

心齋、震澤の人、孝廉方正に擧げらる、著す所、心齋詩稿、綱目通論各一卷等あり、(國朝著錄類考)此書は孟子の年譜なり、毎年時事を擧げ對照に便にせり。

◎ 歷代名儒傳 八卷

◎ 歷代循吏傳 八卷

〔作者〕 右二書は共に清の朱軾の下に、名儒傳は李清植、循吏傳は張福禎の纂する所なり、軾字は若瞻、一字は可亭、江西高安の人、康熙三十三年の進士、仕へて文華殿大學士吏部尙書に至る、乾隆元年(二三九六)薨す、帝爲めに朝を輟めしといふ、(國朝先正事畧、國朝著錄類考)清植は雍正二年の進士、浙江に視學すること三十餘年、官禮部侍郎に至る、(國朝著錄類考)福禎の傳は考を俟つ。

〔體裁〕 此二書一は名儒、一は循吏を録す、大致二十一史の本傳を主とし、諸家の説部、文集等を參酌して、傳を立て、論贊を加ふ、漢より元に至る學問劾績の一代に傑出し、又は後代に關係ある者を主とせり、凡て時代順に列し、名儒傳は八十八人、循吏傳は百二十人あり、徒に二十一史中の、儒林傳、循吏

傳を拔萃せるものに非ず。

◎ 國朝漢學師承記 八卷

◎ 宋學淵源記 二卷 附記 一卷

〔作者、體裁〕 清の江藩の撰なり、藩字は子屏、一字は鄭堂、江蘇甘泉の人、諸生たり、博聞強記にして群經を心貫す、此書の外に國朝經師經義目錄一卷を著せり、(先正事畧、碑傳集作者紀)師承記は清朝の漢學者(宋學に對)の傳記にして、其師承を明にせるもの、閻若璩に始まり顧炎武に終る、凡て四十八人、附傳十六人、合せて五十六人なり、淵源記は宋學者の傳記にして、孫奇逢に始まり鄧元昌に終る、凡て三十一人あり、附記は附録にして、沈國模以下九人を收め、以て其淵源を明にせり。

◎ 歷代名臣言行錄 二十四卷

〔作者、體裁〕 清の朱桓撰す、桓字を拙存といふ、此書は朱子の宋名臣言行錄を讀み、感する所有りて著

◎ 貳臣傳 八卷

〔題名、體裁、作者〕 貳臣は二心の臣なり、明朝の遺臣にして清に事へ、且つ異圖を抱きたるもの、傳を、滿漢名臣傳と同じく國史館の原本により抄録したる者なり、劉良臣に始まり、葉初春に終る、百二十八人、附傳五人、合して百二十五人あり、作者詳ならず。

◎ 歷代名人年譜 十卷

〔作者、體裁〕 清の吳榮光撰す、榮光字は荷屋、廣東南海の人、嘉慶四年の進士、湖南巡撫より、四品景堂に左遷せられ、後、福建布政使に至る、石雲山人詩稿の著あり、(國朝著錄類考)此書は漢の高祖に起り、清の道光二十三年に終る、編年體を用ふ、上段に紀年を擧げ、中段に重要なる時事を記し、下段に名人の生卒を記す、故に此書は年譜にして、又年表を兼ねたる者なり。

◎ 避諱錄 五卷

◎ 滿漢名臣傳 八十卷

〔題名、體裁、作者〕 清初より乾隆の末に至るまでの、滿洲及び漢(即ち支那本部)の名臣の傳記を、國史館の原本より抄録したる者なり、滿洲名臣傳四十八卷、本傳六百三十九人、附傳百三十八人、合して七百六十九人、漢名臣傳三十二卷、本傳二百七十九人、附傳二十八人、合して三百七十七人あり、作者詳ならず。

せるものなり、故に宋朝の事を記する朱子の前集後集、李幼武の續集、別集、外集を藍本とし明は徐開任の書に本づき、其他は凡て補作せり、卷一を序言、凡例、歷代國號歌、歷代帝都考、歷代輿地沿革考、直省形勝郡邑考、歷代輿地紀要考、歷代封建紀要考、讀史吟評節錄、證法考、及び六國秦とし、卷二より五までを兩漢とし、卷六を三國、七を晉、八を晉魏五までを兩漢とし、卷六を三國、七を晉、八を晉魏間借號十六國、九を五代、十を北朝魏齊周、十一、十二を唐、十三を後五代、十四より十九までを宋、二十を遼金元、二十一より二十四までを明とす、嘉慶二年次で同治四年の刊本有り。

〔題名、體裁、作者〕 支那には古より避諱の禮として、君父の名諱は之をいふを憚り、避けて名を呼ばず、又其諱を用ひざるを例とす、此書は即ち歷代避諱改字の事を人に由りて記したる者なり、卷一は本朝敬避字様、卷二より四まで歷代の帝王を録し、卷五に家諱あり、清の黃本驥撰す本驥、字は仲良、華耘と號す、湖南寧鄉縣の人なり、嘉慶十三年の舉人、湖南沅州府黔陽縣の教諭と爲る、著す所三十六灣草堂集有り。

(國朝正雅集、歷代職官表卷首參考)

◎ 顧亭林年譜 四卷

〔作者、體裁〕 清の張穆撰す、穆の傳は蒙古遊牧記の條に出づ、顧亭林は炎武、閻潛邱は若璩なり、炎武は日知錄、若璩は孟子生卒年月考の條に傳あり、此書は即ち二氏の年譜にして、亭林年譜には、附録に亭林の傳と世譜とあり。

◎ 先聖生卒年月日考 一卷

孔子の弟子にして年名ある者、三十餘人、皆孔子の年を相參考するに足るものは、次を以て編入し、列國中孔子周遊の地に於ける時事は、毎年之を掲げて、參考に備へたり、而して毎年引く所は、事の先後を以て叙と爲し、書の早晚を以て列と爲さず、又先儒辨論中考訂に資するに足る者は、各條の下に分注せり、其孔子生年の如き公毅に従ひて史記を取らず。

◎ 孟子編年 四卷

〔作者、體裁〕 清の狄子奇撰す、子奇の傳、孔子編年の條に出づ、此書體例、孔子編年と大概相同じ、孟子鄒人なるも其世次、考ふる無きを以て、周史を以て年を編し、七國諸侯の年を以て、其下に繋ぎ、孟子の事蹟其七國と相渉る者は悉く之を擧げ、其書によりて異なる者あれば、兩存して考核に便にし、又列國の事にして孟子と關係無きも、然も孟子と相發明するに足る者あれば、附録として參考に供せり、其生年を以て周の烈王四年と爲し、遊歴の順序は、先づ齊に行き、宋、滕に行き、後梁に行くと爲せり。

〔作者〕 清の孔廣牧撰す、廣牧字は力堂、曲阜の人、孔子七十世の孫なり。

〔大意〕 周曆を推歩して、以て孔子の生年は史記に従ひ、魯の襄公の二十二年と爲し、月は穀梁傳に據りて冬十月と爲し、日は公羊傳穀梁傳に本づきて庚子と爲し、之を清曆に當て、八月二十八日と爲せり、而して其卒年は哀公十六年夏四月己丑の日にして、七十三歳なりといへり、收めて續皇清經解中に在り。

◎ 孔子編年 四卷

〔作者〕 清の狄子奇撰す、子奇字は叔穎、惺菴と號す、深陽の人、業を陳絨に受け、學程朱を宗とす、然れども、亦漢唐諸儒の説を兼採し、偏攻無く、偏主無し、宿州、河南、覃懷の諸書院に主たり、道光中歿す、年五十六、著述此外に孟子編年、四書質疑、國策地名考等あり。(孔子編年卷首行狀參考)

〔體裁〕 宋の胡仔の孔子編年の體例に仿ひ、之を増補刪訂したり、春秋によりて年を編し、綱目の體により、凡そ孔子の出處にして大に關する者は、皆其要を各年の下に總掲し、後、經傳を分引して之を證し、

◎ 文獻徵存錄 十卷

〔體裁、題名、作者〕 清初より道光頃までの學者、百九十三人、附傳二百六十六人、合せて四百五十九人の傳記なり、其文獻徵存錄といふは、論語の「夏禮吾能言、杞不足徵也云々、文獻不足故也、足則吾能徵之矣」に取れり、而して徵存といふは猶彙存の意なり、清の錢林、字は東生の輯むる所、王藻の編する所なり、錢林は杭州錢塘の人、嘉慶十三年の通籍、其の詞館に在る二十餘年、學士と爲り、道光中事を以て左遷せらる、此書は蓋し其未成のものなり、林少くして羸疾有り、三十八歳にして妻を失ひ再び娶らず、午を過ぐれば食せず、毎朝三時前後に起きて讀書せりといふ。(王藻の叙參考)

◎ 碑傳集 百六十五卷

〔題名、作者、體裁〕 此書は、清の天命紀元より嘉慶の朝までの、偉人、碩學、良吏等の碑誌行狀等を集録せる者なり、故に碑傳集といふ、錢儀吉の撰する所、

儀吉の傳は經苑の條に出づ、此書は目を、宗室二卷、功臣五卷、宰輔十卷、部院大臣二十二卷、内閣九卿三卷、翰詹九卷、科道六卷、曹司三卷、督撫十四卷、河臣二卷、監司十一卷、守令二十三卷、校官二官、佐貳雜職一卷、武臣三卷、忠節六卷、逸民四卷、理學三卷、經學、文學各六卷、孝友四卷、義行、方術、蕃臣、各一卷、列女十二卷に分ち、別に卷首に總目一卷、作者紀略、引用書目、一卷、卷末に、存文集外文各一卷を添ふ、其傳する所王公大夫庶統べて一千六百八十餘人、烈女三百三十餘人あり、五百六十餘家の文を采りて之を成せり。

●國朝先正事略 六十卷

〔題名、作者、體裁〕 此書は清初より咸豐頃までの人物の傳記にして、先正とは先代の正人の義なり、清の李元度の著す所、元度字は次青、平江の人、曾國藩の幕下に屬し、長髮賊の亂、諸處に轉闘して功あり、著す所天岳山館文抄あり、光緒十三年(一五四七)歿す年六十七(天岳山館文抄序文及びA Chinese Biographical Dictionary by Herbert A. Giles)此書は目を名臣(卷一—二十六)名儒(二十七—

三十一)、經學(卷三十二—三十六)、文苑(卷三十七—四十四)、遺逸(卷四十五—四十八)、循良(卷四十九—五十四)、孝義(卷五十五—六十)に分ち、凡て五百人、附傳六百八人、合せて一千百〇八人を收む、宋の名臣言行録の例に仿ひ、揚善を以て主とせり。
〔附記〕 天岳山館文抄の中に、諸名公の傳記多く、此書と相重複する者あり、元度の言によれば、彙管輯先正事略、即以諸傳(文抄中にある諸人の傳を指す)爲底本、蓋傳成於先也、然傳中人不盡入事略、故兩存之とあり、今二書を比較するに全く相同じ。

●中興名臣事略 八卷

〔作者、題名、體裁〕 清の朱孔彰撰す、孔彰は長洲の人、今人なり。長髮賊の亂、官軍連敗、社稷將に覆らんとせしが、曾國藩等の功によりて平定し、竟に中興の偉業を爲すに至れり、此書は即ち其諸功臣の事略なり、故に名づく、而るに表題には續先正事略とあり、想ふに書賈其賣らんことを欲し、李元度の續篇と爲したるものならん、曾國藩に始まり、英國陸軍少將「ゴルドン」に終る、凡て百六人、附傳六

十九人、合して百七十五人あり。

●國朝耆獻類徵 四百八十四卷 卷首二百四卷

〔作者〕 清の李桓撰す、桓は湘陰の人、今人なり、此書を作りたるは光緒十六年にして、時に江西巡撫と布政使とを兼ねたり。

〔題名〕 耆は長老の稱なり、所謂元老元勳の義なり、獻は賢なり、類徵は類を以て徵集する意なり。

〔體裁〕 清の太祖の天命元年より、宣宗の道光三十年までの、英雄、豪傑、鴻儒、碩學、忠孝、悌信より、荷も一藝に秀づる者の傳記にして、(明朝殉節諸臣にして勝朝殉節諸臣に入らざる者之を)卷首は欽定宗室王公功績表傳十二卷、欽定編入せり、外藩蒙古同部王公表傳百二十卷、中、十七、十八、百一、百二、百三、百四、百五、百八、百九、百十一、百十八、百十九、百二十の十三卷を闕く、欽定續纂、藩蒙古同部王公表傳十二卷、同傳十二卷、(嘉慶十七年勅撰)、同表十二卷、同傳十二卷(道光二十九年勅撰)を收む次を正編とす、正編は之を宰輔四十卷、卿貳七十四卷、詞臣十八卷、諫臣六卷、郎署十卷、疆臣

五十六卷、監司十卷、守令三十四卷、僚佐十二卷、將帥六十六卷、材武四卷、忠義四十四卷、孝友二十卷、儒行十八卷、經學十卷、文藝二十卷、卓行十八卷、隱逸二十卷、方技四卷に分ち、錄する所凡て一萬餘人あり、宰輔より材武に至る迄は、每人登科の順によりて列し、往々にして卒年による者あり、忠義以下は卒年順に列し、往々にして登科による者ありて、一定せず、每人國史館に本傳ある者は、先づ之を掲げ、次に他人の撰せる碑銘、又は傳記(本人の撰述にかゝる碑傳は、他に事蹟の徵を擧げ、後、各書中より、す可き場合なき以外は之を掲げず)其人に關係せる記事を節録して之を掲ぐ、國史館本傳無き者は、碑傳を擧げ次に記事に及ぶ、例相同じ、而して碑傳は必ず撰者の名を擧げ、記事は必ず引用書の名を小字を以て注せり、其諛諛に近き者は皆掲げず、卷首に、述意三十則、總目、通檢あり、又卷末往々補録あり、凡そ清朝諸人の傳を網羅せること方今未だ此書の右に出づるものあらず。

史鈔

●兩漢博聞十二卷

〔題名、作者〕 是書は前後兩漢書の文を摘録したるを以て、之に名づく、何人の作りし所なるを題せずと雖、晁公武の讀書志に據れば、宋の楊侃の編する所なり、侃は錢塘の人、端拱中進士に第し、仕へて集賢院學士に至り、晩に知制誥と爲れり。(四庫提要)

〔體裁〕 前漢七卷、後漢五卷、共に十二卷、其摘録するや、篇第に依らず、門類を分たず、惟く字句故事を簡擇し、列して標目を爲す、又顔師古及び章懷太子の註を節取し、其下に列し、後漢書中間と引きて前漢書に及ぶ者有れば、必ず顔師古の字を標す、然れども引く所の梁の劉昭續漢志註に至りては、章懷太子の註と區別すること無し、今記す所の本は續興雅堂叢書本にして、首に嘉靖三十七年黃魯曾の序ありて、其細目は前後漢俱に各卷の首に冠せり。

●通鑑總類二十卷

〔題名、作者〕 宋の沈樞が司馬光の資治通鑑の文を編取し、冊府元龜の例に仿ひ、類別せしものなれば、

通鑑總類と名づけたり、沈樞、字は持要、德清の人、紹興中進士と爲り、彭澤令に調せられ、官、太子詹事光録卿に至る、事に坐して端州に謫せられ、卒して憲敏と諡す、是書は乃ち其致仕の時編せしものなり。(萬姓統譜 等參考)

●史記法語八卷

〔題名、作者〕 宋の洪邁、文詞の法則に備へんが爲めに史記中の句を摘出す、故に名づく、邁の傳は容齋隨筆の條に出づ。

〔體裁、傳來〕 史記百三十篇中より句法古雋なるものを選び、二字以上の語を集録せり、書録解題には之を類書中に編し十八卷と稱す、今本は止る八卷、完書に非ざるに似たり、然れども、卷末に題識一行あり

●史記鈔六十五卷

〔題名、作者、體裁〕 明の茅坤、史記の文を鈔録評點して此編を爲す、故に史記鈔と云ふ、坤好みて古文を講せしと雖、未だ司馬遷の文を刊削すること能ざるなり、坤の傳は、唐宋八大家文鈔の條に出づ。

●史 緯 三百三十卷

〔題名、作者〕 是書は清の陳允錫、正史の文を摘録し問う改竄して作る所なり、其史緯と名づけしは、正史を經とし、此書を以て之が助と爲さんとするの意なり、允錫、字は疊齋、晉江の人なり、順治十二年、薦擧を以て平湖縣知縣を授けらる。(四庫提要 要參考)

〔體裁〕 是書呂祖謙の十七史詳節に仿へり、祖謙は惟く正史の菁華を擷取せしのみなりしが、此は則ち二十一史を刪潤する所多く、又問う重複する所あり、周

●南史識小錄 八卷

〔題名、作者〕 是書は南史博聞の例に準じ、南北二史の文を摘取したるものなれば、之に名づく、清の沈名孫と朱昆田と同編する所なり、名孫、字は湖芳、一字を湖房といふ、錢塘の人、康熙二十九年の舉人たり、(昭代名人尺 廣小傳參照) 昆田、字は文盦、西陵と號す、初の名を德壽といふ、秀水の人、彝尊の子なり、小朱十と稱す、大學生たり、十五歳にして詩に工なり、著す所笛漁小彙、三體撫韻あり。(文獻徵存錄、昭代名人尺 廣小傳參照)

●北史識小錄 八卷

〔體裁〕 是書は前述の如く、南北二史に就き、其字句

の華麗新舊にして、詩賦の用に供す可きもの、及び其迹の奇異にして故事の材に資す可きものを取り、排次するに原書の次第を以てし、各々其篇名を著し、標目を設け、原文を以て其下に載せたり、門目を分たざるが故に、稍々繁蕪を免れざるも、而も六朝の故事を搜索するに便ならずとせず、今記す所は清の同治十年の校刊本にして、錢唐の張應昌補正する所なり、首に乾隆三十四年趙懷玉の序、四庫提要の抄録、例言六則、總目有り。

●二十一史約編

〔題名、作者〕 清の鄭元慶、二十一史の文を摘録して康熙三十五年、此編を爲す、依て二十一史約編と云ふ、元慶、字は世哇、歸安の人なり。(卷首兩浙輯)

〔體裁〕 此書前に序、例言、後記、後跋、卷首ありて、全部を金、石、絲、竹、匏、土、革、木、の八部に分つ、即ち其卷首及び八部の目左の如し。

〔卷首〕 上考略、歷代圖歌、陶唐以來歷數、道統系、象緯圖、輿地圖、歷朝方域、禮樂、律呂經籍、食貨、官制、兵刑、釋老。

(金部) 前編

(石部) 史記、漢書、後漢書。

(絲部) 三國志、晉書、魏書、北史。

(竹部) 南史、宋書、齊書、梁書、陳書、北齊書、周書、隋書。

(匏部) 唐書。

(土部) 五代史、遼史、宋史上。

(革部) 宋史下、金史、元史。

(木部) 後編 是編は明史を附刊して明末に終る

各部首に全目を列し、次に各々正史の撰人略傳を記し、次に帝王の略傳、次に列傳の大要を録し、次に外國の略史を載記せり。

載記

●吳越春秋十卷

〔題名、作者〕 吳越の事を紀したるを以て、之に名づく、春秋は史の義なり、後漢の趙煜が撰する所、煜、字は長君、會稽山陰の人なり、仕官せずして家に卒す、其著述此書の外、詩細及び歷神淵あり、蔡邕會

稽に至り、詩細を讀み、歎息して以て論衡より長すと爲せりといふ。(後漢書本)

〔體裁〕 吳は太伯に起り、夫差に盡き、越は無餘に始まり勾踐に終り、吳を内にし越を外にす、間々小説家の言を雜へたり、隋書經籍志、唐書藝文志並に是書を十二卷と爲す、今存するもの十卷、全書に非ざるを知る可し、漢魏叢書本、又合せて六卷と爲し、首に徐天祐の序あり、(我國)寬延二年の刻本は即ち之に據れり。

〔注解〕

○吳越春秋十卷 元徐天祐注(四庫全書提要は此書の元集本に據れり明に及びて覆刻本有り)

●越絶書十五卷

〔題名、作者〕 越は國名なり、絶は絶つなり、越王勾踐の時、天子微弱にして諸侯皆叛く、是に於て勾踐、強を抑え弱を扶け、惡を絶ちて之を善に反したり、故に此書を作る者、其内能く自ら約し、外能く人を絶ちしを貴びて、越絶と名づく、隋志に子貢の作と稱すれども、實に漢の袁康の撰する所にして、其友吳平の校定せしものなり、康は會稽の人、此書に建武二十八年の語有れば、則ち其後漢光武帝の朝の人

なるを推知す可し、平は其同郡の人、二人兩漢書共に傳無し。

〔體裁〕 原本二十五篇ありしが、宋の初、已に五篇を佚したり、明の正徳四年の刊本は十五篇のみ存せり、今本卷數即ち是なり、卷首に外傳本事を記して越絶の義を解き、其本文は吳越春秋と相出入し、兩國興亡の始末を記録せり。

●華陽國志十二卷附録一卷

〔題名、作者〕 晋の常璩撰す、璩字は道將、江原の人なり、李勢の時、官散騎常侍に至る、著す所此書の外、漢書十卷あり。(尙友錄)

〔體裁〕 述ぶる所、巴蜀の事にして、開闢に始まり永和三年に終る、凡て十三卷、其篇次左の如し。

巴志、漢中志、蜀志、南中志、公孫述劉二牧志、劉先主志、劉後主志、大同志、李特雄期壽勢志、先賢士女總贊論、後賢志、序志、三州士女志。

是書闕漏せし所多く、今傳はるものは、璩の舊に非ずして、張佳允の補ふ所の一卷と影寫宋本とを以て充足せしものなり、現行漢魏叢書中に編入しあるも

のは首に宋の元豊元年、呂大防の引あり、凡て十五卷、即ち先賢士女總贊論無くして、三州士女志を三卷に分ち、序志後語を増益せしものなり。

●鄴中記一卷

〔題名、作者、傳來、體裁〕 是書魏の鄴都の事を記したるを以て鄴中記と云ふ、舊二本あり、其一本は二卷にして隋書經籍志に見ゆ、晋の國子助教陸倕撰すと稱す、其一本は一卷、陳振孫書錄解題に見ゆ、稱して撰人の名氏を知らずと爲し、又唐志に鄴都故事二卷肅代の時馬温撰すとあり、今の書多く之を引けり、是を以て肅代後の人の作る所と稱せり、然れども是書記す所、北齊の高觀高洋の二事あり、上東晋の末を距ること已に一百三十四年、又寒食一條は、隋の杜臺郷の玉燭寶典を引きたれば、時代尤も相應せず陳振孫以て翻の書と爲さざりしは據るべきに似たり、然るに又歐陽詢の藝文類聚は、太宗の貞觀中に作り、徐堅の初學記は、元宗の開元中に作れり、二書の引く所、一今本と合す、想ふに翻書二卷は、惟と石虎の事を記し、のみなりしが、後人鄴都故事を

採摭し、以て之を補ひしものならん。(四庫提要)

●江南野史十卷

〔題名、作者〕 宋の龍衮撰す、衮の傳は未だ詳ならず、是書南唐の事を記す、南唐は金陵に都す、金陵の地楊子江の南岸に在り、故に江南と云ふ、野史は猶私記の如し。

〔體裁、傳來〕 (宋)の鄭樵の通志略に、此書を載せて二十卷と爲す、今其十卷を闕き、晁公武の讀書志には八十四傳と爲せども、今其五十傳を缺く、(清)の錢會の讀書敏求記に至り、十卷に作りて今本と合す、則ち知る明以來已に完本無きを、說郛に收むる所は此抄録にして、僅に數條を載するのみ。

●江南別錄一卷

〔作者〕 宋の陳彭年撰す、彭年、字は永年、撫州南城の人なり、太平興國中の進士、仕へて兵部侍郎參知政事を歴て執政と爲る、卒して文信と諡す。(宋史本傳參考)

〔題名、體裁〕 是書南唐の義宗、烈宗、元宗、後主、四代

の事を記す、時に徐鉉、湯悅等詔を奉じて江南録を撰せり、彭年の此編は即ち私纂なり、故に名づくるに別録を以てす、宋史藝文志、晁氏讀書志、俱に皆四卷に作る、見今の百川學海、古今說海に收めらる、一卷は、疑らくは後人の合併せし所ならん。

●南唐書三十卷

〔作者〕 宋の馬令撰す、令は宣興の人。(四庫提要)

〔體裁〕 先主書一卷、副主書三卷、後主書一卷、女憲

傳一卷、宗室傳一卷、義養傳一卷、列傳四卷、儒者傳二卷、隱者傳一卷、義死傳二卷、廉隅傳苛政傳共一卷、忠死傳二卷、黨與傳二卷、歸明傳二卷、方術傳一卷、談諧傳一卷、浮屠傳妖賊傳共一卷、叛臣傳一卷、滅國傳二卷、建國譜世系譜共一卷。

是書採摭する所、詩話小説に及ぶ、其裁する所以を知らず、故に頗る蕪雜煩瑣たり、然れども南唐を以て正統と爲さざりしは、猶陸游の書に比して稍々勝れる所有りとす。

〔參考〕 ○南唐書十八卷音釋一卷宋陸游撰元成光音釋

●安南志略十九卷

〔作者、題名〕 元の黎崱撰す、崱、字は景高、安南國の人なり、其先は東晋交州刺史阮敷にして、世々愛州に居る、崱幼にしし黎瑋の子と爲り、其國に仕へて侍郎に至る、至元中世祖安南を伐ちしとき、陳鍵に従ふ、鍵遂に軍に死し、崱乃ち朝に入り奉議大夫を授けられ、漢陽に住す、崱鍵が志伸びずして空しく涙びしを傷み、乃ち此志を作りて其意を致せり。

(四庫提要)

〔傳來、體裁〕 是書二十卷本原板久しく已に佚し、祇と抄本十九卷に従ひ上海の樂善堂にて刊行せり、首に明治十七年岸田吟香の序、元の察罕、元明善、皇慶趙焯等の數序、及び目錄、總序、凡例あり、其誌す所、安南の地誌、制度、物産、風俗、及び漢以來刺史の略傳、趙、丁、黎、李、陳五氏の世家、歷朝名賢雜咏、安南名人詩等なり。

●十六國春秋一百卷目一卷

〔作者〕 舊本魏の散騎常侍崔鴻撰と稱すれども、實に

明の屠喬、孫項琳の偽作に係る。(四庫提要)

〔題名〕 晋の時、五胡十六國あり、其十六國の事迹を載せたるを以て之に名づく。

〔體裁〕 前趙錄十卷、後趙錄十二卷、前燕錄十卷、前秦錄十卷、後燕錄十卷、後秦錄十卷、南燕錄三卷、夏錄四卷、前涼錄六卷、蜀錄五卷、後涼錄四卷、西秦錄三卷、南涼錄三卷、西涼錄三卷、北涼錄四卷、北燕錄三卷、以上通計一百卷、

其晋宋の年號を以て年に繋けたるは、喬、孫等の偽作なるに由れり、此書乾隆三十九年同四十六年の板本有り、清の汪日桂の校する所なり。

〔附記〕 此書は別に十六卷本有り、一國を以て一卷と爲し、唯、其國君併せて五十八人の事を録するのみにして其諸臣に及ばず、又晋宋の紀年を用ひず何鏗の漢魏叢書本は即ち是なり、一百卷本より世に出づる早しと雖、要するに崔鴻が原書に非ず。

〔參考〕

○十六國年表一卷 清張倫 ○十六國年表二十二卷 孔尚賢撰

◎十國春秋 一百十四卷

〔作者、題名〕 清の吳任臣撰す、任臣字は志伊、一字は征鴻、託園と號す、仁和の人、康熙十七年の舉人、仕へて翰林院檢討に至る、(國朝先正事畧 尺牘小傳) 任臣は歐陽修が新五代史十國世家脱漏尤も甚しきを以て、此書を作り、其闕を補ふ、故に十國春秋と云ふ。

〔體裁〕 吳十四卷、南唐二十卷、前蜀十三卷、後蜀十卷、南漢九卷、楚十卷、吳越十三卷、閩十卷、荆南四卷、北漢五卷、十國紀元世系表各一卷、十國地理表二卷、十國藩鎮表一卷、十國百官表一卷、凡て一百十四卷、末に拾遺一卷 備致一卷の附録あり、今記す所の本は、乾隆五十八年周昂の校刊せしものにして、首に康熙十一年魏禧、同八年吳任臣の二序同十六年吳農祥の題辭、凡例、及び目錄あり。

史評

◎史通 二十卷

〔題名〕 通は白虎通、風俗通の通の如く、書と云ふに同じ、是書は諸史を論評したるを以て名づく。

〔作者〕 唐の劉子元撰す、子元、本名は知幾と云ひし

が、明皇の諱を避け、字を以て行はる、彭城の人、弱冠にして進士に擢られ、累遷して鳳閣舍人と爲り國史を兼修す、中宗の時、太子率更令に擢られ、秘書監、太子左庶子、崇文館學士に遷り、開元の初、左散騎常侍に官し、後事に坐して安州に貶せらる、開元九年(二三八一)官に卒す年六十有一。(唐書本傳)

〔體裁、大意〕 是書内外の二篇に分ち、内篇は十卷三十九篇、外篇は十卷十三篇あり、其中内篇の體統、紕繆、弛張の三篇は、録ありて書無く、唐書本傳已に史通四十九篇を稱せしを見れば、三篇の散佚は、唐書を修むる以前に在るを知るなり、内篇は、皆史家の體例を論じて是非を辨じ、外篇は、史籍の源流を述べて古人の得失を評す、其文或は内篇と重出し、又或は抵牾無きに非ず、然れども子元史學に於て最も深く、又史職に居ること幾ど二十年、其古今を貫穿し利病を洞悉する所は、實に後人の及ぶ所に非ず、蓋し子元秘書監に在りし時、蕭至忠、宗楚客等と、史事を爭論して合はず、發憤して此書を著す、故に其詞往往過激にして、疑古、惑經の諸篇に至りては、更に王充の刺孟問孔に幾し、其駁詰する所は、班馬も亦自解すること能はざらん、故に唐宋以來の史

此書を奉すること龜鑑の如し。

〔傳來〕 是書、景龍四年に成り、(唐宋)の學者之を奉じ、歐陽修、宋祁等の史を編する多く其緒論を採れり、(明)より以來、之を評註する者三四家あり、(清)に至り、浦起龍之が通釋を作れり。

〔注解、參考〕

○史通註二十卷 明陳繼儒撰 ○史通訓故二十卷 王惟儼撰 ○史通通釋二十卷 清浦起龍撰 ○史通削繁四卷 紀昀撰

◎唐鑑 二十四卷

〔題名〕 宋の司馬光通鑑を修むるとき、范祖禹編修官と爲りて唐史を分掌す、其自ら得る所の大綱を採り繋ぐるに論斷を以てして此書を成せり、故に唐鑑と名づく。

〔作者〕 宋の范祖禹撰す、祖禹、字は淳甫、一字は夢得、華陽の人なり、嘉祐八年の進士、仕へて龍圖閣學士を歴て陝州に知となり、後、賓化に徙りて卒す、年五十八、實に元符元年(一七五八)なり。(宋史范祖禹傳) 〔體裁、傳來〕 唐の高祖に起り、昭、宣に迄ふ、凡て十二卷、元祐の初、表して朝に上る、後、呂祖謙分ちて二

十四卷と爲せり、當時の人曾て祖禹の子温を目して唐鑑の子なりといへり、以て此書の有名なりしを知る可し、朱子は初め是書を以て苟簡なりとして鄙みしが、晩年に及び、丞之を稱して不易の論と爲し、社倉記を作りて、自ら前言の誤を述べ、朱子と同時の人呂祖謙之が音註を作れり、(我國)にては碧山日録(後花園帝寛正二年の條)に之を関せることを記したれば、以て五山の僧徒が傳習せることを知る可し、下りて寛文九年之を刊行し、以て天保十年、嘉永六年、萬延元年、又梓行せり、共に皆呂祖謙か注本にして、首に范祖禹の自序進表を冠らせり。

●唐史論斷三卷

〔題名〕 是書は劉昫の唐書を改め、編年と爲し、論斷を係けたるものなるを以て名づく。

〔作者〕 宋の孫甫撰す、甫、字は之翰、陽翟の人なり進士に擧げられて右正言に歴官し、天章閣待制河北轉運使に遷り侍讀を兼ね、年六十にして卒し、右諫議大夫を賜はる、著す所唐史記並に文集あり。(宋史新編參考)

〔體裁、傳來〕 甫が、唐書の煩碎を刪りて編年體と爲す。

ものにして、自ら謙して斯く名づけたるなり。

〔作者〕 宋の胡寅撰す、寅字は明仲、致堂と號す、崇安の人なり、官禮部侍郎に至り侍講を兼ね、紹興二十一年(一一八一)年五十九にして卒す、其著す所、此書の外論語詳説、柴然集あり。(宋史儒林傳參考)

〔體裁、大意〕 寅の父安國、高宗の詔を奉じ、春秋傳を修め、筆削大旨發明する所ありと雖、頗る深刻なりき、寅は司馬光の資治通鑑を讀みて、之を評論するに父の説を採り、彌、嚴苛を用ひたり、其人を論するや、盡く責むるに孔、顔、思、孟を以てし、其事を論するや、皆規するに虞、夏、商、周を以てす、是非を論する、往々枝葉に走り、讖議を主とし、褒貶正多きは當を得ず、故に清朝に至り、朱直は史論初集を作り專之を駁し詆訶して除す所なし、此書は首に胡寅の猶子大壯の序、及び寶祐甲寅劉震孫の跋あり、劉弘毅の校刊する所なり。

〔附記〕 清の李暉芳の讀史管見は三卷にして、我國安政三年の板本あり、混同す可からず。

●史糾六卷

(史) 年表

すや、康定元年に創め、嘉祐元年に至る、十七年を歴て唐紀七十五卷を勸成し、其間の善惡分明にして唐鑑と爲るべき者は、繋くるに論斷を以てし凡て九十二篇を作れり、甫没して後、唐紀散佚し、惟論斷のみ別本ありしが爲に存するを得たり、紹興二十七年、劍州に鏤版したるも其版亡びたるを以て、端平二年黃準復東陽に刻す、宋史藝文志に二卷に作り、文獻通考に十卷に作る、蓋し本唐紀より鈔出したるものにして、別行本は已に其舊に非ざるが故に、卷數の多寡に差異を生せしなり、粵雅堂叢書本、前に自序一篇、後に附録一卷あり。學津討原本は尙前に四庫提要の文を冠す。

〔附記〕 宋代に於て是書を推重せしものを、曾鞏、歐陽修、蘇軾等と爲す、殊に朱子は其議論唐鑑より勝れりといへり。

●讀史管見三十卷

〔題名〕 管見とは、漢書東方朔傳に、管を以て天を窺ふと云へるに本づく、蓋し其識見の小なるをいへるなり、是書は胡寅が通鑑を讀みて評論を下したる

〔題名、作者〕 史糾は、諸史の謬を正すの意なり、是書は明の朱明鏡、諸史の誤及び其事實の舛悞を考正せしものなるを以て名づく、明鏡字は昭芭、太倉州の儒學生なり、性強記にして制藝に工なり。(明詩綜、復社姓氏錄參考)

〔體裁〕 上三國志に起り、下元史に迄ぶ、每史各一編たり、元史は甚だ可否を置かず、晉書、五代史も亦闕きて論せず、其編末別に書史の異同一篇、新舊唐書異同一卷とを附して、前の體例と截然同じからざるは、是後人の殘棄を撥拾して編次秩を成したるを以てなり。

年表

●欽定歷代紀事年表 一百卷

〔作者〕 清の康熙五十一年の敕撰なり。

〔體裁〕 上は堯帝元載甲辰に起り、下は元の順帝至正二十八年戊申に至る、凡て三千七百二十五年間の年表にして、年を以て經と爲し、國を以て緯と爲し、正統を以て第一格に置きて全書の通例を爲し、其餘時代の變するに従ひて例を異にせり、大抵史記年表

月表及び司馬光の資治通鑑目錄に従ひ、每表多くは史評を附し、又毎代には各々地理圖世系圖を、總冠には、三元甲子紀年圖を冠す、是書歷代を網羅し、始終を總括し、記録して遺す所無し、眞に讀史家の綱領たり、首に康熙五十四年の御製序、凡例十則、纂修官名、進表目錄あり。

● 歴代表史 五十三卷

〔作者〕 清の萬斯同撰す、斯同字は季野、浙江鄞の人なり、其兄選、尤、等と共に黃宗羲の門に入り、劉蕡山の學を傳ふ、博く諸史に通じ、尤も明代の掌故に熟達す、王鴻緒の明史稿を撰する、皆其手に出づ、徐乾學の讀禮通考を纂修する亦與りて大に力ありき、康熙四十一年(二三六二)年六十にして卒す、學者稱して石園先生と云ひ私に文貞と諡す、其著書の重なる者は、紀元彙考、廟制圖考、宋季忠義錄、儒林宗派、周正彙考、石經考、群書疑辨、六陵遺事、庚申君遺事、書學彙編、歷代宰輔彙考、崑崙河源考、河渠考、石園詩文集等あり。
〔體裁〕 十七史の中、後漢書より以下、唯々新唐書のみ

表ありて、餘は皆闕くを以て、各補撰を爲す、其躰は史記、前漢書の例に倣ひ、諸王世表、外戚侯表、外戚諸王世表、異姓諸王世表を作り、將相大臣及九卿年表は、新唐書の例を宗とし、方鎮年表、諸鎮年表を作り、其官者侯表、大事年表は、自ら創むる所なり、今記す所は、光緒十五年廣雅書局の刻本にして、首に四庫提要の文を冠し、次に朱彝尊、黃宗羲、李鄴嗣の三序及び目錄あり。

● 歴代建元考 十卷

〔作者〕 清の鍾淵映撰す、淵映字は廣漢、浙江秀水の人。
〔體裁〕 大意 古來紀元の諸書は、皆正統に詳にして、僞朝新國の如きは悉く省略せり、清の初、吳肅公改元考を作りて僞朝新國を併記してより、萬光泰の紀元叙韻及び淵映の是書は、則ち正統のみに止ま

● 歴代帝王年表 三卷

〔作者〕 清の齊召南撰す、召南の傳は、水道提綱の作者項を見るべし。
〔體裁〕 是書は、司馬光の通鑑目錄の例に仿ひて、二十一史の大綱を總べ、上は三皇に始まり下は明の洪武に至るまで、數千年の事實を記し、周の赧王までは世を以て表し、秦六國より後は年を以て表し、縦横に之を列し、統閩之を別ち、治亂得失瞭として掌を指すが如し、今記す所は粵雅堂叢書本にして首に胡大游の序と自序とあり、次を目次と爲す、左の如し。

三皇五帝三代表、秦六國年表、秦年表、前漢年表、後漢年表、蜀漢年表、晉東晉十六年表、南北朝齊梁陳北周隋年表、唐年表、後五代契丹年表、宋南宋遼金西夏年表、元年表、明年表。
凡て十四篇、末に南海の伍崇曜の跋あり。

● 歴代紀元表 一卷

〔題名、作者〕 清の黃本騏、漢より清の道光に至る歴

らす、草霸借稱に至るまで、一一具載して技彙を視るに便ならしめたり、其例、年號相同しき者を以て前に列し、次に年號を以て韻を分ちて排列し、次に歴朝の王及び僭國の始末を列し外藩も亦間々之に附記し秩然として序あり、今記す所は守山閣叢書本にして、首に四庫提要の文を冠し、次に自序あり、凡て書目總論、類考、前編、卷上、卷下、外篇四卷、共に十卷なり。

● 紀元要略 二卷 補遺 一卷

〔作者〕 清の陳景雲撰す、景雲字は少章、長州の人、吳江縣學生に補せられ、卒して私に文道先生と諡す。
〔體裁〕 是書漢より明に至る、帝王の建元及び歷年を紀し、其子黃中、又歴代僞僭の號を採り、附するに外國を以てし、補遺一卷を作れり、其體例附書は、諸朝各々記載を爲し、彼此互に註して分たす、頗る檢閲に便なり、藝海珠塵收むる所は錫鬯の校訂せしものなり。

代の紀元を表に依りて瞭然たらしめたり、故に名づく、本驥の傳は避諱録の條下に出づ。

〔體裁〕 支那紀元は、漢の武帝建元に始まりしが、是書は上甲子に遡りて、文帝より始む、表内正統年號は、皆大字を用ひて填寫す、惟三國の魏、吳、北朝の魏、齊、周、及び遼、金二朝は、正統に係ると雖一格の内に雙列すれば、互に混じ易し、故に小字を用ひて區別し、漢の新莽、唐の周墾、東晉の十六國五代の十國、及び他の僭偽にして年號の最も著る者は、概ね小字を用ひて記載す、今記す所は、三長物齋叢書本にして、首に凡例一則を載せ、終に年號分韻録を附し、以て檢索に便せり。

● 歷代紀元編 三卷

〔作者〕 清の李兆洛撰す、兆洛の傳は、歷代地理志韻編の條に出づ。

首に目及び其門人六承如の跋あり收めて粵雅堂叢書中に在り、其目左の如し。

〔體裁〕 (卷上)、紀元總裁、漢、後漢、三國十六國附宋、齊、梁、陳、北魏、北齊、北周、隋、唐、五代十國附宋、遼、夏

金、元、明、附歷代僭竊年號(改元せざる者に録せず) 附外國年號(改元せざる者に録せず) 附外國年號、交趾、日本、南詔、柔然、蠻、新羅、渤海、吐蕃、高麗、子闐、蒙古、西洋雜夷、道經雜記所載年號、擬議不用年號、錢文年號。

(卷中)、紀元甲子表補遺元以前歷三字四字

(卷下)、紀元編韻三字四字

(卷末)、紀元編韻補附韻

子

小序

子の意義に就きては、或は男子の美稱といひ、或は有徳の稱といひ、或は師稱といひ、諸説あるも、其尊稱語たるは即ち一なり、先秦の書を繙けば、老子、孔子、墨子、揚子、孟子、莊子等の名目を見るならん、是皆其人を尊稱する者なり、而して其人の述作は、儒の六經と同じく、經として尊ばれしが、(經の小序参考)漢に至り、董仲舒、武帝の間に對へて、六藝の科孔子の術に非ざる者は其道を絶たんといひ、帝亦之に従ひ儒教を用ひてより、六經は絶對無上の寶典と爲り、他は其より一等下れるものとして待たれ、其人の尊稱語は、直に取りて其書に名づけられ、劉歆の七略出づるに及び、書目上に割然相分たるに至れり、故に子は人の尊稱語の轉じて書の尊稱語と爲れる者なりとの定義を下すことを得ん。今子には如何なる者が屬するかを考ふるに、大約左の三種に分つことを得べし。

(1) 六經に本づきて説を立てたる者、儒家是なり。

(2) 各自見る所に本づきて、説を立てたるもの、左の數家あり。

(a) 道家 老子の派之れに屬す。

(b) 墨家 墨子の派之れに屬す。

(c) 法家 政法論者之に屬す。

(d) 兵家 兵法論者之に屬す。

其他正名を主とせる名家、陰陽五行説を主とする陰陽家、外交策を講ずる縱橫家、農學を講ずる農

(子) 小序

家等の如き者皆之に屬するものたり。

(3) 諸家の説を兼收して立論する者、雜家はなり。

漢の班固、子書の起原を論じて、王道の衰微に歸してより以後、歴代の諸儒皆之を祖述せり、是蓋し儒教的見地より立論したる者にして、公平を缺くの嫌無き能はず、寧ろ時勢進化の結果と見るの極めて妥當なるを信するなり、此等の諸家は歴代皆講究せられたれども、其最も行はれたるは儒家と道家とす、儒家は宋に至り佛老と混説し、學術上に一新面を開けり、故に其以前と以後との述作を對照する時は、同一儒家にして其立論の著しく異なるを見ん、道家は魏晉六朝に在りては經と同じく尊重せられ、唐に至り老、莊、列、文四子に經の名稱を與へられ、宋に至りては、濂洛關閩の諸儒、竊に其説を採りて經義を發揮するに至れり、其他法家の管韓二子、兵家の孫子、墨家の墨子の如きも、亦老、莊、列三子に次ぎて講せられき、我國も亦同じく其影響を受け、殆ど其變遷を同じくせり。

〔附記〕 歴代の書目、子を分つに、漢志は儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縱橫家、雜家、農家、小説家と爲し、隋書經籍志は此外に兵家、天文、曆數、五行、醫方の五類を増して陰陽家を除き宋の崇文總目は、隋志より類書、算術、藝術、卜筮、道書、釋書の六類を増し、醫方を醫書、天文を天文占書と改む、高似孫の子略は門類を分たず、陳振孫の書錄解題は總目より神仙、曆家、陰陽家形法、音樂、雜藝の五類を増して、算術、藝術、道書、天文占書を除き、文獻通考は書錄解題に本づき、其音樂類を除き、天文、五行、房中の三類を増し、醫書を醫家と改む、清の乾隆帝四庫提要を撰するに當り、定めて儒家、兵家、法家、農家、醫家、天文算法、術數、藝術、譜錄、雜家、類書、小説、釋家、道家の十四類と爲してより、諸家大抵之に據る、今は儒家、道家、墨家、法家、兵家、雜家の六類に分ち、他は或は省き或は別に目を設くることとせり。

儒家

荀子二十卷

〔作者〕 荀卿(荀或は孫に作るは音同じきを以てなり) 名は況、趙人なり、年五十、齊に遊び、襄王の時、三たび祭酒と爲りしが、讒に遭ひ、逃れて楚に適き、春申君に仕へて蘭陵の令と爲れり、後また讒に遭ひ、去りて故國に歸りしが、春申君は復び召して前官に補せり、春申君の死と共に、荀卿も廢せられたり、因て蘭陵に家し、大道行はれず異學盛に、亡國亂君相屬して、人民塗炭に苦むを慨し、數萬言を著して卒せり、荀卿は子夏の學を祖述したる者にして、經學の後世に傳へたるは實に其功なり、孟軻と並稱して先秦の二大儒と謂ふ可し。(史記孟荀列傳、劉向の序錄、柳劭の風俗通義、陸德明の經義疏、漢書藝文志、荀卿傳、古注及諸家題、法解等參考)

相。六、非十二子。七、仲尼以上。八、儒效九。九、王制十。富國十一。王霸十二。君道十三。臣道十四。致仕十五。議兵十六。六、強國十七。天論十八。正論十九。禮論二十。樂論二十一。解蔽二十二。正名二十三。性惡二十四。君子二十五。成相二十六。賦篇二十七。大略二十八。宥坐二十九。子道三十。法行三十一。哀公三十二。堯問三十三。

〔大意〕 荀子の主張する所は禮なり、禮を主張するは性惡に本づく、故に禮論性惡の二篇は其本領の在る所なり、而して禮を知るは學の主眼なり、故に開卷勸學篇あり、學の必要を述べ禮儀を以て隱括とす、他二十九篇は之より敷衍したる者なり。(荀子は人之性也、といへるも偽は詐偽の偽に非ざることを徹居集に辨せり)

〔傳來〕 荀卿歿後、門人頌荀卿辭を堯問篇の終に附加せり、凡て三百二十二篇あり、(秦)火の難、諸子たるを以て免る、漢に至り、董仲舒、劉向之を尊ぶ、劉向は其重複せるもの、百九十篇を除き三十二篇と爲せり、其後諸儒之を修むる者無く、簡牘錯脱し、傳寫誤謬尤も多く、讀む者或は文義の通せざるを苦

み、往々巻を掩ふて終へざるに至れり、(唐)に至り、韓退之は讀荀子を著し、性惡、非十二子二篇を削りて曰ふ、大醇にして小疵なりと、揚雄また之が注を作る、(宋)神宗熙寧中始めて之を刊行せり、蘇東坡、程子、朱子の徒は排擊餘力を遺さざるも唐仲友の如きは之を喜び熙寧監本を翻刻せり、黃震は退之の説を祖述し、(清)に至り方望溪又之に倣ひて性惡非十二子二篇を削り、刪定荀子を著す、謝朓、俞樾、王先謙の徒は之が注解を作れり、(我國)には藤原佐世の日本國現在書目に著録したれば平安朝已に渡來せるを知る、然れども之を攻むる者あるを聞かず、鎌倉時代に唐仲友の翻刻本(即台州本)舶來せしも、爾來朱子學の勃興と共に毫も顧みられざりしが、荻生徂徠起るに及び大に之を尊び、爲に讀荀子を著す、徂徠の學説は全く荀子を祖述せり、荀子は知己を東方に得たりと謂ふ可し、後、注解を作る者漸く多し、久保筑水の増注出づるに及び以上の諸注を集めて大成す、朝川善菴は謝朓の箋釋を翻刻し、是より後大に世に行はる。

〔注解〕

○荀子注二十卷唐 陸賈撰 ○荀子箋釋二十卷清 謝朓撰 ○荀子補注

陸賈二十七篇と題す、蓋し他の論述する所を加へて數ふるなるべし、隋志 下は皆新語二卷と録し、今本と異なる無し、宋の王應麟が玉海に、「今の世に存する者は、道基、術事、輔政、無爲、資賢、至德、懷慮、總に七篇」といへば、則ち此書は宋末に至りて五篇を佚せしを知る、故に馬端臨が文獻通考に漢代の儒書類を備載して、獨此書を遺せしは、全書を見ざる故なり、今本は明の宏治中錢福の編序する所、全く十二篇あり、想ふに元明以來、哀集して之を得たる者なるか、然るに四庫提要には、王充論衡本性篇に賈の語を引くも、今本に其文無く、又道基篇には、漢武帝の時に出でたる穀梁傳の文を引く等、脱漏抵牾多し、必ず後人の僞作にして、王應麟以後の五篇は、後人の補綴するならんといへり、脱漏竄入は古書の常にして、此書より以後に成れる史記すら免れざる所なれば、獨此をのみ疑ふ可からざるなり、況んや唐の馬總の意林に載する所は、皆今本と相符し、李善が文選の注に引く所の新語は、今本と詳略異同ありと雖、大致亦相應するに於てをや、提要の論稍く穿鑿に過ぐといはざる可らず、而して今本闕字多く、讀む可からざる者あり、其古書たる此事を

一卷和 荀子通義四卷、荀子詩說一卷俞樾 ○荀子集解二十卷王先謙 ○讀荀子四卷日本 荻生 ○荀子増注二十卷久保 ○荀子篇旨二卷曾川 ○荀子斷四卷家田 ○荀子遺業愛媛 ○荀子考一卷猪飼 ○荀子徵文諸葛 ○荀子微文無卷

●新語二卷

〔作者、題名、傳來〕 漢の陸賈撰す、史記本傳に曰く賈は楚人なり、客を以て高祖に従ふ、名つけて口辯ある士と爲す、高祖の命を受け南越に使し、尉佗を拜して王と爲し、臣と稱して漢約を奉せしむ、高祖大に喜び、太中大夫に拜す、前みて詩書を誦す、帝之を罵りて曰く、乃公馬上に居りて之を得たり、安んぞ詩書を事とせんと、賈曰く、馬上に居りて之を得るとも寧ろ馬上を以て之を治めんや、湯武は逆に取りて順に守る、文武並び用ふるは長久の術なりと、帝曰く、試に我が爲に、秦の天下を失ふ所以と、吾が之を得る所以と古の成敗の國とを著すべしと、賈乃ち存亡の徴を纒述して、凡そ十二篇を著す、一篇を奏する毎に、帝未だ嘗て善と稱せざるはあらず、其書を號して新語といふと、漢書藝文志の儒家に、

以ても證左と爲すことを得へし、賈の著此外に楚漢春秋あり。

〔體裁、大意〕 此書は左の十二篇より成る。

道基、術事、輔政、無爲、辨惑、慎微、資執、至德、懷慮、本行、明誠、思務。

大旨皆王道を崇び、覇術を黜け、而して其本を身を修むるに歸せり、援據する所春秋論語の文多く、たゞ思務篇に上徳不徳の一語のみ老子を引けり、董仲舒の言と共に、漢書中最も醇正なる者なり。

●新書十卷

〔作者、題名〕 漢の賈誼撰す、誼は洛陽の人なり、年十八能く詩を誦し書を屬するを以て郡中に聞ゆ、文帝召して博士と爲す、是時誼年二十餘、最も年少なり、詔令議下る毎に、諸老先生言ふこと能はざるに、誼獨り之に對ふ、一歲中超遷して太中大夫に至る、誼以爲らく漢興りてより孝文帝に至るまで二十餘年天下太平なり、固に當に正朔を改め服色を易へ、制度を改め、官名を定め、禮樂を興すべしと、乃ち其事を草具す、諸律令の更定する所、及び列侯の國に

就く、其説皆誼より出づといふ、周勃、灌嬰等誼を刺りて曰く、年少初學にして權を專にし、諸事を紛亂せんとすと、文帝も亦之を疎み其議を用ひず、以て長沙王の太傅と爲し、又梁の懷王の傅と爲せり、誼死する時、年三十三、(史記本傳)此書漢書藝文志には單に賈誼といふ、隋以下新書といふ、又賈誼新書といひ、或は賈子新書といふ。

〔傳來〕漢書藝文志儒家類には賈誼五十八篇と題す、崇文總目には、舊七十二篇、劉向刪定して五十八篇と爲すといへり、隋唐志に九卷と題するは誤なり、(四庫提要)其書多く誼本傳に載する所の文を取り、其章段を割裂し、其次序を顛倒し、加ふるに標題を以てしたる者にして、亂雜條理無し、故に朱子曰く「賈誼新書、除了漢書中所載、餘亦難得粹者、看來只是賈誼一雜記稿耳」と、陳振孫亦曰く、「其非漢書所所有者、輒淺駁不足觀、決非誼本書」と、四庫提要に之を辨じて曰く、「漢書誼の本傳贊に稱す、凡そ著述する所五十八篇、其世に切なる者を綴り傳に著すと、應劭及び顏師古の本傳と、文帝本紀の注を見れば、唐人見る所の本と、今本と相同しきを知るに足る、且つ世人の言ふ如く、一段を摘録し一篇の名を立つ

るの理無く、亦決して十數篇を連綴して、合して奏疏一篇と爲して、之を朝廷に上るの理無し、疑ふらば誼が過秦論、治安策等は皆五十八篇の一にして後に原本散佚し、好事者因て本傳有る所の諸篇を取りて、其文を離析し、各々標目を爲り、以て五十八篇の數に合せたるならん、故に釘釘此に至る、其書全く眞ならず、全く僞ならず、朱子の言固より未だ其實を核せず、陳氏亦篤論に非ず、其中經義に合ふ者甚だ多し、又安んぞ盡く淺駁不粹を以て之を目す可けんや、殘闕次を失ふと雖、要するに、斷爛を以て之を棄つ可からず」と、此論妥當といふ可し。

〔體裁〕此書の篇目左の如し。
過秦(上下)、宗首、數寧、藩傷、藩疆大都、等齊、服疑、益壤、權重、五美、制不定、審微、階級、俗激、時變、瑰璋、孽產子、銅布、壹通、屬遠、親疏危亂、憂民、解縣、威不信、匈奴、勢卑淮難、無著、鑄錢、傅職、保傅、連語、輔佐、問孝、禮、客經、春秋、先醒、耳痺、論誠、退讓、君道、宮人、勸學、道術、六術、道德說、大政(上下)、修政語(上下)、禮容語(下)、胎教雜事、立後義。
五十六篇あり、就中「孝篇は篇目のみ有りて本文

を闕く、或は意を取りて名づくるあり、或は篇首の文字又は篇中の文字を取りて名づくるあり、一定せず。

〔注解〕

○賈子新書纂註六卷日本録 木弘撰

鹽鐵論十二卷

〔作者、題名〕漢の桓寬撰す、寬字は次公、汝南の人、宣帝の時擧げられて郎と爲り、後、廬江の太守に至る、初め武帝の時財政窮迫し、桑弘羊等權酷(官にて酒を醸し賣ること)鹽鐵(鹽鐵を官より賣ること)の法を設け、僅に之を救ふことを得たり、然れども人民は煩る之に苦みたり、昭帝立つに及び、始元六年郡國に詔して、賢良文學の士を擧げ、問ふに民の疾苦する所を以てす、士皆權酷鹽鐵を罷めんことを請ひ、弘羊等と相辯難す、問對往復數千萬言、寬之を集めて書と爲す凡て六十篇あり、篇目を分つと雖、其實は始終文學と大夫御史の問答にして首尾相屬せり、後、權酷は廢せられたるも、鹽鐵は則ち舊の如し、故に寬、此書を表し、鹽鐵を以て名と爲す、蓋し其議の盡く行はれざるを惜むなりといふ。(漢書本傳參考)

〔體裁〕此書は左の六十篇より成る。

本議、力耕、通有、錯弊、禁耕、復古、非軼、晁錯、刺權、刺復、論儒、憂邊、園池、輕重、未通、地廣、食富、毀學、褒賢、相刺、殊路、頌賢、遵道、論誹、孝養、刺議、利議、國疾、散不足、救匱、鹽鐵、鉞石、除狹、疾貧、後刑、授時、水旱誅秦、伐功、西域、世務、和親、絲役、險固、論勇、論功、論鄒、論菑、刑德、申韓、周秦、詔聖、大論、雜論。

〔大意、傳來〕此書論ずる所、皆經濟の事にして、先王之道を述べ、六經の旨を稱す、剴切周到、小大兼備せり、故に諸史皆之を儒家に列せり、獨、黃虞稷の千頃堂書目收めて史部食貨中に入る、名に循ひて其實を失ひたる者なり、(明)の嘉靖三十二年張之象始めて之が注を作れり、(我國)にては現在書目に著録すれば、其傳來の早きを知る可く、伊藤仁齋の如きは殊に之を稱賞せり。

〔注解〕

○鹽鐵論十卷考證三卷明張之象注、清張敦仁考證

法言十三卷

〔作者、題名〕 漢の揚雄撰す、雄字は子雲、蜀郡成都の人、少にして學を好み、訓詁章句を爲めず、深く先王の道を味ひ、其意に非ざれば富貴と雖、事とせず哀帝の時、丁傅、董賢、事を用ふ、諸々之に附離する者、家より起ちて二千石に至るあり、時に雄方に太玄を草す、以て自ら守りて泊如たりき、年四十餘、大司馬王音、其文を奇とし、召して郎と爲し、黃門に給事せしむ、然れども勢利に淡きを以て、進まず、王莽位を篡するに及び、老蒼を以て大夫と爲る、劉棻の罪を得る、雄亦連及せしも、許されたり、後、病を以て官を黜きしが、召されて大夫と爲れり、天鳳五年(六七八)卒す、年七十一(漢書本傳參考)雄は漢代第一の儒家にして、兼て哲學者なり、然るに王莽の爲めに劇秦美新を作り、其徳を稱揚せしを以て、後人の譏刺する所と爲れり、此書は雄が著書中最も見る可き者にして、本傳に「雄は諸子が各、其知を以て舛馳し、大抵聖人を譽り、怪迂析辨詭辭を爲し、以て世事を撓す、小辯と雖、終に大道を破る、太史公六國を記し楚漢を歴、麟止に訖るも、聖人と是非を同くせず、

頗る經に諳るを見るを爲し、故に人の問ふ者あれば、常に法を以て之に應じ、誤して以て十三卷と爲し、論語に象り、號して法言と曰ふ」と、以て此書の由来を知る可し。

〔體裁、大意〕 此書は凡て十三篇あり左の如し。

學行、吾子、修身、問道、問神、問明、寡見、五百、先知、重黎、淵養、君子、孝至。

雄は天道を説くに無爲を以てせり、儒は大抵萬物の生育を以て天道と爲す、故に天道によりたる人道を以て民人を長養するの道となし、道德、仁義、禮智は即ち其具にして天の自然に則りたるものと爲せり、雄は之を指して無爲といひ、又無爲の爲ともいへり、(同道篇參考)是道家の言を借りて儒の道を説きしものといふ可し、雄又性善惡混淆説を唱へて孟荀二子の調和を試みたり、以上は其説の根本なり。

〔傳來〕 雄の此書當時に在りて、甚だ重んぜらる(六朝)の間、之が注を作る者、李軌、侯苞、宋衷の徒あり、(唐)に至り韓愈之を稱述して曰く、「孟子は醉乎として醇なる者なり、荀と揚とは大醇にして小疵あり、三子皆大賢、六藝を祖として、孔子を師とす云々」と、柳宗元、亦之に注せり、(宋)に至り宋成は宗

元の注を補ふ、司馬光は特に之を尊びていふ、「揚子の生最も後る、二子(孟、荀)に鑒みて、聖人に折衷し、潜心以て道の極致を求め、白首に至りて然る後書を著す、故に其得る所多しと爲す、後の立言者能く加ふる無し」と、乃ち諸儒の説を採りて、此書を注せり、然るに程子は評して、曼衍にして斷なく、優柔にして決せずといひ、蘇東坡は艱深の詞を以て、淺易の説を文るといひ、朱子は通鑑綱目を作りて、莽大夫揚雄死と書せしより、雄の人品著作、遂に皆儒者の輕んずる所と爲れり、然れども(明)の焦竑の如きは、揚雄莽に事へざるの辯を作りて、其冤を雪げり、(我國)には現在書目に著録すれば、其傳來の平安朝に在るを知るべし。

〔注解〕
○法言李軌注十三卷音義一卷晉李軌、唐柳宗元、宋宋成、吳秘、司馬光撰
○法言五臣注十卷

太玄經十卷

〔作者、題名〕 漢の揚雄の著なり、雄の傳、已に法言の條に出づ、此書は漢志以下皆太玄經といひ、司馬光

の集注本は、單に太玄と稱す、玄とは猶大極の如く天地萬物の根源をいひ、太は其功徳を形容せるなり。
〔體裁、大意〕 此書は易に擬して作りたる者なり、今其篇名を易の篇名に比較すれば左の如し。

家||卦、立首||系、玄贊||交、玄測||象、玄文||文言、玄攤、玄瑩、玄規、玄圖、玄告||繫辭、玄數||說卦、玄衡||序卦、玄錯||雜卦(上は太玄)

更に之を細に比ふれば、易は陰陽の二畫に分ち、此は一三三の三畫に分ち、易には初、二、三、四、五、上の六位あり、此には方、州、部、家の四重あり易は八卦を以て相重ねて六十四卦を爲し、此は一三三を以て四重に錯へて八十一首を爲し、易は每卦六爻合して三百八十四爻を爲し、此は每首九贊合して七百二十九贊を爲す、易には元、亨、利、貞あり、此には罔、直、蒙、會、冥あり、易は大衍の數五十、其用は四十九、此は天地の策各十八、合して三十六策たり、地は則ち三を虛にし三十三策を用ふ、易は之を撰ぶに四を以てし、此は之を撰ぶに三を以てす、易に七九八六あり、之を四象といふ、此に一二三あり、之を三幕といふ、是其重なる者なり、而して以上掲げたる目次は原書によりたる者なるが、晋の范望注

を作り玄首一篇を析きて、八十一家の前に分ち冠し
玄測一篇を析きて、七百二十九贊の下に分ち繋けた
るより、歴代之に従ひたれば、今本の體裁原書と異
なれり、司馬光曰く、大は則ち宇宙を包み、細は則
ち毛髮に入る、天地人の道を合して一と爲すと、此
書の大旨を盡くせりといふ可し。

〔傳來〕 雄の此書を作るや、劉歆は以て無用の業と爲
し、諸儒は聖人に非ずして經に擬して作るを攻撃せ
り、以て當時に重んぜられざるを知る可し、(後漢)
に至り宋衷之を注し、(吳)に至り陸績亦之を釋す、
(晉)范望は、宋、陸二家の注を集めて一篇と爲せり、
(宋)に至り司馬光大に之を尊び、謂へらく、「玄を讀
みて後、易を讀まば、易は刀を迎へて解けん、眞に天
地の秘を聞くもの、以て孔子に次ぐ可き者なり」と、
乃ち之が注を作れり、程朱等は之を評して、或は取る
可きあり、或は取る可からざるありと爲せり、此書漢
志以下皆儒家類に収め、鄭樵の通志は獨、易經類に
收む、(清)に至り四庫提要、書目答問は共に術數類
に入る、不可なるに似たり、漢志に従ふを妥當とす、
(我國)には日本國現在書目に著録すれば、其傳來の
古きを知るに足るも、未之を究むる者あるを聞かず。

〔注解〕 ○太玄經十卷 晉范 ○太玄集注十卷 宋司馬 ○太
玄解一卷 清焦

◎ 潜夫論十卷

〔作者、題名〕 後漢の王符撰す、符字は節信、安定臨
涇の人、少より學を好み、志操あり、馬融、張衡、
崔瑗と友とし善し、時人游官を秘む、而るに符は獨
耿介俗に同せず、此を以て遂に用ひられず、隱居し
て書を著し、以て當時の得失を議す、其名を顯すこ
とを欲せず、故に號して潜夫論といふ。(後漢書本傳參考)

〔體裁、大意〕 此書桓帝の時に成る、故に説く所漢末
の弊政に切なる者多し、凡て三十五篇其目左の如し。
讀學、務本、退利、論榮、賢難、明闇、考績、思
賢、本政、潜歎、忠貴、浮侈、慎微、實貢、班祿、
述教、三式、愛日、斷訟、衰制、勸將、救邊、邊
議、實邊、卜列、正列、相列、夢列、釋難、交際、
明忠、本訓、德化、五美志、志氏姓。
別に叙録一篇あり、各篇の主旨を概括せり、就中讀
學篇は立志修學の旨を論じ、五美志篇は帝王の世次
を述べ、志氏姓篇は譜牒の源流を考へ、卜列、相列、

夢列の三篇は皆方技を論じ、時事に與らず、而して
後漢書本傳に引ける忠貴、浮侈、實貢、愛日、述教の五
篇は、字句今本と同じからざる所あるは、范曄が損
益せし故なるべしといふ、此書(我國)には平安朝に
傳はしし事は、現在書目に著録せるにて知るべし。

〔注解〕
○潜夫論箋十卷 清汪樞

◎ 申鑒五卷

〔作者、題名〕 後漢の荀悅撰す、悅の傳は漢紀の部に
出づ、後漢書荀淑傳に曰く、「悅、禁中に侍講し、政の
曹氏に移るを見、志獻替に在り、而れども謀用ふる
所無し、乃ち申鑒五篇を作る、其論辨する所、政跡
を通見す、既に成りて奏上す、帝覽て之を善しとす」
と、其申鑒と名づくる所以は、政跡篇開卷に曰く「道
之本仁義而已矣、五典以經之、群籍以緯之、前鑒
既明、後復申之、故古之聖王、其於行義也、申重
而已、篤序無疆、謂之申鑒」と、是其名を命ず
るの意なり、又後世之を小荀子と稱するは、荀卿に
對するなり。

〔體裁、大意〕 凡て五篇、一篇一卷なり、一を政體と
いひ、二を時事といふ、皆朝市の大要及び時政の急
務を論ず、三を俗嫌といふ、皆穢僻、讒緯の説を辨す
四、五を雜言とす、上下に分つ、汎く義理を論せり、
性三品説の如き即ち雜言下の中に在り。

◎ 中論二卷

〔作者、題名〕 後漢の徐幹撰す、幹字は偉長、北海の
人なり、建安中、五官中郎將文學と爲る、陳琳、阮瑀、
王粲、曹植、應瑒、劉楨と皆文章を好む、世に之を
建安の七子といふ、曹植嘗て幹を贊して曰く、「偉長
文を抱き質を抱き、恬淡寡欲、箕山の志あり、彬々
たる君子といふ可し」と、以て其人品を知る可し、建
安二十三年(八七八)歿す年四十八、(三國志魏王) 中論の
中は中庸といふ意ならん。

〔體裁、大意、傳來〕 是書は隋唐志皆六卷に作る、崇
文總目も亦同し、獨鬼公武の讀書志、陳振孫の書錄解
題、並びに二卷に作り、今本と同じ、蓋し宋人の合
する所なり、凡て二十篇、其目左の如し。
治學、法象、修本、虛道、貴賤、貴言、藝紀、駁

辨、智行、爵祿、考偽、譴交、歷數、論天壽、務本、審大臣、慎所從、亡國、賞罰、民數。

義理を闡發し、本を經訓に原ねて、之を聖賢の道に歸す、故に宋の晁公武は曰く「漢は秦が學を滅するの後を承け、百氏雜家、聖人の道と並び傳はり、學者能く治心養性の方、去就語默の際に、自得するもの罕なり云々、幹獨能く六藝を考論し其内に得る所、又能く信じて之を充たす、濁世を逡巡して去就顯晦の大節あり、賢と謂はざる可けんや」と、此書もとは別に復三年喪、制役の二篇ありしも北宋の末より散佚せり、又卷首の原序は幹と同時の人の作る所なる可しといふ。(書錄解題參考)

● 傅 子 一 卷

〔作者〕 晋の傅玄撰す、玄字は休奕、北地泥陽の人なり、少くして孤貧、博學にして善く文を屬す、性剛勁亮直、人の短を容る、能はず、晋に事へて侍中と爲る、將に奏せんとする事有りて偶ま日暮に値へば、簪帶を整へ、白簡を捧げて竦誦して寐せず、坐して且を待つ、其峻急なること此の如し、是を以て貴遊諸子儼

伏して臺閣風を生ぜりといふ、又善く樂府歌章を作る、晋代宗廟朝廷の樂章、多くは玄の手に成れり、蓋し亦晋初著名の作家なり、卒す年六十、年月を缺く。(晋書本傳參考)

〔題名、傳來、體裁〕 本傳に曰く「玄、經國九流及び三史故事を撰論し、得失を評斷して、各々區別を爲し、名つけて傅子といひ、内外中篇を爲る、凡そ四部六録、合して百四十首、數十方言あり、世に行はる」と、此書傅子といふは即ち其姓を取りて名とせるなり、傳に又曰く「玄、初め内篇を作りて成り、以て司空王沈に示す、沈は玄に書を與へて曰く、足下著す所の書を省るに、政跡を經綸し、儒教を存重す、以て揚墨の流を塞くに足る」と、其當時に重んぜられたるを知る可し、隋書經籍志、唐書藝文志、馬總意林、皆傅子百四十卷といへば以て唐代には尙完本ありしを知る、宋に至りて崇文總目は僅に二十三篇を載せり、之を原目に較ぶれば、已に百十七篇を亡ふ、故に宋史藝文志僅に載せて五卷ありとせり、其後た尤袤(宋)の遂初堂書目に其名を見るのみにして元明の後には藏書家遂に著録せず、蓋し散佚せるなり、然れども、幸にして永樂大典中に、其文散見し、且

つ篇目を存せるを以て、乾隆帝の時四庫館員に命し、採録哀次せしむ、是に於て文義完く具はる者十二篇を得たり、正心仁論、義信、通志、舉賢、重爵祿、禮樂、貴教、檢商賈、校工、戒言、假言是なり、又文義未だ全からざる者十二篇を得たり、問政、治體、授職、官人、曲制、信直、矯違、問刑、安民、法刑、平役賦、鏡總叙是なり、乃ち之に依て編綴して總べて一卷と爲し、其永樂大典に載せずして、他書に徵引する所の者、後四十餘條を蒐輯して別に附録とせり、是即ち現行本にして武英殿聚珍段、及び百子全書に收むる者是なり、清の紀曉嵐曰く「此書論ずる所皆治道に關切にして、儒風を闡啓し、精意名言、往々にして在り、寶貴となすべきなり」と、以て是書の價值を知るに足る。

● 中 說 十 卷

〔作者〕 舊本隋の王通撰すと題す、宋の阮逸曰く、通の門人對問の書にして、薛收、姚義集めて之に名づく、今此書及び文中子世家、王氏家書襍錄(通の子福時の著)、阮逸の此書の序文によりて、綴りたる

傳によれば「王通は字を仲淹といひ、河東龍門の人なり、父隆、隋の文帝に仕ふ、通、幼にして明悟、學を好み、書を東海の李育に受け、詩を會稽の夏璜に受け、禮を河東の闞朗に受け、樂を北平の霍汲に受け、易を族父仲華に受け、仁壽二年始めて冠し、西長安に入り、太平十二策を献す、帝召見し之を稱美すれども、而も用ふること能はず、罷めて歸らしむ尋で復之を徵す、煬帝位に即き、また之を徵すも皆辭して至らず、専ら教授を以て事と爲す、唐初の俊傑、李靖、竇威、房玄齡、魏徵、温大雅、陳叔達、薛收等皆師と稱し、北面して王佐の道を受く、往來して業を受くる者は勝けて數ふ可からず、蓋し千餘人あり、大業十三年(二七七)卒す、年三十四、門人諡して文中子といふ、二弟あり疑といひ續といふ二子あり福郊、福時といふ、著す所禮論二十五篇、樂論二十篇、續書百五十篇、續詩三百六十篇、元經五十篇、贊易七十篇あり、門人之を王氏の六經といふ、而して中說を以て擬論語と爲せり、六經は通の歿後既に闕佚せしが、唐初に至り全く亡佚せり」と、能く此傳記を見る時は、事實の矛盾せるのみならず甚だ小説的なることを知らん、所謂六經が假令へ唐

初に亡佚せしとはいへ、門人も多き事なれば、其一句にても他書に引用せらる可きに、毫も之無きは怪む可き一なり、又通は一大儒にして而も多くの好弟子を有しながら、其名及び其教の、當世に聞えず、隋書にすら其傳を列せざるは怪む可き二なり、又通の孫王勃（時）の外、なほ勳、勳、勳、勳、助の五子あり、皆文名あり、而るに其祖の爲に、其學を闡揚する者あること無し、是怪む可き三なり、又其稱する所の朋友門人は、皆隋、唐の際の將相名臣、蘇威、揚素、賀若弼、李德林、李靖、竇威、房玄齡、杜如晦、王珪、魏徵、陳叔達、薛收の徒の如き、之を舊史に考ふるに、一人も語りて通が名に及ぶ者無し、是怪む可き四なり、又通より百七年前に卒したる關朗に禮を學ぶといひ、通が八歳の時（開皇十一年）に卒したる李德林が通に從學すといふ、陳叔達は通が未生前六年（大建十年）已に義陽王に封せられ、房玄齡は通より長すること六歳（貞觀廿二年卒年七十一歳）杜淹は隋の文帝の朝、江表に流されたる人なれば、文中子の生る時已に名を著せるに猶之を門人と爲す、是怪む可き五なり、故に宋の宋咸は實に其人無しといひ、洪邁は、全く阮逸の僞作なりといひ、

司馬光は通の弟凝及び子福時が其遺言に附會して作りし者なりといひ、明の胡應麟及び四庫提要亦此説に従ひ、清の姚際恒は、全く此書を燒棄すべしといふに至る、以上の諸説何れに従ふ可きか、今唐の楊炯・王勃集に序して、祖述は隋の秀才高弟といひ、皮日休が文中子之碑を作れるより見れば、世に其人あり、從て大儒たりし事は疑なきも、此中説は司馬氏の説の如く、疑及び福時の附會せし者なる可し、且つ始めて注を作りし阮逸は、僞書を作るを以て名なき人なれば、其誇飾せし所亦多かる可し、所謂文中子世家等、世に傳はる傳記（前に掲げたる）も、恐らくは假托にして信す可らず。

〔傳來〕 此書唐代に在りて貴ばれず、李翱之を鄙みて太公家教に竝べ、劉蕡六籍の奴隸を以て之を譏るが如き、其一例なり、（宋）に至り柳開、仲塗、孫何の徒振ひて而して之を張り、遂に世に行はれ、孔子に繼ぐ可き者と爲すに至る、阮逸は注を作りて聖人の修なる者とし、仲靈禪師は特に之を崇仰して碑文を製し、程子亦文中子は本は一隱君子なり、極めて格言あり、苟揚到らざる所と稱せしより、後人遂に附和雷同して敢て輕議せず、然れども（清）に至りて考證

學の勃興と共に、之を刺譏する者多く、姚際恒の如き其主なる者なり、（我國）にては、異制庭訓往來に此書名を掲げれば、南北朝時代に在りて、學者の講習せること畧々推知するに難からざる可し。

○中説注十卷 宋阮逸撰

帝範四卷

〔題名、體裁、大意〕 此書中説と稱するは、阮逸の序に、「子之道其天乎、天道則簡而功密矣、門人對問、如日星麗焉、雖環周万變、不出乎天中、云々、中之爲義、在易爲二五、在春秋爲權衡、在書爲皇極、在禮爲中庸、謂乎無形、非中也、謂乎有象、非中也、上不蕩乎虛無、下不局於器用、惟變所適、惟義所在、此中之大略也、中説者如是而已」といへるにて、知ることを得ん、之を文中子といふは、諡名を取るなり、凡て十篇あり。

王道、天地、事君、周公、問易、禮樂、述史、魏相、立命、關朗。

〔作者、題名〕 唐の太宗親ら撰し、以て太子に賜ふ所にして、帝王たる者の模範とすべきことを記したり、故に名づく、太宗姓は李、諱は世民、高祖の第三子なり、英邁衆を抜き、隋末の擾亂に際し、高祖を勸めて豪傑を收攬し、遂に天下を奄有す、位に即くに及び、文を興し武を振はし、國勢大に揚る、後世稱して貞觀の治といふ、貞觀二十三年（一三〇九）崩す、實壽五十三。（唐書本紀參考）

〔體裁、大意〕 凡て十二篇、晁公武が稱して六篇といふは殘闕本なり、全篇修身治國を以て貫く、其末頗る法修を以て自ら咎め、以て高宗を戒め、己れに效ふ勿らしむることをいへり、十二篇は、左の如し

君體、建親、求賢、審官、納諫、去讒、誠盈、崇儉、賞罰、務農、閱武、崇文。

是なり、皆其篇首の二字を取りて其目と爲す、別に意あるに非ず、論語に擬せし者なれば、多く問答體を用ひて記せり、格言甚だ多し、其の大旨は實に三教一致論に在りとす、後世の刻本には、末に司馬光の文中子補傳を附せし者あり。

〔傳來〕 此書は（唐）の時已に韋公肅、賈行二家の注有り、（宋）に至りて晁公武の讀書志には六篇といひ、陳振孫の書錄解題には一卷といへり、蓋し南宋に至

りて其半を佚せるならむ、永樂大典に載する所は卷末に(元)の吳萊の跋有りて雲南を征する時始めて完書を見たることを記したりといへば、即ち泰定以後漸く再び十二篇本の世に出でたるならむ、四庫提要に據れば其注中に揚萬里、呂祖謙の言あるもの、如し、乃ち注文も亦竄入あるを知る可し、此書(我國)に傳はる所のものは上下二卷にして注中には揚、呂二家の語無し、其草、賈二注の何れたるを詳にせずと雖、唐代のものたる推知するに難からず卷末に康平三年五月五日點之禮部郎中江匡房とあれば即ち宋の仁宗嘉祐五年に當る、實に揚、呂二家以前に在り、以て其渡來の舊きを證す可し。

● 臣 軌 二 卷

〔作者、題名、體裁〕 唐の則天武后撰す、武后姓は武、名は嬰、もと太宗の才人なりしが、後、高宗の后と爲り、遂に政權を專にし、高宗崩して中宗立つに及び、遂に中宗を廢して、其弟睿宗を立て、益、權を擅にし、遂に睿宗を廢して、自ら帝位に即き、則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十六年、中宗位に復

し、后を廢す、尋で卒せり、年八十一、(唐書后紀)此書は人臣たる者の軌法とす可き道を述べし者にして、垂拱元年の撰に係り長壽三年三月、貢舉人をして之を習はしむることを令せり、凡て 同體、至忠、守道、公正、匡諫、誠信、慎密、廉潔、良將、利人。

の十章に分ち、卷首には御製の序を冠す。

〔傳來〕 此書唐志、崇文總目、鄭樵の通志藝文畧に著録すれども、宋史には著録せざれば、元代既に散佚せしなる可し、然るに(我國)には舊く傳來し、帝軌と共に博士家にて必讀の書と爲り、鎌倉將軍家にては共に皆之を讀み治道の助と爲せりといふ、寛文八年、京都の人林白水といふ者帝軌と共に之を刻せり、此刻本幾ばくならずして支那に傳はり、阮元は之を四庫未收書目に收めたり。

● 續 孟 子 二 卷

〔作者、題名〕 唐の林慎思撰す、慎思字は虔中、福州長樂の人、咸通十年進士に及第し、十二年宏詞に中り、擢れて秘書省校書郎與中尉と爲り、尋で尙書水

部郎に陞り、後、万年縣令と爲る、會々黃巢長安を陥

れ、迫るに僞祿を以てす、屈せず、賊を罵りて死す、

〔福州府志參考〕 慎思以爲らく、孟子七篇軻の自著に非ず弟

子の其言を記するもの、故に軻の意を盡くす能はず

因て其説を傳へ演べて之に續ぐと、是即ち其名づく

る所以なり。

〔體裁〕 凡て十四篇、大抵孟子の言に因り、推闡して

其義を盡せり、獨り其自ら論を立てざるのみならず、

必ず孟子中の姓氏を假借せり、牀例殆ど莊子、列子等

の寓言に似たり、其言條理一貫、必讀の書たるを失

はず、十四篇の目は左の如し。

梁大夫、梁惠王、樂正子、公都子、高子、公孫丑、屋廬

子、咸丘蒙、齊宣王、万章、宋臣、莊暴、彭更、陳臻

● 伸 蒙 子 三 卷

〔作者、題名〕 唐の林慎思撰す、慎思の傳、續孟子の部に著録す、題に命するの義は、其自序に詳なり、曰く「舊著著、備範七篇、辭艱理僻、不爲、時人所知、復研、精覃、思、一旦齋沐禱、心靈、是宵夢有、異焉、明日召、著祝之、得、蒙之觀、曰伸、蒙入、觀、

通明之象也、因自號伸蒙子」と。

〔體裁、大意〕 慎思曰く、「嘗て二三子と興亡を辯論し古今を敷陳し、編して上中下三卷となす、槐里辨三

編(彰變、辯治、喻民、演諭、較功、演聖、喻時、全

明、遷善、明化、廣賢、較仁、持危、利用、の十四

章に分つ)は三才に象り、天地人の事を叙す、澤國紀

三篇辯刑、合天、去亂、鏡旨、鑑旨、演忠、明諫、辨

惑、分賢、彰明の九章に分つ)は三人に象り、君臣

民の事を叙す、時喻二篇(明性、刺奢、顯防、伺難、

治難、審類、遠化、譏惑、由天、警惑、辨功、慎名、

指常、指公、諷失、書誤の十六章に分つ)は二教に

象り、文武の事を叙す」と、今其書を見るに上卷は干

祿先生、知道先生、求己先生、三人の問答を設爲し、中

卷は宏文先生、如愚子、盧孔子三人の問答を設爲し、

下卷は則ち自己の説を述べたり、持論多、醇正なり、

清の黃式三、續伸蒙子の一編を作りて其要語を摘み、

斷して以て、其言の善は以て古今の疑を析くに足り、

以て後學の疏を勵ますに足り、以て治平の鑒を立つ

るに足る」といひしは、必しも阿諛の言に非ず。

◎素履子三卷

〔作者、題名〕唐の張弧撰す、弧の傳記詳ならず、宋晁說之の學易堂記に謂ふ、世傳ふる所の、子夏易傳は、乃ち弧の偽作と、舊本其官大理評事と署す、而して郷貫は已に考ふ可らず、素履の名は蓋し易象上傳の、素履之往獨行願也といへるに本づきしならむ。

〔體裁、傳來〕此書は分ちて履道、履德、履忠、履孝、履仁、履義、履智、履信、履禮、履樂、履富貴、履貧賤、履平、履危。の十四篇あり、宋代の書目中、新唐書藝文志、晁公武讀書志、陳振孫書錄解題、尤袤遂初堂書目には皆著録せず、たゞ鄭樵の藝文略、宋史藝文志に之有り、四庫提要に曰く、「其詞義平近、後代に出で、漢魏諸子と抗衡する能はず、故に宋より以來、甚だ世に顯はれず、宋濂諸子辨を作る、亦未だ之に及ばず、然れども、其經史を援引し、理道に根據す要は皆聖賢垂訓の旨に本づきて、之を正に歸す、蓋し亦儒家者流なり」と、藝文略、宋志には一卷に作り、今本三卷なるは、後人の分つ所なる可し、收めて藝海珠塵、函海の中に在り。

◎忠經一卷

〔作者、傳來〕舊本漢馬融撰、鄭玄注と題す、其文孝經に擬し十八章に分つ、今之を見るに、經と注と一手に出づるが如し、隋書經籍志、唐書藝文志皆著録せずして、始めて宋の崇文總目に出づるを見れば其宋代の偽書たること推知するに足れり。

◎家範十卷

〔作者、體裁〕宋の司馬光撰す、光の傳は、資治通鑑の部に出づ、此書は一の家政書にして、首に周易家人卦辭及び大學、孝經、堯典、詩、齊篇の語を節録し以て全書の序と爲し、其後治家祖、父母、子(上下)、女、孫、伯叔父、姪、兄弟、姑姊妹、夫、妻(上下)、舅甥、舅姑、婦、妾、乳母。の十九篇に分つ、皆古人の行事の法則とすべき者を雜へ採り、間々論斷を加へたり、朱子の小學と義例稍異にして用意略同く、且つ節目備に具はり、簡明にして要を得たり。

◎潜虛一卷

〔作者、體裁〕宋の司馬光が、太玄經に擬して作りたる者にして、卦圖、氣圖、性圖、名圖、行圖、命圖ありて其界説あり、首と尾に序論、結論の如き者あり、光の傳は資治通鑑の條を見よ。

〔大意、題名〕光の言に曰く、「萬物は皆虚を祖とす、虚は氣を生ず、氣以て卦を成す、體以て性を受く、性以て名を辨す、名以て行を立つ、行以て命を俟つ故に虚は物の府なり、氣は生の戸なり、卦は質の具なり、性は神の賦なり、名は事に分なり、行は人の務なり、命は時の過なり」と、以て其大旨を盡くせり、亦以て其書に名づくる所以を知るに足る。

〔注解、參考〕○潜虚發微論一卷 宋張敦 撰 ○潜虚解一卷 熊良 撰 ○潜虚述義四卷 潘周天 撰

◎儒言一卷

〔題名、作者〕儒言とは儒者の言論の義なるべし、宋の晁說之撰す、說之字は以道、鉅野の人、少にして

司馬光の人と爲りを慕ひ、之に従學す、光晩に迂叟と號す、說之因て自ら號して景迂といふ、元豐五年進士に及第す、蘇軾著述科を以て之を薦む、靖康の初、召されて著作郎と爲り、中書舍人に試みられ、太子詹事を兼ね、建炎の初、徽猷閣待制に擢んでられしが、高宗其書を作りて、孟子を非とするを惡み、勅して致仕せしむ、建炎三年(一七八八)卒す、年七十一、景迂集、容語等の著あり。(宋元學 參考)

◎帝學八卷

〔作者、題名、體裁〕宋の范祖禹撰す、祖禹の傳唐鑑の部に出づ、帝學とは猶帝王の學問といふが如し、元祐の初、祖禹經筵に在る時進むる所なり、古賢君より

宋の祖宗に至る、典學の事蹟を纂輯し、上古より漢唐に至るまでを二卷とし、宋の太宗より神宗に至るまでを六卷とす、其宋の諸帝に於て特に詳なるは、即ち祖に法るの意に本づきて啓迪するなり。

儒志編一卷(未見)

〔作者、傳來、題名〕 宋の王開祖撰す、開祖字は景山、永嘉の人、皇祐五年の進士、秘書省校書郎より、處州麗水縣の佐と爲る、後、郡城の東山に退居し、塾を設けて徒に授く、年僅に三十にして卒せり、(四庫提要) 其著多くは湮没し、此書獨存せしが、亦殘闕せり、明の王循永嘉に守たるの時、釐訂して之を刻し、當時儒志先生の稱あるに因りて、故に題して儒志編といへり記する所大抵其講學の語録なりといふ。

太極圖說一卷

〔作者、體裁、題名〕 宋の周敦頤撰す、敦頤字は茂叔、道州營道の人、博學力行にして、甚だ高節あり、嘗て分寧縣の主簿と爲り、獄事を決斷して合名あり、

たるなり、然れども此五性を動かして外物と接する時は、其行事に善惡の差別を生ずるを以て、聖人中正仁義の道を立て、靜を主とし、以て正に復歸せしむるなり、以上は其大略に過ぎざるも、要するに宇宙の本跡より人類に及ばし、天人合一の原理を明したる者なり、今此圖の傳來を考ふるに全く陳搏に出づ搏は之を魏伯陽より得、伯陽の參同契中、天地匡廓三五至精圖あり、以て併せ觀る可し(但し今の參同契には圖を遺す)此の如く本は道家の物なりしを、敦頤は之を易の太極に附合し、以て儒家の奥旨を發揮すと爲せり然れども二程子は深く信用せざりしと見え二程全書中絶えて太極の事に及ばず、朱子に至り此を過信し、注解を作りて其主旨を發揮し、聖人の統を得たる者とせり、然るに陸氏兄弟は之を排斥して、儒家の言に非すと爲す、即ち梭山の言に曰く、「太極圖與通書不類、疑非周子所爲」と、象山は即ち曰く、「希夷(陳搏)之學、老子之學也、無極二字、出老子知其雄章、吾聖人之道所無有也、老子首章言、無名天地之始、有名萬物之母、而率同之、此老子宗旨也、無極而太極、即是此旨」といひ、朱子と往復論難して、遂に鷲湖の會を起すに至れり、然れども朱子學

熙寧の初、郴州に知たり、趙抃及び呂公著の薦を以て、廣東轉運判官と爲る、疾を以て南康軍に知たらんことを求め、因りて廬山蓮花峰下に家す、前に溪あり、自ら名けて濂溪と云ふ、學者因て濂溪先生と稱す、熙寧六年(一七三三)卒す、年五十七、黃廷堅其人品を評して曰く、胸懷灑落光風霽月の如しと、以て其人を盡せりといふ可し(伊洛淵源)敦頤は實に宋學の開祖にして、其學は穆修より來る、修は種放の門人、放は陳搏の門人、搏は道家の徒にして、五代宋初の際に生榮せり、此書前に太極の圖あり、後に其説あり、故に太極圖說といふ。

〔大意、傳來〕 圖說僅に二百二十八字なるも、宋學の根本なるを以て、其大意を述ぶ可し、元來天地に先ちて絶跡にして自存せる者あり、無形無色にして、目に見る可からず、耳に聞く可からず、手に觸る可からず然れども秩然たる條理其中に在りて、天地萬物の本源を爲す、之を稱して太極といふ、太極には動と靜との二種の活動力あり、之によりて陰陽の二氣を生ず、二氣分れて木、火、土、金、水の五行と爲る、五行の精、凝合して人類を生ず、人類は五行に由りて仁、義、禮、智、信の五性を得るが故に、萬物の靈

の盛行と共に、深く世人の尊重する所と爲り、易、中庸に準擬するに至れり、清の毛奇齡、我伊藤東涯太田錦城の徒出で、其道家に本づくことを指陳し、殆ど周子をして、顔色無からしむるの概あるも、遂に世の崇仰を奪ふ能はず、是蓋し進化の理勢争ふ可からざるもの有るに由るならむ此書の始めて(我國)に傳來せるは、北畠親房の元元集に首句を引用せるを以て之を見れば、其北條氏の末葉に有るや明なり、徳川氏の頃に至り、山崎闇齋始めて之を刻せり。

〔注解、參考〕

- 太極圖說一卷 宋朱熹撰 ○太極圖說遺議一卷 毛奇齡撰 ○太極圖說論十四卷 清王嗣撰 ○太極圖說一卷 日本伊藤撰 ○太極圖說解一卷 三宅重長撰 ○太極圖說二卷 清撰

通書一卷

〔作者、題名〕 宋の周敦頤撰す、敦頤の傳は、已に太極圖說の條に著録す、朱子の言に據れば、敦頤の著書散失する者多し、獨此一篇のみは、太極圖說と並び存せり舊名づけて易通といひたるなりと、通とは

而貫の義なる可し。

〔體裁、大意〕 凡て四十篇あり。

誠(上下)、誠幾德、聖、慎動、道、師、幸、思、志學、順化、治、禮樂、務實、愛敬、動靜、樂(上中下)、聖學、公明、理性命、顔子、師友(上下)、過、勢、文辭、卑蘊、精蘊、乾損益動、家人睽復無妄、富貴、陋、擬議、刑、公、孔子(上下)、蒙艮。

是なり、其說太極圖說と相表裏せり、圖説は理論に屬し、此書は其應用を示しし者なり、其大意に謂へらく、人間修身の眞諦は中正仁義に在り、之を誠と名づく、誠は至善純一、天、等しき者なり、然れども其外物に應ずるに當り、善惡の生ずるを免れず、故に君子は意を此際に注ぎて戒慎せざる可からず、物して之を全くするには、無欲にして恬淡虚無、外而誘を拒絶して、常に心を靜に安んずるに在るのみと、誠、誠幾德、慎動、聖學等の諸篇は其重要なる者なり。

〔注解、考考〕

○通書解二卷 宋朱熹撰 ○西書述解一卷 明曹端撰 ○通書私考一卷 日本林朝雄撰 ○通書解翼義二卷 中村明道撰

●正蒙書十卷

〔作者、題名〕 宋の張載撰す、載字は子厚、横渠と號す、長安の人、少より喜びて兵を談す、年廿一書を以て范仲淹に謁す、仲淹一見して其遠器なるを知り、勸めて中庸を讀ましむ、載其書を讀み、猶以爲らく未だ足らずと、又釋老を究極す、得る所無し、反て之を六經に求む、嘗て虎皮に坐し、易を京師に講ず、聽從する者甚だ衆し、一夕二程子に至り與に易を論ず次日門人に語りて曰く、比ごろ二程子を見るに深く易道に明なり、吾及ばざる所なり、汝輩之を師とすべしと、坐を輒し講を輒め、二程と道學の要を語り、大に悟る所あり、盡く異學を棄て、聖學を奉ず、嘉祐二年進士に及第し、祁州司法參軍と爲る、熙寧の初召されて崇文院校書と爲りしが、已にして疾を以て辭し、南山の下に屏居し、諸生に教授せり、熙寧十年(一七三七)卒す、年五十八(伊洛淵源、此書單に正蒙ともいふ、蒙は蒙昧未明の謂にして、正は之を訂正するをいふなり)。

〔體裁、大意〕 此書は張載の學術を窺ふ可き第一の書なり、凡そ

〔注解〕

○正蒙解二卷 宋朱熹撰 ○正蒙釋四卷 明徐必淵撰 ○注解正蒙二卷 清李光地撰 ○正蒙初義十七卷 王植撰 ○正蒙集解九卷 張燾撰

●西銘一卷

〔作者、題名〕 宋の張載撰す、載の傳已に正蒙の部に著録す、載、塾の東西二窓に硯思、訂頑二銘を作り、以て諸生を誡む、後硯思を東銘と改め、訂頑を西銘と改む。

〔傳來、大意〕 東西銘、共に舊と文集中に在りたるものなるが、西銘は最も能く其倫理説を約述せるを以て、朱子別に注を作りしより、漸く學者の注意を引き、遂に東銘と離れて單行するに至れり、其説たる天地は我父母にして、人類は我同胞なり、故に人たる者は天地の命に安んじ、心閒に天を樂む可し、此其義務なりといふに在り。

〔注解〕

○西銘解一卷 宋朱熹撰 ○西銘述解一卷 明曹端撰 ○西銘考證講義一卷 朝鮮李滉撰 ○西銘私考一卷 日本林朝雄撰 ○西銘參考一卷 淺見安正撰 ○西銘詳義一卷 室直清撰

太和、參兩、天道、神化、動靜、誠明、太心、中正、至當、作者、三十、有德、有子、太易、樂器、王禘、乾稱。

の十七篇に分てり、載は宇宙を以て一太虚より生ずる者と爲して曰く、太虚は氣なり此氣の未だ發せざるを稱して太和若くば道といふ、現象世界の万事万物は、此一氣の屈伸往來して變化したる者なり、故に森羅万象、其分各、殊なりと雖之を生ずる所以は一のみ、而して森羅万象は變化して一定せざるも、其本體たる太虚は、千秋万古依然として同一なりと、是其宇宙論の主要なり、又人生を以て天地、氣質の二と爲し、天地の性は未發に屬して、渾然たる太和に居るをいふ、故に至善純一なり、氣質の性は已發にして形而下なり、人に才不才賢不肖あるは、皆之に由る、故に天地の性より人を論する時は、盡く同一なれども、氣質の性よりするときは、各人皆異なり、是を以て君子は氣質を性の本然とせずして、天地の性に復らんことを求むと、太和、參兩、天道、誠明、神化、動物、中正、の諸篇は、宇宙より人性、爲學に關する議論にして、最も注意す可きものなり。

●二程遺書二十五卷 附錄一卷

〔作者、傳來〕 宋の二程子の語を、當時門人の記録する所なり、後に朱子復た之を次録せるもの即ち此書なり、二程子とは程頤と程顥とをいふ、頤は頤の兄にして、共に周敦頤に學ぶ、頤字は伯淳、頤字は正叔、河南の人なり、頤は溫順篤實、之に對すれば春風和氣の中に在るが如く、偏執なる王安石をして、猶忠信の人として感激措かざらしめたり、頤は峻嚴刻削、之を望めば泰山巖巖たるの象あり、黨を樹て、東坡と争へるが如き、人をして聞くを厭はしむる者あり、故に頤は學を爲すに自然に融會するを貴ぶも、頤は歸納的に研究したりき、頤は京兆府、鄂縣の主簿、其他の諸官に歴任して、皆治績あり、元豐八年(一七四五)卒す、年五十四、墓に題して明道先生といふ、頤は哲宗の朝、東坡と共に經筵に侍せしが、資性相容れず、遂に黜けられ、崇寧二年邪說流行を以て目せられ、其學徒を解散することを命せられたり、大觀元年(一七六七)卒す、年七十五、嘗て學を伊川の傍に講するを以て、之を伊川先生といふ。(伊洛淵源、錄參考)

二程子歿後傳ふるの語録、李頤、呂大臨、謝良佐、游酢、蘇頌、劉紉、劉安節、楊迪、周孚先、唐棣、鮑若雨、鄒柄、暢大隱諸家あり、嘗に散亂次を失ふのみならず、各其意に隨ひて記録したるを以て、往往同じからず、尹焞嘗て朱光庭の鈔する所を以て伊川に質せしに、伊川其誤を指陳したるが如き、程子在世の時、已に其眞を失へるを知るべし、故に朱子曰く「游の録語は慢、上蔡の語は險、劉質夫の語は簡、李端伯の語は宏肆、永嘉諸公の語は絮なり」と此書は乾道四年、朱子其家藏本に因り、復び類を以て訪求附益し、聞く所の歲月の先後に據りて編成し、二十五卷と爲し別に附錄一卷を添へたるものなり。

〔體裁〕 卷一より十までを二先生語とす、曰く端伯傳師說、李端伯の録する所なり、曰く元豐已未呂與叔東見二先生語、曰く附東見録後、共に呂大學(字與叔)の録する所なり、曰く謝顯道記憶平日語、謝良佐(字顯道)の追録する所なり、曰く游定夫所録、游酢(字定夫)の録する所なり、以上各一卷と爲す、凡て四卷なり、卷五より八までは其録者詳ならず、曰く少日所聞諸師友說、録者を詳にせず、曰く洛陽議論、熙寧十年橫渠との議論なり、また各一卷を爲す、卷

十一より十四までを明道先生語と爲す、曰く師訓、曰く戊冬(元豐五年)見伯淳先生洛中所聞、曰く亥(全六)八月見先生於洛所聞、曰く亥九月過汝所聞、皆劉紉の録する所なり、卷十五より廿五までを伊川先生語といふ、曰く入關語録、關中學者の記する所、曰く己巳冬所聞、録者詳ならず、曰く劉元承手稿、劉安節(字元承)の記する所、曰く楊遵道錄、楊迪(字遵道)の記する所、曰く周伯忱錄、周孚先(字伯忱)の記する所、曰く師說、張釋の録する所、曰く附師說後、記する者明ならず、曰く伊川雜錄、唐棣の録する所、曰く附錄雜錄後、記する者明ならず、曰く鮑若雨錄鮑若雨の録する所、曰く鄒德久本、鄒柄の記する所、曰く暢潛道錄、暢大隱(字は潛道)の録する所なり。

●二程外書十二卷

〔作者、體裁、題名〕 二程子門人の記する所にして朱子の編次する者なり、其後序にいふ、遺書二十五篇、皆諸門人當時記録の全書、以て俗本紛更の謬を正すに足る、而して二先生の語に於ては、則ち遺す所無き能はず、是に於て諸人集録するものを取り、

參伍相除し、此十二篇を得、以て外書と爲すと、凡そ朱光庭、陳淵、李參、馮忠恕、羅從彦、王蘋、時紫芝七家の録する所を採れり、又胡安國、游酢の家本及び建陽の大全集印本三家、又傳聞雜記、王氏塵史より、孔文仲の疏に至るまで、凡そ百五十二條を均く採れり、其語皆遺書に録せざる者なれば、每卷悉く拾遺を以て目に標せり、外書とは遺書を以て内篇と爲し、之に對して名づくるなり、後世其撰擇當を得ざるを刺る者あり、然れども朱子は玉石相擇はず、悉く收録したることは其語類に「其記録未レ精、語意不レ圓、而終以「其言足以警一切學者、故敢收入」といへるを見れば、強ちに咎む可からざるに似たり。

●皇極經世書十二卷

〔作者、題名〕 宋の邵雍撰す、雍字は堯夫、共城の人なり、後、河南の人となり、李挺之に従ひて學を受け、刻苦勵精遂に一家の言を爲す、挺之は穆修の門人、修は种放の門人、放は陳搏の門人にして、共に道家なり、嘉祐中詔して遺逸を求めし時、王拱辰雍を以て

詔に應じ、將作監主簿を授けしが、疾と稱して官に就かず、熙寧十年(一七三七)卒す、年七十六、秘書省著作郎を贈り、元祐中謚を康節と賜ふ、雍、高明千古に迥出す、程明道嘗て論讀すること終日、退きて嘆じて曰く、堯夫は内聖外王の學なりと、著す所此外觀物外篇、漁樵對問、伊川擊壤集あり(伊洛淵源錄參考)此書元を以て會を經し、會を以て運を經し、運を以て世を經す、(大義の部)故に經世といふ、皇極とは尙書洪範の皇極と同じ、此書は其觀物内篇十二篇を指すものにして、性理大全收むる所の全書と異なり。

〔體裁、傳來〕 此書は觀物内篇十二篇あり、雍の歿後、王湜は易學を作り、祝泌は皇極經世解起數訣を作り、張行成は皇極經世索隱を作り、各々其學を傳ふ、朱子亦之を取る所多し、蔡季通の數學は實に其傳を得たる者なり、其子沈は洪範皇極内篇を作る、亦之を祖述する所多し、(明)に至り何瑋其理に戻る所あるをいひ、(清)に至り黃宗炎、朱竹垞等之を攻取する者生ぜり、此書は晁公武の讀書志、陳振孫の書錄解題、馬端臨の文獻通考、皆儒家類に收め、四庫提要、書目答問は術數類に收む、今は前者に従ふ。

〔大意〕 雍は易の如く、數理を以て天地を觀察したり、

其大旨に謂へらく、十二辰一日を爲し、三十日一月を爲し、十二月一年を爲し、三十年一世を爲し、十二世一運を爲し、三十運一會を爲し、十二會一元を爲す、故に一元は十二万九千六百年なり、天地は斯一元によりて一變遷を爲す者なり、万物は是時間的順序により、其加一倍法に従ひて發達する者なりと、此先天の數理を應用したる者は、則ち此書にして、其一篇より三篇までは天地人を論じ、四篇より十篇までは天人の關係を論じ、十一十二篇は動植飛走の事に及べり。

● 觀物外篇二卷

〔作者、題名〕 邵雍歿後、門人其平生の言を記ししものなり、小失なき能はざれども、内篇(前の皇極經世書なり)の義を發明するに足る者あるを以て、外篇と名づく、後世之を分ちて六卷と爲すものあり。

● 漁樵對問一卷

〔作者、題名〕 宋の邵雍撰す、雍の傳は皇極經世書の

部に出づ、此書は漁者と樵夫との問答にして、義理を發明せる者なり、蓋し漁樵に托して己れの説を述ぶるなり、故に或は漁樵問答と名づくるもあり、清の紀昀は此書雍の自著に非ず、後人其緒論を撫て爲りしものにして、猶二程遺書の盡く口授に出でざるが如きかといへり、或は然らむ。

● 二程粹言二卷

〔作者、體裁〕 宋の楊時が、二程門人記する所の、師説の最も純粹にして、要を得たる者を探りて、編次し、分ちて十篇と爲したるもの、即ち此書なり、時の傳は龜山集の部に録す、此書は時が洛より闕に歸る時、著したる者にして、遺書外書は、卷帙浩繁、驟かに其要を窺ひ難きも、幸に此あるに由りて、大に其勞を省くことを得べし、十篇は即ち左の如し
論道、論學、論書、論政、論事、天地、聖賢、君臣、心性、人物。

〔附記〕 此書、朝鮮の李滉溪は楊時の記する所に非ざるを疑ふ、我國の山崎闇齋亦之に和して曰く、
〔嘉、楊張(楊時)〕 兩家の集を閲するに、斯書は龜山

の爲る所に非ず、而して其序亦南軒の作る所に非ざる也云々、朱子言へるあり、胡明仲、伊川の語を文にして書と成す、凡そ五日にして畢る、世に河南夫子の書と傳ふるは乃ち其略なりと、竊に謂ふ、粹言は即ち此是なるか、楊月湖亦疑ひて以て明仲の書となす、然らば即ち明仲の才と雖、倉卒の爲る所、恐らくは惟に言語氣象を寫し得ざるのみならず、且つ其言の眞意を失ひ、其語の餘味を闕くもの或はこれあり、南軒の所謂、應に快便に乗じ目前に據り斷殺す可からざる者、是に於てか驗あり(二程治效錄跋)と、暫く録して考を俟つ。

● 公是先生弟子記一卷

〔作者、題名〕 宋の劉敞撰す、敞字は原父、臨江の人、慶曆の進士、集賢院判尙書考功より、知制誥に擢んでられ、翰林侍讀學士に拜せらる、英宗に侍講する時毎に事を指し經に據りて諷諫す、帝竦然容を改められたりといふ、集賢院學士に改められ、南京御史臺に判たり、熙寧元年(一七二八)卒す、年五十、敞、學問淵博、一大醇儒なり、歐陽修の如き常に疑義を質

せりといふ、著す所、春秋傳十五卷、春秋權衡十卷、春秋意林二卷、七經小傳三卷あり、(宋史本傳)是書題して弟子記といふ者は、蓋し言を弟子の記する所に托するなり、故に本傳にはたゞ弟子記と題せり、公是は其諡なり。

體裁、大意) 是書言ふ所、和平、毫も矯激の言無し、多く王安石の新學を攻め、亦兼ねて元祐の諸賢を鍼貶するの意を寓せり、晁公武が書中王安石、楊體の徒に於ては名を書し、王深甫、歐陽永叔の徒に於ては字を書すを稱して、褒貶を不すなりといふが如きは、牽強の説なり。

●童蒙訓三卷

〔作者〕 宋の呂本中撰す、本中字は居仁、公著の曾孫なり、楊時、游酢、尹焞に従學し、承務郎と爲り、宣和六年樞密院編修官に任じ、紹興六年特に進士出身を賜はり、起居舍人と爲り、八年中書舍人に遷り、侍講を兼ね、秦檜に黜けらる、著す所、詩二十卷、春秋解十卷等あり、(宋史本傳)

〔大意、體裁〕 此書記する所、正論格言多く、大抵皆

經訓に本づき、實用に切なり、身を以て政に従ふの道に於て深く裨益する所ある可し、原本詩文を論ずるの語ありしも、現行本に之を闕くは、後の道學者が詩文を輕視して之を削りしに由れりといふ。

●省心雜言一卷

〔作者〕 宋の李邦獻撰す、邦獻は懷州の人、李邦彥の弟なり、官直敷文閣に至る、(四庫提要)此書或は林通又は尹焞の著と署する者あり、皆誤なり。

〔大名、大意〕 大旨にいふ學の本は正心に在り、然れども、物慾の常に來りて之を蔽障するが故に、時時省みて正さざる可からず、故に省心を名と爲す、其箴規訓誡の辭を、筆に隨ひて記するを以て、雜言といふなり。

●上蔡語錄三卷

〔作者、題名、大意〕 宋の謝良佐の語錄なり、語錄は語を録する義にして、達磨西來以來、其徒各、其語を録し、是に始めて語錄の名あり、宋に至り、儒者多

篤摯なり。

●知言六卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の胡宏撰す、宏字は仁仲、安國の子なり、家學を承け、衡山の下に講説す、紹興中上書して時事を論せしとあり、後、召されしが疾を以て辭し家に卒す、著す所、詩文五卷、皇王大紀八十卷あり、(宋史儒林傳)此書は儒學上に於ける意見を、筆に隨ひて割記せしものにして、屢は改訂を経て成れり、知言は孟子浩然之氣章、「我能知言」の語に本づく、附録は朱子の是書を辨正するの語を集めたり。

〔體裁大意、傳來〕 是書は

天命、修身、陰陽、好惡、仲尼、文王、事物、紛華、一氣、義理、往來、大學、復義、漢文、中原。

の十五篇に分つ、論旨明白正大、正學を振ひ異端を闢くに足る、其性を論じて「性には善惡無し、心を以て性を成す、天理人欲、體を同くして用を異にし、行を同くして情を異にす、其體を指名して性といひ、其用を指名して心といふ、性動かざる能はず、動けば則ち心なり」といふが如きは、最も見る可き説な

く之に倣ふ、良佐字は順道、壽春上蔡の人、故に上蔡先生と名づく、程門四先生の一人なり、元豐八年、進士に及第し、建中靖國の初、京師に官す、召對して旨に忤ひ、出で、西京竹木場を監せしが、復事に坐して廢せらる、歿年詳ならず、(伊洛淵源)此書は門人曾恬、胡安國の録する所にして、紹興二十九年、朱子之を刪定す、後意に満たざる所あり、乾道四年重ねて之を編次す、即ち今本なり、良佐最も明道を信ず、仁を論するに生意を以てし、誠を論するに實理を以てし、敬を論するには常惺々を以てせり、故に遂に陸學の先驅と爲れり。

●袁氏世範三卷

〔作者、題名、體裁〕 宋の袁采撰す、字は君采、信安の人、進士に及第して、後諸州縣に歴仕す、廉明剛直を以て稱せらる、(衢州志)是書は其樂清縣に宰たる時作る所、凡そ陸親、處己、治家の三門に分ち、題して俗訓と曰ふ、府判劉鎮之が序を作り、始めて名を更めて世範といふ、世人の軌範といふ意ならむ、論する所立身處世の道に於て、反覆詳盡し、極めて

り、(此説常總に出づといふ)、張拭(宏の門人)序して曰く「其言約にして其義精しく、誠に道學の樞要にして制治の著龜なり」と、呂祖謙は以て正蒙に勝ると爲せり、然るに朱子は力めて其非を詆り、知言疑義を作り、祖謙及び拭と互に相論辨する所あるに至れり、然れども猶思索精到と稱して之を捨てず、明に至り初めて之を刊行せしも、竄亂多く眞を失へり、當に四庫の永樂大典本に従ふべし、粵雅堂叢書、百子全書に收むる者、即ち是なり。

〔参考〕

○知言疑義一卷 宋張拭撰

延平答問 一卷 補錄 一卷

〔作者、題名〕 程子の學一傳して楊時と爲り、再傳して羅從彦と爲り、又再傳して李侗と爲る、侗字は愿中、南劍州劍浦の人、延平に住す、故に延平先生といふ、隆興元年(一一八三)歿す、年七十一(宋史道學傳參考)侗、朱子に於ては父執たり、朱子紹興二十三年始めて侗に就きて教を受けてより、前後從學すること數月に過ぎざるも、其益を受けしこと極めて多し、此

書は即ち朱子が侗と往來學を論するの語を輯めたる者にして、侗が與劉平甫一書二通を以て之に附せり、補録は明の周木が朱子の門人、又朱子が侗を論するの語、及び祭文行狀を取りて、別に一卷と爲したる者なり。

近思錄 十四卷

〔作者、題名〕 朱子と呂祖謙との同じく撰する所なり、年譜を按ずるに、淳熙二年夏、祖謙朱子を寒泉精舍に訪ひ、留ること旬日、相共に周茂叔、二程子、張載の著書及び、其門人の記せる語録を讀み、其廣大宏博にして津涯なきが如きを嘆じ、初學者の入門所を知らざるを懼れ、因て其大體に關して日用に切なる者を撮り、六百二十餘を得たり、分ちて十四卷と爲し、名けて近思錄といふ、蓋し論語の「博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣」の語に本づく、其後また往復商榷刪補する所あり、前後一歲餘にして始めて定まれり、朱子の傳は朱子文集、祖謙の傳は大專紀の部に出づ。

〔大意、體裁〕 朱子曰く「窮鄉晚進、道に志ありて、明

師良友の以て之を先後する無き者は、誠に此を得て心に玩てば、亦以て其門を得て入るに足る、此の如くにして然して後、これを四君子の全書に求め、沈潜反覆し、優柔厭厭し、以て其博を致して之を約に反す、則ち其宗廟の美、百官の富、庶くば其以て之を盡すあらむ、若し煩勞を憚り、簡便に安んじ、以て足ることを此に取りて可と爲さば、則ち今日此書を纂集する所以の意に非ず」と、呂祖謙曰く「講學の方、日用躬行の實、具さに科級あり、是に循ひて進み、卑きより高きに升り、近きより遠きに及ばば庶幾くば纂集の指を失はず、若し乃ち卑近を厭ひて高遠に驚せ、等を躐え節を凌ぎ、空虚に流れ依據する所無きに至るは、則ち豈所謂近思といふ者ならんや」と、以て編集の意を盡くせり、朱子又曰く「四子は六經の楷梯、近思錄は四子の楷梯云々、修身の大法は小學に備はり、義理の精微は近思錄之を詳にす」と、以て此書の大意を盡くせりといふ可し、此書は此の如く義理を主とするを以て、或は一篇の文を全載するあり、或は著書中より一二節を節録するあり、或は語録文集より抄選するありて、體裁毫も一ならず、次に其篇目に就きて初めよりありとする説と、

初より無しとする説とあり、朱子語類に「近思錄録する所難にして、卷を逐ひて一事を以て名づく可からず」の語あるをれば、後説確なるに似たり、然れども卷を分つこと十四、各事類を爲して篇次せしこととは、語類に「近思錄逐篇綱目、一道體、二、學太要、三格物窮理、四存養、五改過遷善、克己復禮、六齊家之道、七出處進退辭受之義、八治國平天下之道、九制度、十君子處事之方、十一教學之道、十二改過及人心疵病、十三異端之學、十四聖賢氣象」といへるを見れば明なり、然るに後人之を讀む者其記憶と標出とに不便なるを以て、其大意をとり、改修して二字若くば三字と爲し、遂に定めて篇名と爲したり、是蓋し葉平巖の集解本に始まれり、即ち一道體、二爲學、三致知、四存養、五克己、六道、七出處、八治體、九治法、十政事、十一教學、十二警戒、十三辨異端、十四觀聖賢の十四篇是なり。

〔傳來〕 此書一たび出で、より、後、(宋)の蔡模(朱子門人)は近思錄十四卷を作りて、朱子の説を選集し、近思別錄十四卷を作りて、張拭、呂祖謙の説を採録し、(明)の江起は近思錄補十四卷を作りて、宋の朱子、張拭、呂祖謙三子より、明の薛瑄、蔡清、

胡居仁、羅欽順の説の躬行に益あるもののみを録したり、是等の書は皆共に参考に資するに足るかくて朱子學の普及と共に、學者此書を尊ぶと甚だしく、以て四書、小學、近思錄と並べ稱するに至れり、殊に(我國)山崎闇齋の學派は、十四目を大學の三綱八條目に比し、一句も増減す可からずと爲し、之を講ずる極めて精詳、諸生を教ふる必ず先づ此を讀みて然る後六經に及ばしめたり、(是は昌平校、諸藩校も大抵相同じ)、從ひて之が注解を作る者甚だ多かりき、此書の我國に傳來せるは未だ詳ならざるも、足利氏の末葉に在るは明なり、初めて尊びたるは小倉三省にして、之を翻刻したる者は山崎闇齋なり。

〔注解〕

○近思錄集注十四卷 清葉永撰 ○近思錄集解十四卷 清葉永撰 ○近思錄備考十四卷 日本貝原篤信撰 ○近思錄說略十四卷 清田澤山撰 ○近思錄筆記 卷數未定 ○近思錄摘說十四卷 清山實撰 ○近思錄訓蒙輯疏二卷 安部井撰

●雜學辨一卷附記疑一卷

〔作者、題名、體裁〕 宋の朱熹の撰、當代諸儒が佛老

の説を混せる者を辨斥せる書なり、故に雜學辨といふ、凡そ蘇軾の易傳十九條、蘇轍の老子解十四條、張九成の中庸解五十二條、呂希哲の大學解四條、皆原文を摘録し各駁正を其下に加へたり、乾道二年の作、記疑は淳熙二年の作なり、朱子の題詞に「偶々雜書一冊を得、何人の記する所なるかを知らず、其流傳すること久遠、上師門を累らはさんことを懼る云々」と、蓋し程子門人師説を記録し、附するに己れの意を以てし、因りて流れて二氏に入る者なり、是に於て、亦摘録して辨凡そ二十條を作れり、後人之を雜學辨の後に附刻せり、朱子の傳は朱子文集の條を見よ。

●小學書六卷

〔作者、題名〕 宋の朱子撰すと稱するも、實は其門人劉子澄、朱子の指授を受けて纂述せる者にして、淳熙十二年に起り、十四年に成る、朱子乃ち自ら校閱刪訂す、即ち今本なり、劉子澄、名は清之、字を以て行はる、臨江の人、紹興二十七年の進士、諸州縣の主簿を歴仕し、太常寺主簿より、鄂州の通判に至

る、著す所曾子内外雜篇訓蒙新書等あり、(傳參考)朱子の序に曰く、「古は小學(細學より大學)にて、人を教ふるに、灑掃應對進退の節、親を愛し長を敬し師を隆び友を親むの道を以てす、皆身を修め家を齊へ國を治め天下を平にするの本と爲す所以にして、必ず其をして講じて、之を幼穉の時に習はしむ、其習智と長じ、化心と成りて、扞格して勝へざるの思なからしむることを欲するなり、今其全書見る可からずと雖、而も傳記に雜出する者亦多し、讀者往々直に古今宜を異にするを以て、之を行ふこと無し、殊に知らず、其古今の異なる者、未だ始より行ふ可からずばあらざることを、今頗る蒐輯して、以て此書と爲し、之を童蒙に授けて、其講習を資くと、其命名する所以を知る可し、古は小學書といひ、後世は單に小學といふ。

〔體裁、大意〕 此書初めに朱子の題辭を載す、分ちて内外二篇と爲し、内篇は立教、明教、敬身、稽古の四目に分つ、立教は三代聖王の人を教ふる所以の法を述べ、明倫は人倫を明にす、父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之交、通論の六に分叙せり、敬身は身を修むるの要にして、心術之要、威儀

之則、衣服之制、飲食之節の四に分てり、稽古は古聖人の言行を舉げて前の三大目(立教、明倫、敬身)を證明せり、外篇は嘉言、善行の二目に分ち、嘉言は前の三大目に關する漢唐宋諸賢の言を、善行は之を踐行せる歷代諸賢の行を收録せり。

〔傳來〕

此書陳振孫の書錄解題等皆之を儒家類に收む、馬端臨の文獻通考に至り經部小學類に編入す、清の四庫提要復び儒家に列す、當を得たる者なり、朱子歿後世人此書を以て朱子の手録する所と爲し、尊ぶこと六經の如く、(明)の陳選以下注を作る者十餘家あり、其(我國)に傳來せるは新井白石の退私録に、北條顯時與書本の金澤文庫に之を藏せるをいへるあれば、北條氏の末世已に渡來せるを知る、之を尊重せし者は野中兼山、小倉三省にして、始めて之を校點し、且つ翻刻し諸生に先づ之を讀ましめたり、昌平校、諸藩校皆之を襲ひ、初等生の教科書と爲せり。

〔注解〕

○小學集注六卷、小學句讀六卷 明陳選撰 ○小學集說六卷 清高祖撰 ○小學纂注六卷 清高祖撰 ○小學集疏 卷數未定 ○小學纂說六卷 清高祖撰 ○小學書欄外書一卷 清高祖撰 ○小學書合纂四卷 清高祖撰

● 洪範皇極內篇二卷

〔作者、題名〕 宋の蔡沈撰す、沈字は仲默、朱子の門人なり、父を元定といふ、洪範の數學に通せしが、未だ論著するに及ばず、是に於て、沈は反覆數十年にして、此書を著せり、皇極は洪範の中樞なるより取りて書名と爲ししなり、沈は一生仕へず、九峰に隱居し、諸生に講説す、故に學者九峰先生と稱せり、紹定三年(一八九〇)歿す、年六十四、著す所書集傳、及び此書有り。(宋史儒傳參考)

〔大意、體裁〕 沈の自序に曰く、「天地の撰を體する者は易の象なり、天地の撰を紀する者は範の數なり、數は一に始まり、象は二に成る、一は奇、二は偶なり、奇は數の行はる、所以、偶は象の立つ所以なり、故に二にして四、四にして八、八は八卦の象なり、一にして三、三にして九、九は九疇の數なり、是に由りて之を重ぬれば、八にして六十四、六十四にして四千九十六而して備はれり、九にして八十一、八十一にして六千五百六十一而して數周ぬし、易は四聖をかへて象已に著れ、範は神禹に錫ふて數傳は

らす云々、夫れ天地の肇まる所以の者は數なり、人物の生まる、所以の者は數なり、萬事の失得する所以の者も亦數なり、數の體は形に象はれ、數の用は理に妙なり、神を究め化を知り、物表に獨立する者に非ざれば、曷んぞ以て此に與るに足らんや、然れども數の象は用を異にするが若くにして、本は則ち一、途を異にするが如くにして歸は則ち同じ、數を明にせざれば與に象を語るに足らず、象を明にせざれば與に數を語るに足らず、二者以て相有る可くして以て相無かる可からざるなり、余洪範を讀みて感ずるあり、上は天文を稽へ、下は地理を察し、中に人物古今の變を參へ、義理の精微を窮め、興亡の徵兆を究め、(中略)粗ば見る所を述ぶ」と、以て此書を作れる大意を知る可し、論三篇の外、洪範皇極圖以下十五圖あり。

● 朱子語類百四十卷

〔作者、傳來〕 宋の咸淳六年、導江の黎靖德編す、靖德嘉祐中沙縣の主簿たり、清謹にして能く繁劇を理めたり、博學文詞を善くし、嘗て沙陽志を修めたり、

是より前、朱子門人等其朱子と問答の語を録して各編を爲せり、始めて書を成したるは嘉定八年李道傳、廖德明等三十二人の記する所を輯めて四十三卷と爲せるもの是なり、續きで張洽の録する所一卷を増し、合せて之を池州に刻す、之を池録といふ、嘉

濟北集に已に語類の文を引用したれど、其傳來の北條氏の末業に在るは明なり、寛文八年鶴岡石齋之を校刊せり。

〔體裁〕 此書三十五門の目左の如し。

- 理氣、鬼神、性理、學、大學、論語、孟子、中庸、易、書、詩、孝經、春秋、禮、樂、孔孟周程張子、周子書、程子書、張子書、邵子書、程子門人、楊氏尹氏門人、羅氏胡氏門人、朱子、呂伯恭、陳葉、陸氏、老莊、釋氏、本朝、歷代、戰國漢唐諸子、雜類、作文、拾遺。

● 邇言十二卷

〔作者、題名、體裁〕 宋の劉炎撰す、炎は朱子の門人なり、傳記詳ならず、四庫提要には字は子宣、括蒼の人とあり、萬姓統譜には字は潜夫、邵武の人とあり、邇言とは、中庸の「舜好問而好察邇言」より出づ、邇は近なり、卑近の意、蓋し謙辭なり、是書分ちて成性、存心、立志、踐行、天道、人道、君道、臣道、今昔、經範、習俗、志見、の十二章と爲す、立言醇正篤實にして、人情事理に

近く、迂濶行ひ難きの説無く、また刻核高きに過ぐるの論無し、二程學派末流の弊の如きは、極めて能く之を言ひ盡くせり。

先聖大訓六卷

〔作者、體裁〕 宋の楊簡撰す、簡字は敬仲、慈溪の人陸九淵に師事し、自ら一家の學を爲す、乾道中進士に及第し、嘉定中秘書郎を授けられ、出で、温州に知となり、累遷して寶謨閣學士と成れり、學者之を慈湖先生と稱す、著す所、易傳等有り、(宋史儒林傳參考)此書は孔子の遺言を蒐輯し、排纂して五十五篇と爲し、各、之が注を下せり、簡は九淵の門に出づるを以て、聖言に牽合して心學を抒發せり、秦漢以來、百家詭誕の談、徃往にして孔子に依托す、簡能く僞妄を削り醇正に歸し、異同舛互亦釐訂する所多し、其搜羅澄汰の功没す可からざるなり、左に五十五篇の目を擧ぐ。
蜡賓、哀公問、哀公問禮、五儀、孔子燕居、孔子問居、入其、哀公問取人、哀公問政、問冠、席制、曾子問、擅弓、周公、言樂、少連、主言、君子、中庸、隱而、入官、定公問郊、喪禮、問康子疾、

心經一卷

〔作者、體裁〕 宋の眞德秀撰す、德秀の傳は眞西山文集の條に見ゆ、是書は聖賢心を論するの格言を集め、諸家の議論を以て之が注と爲し、末に四言の贊一首を附せり。

政經一卷

〔作者、體裁〕 宋の眞德秀撰す、此書は經典中政を論する語を取りて經と爲し、事跡を雜引して之が傳と爲せり、末に當時の近事六條を載せ、之を附録といふ、又德秀の歷官公牘告諭を以て之に附せり、陳振孫の書錄解題には心經ありて此書無し、故に僞書たるを疑ふ者あり、然れども其言取る可き者あれば、

必しも深く眞僞を辨するを要せざるに似たり。

黃氏日鈔九十四卷

〔作者、體裁、大意〕 宋の黃震撰す、震の傳は古今紀要の部に出づ、是書もと九十七卷、凡そ
讀孝經、讀論語、讀孟子、讀毛詩、讀尚書、讀周易各一卷、讀春秋七卷、讀禮記十六卷、讀周禮、讀三傳、讀孔氏書各一卷、讀諸儒書十三卷、讀史五卷、讀雜史、讀諸子各四卷、讀文集十卷。
合して六十八卷、皆諸家の書を讀み筆に隨ひて割記し斷するに己れの意を以てす、僅に切要なる數語を摘む者あり、一語を摘せずして但標目を存する者あり、又標目を存せずして一二字を採録する者あり、大旨學問に於ては老佛を排斥せり、又陸九淵、張九成より以上、楊時、謝良佐に溯り皆其禪を雜ふるを議せり、又朱子の陰符經、參同契を校正せるを疑へり、治術に於ては功利を攻撃し、痛く王安石を詆れり、朱子が周禮は太平を致す可しといふが如きも、亦敢て遽に信せず、其他經義を解説する、或は諸家を引きて以て朱子を翫け、或は朱子を舍て、諸家を取り、毫も門戸

の見を持せず、震は當時象山學派の楊簡と對立せる一大朱子學者なり、然れども妄信せず、取る可きを取り、舍つ可きを舍つ、猶朱子の程子に於けるが如し、此書を見れば以て其技量を知るに足る、六十九卷以後は震の雜文を輯めたる者にして、
申明、公移、講義、策問、書、記、序、題跋、啓、祝文、祭文、行狀、墓誌銘。
の十三類に分つ、八十一、八十九、九十二の三卷を缺く、故に現存する者は九十四卷なり。
〔附言〕 四庫提要に、此書を録し、八十一、八十九の二卷のみ缺くとせり、余の見たる所は、至元三年廬江の沈遂の刻本を、明の正徳己卯書肆龔某の覆刻せるものにして、前二卷の外九十二卷を缺けり、今姑く之に従ふ。

北溪字義二卷

〔作者、體裁〕 宋の陳淳撰す、淳字は安卿、北溪と號す、嘉定十年迪功郎、泉州安溪の主簿を授けられ、未だ上らずして卒す、著す所、語、孟、大學、中庸の口義等あり平生陸氏の禪を以て儒を扮するを惡み排闢を以て

任とす、(宋史本傳參考)此書は其門人王雋の録する所にして、命、性、心、情、才、志、意、仁、義、禮、智、信、忠、信、忠、恕、一貫、誠、敬、恭、敬、道、理、德、太極、皇極、中和、中庸、禮樂、經權、義利、鬼神、佛の二十六門に分ち、原委を詳論せり、旁通曲證、頗る發明する所あり。

〔傳來、題名〕 此書永嘉の趙氏初めて刻して後、覆刻する者數家あり、増減互に異なり、且つ舛互も亦少からざるを以て、(清)の顧秀虎、諸本の異同を校正し、復た他書に散見する者を以て、補遺一卷と爲し、附するに嚴陵講義四條を以てせり、曰く道學統緒、曰く師友淵源、曰く用工節目、曰く讀書次第是なり、即ち淳が嘉定九年嚴陵を過ぎ郡庠に講する時の作なり、此書後世誤りて性理字義と稱す、遂に沿稱して改めざる者あるに至れり。

〔注解〕

○性理字義諺解八卷 日本林信勝撰

●性理群書句解 二十三卷

〔作者〕 宋の熊節編し、熊剛大注す、節字は端操、建

陽の人、慶元中、官、通直郎に至り、閩清縣に知り、剛大も亦建陽の人、業を蔡淵、黃幹に受け、嘉定中、進士に及第す、建安書院を掌れり、其官歴詳ならず。(建陽縣志參考)

〔體裁、傳來〕 是書は宋の諸儒の遺文を、類分ちて編みせる者にして、首に周敦頤、二程、張載、邵雍、司馬光、朱熹七子の遺像並びに傳道支派を列し、贊訓、戒、箴、規、銘、詩、賦、序、記、說、錄、辨、論、圖、正蒙、皇極經世、通書、文。

と次を逐ふて採録せり、又間々楊時、羅仲素、范浚、呂大臨、蔡元定、黃幹、張拭、胡宏、真德秀、范質、蘇軾の文を載せたり、終には七子の行狀を載す、明の永樂中詔して性理大全を修むる、其諸儒の語を録するには皆近思錄に因りて之を廣め、其諸儒の文を録するには則ち此書に本づきて之を廣め、併せて其性理の名を取れり。

●魯齋心法 一卷

〔作者、傳來〕 元の許衡撰す、衡字は仲平、魯齋と號す、河内の人なり、程朱の學を奉じ、吳澄と共に元

六條を以て綱とす、卷一より年月日に分ちて其課程を立てたり、今所謂小學學科表なり、元史儒學傳に曰く、端禮讀書工程あり、國子監嘗て以て郡縣に頒つと、即ち此書なり。

●理學類編 八卷

〔作者、題名〕 明の張九韶撰す、九韶字は美和、清江の人、元末累りに擧げられたるも仕へず、洪武三年薦を以て、縣學教諭より、國子助教に遷り、翰林編修に改めらる、致仕の後、復徵され、入りて書を校せしことあり。(明史張九韶傳參考)此書は至正二十六年、乃ち未だ明に入らざる時の作なり、初め格物編と名づく、臨川の吳當之を見て以爲らく、輯むる所天地、鬼神人物、性命の說、乃ち格物の一端、以て格物の義を盡くすに足らずと、因りて改めて今の名と爲せり。

〔體裁〕 此書は左の七篇に分つ。

天地、天文、地理、鬼神、人物、性命、異端。周、程、張、邵、朱、六子の言を以て主と爲し、荀子以下五十三家の說を以て之を輔く、復た每篇の末に於て己れの意を釋述せり、凡て精要を摘みて、博引

代の二大家と稱す、仕へて京兆提學より、集賢大學士兼國子祭酒に至る、至元十八年(一九四一)卒す、年七十三。(元史本傳參考)此書は魯齋全書中、語録の下卷に其語録の上卷の三十二條を摘み、其次第を亂して其中に竄入し、心法と名つけたる者にして、極めて蕪蔓の書なり、明の嘉靖元年、韓士奇といふ者、始めて之を刻し、全書の外別に此書ある如くいへるは、大なる誤なり、支那にては甚だ行はれざれども、(我國)にては、近藤養元によりて寛文九年に刻せられ、獨り朱子派のみならず、伊藤仁齋の如きも之を尊び、盛に行はれたり。

●讀書分年日程 三卷

〔作者、體裁〕 元の程端禮撰す、端禮字は敬叔、畏齋と號す、鄞縣の人、薦を以て建平の教諭より、台州路の教授に遷る。(元史儒學傳參考)此書は始めに綱領あり、白鹿洞書院教條、程董二先生學則、西山真先生教子齋規、朱子讀書法を擧げ、後に朱子の言を擧げ以て其讀書法によるの意を言へり、凡て居敬持志、循序漸進、熟讀精思、虛心涵泳、切己體察、著緊用力の

繁稱を事とせず、故に條理次序頗る精密なり。

●性理大全七十卷

〔作者、題名〕 明の胡廣等勅を奉じて撰す、(永樂十三年、廣字は光大、吉水の人、建文二年進士に登第し、翰林修撰を授けられ、成祖の朝侍講より文淵閣大學士に進む、永樂十六年(二〇七八)卒す、年四十九、四書大全等亦勅を奉じて撰する所なり(明史本)、此書宋儒の説を集めたる者にして、性理の名は性理群書句解より出づ。

〔體裁〕 此書宋儒の説を取る凡そ百二十家、其中自ら卷帙を爲す者は左の如し。

周子太極圖說一卷、通書二卷、張子西銘一卷、正蒙二卷、邵子皇極經世書七卷、朱子易學啓蒙四卷、家禮四卷、蔡元定律呂新書二卷、蔡沈洪範皇極內篇二卷以上合して二十五卷なり、二十六卷より以下は、群言を拾録し、分ちて

理氣、鬼神、性理、道統、聖賢、諸儒、學、諸子、歷代、君道、治道、詩、文。

の十三目と爲す、然れども甚た蕪雜にして統を得ざるを以て、清の康熙帝は其粹要を抜き改めて、性理精義を撰せり。

●讀書錄十一卷續錄十二卷

〔作者、題名〕 明の薛瑄撰す、瑄字は德温、河津の人、敬軒と號す、永樂十九年の進士、官禮部右侍郎より、翰林院學士を兼ね、入りて機務に參せり、瑄が學は一に程朱を本とす、其己を修め人を教ふる、復性を以て主とす、充養遂密にして言動皆法る可し、嘗て曰く考亭より以還、斯道已に大に明に、著作を煩はす無し、直に須らく躬行すべき耳と、天順八年(一二一四)卒す、年七十六、禮部尙書を贈り、文清と諡す、(明史儒林) 著書には從政錄、文集等あり、此書自叙に「余讀書至心有所闕處、隨即錄之」とあり、即ち名づくる意を知る可し。

〔體裁、傳來〕 此書、薛瑄の門人、閻禹錫の編せるものは門類を用ひ、卷末に甯杲の編次せる策目五十八道を附せり、後、其板漫滅せるを以て、嘉靖十七年、鄭維新學校を加へ、釐めて十卷と爲して再刻せり、後又萬曆二十四年李涑の三刻せるものあり、即ち此本なり、

〔我國〕 徳川氏の初之を翻刻せるものは、卷末に呂柟の薛文清公祠堂記並に策目五十八道を載せたり、策目には山崎闇齋の跋あり、今本は門目を設けず、總て語録體なり。

●從政名言二卷

〔作者、題名、體裁〕 明の薛瑄撰す、瑄の傳已に讀書錄の部に著録す、瑄宣德元年四月、服闋り、都に至り上章して教職に就かんと請ふ、宣宗特に擢んで、御史と爲し、沅州の銀場に差監せらる、此書は即ち此時の作にして、政事上に於ける意見なり、語録體を用ふ、從政名言とは蓋し後人の附せし名なり、其言切實通達、然れども精要已に讀書錄中に見ゆ、是緒餘のみ、我國にては寛政十一年、板行せり。

●居業錄八卷

〔作者、題名〕 明の胡居仁撰し、門人余祐編す、居仁字は叔心、餘干の人、業を吳興弼に受け、白鹿書院に主となり、諸生に講授す、又桐源書院に講す、淮

王聘して易の講義を聞き、甚た優禮せらる、人と爲り謹端、其學忠信を以て主とし、放心を求むるを以て要と爲す、謂へらく聖學の始を成し終を成すは敬に在りと、因て敬齋といふ、成化二十年(一二四四)卒す、年五十一、(明史儒林) 此書は其講學語録なり。即ち之なり、張伯行の正誼堂叢書本には、之を心性淵源、學問工夫、聖賢德業、帝王事功、古今制度、天地化生、老佛歸宿、經傳旨趣。の類に分てり、後世學者薛瑄の讀書錄と並稱して、之を尊ぶ、正徳年中張吉は其書を刪りて要語を爲り、吳廷舉は粹言を作れり。

●朱子學的二卷

〔作者、題名〕 明の丘濬撰す、濬字は仲深、瓊山の人、故に學者瓊山先生といふ、景泰五年進士に及第し、編修を授けらる、累進して禮部尙書に至り、太子太保を加へられ、文淵閣大學士を兼ね、弘治八年(一二一五)卒す、年七十六、文莊と諡す、著す所大學衍義補、遺稿、家禮儀節等あり、(明史本) 濬は朱子の説を

奉ず、學問人品共に高し、我山崎闇齋の如きは、薛瑄と並稱して明代の二大儒とせり、學的是學のマトなり、朱子學のマトの意なり。

〔體裁、大意〕 是書は、

下學、特敬、窮理、精蘊、須看、鞭策、進德、道在、天德、韋齋、上達、古者、此學、仁禮、爲治、紀綱、聖人、前輩、斯文、道統。

の二十篇に分つ、蔡衍鏡の序に曰く、「上編下學より天徳に至る、事に由りて理に達す、之を終るに韋齋を以てするは、朱子の生平の言行を紀する所以、猶論語の郷黨あるが如きなり、下編は上達より、以て斯文に至る、理に由りて事を散す、之を終るに道統を以てするは、濂洛關閩の學の由來する所を紀する所以なり、猶論語の堯曰あるが如し」と、其說牽強に近きも、大旨を誤らすといふ可し。

●東溪日談錄十八卷

〔作者、體裁〕 明の周琦撰す、琦字は廷璽、馬平の人、成化十七年の進士、官南京戸部員外郎に至る。(四庫提要) 琦の學は薛瑄に出づ、是書は其心得する所を記した

る者にして、分ちて十三類と爲す、

性道談、理氣談、祭祀談、學術談、出處談、物理談、經傳談、著述談、史系談、儒正談、文詞談、異端談、關異談。

●傳習錄三卷

〔作者〕 明の王陽明の語録にして、門人徐愛等の編する所なり、陽明名は守仁、字は伯安、成化八年餘姚に生る、少より豪邁不羈、任侠を以て自ら居る、弘治十二年進士に及第し、翌年初めて仕官す、十八年佞臣劉瑾、谷大用を刻し、爲めに貴州龍陽驛丞に竄せらる、是より先き守仁佛老に溺れしが、此に至り深く悟る所あり、遂に知行合一の旨を發し、正學に復歸せり、時に正徳元年なり、同五年劉瑾等倒れ、復び召されて江西廬陵縣の知事と爲る、是より官復益々進み、弟子愈々多し、同十一年都察院左僉都御使に進み、南贛、汀、漳等の巡撫を命せらる、州の巨魁を討平して功あり、十四年王宸濠を生擒し、盛名一時を蓋ふ、然れども兵馬倥傯の間、未だ曾て一日も講學を廢せざるなり、嘉靖五年廣西の諸蠻を平

げ、同七年(二二八八)卒す、年五十七、穆宗の隆慶元年五月新建侯を贈り、文成と諡す、陽明の學は陸象山に出で、別に一家を爲したる者、朱子と並稱して其名孔孟に次がり、陽明の號は、其弘治十六年、會稽宛委山陽明洞中に室を築き住せしより起る、著書は此外に詩文集等あり(明史本傳、明儒學案、年譜、爾來王文成傳本、同續補等參考) 陽明學派を餘姚學派、又は姚江學派といふ、皆郷名に取れるなり。

〔題名、傳來〕 傳習とは、傳は之を師に受くるをいひ、

習は之を己に熟するをいふ、論語學而篇、曾子の言に傳不習乎とあるに本つけり、初め正徳七年、徐愛、陽明の論學の語を録し、名つけて傳習錄といひ、且つ序文を製す、同十三年門人薛侃、愛が此書に、陸澄及び己れが録する所を加へて刻す、之を初刻本とす、嘉靖三年十月、門人南元善、陽明の人に答へて學を論ずるの書八篇を輯め、之を傳習下卷と爲し、前輯を合せて之を刻す、之を再刻本とす、嘉靖七年冬、門人錢德洪、王汝中と廣信に至り陽明の計を門人に告げ、三年にして遺言を収録せんことを約す、繼で後門人各記する所を以て德洪に遺る、德洪問正に切なる者を選び、其私録する所を合せ、

陽明文録と共に刻せんとせしが、適と愛に逢ひて果さず、同三十四年、曾才漢、德洪の手抄を得、復た傍ら采輯し、名けて遺言といひ、荆に刻す、德洪之を讀みて、當時采録すること未だ精しからざるを覺え、乃ち爲めに其重複を刪り、蕪蔓なる者を削り、其三分の一を存し、名づけて傳習續録といひ、復た寧國の水西精舎に刻す、翌年沈思畏の勸により、逸稿中其語の背かざる者を采り、一卷を得、名つけて補遺といひ、之を増刻す。(德洪の跋) 按ずるに現行本續録を以て、陳九川輯め德洪跋すと爲し、補遺を以て曾才漢の錄する所にして、德洪之に序すと爲し、全く之と異なれり、如何なる故なるかを知らず、況や補遺は黃以方の錄する所の語を以て滿つ、誠に疑ふ可し、後楊荆山、德洪の原本により、初刻、再刻、續録、補遺を合刻し、大學問等諸篇を附録と爲し、總て傳習錄と名づく、是より後之を刻する者多く、互に異同あり(我國)に傳はれるは慶長元和の交に在るか、寛文中嘗て之を刻せしも、今は傳本極めて稀なり、正徳二年九月、三輪執齋諸本を參考校輯して、所謂原刻本を以て上卷と爲し、再刻本に三篇を加へて中卷と爲し、續補遺に晩年定論を加へて下卷と爲し、荆山の

附録に陽明の略年譜を加へて附録と爲し、之を合刻し、最も盛に世に行はる、因りて今此本によりて體裁を述ふ可し、因に云ふ陽明學の流行と共に、其徒此書を奉して經典視し、尊重菅ならざることは、和漢を通して相同じ。

〔體裁〕 上卷には徐愛が録する所十四條、陸澄が録する所八十條、薛侃が録する所三十五條、合して百二十九條あり、中卷には答人論學書、答周道通書、答陸原靜書(二篇)、答歐陽崇一書、答羅整菴小宰書、答薛文蔚書(二篇)の八篇に、示弟立志說、訓蒙大意、教約の三篇あり、下卷には陳九川録する所十五條、黃以芳録する所十一條、黃修易録する所十一條、黃省曾が録する所十七條、錢德洪が録する所五十一條合して百十五條、之を續録とす、補遺は凡て二十八條、此外晚年定論を添ふ、附録は太學問、示徐曰仁應試、論俗四條、客坐私祝、畧年譜あり。

〔注解、參考〕

○陽明先生集要(理學編四卷、明施邦、日本三輪、重編) ○標注傳習錄三卷(希賢撰、重編) ○傳習錄外書三卷(重編)

學上に於ける隨筆なり、吉齋とは、其書室の名ならん。

〔大意、傳來〕 廷翰の學は朱子を宗とすれども、其一元氣説を唱ふるを異なりとす、「氣即道、道即氣、天地之初一氣而已矣」といひ、「夫陰陽今之所謂氣也、仁義即理也、若以理氣爲二物、則氣乃天之道、理乃人道乎」といふ、其主なる言なり、此書(我國)に傳來し、伊藤仁齋之に本づきて説を立てたりとて、徂徠、考證、朱子の諸學派より大なる攻撃を受けたり、然れども仁齋が之に據らざるは明なる所にして、山縣周南以來近時の島田篁村に至る迄、諸家既に詳論晰辨せり、周南此書を刻してより、漸く廣く世に傳はる。

●學部通辨十二卷

〔題名、作者〕 易の豐卦、豐其蔀の注に、蔀覆障蔽、光明之物也とあり、學部とは即ち正學を覆障せる義なり、通辨とは之を通じ辨するなり、明の陳建の著なり、建は廣東東莞の人、清瀾居士と號す、嘉靖十三年南閩に官たり、朱陸の異同に於て討論探究し、後

(子) 儒家

●困知記二卷續記二卷附録一卷

〔作者、體裁、題名〕 明の羅欽順撰す、欽順字は允升、整菴と號す、泰和の人、弘治六年の進士、編修を授けられ、累遷して後南京禮部尙書に至る、晩に致仕して、郷里に住し、聖學を究むること二十餘年、嘉靖二十六年(三〇七)卒す、年八十三、(明史儒林傳)此書は其儒學上に於ける隨筆にして、前記は嘉靖七年に成り凡て八十一章あり、續記は同十年に成り凡て八十章あり、附録は人に興へて學を論ずる書六編を收む、欽順の學初め禪を學び、後朱子を奉ず、たゞ一元氣論を主張するを異なりとす、其困知記といふは、自序に「名以困知、而著其實」といへるより見れば、困みて知りしことを記するといふ意ならん。

●吉齋漫錄二卷

〔作者、題名〕 明の吳廷翰撰す、廷翰字は崇伯、蘇原山人と號す、濡須の人、正徳十六年の進士、武宗の朝、銓曹に官せり、著す所此外に魏記、積記あり。(本書序文、題名) 此書は嘉靖二十二年の著にして其儒

十四年を経て、同二十七年に至り、此書を完成せり。〔體裁、大意、傳來〕 大旨、佛と陸象山とを以て、學の蔀となし、前編、後編、結編、終編に分ち、每編又上中下に分ち、朱子文集、語類、年譜の諸書より、其關係ある語を採りて之を辨せり、其自序に曰ふ、「專ら一實を明にし、以て三蔀を抉す、前編は朱陸早同晚異の實を明にし、後編は象山陽儒陰釋の實を明にし、續編は佛學近く人を似惑するの實を明にし、聖賢の正學、妄に議す可からざるの實を以て終ふ」と、以て此書の大意を知る可し、唯、其陸學を駁する慢罵に涉り、過激の言有り、故に或は以て陽に陸を攻むるは、即ち陰に王陽明を黜け利祿の資に充てんと欲するに在りと爲すもの有るに至る、(觀者錄)清の阮元は是等狂暴の語を刪削し、且つ朱子か晩年禮を講せる證左を擧げて、此書の未だ至らざる所を論せり、(阮元の書東塾陳氏學蔀通)我國にては寛文三年安東守正之を校刊し、復安政四年昌平校にて翻刻せり。

●呻吟語摘二卷

〔作者〕 明の呂坤撰す、坤字は叔簡、寧陵の人、萬曆

二年の進士、襄垣知縣より、累進して刑部左右侍郎に至る、人と爲り剛介峭直、意を朱子の學に留め、常に後進を誘導せり、同四十六年(二二七八)歿す、年八十三。(明史本傳參考)

〔題名、體裁〕 此書もと四卷、坤削りて二卷と爲す、故に摘といふ、呻吟とは、序に呻吟病聲也、呻吟語病時疾痛語也、云々、予小子生而昏弱、善病、病時呻吟、輒志所苦以自恨、曰慎疾無復病、己而弗慎又復病、輒又志之云々といへるにて、知る可し、内外二篇に分ち、内篇には

性命、存心、倫理、談道、修身、問學、應務の七門あり、外篇には

世運、聖賢、品藻、治道、人情、物理、廣喻、詞章の八門あり、其言は躬行實踐を以て主と爲し、精微を語らず、高遠を談せず、明末に於ける醇儒といふ可し。

〔附記〕 清の陳弘謀、呻吟語を節録して、呻吟語節録を作り、其遺を補ひて補遺を作れるも、其撰の一定せざる、到底坤の自抄に比す可からず、故に之を措く。

● 聖學宗要 一卷
● 學言三卷

〔作者、題名、體裁〕 明の劉宗周撰す、宗周字は起東、念臺と號す、又學を蕺山に講せしより蕺山先生といふ、紹興山陰の人、萬曆二十九年の進士、仕へて都察院左都御史に至る、南京守らすと聞き、食はずして死せり、時に清の順治二年(二三〇五)なり、年六十八、著す所文集、人譜、周易古文鈔等あり(明史本傳參考) 聖學宗要は、周子の太極圖說、張子の東銘、西銘、程子の識仁說、定性書、朱子の中和說、王守仁の良知問答等を載せ、各、注解を作れり、蓋し其友人劉去非の宋學宗源に本つきて之を増補し、加ふるに詮解を以てし、今の名に改めしなり、學言は其講學の語録にして、門人姜希の刻する所なり、宗周の學姚江に出づと雖、慎獨を以て宗と爲し、能く誠敬に歸す、故に王學末流の混濛自ら恣にする者と異なり。

● 明儒學案 六十二卷

〔作者〕 清の黃宗羲撰す、宗羲字は太冲、梨洲と號す、

● 宋元學案 一百卷

浙江餘姚の人、劉宗周に學ぶ、明の亡びんとするや、里中の子弟を率ひて轉戦し、また我國に來り援兵を乞ひしことあり、明亡ぶる後、郷に歸り、宗周の證人書院に住して諸生を教授し、徵辟せらるゝも皆辭して就かず、康熙三十四年(二三五五)卒す、年八十六、宗羲は宗周の學風を受くるを以て、陽明の學を奉ずと雖、末流の弊に陥らず、能く其神髓を得たり、故に濂洛の統をも尊び、張載の禮教、邵雍の象數、呂祖謙の文獻、陳傅良の經術、葉適の文章等をも、皆能く研究せり、著書多し、就中宋元學案、易學象數論、明夷待訪錄、明文授讀等名著たり。(先正事略附朝香獻類微參考) 宋元學案と同じく、各學案毎に、先づ小序あり、次に各人に就き略傳と學說とを掲げたり、唯、學系表無きを異なれりとす、其目左の如し。

〔題名、作者〕 宋元諸儒の學案にして、今の所謂列傳體哲學史なり、其主とする所は傳に在らずして學案に在り、故に學案を以て名となす、清の黃宗羲撰し、全祖望續補する所なり、宗羲の傳は明儒學案の部に著録す、祖望字は紹衣、一字は謝山、浙江鄞縣の人、乾隆元年進士に登第し、庶吉士を授けらる、幾はくならずして辭して家に歸り、蕺山瑞溪の諸書院を主とし諸生を教育せり、爾來徵辟皆就かず、同二十年(二四一五)卒す年五十一、著す所、經史問答、歸琦亭集等あり。(先正事略附朝香獻類微參考) 〔傳來〕 初め黃宗羲明儒學案及び此書を修む、明儒學案先づ成り、此書は全く成るに及ばずして卒す、其子百家續て之を編輯せしも、未だ其十の一を補ふ能はず、全祖望之を憂ひ、獨力増補し遂に完結す、道光十八年何凌漢之を浙江に刻せしが、阿片の亂の爲に版木を燒棄せり、後北京に刊せしが復た火災に遇へり、因て浙江に於て又刊行せしも、傳本極めて希なり、光緒五年、王梓材、馮雲濠、何紹基の三人資を投じて、校訂刊行し、漸く世に廣まる、即ち現

●三魚堂賸言十二卷

〔作者、體裁、題名〕 清の陸隴其撰す、隴其の傳は、讀朱隨筆の條に出づ、此書もと日鈔と名づく、皆平時割記の文にして、未だ門目を分たず、乾隆六年其甥陳濟排次して編を成し今の名に改む、亦標を立てざれとも其例を以て推求する時は、一卷より四卷に至るまで五經を説き、五六兩卷は四書を説きて、太極圖説、近思錄、小學に及び、七八兩卷は諸儒の得失を説き、九卷より十二卷まで子史を説き、間、雜事を論せり、而して卷首に隴其の傳略を添ふ、三魚堂は其齋の名なり、賸は副なり、そへ言の義なり。

●松陽鈔存二卷

〔作者、題名〕 清の陸隴其撰す、隴其の傳は讀朱隨筆の條に出づ、此書は其靈壽縣に知たる時、輯むる所の問學錄、日記の二書より、其最も切要なる語を摘みたる者なり、靈壽は古の松陽の地、故に松陽鈔存を以て名と爲す。

〔體裁、傳來〕 此書錄する所凡て七十八條あり、後張

伯行刊行して、其半を削り、大に著者の意を失へり、即ち正誼堂叢書に收むるものにして一卷なり、乾隆十六年楊開基は原本に本づきて、重ねて編し、舊書の面目に復せり。

●榕村語錄二十卷

〔作者〕 清の李光地の撰、門人徐用錫及び、其孫清植の輯むる所なり、光地字は晋卿、榕村又厚菴と號す、福建安溪の人、康熙九年の進士、編修を以て家居す、耿精忠の叛策を獻じ、功を以て侍讀學士と爲る、後内閣學士より文淵閣大學士に進む、康熙五十七年(二三七八)卒す、年七十七、著す所周易觀象、大學古本説、中庸章段、榕村全集等あり。(先正^三 界國朝 著錄類微參考)

〔體裁〕 此書は、光地の自記する所の者あり、子弟門人の記する所の者あり、各其條の後に注せり、凡そ經を説く者十七卷、諸子諸儒を論する者三卷、史を論する者、歷代を論する者各一巻、學を論する者、性理を論する者、治道を論する者、詩文韻學を論する者各二巻あり。

●朱子全書六十六卷

〔作者、題名、體裁〕 清の康熙五十二年、李光地等勅を奉じて撰す、光地の傳は榕村語錄の條に出づ、此書は朱子文集語類中に未定の説有りて、先後互に異に、或は門人記述する所、彼此迥に殊なり、學者一端に據りて徒に紛紜を重ねるを以て、類を分ち排輯し、釐めて十九門と爲し、眞を存し偽を削り、駁を去り醇を留め、朱子一家の言をして倫あり要あらしむ、黎靖徳の語類に比し、管に雲淵の差あるのみに非ざるなり、其全書と名づくるは全集の謂に非ずして、完全なる説を輯録したるをいふなり、十九門とは學、大學、論語、孟子、中庸、易、書、詩、春秋、禮、樂、性理、理氣、鬼神、道統、諸子、歷代、治道、文詩。

是なり。

●御纂性理精義十二卷

〔作者、體裁〕 清の聖祖、性理大全の蕪雜なるを憂へ、李光地等をして、其繁を削り要を擧げ、勅して此書

と爲さしむ、光地の傳は榕村語錄の條に出づ、此書は分ちて

大極圖説、通書、西銘、正蒙、皇極經世、易學啓蒙、家禮、律呂新書(以上全書抄)。學類、性命類、理氣類、治道類。

と爲す。

●二程語錄十八卷

〔作者、體裁、題名〕 清の張伯行撰す、伯行字は孝先、敬菴と號す、康熙二十四年進士に及第し、内閣中書より、歴官して禮部尙書に至る、雍正三年(二三八五)卒す、年七十五、伯行朱子の學を研め、深く得る所あり、道統錄等著書多し、(國朝著錄類微 先正^三 著略參考) 此書は二程遺書及び外書を刪訂し、合して遺書十五卷外書二卷附録一卷と爲せる者なり。

●河洛精蘊九卷

〔作者、題名〕 清の江永撰す、永の傳は群經補義の條に出づ、永謂へらく、天道を愛します、地寶を愛しま

行本なり。

〔體裁〕 此書每學案の首に、學系表あり、次に序あり、次に各人毎に先づ畧傳を擧げ、後に學說を其文集語錄等諸著書中より抜きて之を掲ぐ、宗義の原本は甚だ多からず、祖望の續補を経る者十の六七に居れり、故に現行本には宗義の原本に據りて、祖望の増損する者は、黃氏原本全氏修定と注し、全く祖望の補足せる者は、全氏補本と注し、宗義の原本にして祖望唯、其卷第を分つ者は、黃氏全本全氏次定と注し、宗義の原本を、祖望其卷第を分ち、特に其案を立つる者は、之を黃氏原本、全氏補定と注せり、又學派小傳、學案に至るまで、二氏の原本と補定とを區別し、一目の下に瞭然たらしむ、今其目を左に掲ぐ。

安定學案、泰山學案、高平學案、廬陵學案、古靈四先生學案、士劉諸儒學案、涑水學案、百源學案、滌溪學案、明道學案、伊川學案、橫渠學案、范呂諸儒學案、元城學案、華陽學案、景迂學案、滎陽學案、上蔡學案、龜山學案、薦山學案、和靖學案、兼山學案、震澤學案、劉李諸儒學案、呂范諸儒學案、周許諸儒學案、王張諸儒學案、武夷學案、陳

鄒諸儒學案、紫微學案、漢上學案、默堂學案、豫章學案、橫浦學案、衡麓學案、五峰學案、劉胡諸儒學案、趙張諸儒學案、范許諸儒學案、玉山學案、艾軒學案、晦翁學案、南軒學案、東萊學案、艮齋學案、止齋學案、水心學案、龍川學案、梭山復齋學案、象山學案、清江學案、說齋學案、徐陳諸儒學案、西山蔡氏學案、勉齋學案、潛菴學案、木鍾學案、南湖學案、九峰學案、北溪學案、滄洲諸儒學案、嶽麓諸儒學案、二江學案、慈湖學案、紫齋學案、廣平定川學案、槐堂諸儒學案、張祝諸儒學案、北劉諸儒學案、鶴山學案、西山真氏學案、北山四先生學案、雙峰學案、存齋晦翁學案、深寧學案、東發學案、靜清學案、巽齋學案、介軒學案、魯齋學案、靜修學案、草廬學案、靜明寶峰學案、師山學案、庸同諸儒學案、元祐黨案、慶元黨案、荆公新學略、蘇氏蜀學略、屏山鳴道集說略。就中獨り案を立つる者あり、數人を合して案を立つる者あり、其名稱は大抵其人の字號又は講說地名を用ひ、諸儒學案といふ者は、其中の有名なる人の姓、又は其講說の地名を取れり、別に元祐慶元黨案は年號を以て之を標す。

◎理學宗傳二十六卷

〔題名、作者〕 理學は性理の學なり、此書は其一代の宗とすべき人の傳記學說を系統的に敘述せるものなり、故に宗傳といふ、清の孫奇逢撰す、奇逢字は啓泰、夏峰先生と稱す、直隸保定府の人、明の萬曆二十八年、鄉試に擧げられ、左光斗、魏大中、周順昌の三名士と相親めり、奸臣魏忠賢の三氏を陥るゝや、身を以て之を救護せり、明亡ふる後、蘇門山百泉に住し、徒を集めて書を講ず、康熙十四年(二三三五)歿す、年九十二、奇逢初め陸王を信じ後、程朱を奉ず、清朝理學の先驅たり、四書近指、讀易大旨、書經近旨、聖學錄等の著あり、就中此書其最も心力を注ぐ所なりといふ。(先正事畧國朝 善類微考)

〔體裁〕 此書は、周茂叔、程明道、程伊川、張橫渠、邵康節、朱晦菴、陸象山、薛敬軒、王陽明、羅洪先、顧憲成の十一子を表して正宗とす、凡て十一卷、各人毎に先づ傳記を擧げ、次に其著書中より學說を窺ふべき者を節録せり、次に隋儒考、唐儒考各一卷、宋儒考四卷、元儒考一卷、明儒考七卷、附錄一卷あり、

◎讀朱隨筆四卷

〔作者、題名、體裁〕 清の陸隴其撰す、隴其字は稼書、平湖の人、康熙九年の進士、嘉定縣の知事より、後四川道監察御史に至る、其學一に程朱を奉じ、居敬窮理を以て本と爲す、蓋し清初第一の朱子學者なり、著書は四書講義困勉錄、讀禮志疑、問學錄、松陽講義、三魚堂文稿、三魚堂臆言等あり、康熙三十一年(二三五二)卒す、年六十三。(國朝善類微考 先正事畧) 此書は朱子文集を讀み、心得せる所を筆に隨ひて刻記せる者なり、故に讀朱隨筆といふ、正集中二十九卷以前の詩賦劄子等は、人の共に知る所なるを以て置きて論せず、其三十卷より以後別集五卷に至るまで、其精要を摘み、條を分ちて纂録し、各々案語を加へて之を申明せり、凡て三百餘條、隴其が朱子に對する意見は、悉く之によりて窺ふことを得べし。

體例相同じ、此書宋元學案、明儒學案と同じく、主とする所は學說に在り、今の所謂哲學史に屬す。

●三魚堂賸言十二卷

〔作者、體裁 題名〕 清の陸隴其撰す、隴其の傳は、讀朱附筆の條に出づ、此書もと日鈔と名づく、皆平時割記の文にして、未だ門目を分たず、乾隆六年其甥陳濟排次して編を成し今の名に改む、亦標を立てざれとも其例を以て推求する時は、一卷より四卷に至るまで五經を説き、五六兩卷は四書を説きて、太極圖説、近思錄、小學に及び、七八兩卷は諸儒の得失を説き、九卷より十二卷まで子史を説き、間、雜事を論せり、而して卷首に隴其の傳略を添ふ、三魚堂は其齋の名なり、賸は副なり、そへ言の義なり。

●松陽鈔存二卷

〔作者、題名〕 清の陸隴其撰す、隴其の傳は讀朱附筆の條に出づ、此書は其靈壽縣に知たる時、輯むる所の問學錄、日記の二書より、其最も切要なる語を摘みたる者なり、靈壽は古の松陽の地、故に松陽鈔存を以て名と爲す。

〔體裁、傳來〕 此書録する所凡て七十八條あり、後張

伯行刊行して、其半を削り、大に著者の意を失へり、即ち正誼堂叢書に收むるものにして一卷なり、乾隆十六年楊開基は原本に本づきて、重ねて編し、舊書の面目に復せり。

●榕村語錄三十卷

〔作者〕 清の李光地の撰、門人徐用錫及び、其孫清植の輯むる所なり、光地字は晋卿、榕村又厚菴と號す、福建安溪の人、康熙九年の進士、編修を以て家居す、耿精忠の叛策を獻じ、功を以て侍讀學士と爲る、後内閣學士より文淵閣大學士に進む、康熙五十七年(二三七八)卒す、年七十七、著す所周易觀象、大學古本説、中庸章段、榕村全集等あり。(先正^三、畧國朝^一、善^一、類^一、微^一、參^一、考^一)

〔體裁〕 此書は、光地の自記する所の者あり、子弟門人の記する所の者あり、各其條の後に注せり、凡そ經を説く者十七卷、諸子諸儒を論する者三卷、史を論する者、歴代を論する者各一卷、學を論する者、性理を論する者、治道を論する者、詩文韻學を論する者各二卷あり。

●朱子全書 六十六卷

〔作者、題名、體裁〕 清の康熙五十二年、李光地等勅を奉じて撰す、光地の傳は榕村語錄の條に出づ、此書は朱子文集語類中に未定の説有りて、先後互に異に、或は門人記述する所、彼此迥に殊なり、學者一端に據りて徒に紛紜を重ねるを以て、類を分ち排輯し、釐めて十九門と爲し、眞を存し偽を削り、駁を去り醇を留め、朱子一家の言をして倫あり要あらしむ、黎靖徳の語類に比し、管に雲淵の差あるのみに非ざるなり、其全書と名づくるは全集の謂に非ずして、完全なる説を輯録したるをいふなり、十九門とは、學、大學、論語、孟子、中庸、易、書、詩、春秋、禮、樂、性理、理氣、鬼神、道統、諸子、歴代、治道、文詩。

●御纂性理精義 十二卷

〔作者、體裁〕 清の聖祖、性理大全の蕪雜なるを愛へ、李光地等をして、其繁を削り要を擧げ、勅して此書

と爲さしむ、光地の傳は榕村語錄の條に出づ、此書は分ちて

大極圖説、通書、西銘、正蒙、皇極經世、易學啓蒙、家禮、律呂新書(以上全書抄)。學類、性命類、理氣類、治道類。

●二程語錄 十八卷

〔作者、體裁、題名〕 清の張伯行撰す、伯行字は孝先、敬菴と號す、康熙二十四年進士に及第し、内閣中書より、歴官して禮部尙書に至る、雍正三年(二三三八)卒す、年七十五、伯行朱子の學を研め、深く得る所あり、道統録等著書多し、(國朝善類^一、微^一、參^一、考^一) 此書は二程遺書及び外書を刪訂し、合して遺書十五卷外書二卷附録一卷と爲せる者なり。

●河洛精蘊 九卷

〔作者、題名〕 清の江永撰す、永の傳は群經補義の條に出づ、永謂へらく、天道を愛し、地寶を愛しま

す、河馬圖を出し、洛編書を出す、天地の大文章なり、聖人の精、聖人の蘊、共に此にあり、此書は即ち之を説明せる者なるを以て、河洛精蘊と名づく。

〔體裁、大意〕 此書を分ちて内外二篇となす、内篇を河洛之精といふ、圖書卦畫の原、先天後天の理、著策變占法を論せり、外篇を河洛之蘊といふ、圖書卦畫の包函する所と、他事を推廣して旁通すべき者とを論せり、内篇は圖十一、説二十六、外篇は圖四十四、説九十九、共に圖、説相雜れり。

●女學六卷

〔作者、體裁、大意〕 清の藍鼎元撰す、鼎元の傳は平嘉紀略の條に出づ、此書は女子教訓書にして目を女學總要、婦德(上下) 婦言、婦容、婦功。の五篇に分ちて三百五條あり、總要 於て古人の語を引きて其大綱を示し、婦德篇以下に於て古人の嘉言善行を擧げて之を證明せり。

●考信錄三十六卷 考信翼錄十卷

子門人の事を述べ、孟子事實錄二卷あり、孟子の傳記なり、考古續説三卷あり、以上の補論なり、考信附録二卷あり、家學の淵源及び此書刊刻の始末を述べ、次に考信翼錄には、王政三大典考三卷、讀風偶識四卷、尙書辨僞二卷、論語餘説一卷あり、引據該博にして考證精確、儒教を攻むる者必讀の良書なり。

●婦學一卷

〔作者、體裁〕 清の章學誠撰す、學誠字は實齋、少巖と號す、浙江會稽の人、乾隆四十三年の進士、仕へて國子監典籍に至る、(皇朝經世文編、海珠塵本卷首参考) 此書は女子に関する教訓、學術、文藝等を簡約に叙述せる者にして女學の沿革の如きも亦簡明に叙述せり、凡て十八條あり。

●國朝學案小識十四卷

〔題名、作者〕 清朝諸儒の學案なり、故に國朝といふ、小識とは猶略記といふが如し、清の唐鑑撰す、鑑字

〔作者、題名〕 清の崔述撰す、述字は武承、東壁と號す、直隸大名の人、乾隆元年の舉人、嘉慶元年羅源縣の知縣に選ばれ、後汀州府上杭縣に遷り、共に治績あり、晩に致仕して郷に歸り、嘉慶二十一年(二四七六) 歿す、年七十七(國朝先正、嘉慶朝考、述は近世の碩儒にして、其儒教の研究の如き頗る見る可き者あり、此書は實に四十餘年を経て、始めて成りたる者にして、畢生の精力此に注ぎたり、其考信錄と名づくるは、彼の自序に「居今日、欲考唐虞三代之事、是非必折衷於孔孟、而真僞必取信於詩書、而聖人之真可見、聖人之道可見也」といへるを以て知る可し。

〔體裁、大意〕 此書は古代儒教史論ともいふ可き者なり、考信錄は分ちて、前録四卷、正録二十卷、後録十二卷とす、前録には考信錄提要、及び補上古考信錄あり、正録には唐虞考信錄四卷あり、堯舜の事を述べ、夏考信錄二卷あり、夏后氏一代の事を述べ、商考信錄二卷あり、商一代の事を述べ、豐鎬考信錄八卷あり、周一代の事を述べ、文武周公の事は最も詳に叙述せり、洙泗考信錄四卷あり、孔子の詳傳なり。後録には豐鎬考信別録三卷あり、周代政事の盛衰、及び制度等を論ず、洙泗考信餘録三卷あり、孔

は鏡海、湖南善化の人、嘉慶十四年の進士、檢討より江南布政使に累進し、入りて太常卿と爲る、直言を以て聲名あり、程朱の學に精し、咸豐七年(二五一一) 卒す、又畿輔水利書の著あり。(國朝著類、先正事略参考)

〔體裁、大意〕 此書分ちて

傳道學案、翼道學案、守道學案、經學學案、心宗學案と爲す、而して守道、經學、心宗、の三學案には、別に待訪錄を添ふ、卷首に學案提要ありて其意を述べ、謂へらく、「聖人の學は格致正誠修齊治平のみ、夫子没してより、唯、顔子、曾子、子思、孟子其傳を得たり、孟子歿してより聖人の統絶ゆ、周子千百年の後に起りて、之を遺經に得、程子張子之を述べ、朱子之を大成す、是に於て聖學大に明なり、明に至り王陽明出で邪説を唱へ、聖學大に壞る、清に至り陸隴其等出で聖道を傳へ、之を既倒に支ふ、是に於て傳道學案を述べ、道を翼くる者多ければ道孤ならず、是に於て翼道學案を述べ、道を守る人ありて風俗美なり、故に守道學案を述べ、經は道を傳ふ、解經修道と目を同くして語る可らず、然れども功無しといふ可からず、漢學者(宋學に對する) 是なり、是に於て經學學案を述べ、心宗學案は附録なり、陽明學

者を收む、待訪録は未だ其著述を得ざるものにして、畧録して以て採訪を待つといふ意より名づく、各學案とも傳は極めて畧にして學説は詳しく叙述せり、學系表なし。

●漢學商兌三卷

〔作者、題名〕 清の方東樹撰す、東樹字は植之、安徽桐城の人、業を姚鼐に受け、詩文を學ぶ、四十以後専ら朱子の學を攻め、遂に一家を爲す、諸州に遊歴し、晩に郷に住し、生徒を教授し、一生官に就かず、咸豐元年(二五一一)歿す、年八十、著す所、此外、書林揚輝、一得舉學齋錄、思適居鈴語、病榻罪言、半字集、考槃集等あり、(方東樹集)東樹深く朱子の學を攻め、之を闡明するを以て、一生の務とす、痛く漢學者即ち考證家が、程朱の闕點を穿鑿し、自ら喜ぶの風あるを慨し、遂に此書を著せり、商兌は周易兌卦九四の「商兌、未寧、介疾有喜」とあるに本づく、兌は君子朋友を以て講習するの象あり、商は度なり、以て其書に名づくる所以を知る可し。

〔體裁、大意〕 此書は、毛奇齡、萬斯同、朱彝尊、顧

炎武、茅星來、戴震、江藩、焦循、臧琳、汪中、凌廷堪、錢大昕、惠棟、阮元、錢大昭、宋鑾、孫星衍、莊舛、段若膺、閻若璩、惠士奇、諸家の説を反駁せり、凡例によれば、固一卷なりしが、紙數多きを以て、分ちて上中下の、三卷と爲したるなり、就中卷中は上下に分たる、大致上卷は其道に畔きて罔説する根源に溯りて論じ、中卷は其經義小學に依附し、是に似て非なる者を辨じ、下卷は總論にして、唐宋の儒先を詆誣して事實を非とする者を辨せり、牀例は朱子の雜學辨に仿ひ、諸家の原文を摘録して、各々其下に辨正せり、事類を援引し、又は餘意を推衍する者は、各々條下に附注し、必ず出處を示せり。

●志學錄八卷續錄三卷

〔作者〕 清の方宗誠撰す、宗誠字は存之、桐城の人、東樹の從弟なり、業を東樹に受け、又許玉峰に從ふ、玉峰名は鼎、字は子秀、亦桐城の人、朱子學を攻め、東樹を友とし善し、宗誠郷に住し生徒に教授す、長髮賊の亂、賊兵桐城に入るや、之を空山に避け、柏堂の中に居る、柏堂は先世の享堂なり、後諸州に遊

●勸學篇二卷

び、同治八年會國藩に召され、直隸に至り官に就く、光緒六年辭して歸り、其集を編次す、時に年六十六なり、(方柏堂集前編次編續編後)著す所、柏堂集前編十四卷、次編十三卷、續編、後編各二十二卷、餘編八卷、春秋集義十二卷、孝經章義一卷、讀學庸筆記二卷、讀論孟筆記三卷、補記二卷、論文章本原三卷、說詩本義三卷、俟命錄十卷、輔仁錄四卷等あり。

〔題名、體裁〕 此書は宗誠が玉峰に從學する時、師命に本づき、自得せる所を割記し、光緒三年其繁を刪り誤を正し、略、倫次して一編と爲し、自ら學に志して得る所を録すといふ意より、志學錄といふ、目を論立志爲學、論存心謹言慎行處境、論居敬致知讀書記理、論存養省察克治、論反身躰察、論正倫理篤恩誼、論治體治法、論從祀賢儒學術事迹、の八篇に分つ、續録は光緒十一年の編次にして、同八年以後の割記に係る、

壬午筆記、癸未筆記、甲申筆記、補遺、に分つ、立論純正にして、能く朱子の真髓を得たり、就中續録は晩年の定論を窺ふに足れり。

〔題名、作者〕 荀子の勸學篇を取りて書名としたる者にして、意亦相同じ、清の張之洞の著なり、之洞字は孝達、一の字は香濤、無競居士と號す、直隸天津府南皮縣の人、同治二年の進士、翰林院編修より、諸官に歴任し、湖北、四川の學政、山西の巡撫に至り、光緒十年兩廣總督に進み、十五年湖廣總督に轉ず、現に其職に在り、故李鴻章、劉坤一等と並び稱せらる、著述は此外に書目答問、輟軒語等あり。

(A Chinese Biographical Dictionary) by Giles. 太陽第四卷十三號參考) 〔大意、體裁、傳來〕 之洞以爲らく、「當今學者新舊二派に分れて、各相陷擠排擊し、毫も之を折衷調和する無し、此の如くは、狡猾の徒邪説を張りて、衆心を蕩し、遂に天下を擾すに至らん、己れ兩湖總督に承乏し士を教へ民を化するの責あり、之を教導救濟せざる可からず」と乃ち此に時勢を規り、本末を綜べて、此書を著せり、凡て二十四篇、之を内外二大篇に分ち、内篇は本を務めて以て人心を正すを主とし、之を同心、教忠、明綱、知類、宗經、正權、循序、守約、去毒。

の九小篇に分ち、外篇は通を務め風氣を開くを以て主とし、之を

益智、遊學、設學、學制、廣譯、閱報、變法、變科舉、農工商學、兵學、鑛學、鐵路、會通、非弭兵、非攻教。の十五小篇に分てり、之洞二十四篇の義を括する五知を以てせり、其言に曰く、「一知、恥、恥、不、如、日、本、恥、不、如、土、耳、其、恥、不、如、暹、羅、恥、不、如、古、巴。二知、懼、懼、爲、印、度、懼、爲、越、南、緬、甸、朝、鮮、懼、爲、埃、及、懼、爲、波、蘭。三知、變、不、變、其、習、不、能、變、法。不、變、其、法、不、能、變、器。四知、要、中、學、考、古、非、要、致、用、爲、要、西、學、亦、有、別、西、學、非、要、西、政、爲、要。五知、本、在、海、外、不、忘、國、見、異、俗、不、忘、親、多、智、巧、不、忘、聖」と乃ち以爲らく所説悉く中庸の旨に合ふと、是に於て之を兩廣の人士に示し、且つ天下の識者に問ふ、然れども當時已に此に慊焉たらざる者あり、何啓等の如きは、勸學篇書後を著し、其志は是なるも、其論は則ち非なり、特に時に益なきのみならず、大に世に累ありといひ、辯駁餘力を遺さざるに至れり。

〔参考〕

○勸學篇書後一卷 清何啟、胡禮堂同撰

●孔子改制考二十一卷

〔作者〕 清の康有爲撰す、有爲字は廣夏、長素と號す、廣東南海縣の人、故に南海先生といふ、朱九江といふ者に就きて、孔子の學を受け、又佛教、及び西洋諸家の學説を讀み、大に得る所あり、長興及び桂林に講説す、甲午の敗(日清戦争)後、北京に強學會を開きしが、政府に禁止せらる、光緒廿四年(明治三十一年)帝大に庶政を改革せんとし、特に有爲を抜きて其任に當らしむ、有爲深く其知遇に感じ、將に大に爲すあらんとせしが、其改革の太だ急激なりし爲め、遂に反對黨に擠され、僅に身を以て日本に逃れ、轉じて米國に行き、又英國政府保護の下に印度に行けり、著書多し、就中此書及び新學僞經考は之を刊す、春秋三世義、大同學説、春秋公羊傳注、孟子大義述等は未だ刊せず。(清議報終)

〔題名、大意〕 有爲以爲らく、孔子は改制の素王なりと此書は即ち孔子が改制の事實を考證して述ぶ、故に名づく、有爲また六經論語に於て、獨り易と春秋とを尊び、孔子微言の在る所と爲す、其意にいふ、春秋は其自作、易は自ら其辭を繫けたればなり、謂

へらく、易は靈界の書、春秋は人間世の書、所謂廣大を致して精微を盡くし、高明を極めて、中庸に至る者と、門人梁啓超曰く、「先生の春秋を治むるや、首に改制の義を發明し、謂へらく、孔子時俗の蔽を感みて一たび之を革新せんと思へり、故に千古に進退し、法律を制定し、以て來者に貽しき、即ち春秋は孔子立つる所の憲法案なり、中國を導きて、野蠻の域を脱し、文明に進ましむる所以なり、故に曰く、春秋は天子の事なりと、但、孔子處る所の時勢地位、既に「ソロン」たること能はず、亦「ルーン」たることを必せず、故に之を記事に託して、其符號を立て、之を口説に傳へき、其大義を微言するは、則ち公羊穀梁二傳、及び春秋繁露等の書に在り、其未だ備はらざる者も、亦甲を推して以て乙を知り、一を擧げて以て三を反すべし、先生乃ち孔子改制考を著して、以て大に此旨を暢ぶ」と、以て此書の作意を知る可し。

〔體裁、傳來〕 此書は目を左の二十篇に分つ。

上古茫昧無稽考、周末諸子並起創教考、諸子創教改制考、諸子改制托古考、諸子爭教互攻考、墨老弟子後學考、儒教爲孔子所創考、孔子爲制法之王

●新學僞經考十四卷

〔作者、大意〕 清の康有爲撰す、有爲の傳、既に孔子改制考の部に著録す、有爲以爲らく、儒教は孔子の創むる所、世に擴めんことを圖り、名を堯舜文王に托せしのみ、然るに後來儒教を以て堯舜文王より出で、考、孔子創儒教改制考、六經皆孔子改制所作考、孔子改制託古考、孔子改制法堯舜文王考、孔子改制弟子時人据舊制問難考、諸子攻儒考、墨老攻儒尤盛考、儒墨交攻考、儒攻諸子考、儒墨最盛並稱考、魯國全從儒教考、儒教徧傳天下戰國秦漢間尤盛考、武帝後儒教一統考。每篇首に序ありて篇意を叙し、次に各細目に分ち、目毎に古書の文を擧げ、其後に己の意見を加へ、以て前後左右より孔子改制の事を引證せり、此書有爲失敗の後、政府は令を發して絶版を命じ、版木を燒棄したれば傳本極めて稀に我國に傳はれる亦僅に數部に過ぎず。

〔参考〕 ○翼教叢編七卷 清維新、此書亦新學僞經考の参考となるべし

〔作者、大意〕 清の康有爲撰す、有爲の傳、既に孔子改制考の部に著録す、有爲以爲らく、儒教は孔子の創むる所、世に擴めんことを圖り、名を堯舜文王に托せしのみ、然るに後來儒教を以て堯舜文王より出で、

孔子を以て之が大成者と爲すは、漢の劉歆が聖經を偽作して、孔子を誣ひたるによる、然るに歴代の通人大儒、皆之を妄信して、一人の孔子の爲めに冤を雪ぐ者無きは、悲む可きの至りなりと、此に於て歆の偽を露し、孔子の眞面目を發揮せんとして此書を著せり。

〔題名、體裁〕 有爲自ら題に名づくるの意を解して曰く、「夫れ古學の名を得る所以は、諸經の孔壁に出で、寫すに古文を以てするを以てなり、夫れ孔壁既に虚なれば、古文も亦贋偽のみ、何ぞ古と之いはん、後漢の時、學今古に分る、既に孔壁に托し、自ら古を以て尊と爲す、此即ち歆の其欺偽を售りし所以なり、今罪人斯に舊案を得れば、肅情して必ずや名を正し實を亂らしむる無かるべし、歆既に經を飾りて纂(王莽より)を佐け、身新の臣たり(莽國を新といふ)、則ち經を新學と爲す、名義の正しきなり」と、目を分ちて、

秦焚六經未嘗亡缺考、史記經說足證偽經考 漢書藝文志辨僞(上下)、漢書河間獻王魯共王傳辨僞、漢書儒林傳辨僞、漢書劉歆王莽傳辨僞、漢書憤攻僞經考、偽經傳於通學成於鄭玄考。後漢書儒林傳糾

二二二
謬附、說文序糾謬、經典釋文糾謬、隨書經籍志糾謬、偽經傳授表(上下)、書序弁僞附、尙書篇目異同眞僞表、劉向經說足證偽經考。

の十四篇と爲し、每篇首に大旨を序し、次に關係せる古書の文を引き、案語を加へて已れの意を加ふること、孔子改制考と異ならず、考證精確、學者一讀すべき書なり。

〔參考〕 判學偽經考辨一卷 日本註 原和撰

道家

陰符經一卷

〔題名〕 陰は暗なり、符は合なり、天機暗に事機に合ふ、故に陰符といふ。(本筌の說參考)
〔作者〕 舊本題して黃帝の撰と爲せども、實は後人の依託なり、唐の本筌之を石壁中得たりといふも信す可からず、其驪山の老母、大公、范蠡、張良、諸葛亮の諸人之が注解を爲れりといふに至りては、益虚誕なり、但、上清道士寇謙之の作といふもの或は

真に近からんか。(古今偽書 考參考)

〔體裁〕 分ちて上下二篇と爲す、僅に四十七條、今記する所は漢魏叢書本にして、漢張良注、武林黃嘉惠閱と識し、首に序一篇有りて名氏年月を著さす。

〔大意〕 此書は李筌の言に徴すれば、道法術の三者を演べたるものなり、道とは神仙抱一をいひ、法とは富國安民をいひ、術とは強兵戰勝をいふ、而して三者一に歸するを説けり、要するに全く虚無の道を説き修鍊の術をいふ道家者流の言なり、朱子が之を評して道に深き者に非ざれば作る能はずと(語錄 考參考)いへるは、理有りと謂ふ可し。

〔傳來〕 陰符經には兵家道家の二種有りて、歴代の史志周書陰符を以て兵家に著録し、黃帝(說)陰符を以て道家に編歸せり、就中隋書經籍志に太公陰符鈐錄一卷、又周書陰符九卷有りて、皆兵家の部に入れ、黃帝の著といはず、戰國策に蘇秦が箴を發きて太公陰符を得とあるも、亦兵家の陰符にして道家の陰符に非ざる可し、此書今本の始めて世に出でしは唐なり、永徽の初、褚遂良嘗て一百本を寫し、今尙其墨帖存すれば、即ち當時世に行はれしこと知る可し、(宋に至りては朱子、夏元鼎並に之が註を作り、(明)

の中葉、文徵明の家に於て石刻の陰符經を出せり、(我國)にては藤原佐世の日本國見在書目錄に著録したれば、宇多朝以前已に渡來せるを知る、但々之を兵家に收めたるは疑無き能はず。

〔注解、參考〕 陰符經解一卷 舊本黃帝撰、太公、范蠡、鬼谷子、張良、李筌、六家注と題す。○陰符經考異一卷 宋朱子撰。○陰符經講義四卷 夏元鼎撰。○陰符經註一卷 明孫汝匯撰。○陰符經註一卷 清李光地撰。

老子二卷

〔題名〕 周の老聃の著なるを以て老子と名づく、又之を道德經といふは其大道上徳を説きたるを以てなり。

〔作者〕 老子の傳は古來詳ならず、漢の司馬遷は李耳(孔子と)老萊子(上)太史儋(孔子以後)の三人を掲げて世其然否を知る莫しといへり、然れども其行文を考ふるに、其生國を記すに縣郷里を詳記して「楚苦縣厲鄉曲仁里人也」といひ、(史記に此文軀を用ひたるは唯々孔)老萊子、太史儋には「或曰」の二字を繋けて疑を存し、末段に老子は隱君子なりといひ、無爲にして自ら化、澹靜

にして自ら正しといひしを觀れば、蓋し李耳を以て老子と爲したるならむ、晋の葛洪は老子を以て孔子以前の人と爲せとも確證無し、元の羅璧は孔子の老聃に學ひたること無きを辯し、清の汪中は太史儋が老子の著者たるを説き、姚鼐は老彭を以て老子と爲し、老を以て氏とし、聃を以て字とし、孔子が禮を問へる人にして五千餘言を著せりといへり、然れども李耳を以て老子の著者とするを妥當とす、(子別に考)

(史記に據れば、李耳字は伯陽、謚して聃といふ、
許慎は聃は耳漫なりと、漫は平なり、耳論無くして平漫なるをいふ、耳と聃と字を以て聃と字するなり、謚は稱也なり、字をいふは謚法に聃の字無し、以て其諱行の姓名に非ざるを知らる可し、宋史に記には伯陽謚曰の四字無きものあり、) 其老聃といひ、(聃) 老彭といふ、(語) 共に皆李耳をいふなり、蓋し彭は徐州の地にして漢の楚國たり、昔は歸徳の地にして漢の淮陽たり、歸徳、徐州、地相鄰れば、則ち其居る所の地を取りて之を呼ぶこと、猶莊子の蒙城に居れるに由りて蒙莊といふに同じかる可し、而して其老といふものは尊長の稱なり、老子は周に仕へ守藏室の史と爲れり、孔子に教ふるに驕氣と多欲とを却けんことを以てし、周の衰ふるを見て遂に去る、關令尹喜の請によりて已むを得ずして書上下篇五千餘言を著せり、其終ふる所を知る莫し、(史記參考)

子には老子死、其友榮先之を弔す、或はいふ老子は天地に先たちて生ると、或はいふ、母之を懷すること七十二年にして生る、生時母の左腋を割きて出で、白首なり故に老子といふと、或はいふ、母適きて李樹の下に至り老子を生む、生れて能く言ふ、李樹を指して此を以て吾姓と爲せといへりと、(神仙傳、太平廣記等參考) 凡そ此の如きの類紛然たりと雖、要するに皆怪誕無稽の言、信するに足らざるなり。

(體裁) 初め上下二篇にして章を分たさざりしが漢文帝の時、(或は秦一河上公は之に注して八十一章に分ち、上篇を三十七章、下篇を四十四章と爲し、章毎に章名を附したり、然れとも河上公の注は後人僞作の疑無き能はず、(予が觀る所數本ありて注文) 成帝の時、嚴遵は七十二章に分ち、以て陰陽奇偶の數に象れり、魏の王弼は八十一章に分ち猶河上公と同じ、而して上代に在りては單に老子とのみ稱して未だ道德經の名有らず、其之有るは陳書張譏傳、北齊書杜弼傳等より始まれるもの、如し、唐の玄宗は其章句を改め、上篇は道をいひ下篇は徳をいふと爲して、凡て、道を説きしものを上篇に屬し、徳を論せしものを下篇に屬して、亦道德經と稱せり、元に至り、吳

澄は六十八章に分ち、我國の葛西因是は二十六節に分ちたり、又明の焦竑、清の姚鼐、及び我國の重野葆光等の如きは皆其分章を廢したり。

〔大意〕 老子の本旨を知らんと欲せば、先づ其時勢を看ざるべからず、當時は周道已に衰へ、諸侯は振威し、大夫は潜越し、臣君を弑し、子父を殺し、紛紛擾擾相踵で起る、是に於て、孔子は皇々として諸侯に游説し、石門の嘲罵を忍びて天下の慘禍を濟はんと欲せり、老子も亦之が根本的匡濟の道を究めんと欲して、書上下篇を著したれども、未だ孔子の如く自ら進みて天下の事に衝ることを欲せざりき、是蓋し孔子の執る所は周易に在り、周易の重する所は乾卦に在り、乾は健剛を以て主と爲し、進みて已まざる象有るを以て、孔子は身を挺きて時勢を救はむと欲したり、老子の執る所は軒轅氏の易に在り、軒轅氏の易は歸藏にして坤柔を主とするを以て、老子は隱遁して世難を避けたり、今老子が唱ふる所の大要を摘出せむ、老子の所謂道とは何ぞ、曰く冲、曰く自然、曰く樸、曰く無爲、人人無爲純樸にして大道に歸せば何の亂離か之有らん、是即ち其最大本旨にして、五千餘言は皆之が注脚たり、今其本旨の大道無

爲を略説せんとす、孔子は仁義を以て道と爲す、老子は仁義の外に大道ありと爲す、其所謂道とは、上帝天地に先だちて成り、其始は何の時なるを知らず、而して其體は希夷微にして常に不可知界に在りて言辭を絶つ、然れども其無爲の爲は微々として不知不識の間に周行し窮極する所なく、仁義忠孝の如く、仁は自ら仁、義は自ら義、忠は自ら忠、孝は自ら孝、孝といへば忠を含ます、忠といへば孝を含ます、各一局一方に偏して萬事を衰含すると能はざる道に非ざるなり、老子は之を假命して大道と名づく、道は本なり、智は末なり、一切の世智は機巧を作る、故に爭奪譏誣至らざる無し、是心、物に役せらるゝによる、無爲ならざるを以てなり、無爲は清靜自正にして、一も施設構作する所無し、故に老子は數、其本に復歸せざる可からざるを説けり、以上は惟其大要のみ、其詳細に至りては直に五千餘言に就きて深思玩味せざる可からず。

〔傳來〕 是書は(周)代に在りて、孔子の生存中には未だ出でず、後、列莊二子多く其語を引き其旨を奉じて世に行はれ、韓非は解老、喻老を作れり(漢)に至り、景帝の時、竇太后其言を好みて經と爲して道學を立

つ、然れども武帝の時一時其學を黜けしことあり、(後漢)桓帝の時、始めて老子を苦縣に祠り、(魏、晉、六朝)の間、盛に世に行はれ、遂に佛と比肩して並馳し、學者皆清談を好み、當世の事を謀らざるに至り、(唐)高宗、乾封元年、老子を追號して太上玄元皇帝と爲し、儀鳳三年、道德經を上經と爲し、貢舉の者をして皆之を兼通せしむ、玄宗、開元七年、親ら之に注し、天下に詔して之を藏めしめ、天寶元年、元元廟を置き、同二年、大聖祖の尊號を加へ、其書を講ずる所を崇元館と改稱して職員を置き、尊嚴偉麗を極めたり、是蓋し唐の姓李なるを以て其祖として尊敬するなり、(宋)に至り又道德經博士を置き、太上老君混元上德皇帝の號を贈る、而して是書を究むるもの亦多く、蘇轍、林希逸、葛長庚等各々之を注せり、(金)は國子監本を學校に頒ち、(元)は道德書を參校して、道德經のみを留め、餘は皆之を焚き、(明)は太祖、歸有光、李贄、薛蕙皆之が説を爲り、(清)に至りて畢沅、考異を著せり、而して(我國)に渡來したるは、奈良朝に在るべし、文德實錄、懷風藻、田氏家集、江吏部集、皇宋事實類苑等の諸書に徴して、邦人の夙に之を講讀せるを知る、日本

國現在書目録には二十餘種を收めたり、下りて鎌倉室町時代に至りても亦之を傳習し、(異國)庭訓往來、東海參徳川時代に至り、異學禁制の時と雖、諸儒之が注解を下すもの多く、現時哲學勃興の際、東洋哲學の巨魁として學者之を讀まざる者無きに至れり、西洋に於ても、亦之が翻譯注解を試むるもの他書に比して、尤も多し。(西洋)に在りて最初に譯せられたるは羅甸文にて、(附録)G. S. Steiner, Stanislas Julien氏、De Hermeticae litterae, Victor von Strauss氏、James Legge氏は共に英國文を以て、Victor von Strauss氏は獨逸文を以て亦皆之を翻譯せり、之が註釋を爲したるはReinhold von Jähnke氏、Alexander Paul Carus氏の英國文有り、以上九種の外尚之有る可しと雖未だ見聞せず、)

〔注解、參考〕
 ○老子注二卷 漢河上公撰 ○道德指歸論六卷 魏張湛撰 ○老子道德經二卷 魏王弼注武英殿本 ○道德經解二卷 唐呂向撰 ○老子注二卷 宋蘇軾撰 ○老子廣義二卷 宋林希逸撰 ○道德真經注四卷 元吳澄撰 ○老子翼二卷 考異一卷 明焦竑撰 ○老子通二卷 沈一貫撰 ○老子通義二卷 朱得之撰 ○老子集解二卷 薛蕙撰 ○道德經管解二卷 郭真撰 ○老子義解二卷 僧德清撰 ○老子章義二卷 清魏源撰 ○道德經攷異二卷 汪元亨撰 ○道德經註二卷 徐大綱撰 ○老子特解二卷 日本太田本義二卷 近藤舜撰 ○老子妄言二卷 明楊慎撰 ○老子正訓問義二卷 戶崎允撰 ○老子解二卷 重野蓀撰 ○老子附注二卷 葛西明撰 ○老子古解一卷 大竹齋撰 ○老子摘解二卷 廣瀨龍溪撰 ○老子全解五卷 太田本義撰

●關尹子一卷

〔題名 作者〕 舊本題して周の尹喜撰すと爲す、尹喜は老子と同時に關の令たりし人なり、故に關尹子といふ經典釋文に、尹喜字公度とあれども、其本づく所を知らず、陳直齋、宋景濂は、孫定の依託と爲せり、然れども孫定は南宋の人なり、張邦基(孫定より以前の人)の墨莊漫錄に、黃庭堅の句を載せて、關尹子の語を用ふと稱したるに見れば、其孫定の手に出でざるを知るべし、四庫提要に、唐、五代間の方士、文章を解する者の作ならんとせるは中らずと雖遠からざるべし。

〔傳來、體裁、大意〕 漢書藝文志に、關尹子九篇を録せるも、隋志、唐志、皆已に著録せず、南宋の時、徐藏子禮といふ者、是書を永嘉の孫定の家に得たり、首に劉向の校定序を載せ、後に葛洪の序あり、而るに其文は向の筆に似ず(宋濂語子)是其舊本に非ざるを以てなり、其篇數は漢志に符して九篇に分てり。
 一宇、二柱、三極、四符、五鑑、六匕、七釜、八籙、九藥。
 是れなり、大致、釋氏及び神仙方技家に法り、儒言を

籍りて、之を文れり。

〔注解〕

○關尹子二卷 宋陳顯撰 ○關尹子一卷 明楊慎撰

●文子二卷 (一名通玄真經)

〔作者〕 周の文子、姓は辛、名は鉞、文子は其字なり、號と計然といふ、葵丘濮上の人、范蠡の師にして、業を老子に受け、其遺言を録して十二篇と爲す、即ち此書なり、孔子と時を同くし楚の平王の間に稱へしといふ、(漢)の班固、(晉)の徐廣、(宋)の葉夢得、然れども此書果して辛鉞の著たるや否やは極めて疑ふ可し、漢代に在りて、己に班固は依託なるに似たりといへり、唐の柳子厚は駁書なりと爲し、宋の陳振孫は文子を以て計然の字と爲すの非をいひ、且つ其書も亦當時の本書に非ざるを辨じ、明の閔景賢は文章上より之を疑ひ清の姚際恒は李暹の作ならんといへり、今之を考ふるに、漢代の依託書あり、後人(或は李暹)淮南子を割裂して之を潤益せるものと爲すを妥當なりとす。

〔體裁〕 漢書藝文志には九篇と有り、隋書經籍志には十二篇と有りて今本と同じ、每篇一卷たり、其篇目

真經八卷(未)宋江 ○列子辨二卷撰人未詳 ○列子通義十卷明朱得
之撰 ○列子釋文考異一卷清任大 ○列子釋解 卷(未)本日
皆川 ○張注列子國子解八卷世撰

●莊子八卷 (一名南華真經)

〔題名〕 是書は莊周の著なるを以て名づく、一に南華經と云ふは、唐の天寶元年、莊子を尊びて南華真人と號し、其書を真經と云ひしに始まりしなり。

〔作者〕 周の莊周撰す、周は蒙人なり、蒙の漆園の吏と爲り、梁の惠王齊の宣王と時を同くせり、楚の威王、其賢を聞き、幣を厚くし之を迎へたれども遂に仕へず、終身逍遙自適して己が志を快くせりといふ、(史記老莊申韓列傳參考) 蒙は何國なるかを明にせず、故に後人異説を唱へ、或は梁人と爲し(釋文)、或は楚人といひ、(宋子)、或は宋人といふ、(漢書藝文志、史記索隱、呂氏春秋、高誘注、陳氏書錄解題)には、皆漢書に從ふ) 案するに、左氏傳襄公廿七年、蒙門の外に盟ふとある其杜注に、蒙門は宋の城門といへり、春秋時代の宋は即ち今の安徽省にして、今尙蒙城あり、又

讀史方輿紀要に、蒙城に漆園あり、莊周の園吏たりし所、亦漆邱と名づくとあるを觀れば、其宋人たること疑なし、又梁惠、齊宣と同時なれば、則ち孟子と大抵時を同じくせるを知る、然るに孟莊二書の中、互に其姓名を載せざるは、共に相聞かず、又相見ざりしか、抑も莊子は、孟子より後輩にして、相接すること能はざりしか、而して此書後人の竄入無き能はず、讓王、盜跖、說劍の諸篇は、惟に先秦の文に類せざるのみならず、亦西漢人の文字に類せず、然るに太史公以前即ち之有るは、曉る可からず、馬蹄、胙篋の如きは、文意又凡近にして、逍遙遊、太宗師の諸篇に視ぶれば殊に相伴しからず、意ふに、但、其内七篇のみ莊子の本書にして、外雜等二十六篇は或は其の徒の述ぶる所、混入するに非ざるか、(井觀) 今以上の三篇及漁父篇を見るに、郭象之に一字も注せず、其間、散見するものは、象の言に似ざるが如し、蓋し象も亦之を疑ひて姑く存せしものに非る無きを得んや、
〔體裁〕 史記列傳に十餘萬言とあり、漢志に莊子五十篇とあり、隋志に莊子二十卷、晉向秀注、今闕とあり、唐志に郭象注莊子十卷、向秀注二十卷とあり、其他釋文に崔譔注十卷、内篇七、外篇二十、又司馬

彪注二十一卷五十二篇等ありて、其卷と篇と古來同じからず、蓋し、郭象其巧難なるものを去り、定めて三十三篇と爲し、特に十の四を存せるなり、(茲)現 今行はるゝものは、皆三十三篇にして、内七篇、外十五篇、雜十一篇なり、即ち左の如し。

○内篇七篇。逍遙遊、齊物論、養生主、人間世、德充符、大宗師、應帝王。

○外篇十五篇。騁拇、馬蹄、胙篋、在宥、天地、天道、天運、刻意、繕性、秋水、至樂、達生、山水、田子方、知北遊。

○雜篇十一篇。庚桑楚、徐無鬼、則陽、外物、寓言、讓王、盜跖、說劍、漁父、列禦寇、天下。

〔大意〕 莊子の學は儒より道に入りしものゝ如し、蓋し子夏の學、田子方に傳はり、子方の後流れて莊周と爲る、(韓愈の送王珣序) 恰も韓非の始め荀卿に従ひ、後申商に歸したるが如し、其説く所は、大抵老子の言に本づき、寓言多く、道德を明に、仁義を輕じ、死生を一にし、是非を齊くし、虛無恬澹寂寞無爲なるに外ならず、漢の司馬遷は、以て孔子の徒を詆訾し、老子の術を明にせりといへるも、宋の蘇子瞻は以て、其實は予へ文を予へず、孔子を尊ぶ者莊子に如

く無しといへり。(明の楊慎集註等には皆) 二家の言は、共に兩端に馳せ過ぎたり、之を要するに、莊子は儒と其方を異にして其旨を同じくするものなり、故に其天下篇に於て、孔子以前の聖人を歴叙し、道孔子に至りて集大成せることを許して、其文は、詩、書、禮、樂、易、春秋なり、鄒魯の士縉紳先生多く能く之を明にすといひ、墨翟、禽滑蓋以下其身に至る道術者を擧げたるも孔子に及ばず以て其意の在る所を見る可し。

〔傳來〕 (晉)の向秀、郭象是書を注してより、盛に世に行はれ、(梁)の簡文帝、(北魏)の孝文帝、皆善く是に通ず、(唐)玄宗、開元元年、莊子を治むる者を擧げ、天寶元年には、莊子を尊び南華真人といひ、又是書を南華真經と稱し、兩京の崇元學に各博士助教を置き又學士一百員を置くに至る、(宋)景德二年、孫奭等、莊子釋文を校定纂刻し、重和元年、莊子博士を置きしが、靖康元年に至り、之を以て士を取ること禁せり、此朝に在りて是書を疑を挾みしもの多し、蘇軾は盜跖漁父二篇を以て眞に孔子を詆る者の如しといひ、又讓王說劍に至りては、皆淺陋にして道に入らずといひ、爲めに讓王、說劍、盜跖、漁

父の四篇を去りて、寓言の終りを列御寇の篇に合せり、羅勉道は又刻意、繕性も亦淺膚なりと爲し、二十六篇に改定せり、是皆其説は是なるも其擧は非なり、(明)に至りては、焦竑、歸有光、相繼ぎて注解を施し、各々論ずる所あり、(本邦)傳來は、奈良朝に在り、(懷風藻)平安朝の始已に十餘種の渡來あり、(見在書目)爾後其沿革は、老子と大差なし、老子條下に就きて見るべし。

〔注解、参考〕

○莊子郭注十卷 晉郭象注 ○莊子音義三卷 唐陸德明撰明版郭注
○南華真經注疏解經 (一名莊子注疏) 三十三卷 成立 ○南華真經新傳二十卷 (宋) 宋王 ○莊子句解 (一名莊子十卷) 林希逸撰
活字本には李士表の新編莊子十卷あり、
卷を附す蓋し朝鮮本に據りたるなり、
六卷 (見) 伯陽中二十六卷 ○南華真經義海纂微百附錄一卷 明焦竑撰 ○南華真經評註十卷 清有 ○莊子通義十卷 宋 ○南華真經副墨八卷 陸明 ○莊子通十卷 沈
○莊子要刪十卷 孫 ○莊子因六卷 清林雲龍撰我風泰鼎
の標注本あり参考、
○莊子解三十三卷 王夫 ○南華本義二卷 林仲
○南華簡鈔四卷 徐廷 ○莊子獨見三十三卷 胡文英撰
參讀註針、
○莊子考三卷 陸 ○郭注莊子跋五十二卷 杜多

秀峰 撰 ○莊子考六卷 戶崎尤 ○解莊二十四卷 宇津木益夫撰

◎周易參同契三卷

〔作者、題名〕列仙傳、神仙傳に據れば、漢の魏伯陽の著なり、伯陽は吳人なり、此書の外又、周易五相類一卷を著せり、參は天地造化の體に參はり、同は同類生成の用を資け、契は造化生成の功に合するの意なり。

〔大意〕周易の爻象を假借して、以て作丹の意を述べたり。

〔體裁、傳來〕伯陽、此書を著すや、先づ之を青州の徐從事に示せしに、徐は其名を掩ひて之に注し、桓帝の時復以て同郡の淳于叔通に授け、遂に世に行はるゝに至りきといふ、然れども隋書經籍志には未だ著録せず、舊唐書經籍志に始めて二卷と有りて之を五行家に入れたり、(後蜀)に至りて、彭曉、之を九十章に分ち、以て陽九の數に應じ、鼎器歌一篇のみは字句零碎にして章を分ち難きを以て獨後に存し、以て水一の數に應じ、名づけて周易參同通真義といひ

譯五卷 九喚道人撰

◎抱朴子内外篇八卷

〔題名、作者〕晋の葛洪撰す、洪字は稚川、抱朴子と號す、依て書に名づく、句容の人、少くして學を好み、儒學を以て名を知らる、又神仙道術を好みて其秘奥を得たり、咸和の初、散騎常侍大著作に任せられたれども就かず、交趾に丹砂を出すに聞き、請ひて句漏令と爲り、子姪を攜へて俱に廣州に至る、刺史郡嶽留めて聽さず、乃ち羅浮山に止まりて丹を煉り、山に在ること七年、遂に此書を著し、年八十一にして卒す、神仙傳十篇も亦洪の著す所なり、(參考)

〔體裁、大意、傳來〕自序に、内篇二十卷、外篇五十卷といひて、今本と相符す、而して洪の一卷は今の一篇なり、隋志に内篇二十一卷、音一卷を道家に入れ、外篇三十卷を雜家に入れたり、又舊唐志にも、内篇二十卷を道家に入れ、外篇五十一卷を雜家に入れて、其卷數各々異なり、内篇は神仙、吐納、符籙、尅治の術を論じ、純乎たる道家の言たり、外篇は則ち時政の得失、人事の臧否を論じ、文辭辨博にして理致あり、

又別に明鏡圖訣一篇を撰び、其卷末に附したり、(宋)に及びて、朱子は之が考異を作る、其章次皆彭曉に從へり、而して陳搏が周濂溪に傳へし太極圖の原圖たる、水火匡廓及び三五至精の兩圖は刪去して附せず、唯、彭氏の舊本のみは猶之を存せり、(明)の嘉靖中南方の者石函の古文參同契を得、以て伯陽の真本と爲し、彭本は經註を淆亂するを謂へり、(楊慎)然れども朱子は已に彭本に從ひ、永樂大典載する所も亦彭本に同じく、俞琰以下の諸註を其下に分隸せるを見れば、未だ遂に石函古文を以て直に伯陽の真本と信すべからざるなり。

〔附記〕鄭樵の通志略には參同契一門を立て、朱彝尊の經義考には周易の中に列せり、是俱に不倫の甚しき者なり、何となれば是書説く所、多く納甲の法を借り坎離鉛汞の要を言ひ、後來鏤火をいふ者の鼻祖となればなり、四庫提要、書目答問之を道家に列するは、當を得たる者なり因て今之に從ふ。

〔注解、参考〕

○周易參同通真義三卷 後蜀彭曉撰 ○周易參同契考異一卷 宋朱熹撰
○周易參同契解三卷 (宋) 陳顯撰 ○周易參同契發揮三卷 明蔣一彭撰
○古文參同契集解三卷 明蔣一彭撰 ○參同契卷釋疑一卷 俞琰撰

而して、其大旨を究むれば、黄老を主として道家の言たるを免れず、今本の目左の如し。

○内篇二十篇。暢玄論僊、對俗金丹、至理微旨、塞難、釋滯、道意、明本、僊藥、辯問、極言、勤求、雜應、黃白、登涉、地真、遐覽、祛惑、附別旨。

○外篇五十二篇。嘉遁、逸民、勗學、崇教、君道、臣節、良規、時難、官理、務正、貴賢、任能、欽士、用刑、審舉、交際、備闕、擢才、任命、名實、清鑒、行品、弭訟、酒誡、疾謬、譏惑、刺駟、百里、接疏、鈞世、省煩、尙博、漢過、吳失、守瘠、安貧、仁明、博喻、廣譬、辭義、循本、應嘲、喻蔽、百家、文行、正郭、彈禰、詰鮑、知止、窮達、重言、自叙。

此書（明）に至りて、盧舜治、之を評校し、萬曆年中慎懋官、之を刊行したり、其（我國）に渡來せるは、宇多朝以前に在り、（佐世の存在、書目録參考）元祿十二年、享保十一年、相次で翻刻せ。

● 亢倉子 一卷（一名洞靈真經）

〔題名、作者、傳來〕 舊本周の庚桑楚撰すと稱すれども、其實は唐の王士元の僞作なり、抑も此名の書に見はるゝものは、莊子に庚桑子、列子に亢倉子とあるを始とす、然れども是莊列の空語にして、事實なきは司馬遷の已にいへる所なり、故に漢の劉向、班固、共に著録せず、唐の柳宗元、宋の高似孫、明の宋濂も亦共に僞書なることを辨せり、唯、唐の玄宗のみは道家の説に方嚮し、之を尊びて洞靈真經と號せり、今本の出でたるは此後に在り、蓋し士元、上意を迎合して私に撰べるなりといふ、今之を觀るに、子文子、呂氏春秋、新序、說苑等を采り、又時に戴氏の禮を采り綴合せるものにして、其言頗る駁雜たり。

〔體裁〕 新唐書、宋史は俱に二卷に作り、宋濂の諸子辨には五卷に作る、今本は一卷九篇にして、崇文總目、郡齋讀書志、書錄解題と相同し、蓋し明人の合併せしものならんか、其目左の如し。

全道、用道、政道、君道、臣道、賢道、訓道、農道、兵道。

〔注解〕

○亢倉子 一卷 明楊慎詳註

墨 家

● 墨 子

〔作者〕 此書の首篇、親士、修身の二篇は、墨翟の自著なり、其他の篇には「子墨子曰、」或は「故子墨子曰、」或は「子禽子曰、」とあれば、子禽子の門人等の纂録せるもの、如し、古傳に據れば、墨翟は宋の人（舊洪楊）にして其大夫と爲り、（史記漢書）孔子と時を並ふといひ、（記）或は孔子の後に在りといひて（漢）一定せず、然れども孟子の墨者夷之、禽滑釐を記するに據れば、孟子より以前にして、耕柱篇、文選注に據れば、孔子より後るゝことを測知す可し、況や又孔子は一言の墨子に及ぶ無く、墨子は數、孔子をいひ、孟子は一言の墨子に及ぶ無く、墨子は一言の孟子に及ぶさるに見れば、以て其孔後孟前に在るを知る可し、但、其孔子より後るゝこと幾何なりしや不明なりと雖、之を潛宮舊事に徵するに、其二に「楚惠王五十年、墨子至、鄧、獻書惠王、王受而讀之曰、良書也、中將辭、王而歸、王使穆賀、以老辭、又魯陽文君言、於王曰、墨子北方賢聖人、」の句あり、楚の惠王在位五

十七年、墨子書を獻する五十年に在り、此時其齒已に高く學已に成る、故に老を以て辭し、又北方賢聖の譽有り、是に由て之を觀れば、其生年は惠王の初年（魯哀公）二十年の間なる可し、惠王十年（魯哀公）は孔子の卒せし年なるを以て、孔子在世の時、墨子尙幼なりしが、卒後幾もなくして生れしかを推知す可し、又其公輸篇及び呂氏春秋當染篇、其注等に據れば、宋人に非ずして魯人たるに幾し、其魯に在るや史角に就きて學べり、又其貴義篇、耕柱篇、公輸篇等に據れば、齊、魯、衛、宋、楚の諸國を游歴し、就中楚には數、游ひしを知る、其卒年亦詳ならずと雖、本書親士篇に「吳起車裂」（周安王二十）、「非樂篇」に「齊康公興樂」（十三年に卒す）の事を説き、是より以後更に見る所なし、則ち墨子は安王の末年に卒せしなる可し、而して其年壽必ず九十を逾えたるならむ。（呂氏春秋、經訓堂墨子、墨子問語、墨子附說等參考）

〔體裁〕 漢書藝文志には七十一篇とあり、隋書經籍志には十五卷目一卷とあり、唐の馬總の意林に十六卷とあるは十五卷に目一卷を加へしをいふ、兩唐書には俱に十五卷とあり、宋の館閣書目には十五卷六十篇とあり、宋史藝文志、通志藝文略、文獻通考の

經籍考、郡齋讀書志、皆以て十五卷と爲し篇數を著さず、又別に三卷本あり、樂臺の注したるものなり、通志及び國史經籍志に見ゆるは、是即ち館閣書目六十一篇と十三篇との二種を掲げたる中の十三篇本なる可し、而して今は傳はらず、又六十一篇とあるは、六十三篇の誤なること四庫提要にも辨せり、後、明の萬曆九年に茅坤が校閱せし所の本は五十三篇にして、其十篇を失へり、之を漢志の七十一篇に比するに十八篇を佚せり、其古より宋までに亡びたるは、節用下、節葬上、節葬中、明鬼上、明鬼下、非樂中、非樂下、非儒上の八篇にして、宋より明までに亡びたるは、第五十一、第五十四、第五十五、第五十七、第五十九、第六十、第六十四、第六十五、第六十六、第六十七の十篇なり、而して其篇名も亦傳はらず、今左に現存の目を掲ぐ。

親士、修身、所染、法儀、七患、辭過、三辯、尚賢(上中下)、尙同(上中下)、兼愛(上中下)、非攻(上中下)、節用(上中)、節葬(下)、天志(上中下)、明鬼(下)、非樂(上)、非命(上中下)、非儒(下)、經(上下)、經說(上下)、大取、小取、耕柱、貴義、公孟、魯問、公輸、備城門、備高臨、備梯、備水、備突、備穴、備蛾傳、迎敵

祠、旗幟、號令、襟守。

〔傳來〕 墨子の學が、孟子以前に於て勢力有りしことは、孟子が楊墨の言天下に充つといひて極力排斥せしこと、及び此書公輸篇に墨子が楚王に對して臣の弟子禽滑釐等三百人といへることに於て之を知る可し、而して其弟子の名の傳はるものは、耕柱子、巫馬子、子碩高石子、管黔、公孟子、子禽子禽滑釐、公尙過、跌鼻、魏越人名なり地名に非ず、曹公子、彭輕生子、孟山、勝綽、高孫子、高何、縣子石、の十六人にして、駱滑釐、程繁、弦唐子、告子の四人は、或は弟子と稱すれども疑はし、(耕柱篇、段義篇、公孟篇、魯問篇)是後、周代に在りて墨學を奉ずるもの、相里氏、相夫氏、鄧陵氏の三派あり、(韓非子)其他夷之の如き、(孟)宋研、尹文の如き、相里勤、五侯子の如き、(孟)晉獲、己齒、鄧陵子の如き、(集賢錄)亦皆墨學を奉ずるものなり、然れども(秦漢)に至りては其説用ひられず、隋書經籍志には唯、墨子、隨巢子、胡非子を録するのみ、舊唐書經籍志、新唐書藝文志には、隋志の外纏子の一書を録せしが、宋史藝文志に至りては墨子の外皆佚せり、(宋)の崇文總目、直齋書錄解題、(元)の文獻通考、(清)の緯雲樓書目には、墨家類を置くと雖、收むる所唯、僅に墨子の一書

に止まり、多きもの二三に過ぎず、四庫提要に至りては之を雜家類に入れ、遂に其門目を廢するに至る、然れども墨子の學、周代に在りて一大宗を爲す、他の諸子と比倫す可きに非ず、宜しく別に一門を設く可し、(明)末に及びて李贄之を批撰し、茅坤は之を校訂したり、其後(清)の盧文昭、畢沅、孫星衍の徒、又相繼きて校正し、孫詒讓、問詒を著すに及びて、之を講讀するもの甚だ便を得るに至れり、此書の(我國)に傳はりたるは、其何朝に在るや詳ならずと雖、佐世の目錄に、隨巢子、胡非子、纏子を載せられたれば、其學説は宇多朝以前に傳はれるを知る、然れども歷朝之を攻むる者少し、寶曆七年に至り、始めて茅坤が校せる墨子を翻刻し、次で天保六年經訓堂本を翻刻せり、戸崎允明、小川信成、太田方、諸葛晃、諸葛益、岡本保孝、鈴木柔嘉等、各、選述有り。

〔大意〕 墨子の主義は兼愛に在り、兼愛は天の志なり、天志に順ふは人の則なり、是其説の大本なり、勤儉を説くは、兼愛の資を充たさんとするに過ぎず、鬼神を説くは、天意の運行を現實にせんとするに外ならず、宿命を否認するは、兼愛自儉の志を勵まさんが爲なり、能く兼愛自儉を行ふものは賢能なり、賢

能の士政を爲せば天下治まる、是即ち天意なり、故に尙賢篇あり、而して其政を爲すには民の統一を要す、故に尙同篇あり、是其説の梗概なり、抑、墨子の學の因由する所を究むるに、實に夏禹に本つき、(論語泰伯參照)廣く折衷する所ありて自ら一家を成せり、今試みに儒家と對せんに、墨子の兼愛と孔子の仁又は博愛とは、似て非なるものにして、墨は汎愛なれども孔は等差あり、又葬に付きて薄厚の差あり、墨子は音樂を非とすれども、儒家は禮樂を崇ぶ、又鬼神を説くに、墨子は其性質を明にしたれども、儒家は敬して遠ざけ怪力亂神を語らず、然れども亦全然相乖離するに非ず、其祭祀を重じ治平を謀りて厭世的ならざるは、同一傾向といはざる可からず。

〔注解、參考〕

- 墨子問詒十五卷目錄一卷附錄一卷後語二卷清孫詒讓撰
- 墨子闡微二卷日本小川信成撰
- 墨子考四卷戸崎允明撰
- 墨子考要四卷未詳
- 墨子附說二卷鈴木柔嘉撰

法家

管子二十四卷

〔作者〕 舊本題して齊人管夷吾の自撰と爲す、夷吾は仲父と號し、齊の顯生の人。初め公子糾に事ふ、少自立ちて桓公と爲るに及びて、之を輔けて、諸侯を糾合し、天下を一匡し、諸蕃族の侵入を防ぎ、漢人種の安寧を保ち、其功績赫耀、青史を照らせり、其事は孔孟諸子の言に散見し、又左傳、史記本傳等に詳なり、此書は管仲の自撰に成りし者は極めて少く、且つ其何れの篇が自撰なるかも亦明ならず、宋の葉適曰く、「管子は一人の筆に非ず、亦一時の書に非ず、誰の爲くる所なるかを無し、其毛嫱西施吳王劔を好むを言ふを以て推せば、當に是春秋の末年なるべし云々、」朱子曰く、「管子の書に難なり、管子は功業を以て著る、恐らくば未だ曾て書を著さず、云々、其書想ふに唯、是戰國の時の人が仲の行事言語の類を收拾して之を著し、附するに他書を以てせしならん」と、黃震も亦水心の説を祖述し、雜駁にして一人の手に出でざるをいへり、四庫提要に謂へらく、「書中經言、外言、內言、短語、區語、雜篇、管子解、管子輕重、等の篇あり、其中

熟れが手撰にして、何れが其語録の如き者にして、何れか家傳の如き者にして、何れが其箋疏の如き者なるかを明にせずと雖、當時に在りては必ず區別明なきに至らしめたる者なるべし」と、此説極めて妥當なり、而して其手撰以外のものは、其門徒の追記する所に係るは固より言を俟たず、其文辭に至りては古奥樸茂、斷して戰國末の氣習と殊なるを知る可し。
〔傳來〕 (漢)の劉向、諸書を校せし時、數家の管子の書を集めて、五百六十四篇を得、重複せる者四百八十四篇を除き、定めて八十六篇と爲す、漢書藝文志には之を道家に列し、隋書經籍志に至り始めて法家に列す、爾來皆之に従ふ、(唐)初已に闕逸せる篇あり、此朝、尹知章といふ者注三十卷を著す、載せて唐書藝文志に在り、(今本房玄齡注と題するは後人其名を借りて玄齡の注無し宋の晁(以て世俗を眩せしなり、唐志を檢するに公武已に之を辨せり)宋)に至り十篇を亡ふ、故に元以後は凡て七十六篇なり、(明)に至り梅士亨之を刊行せるも、舊本の篇次を轉倒して見るに足らず、趙用賢刊する所の書は、宋紹興本を翻刻し、篇次、卷數、皆之に従へるを以て、學者多く之に由る、劉績は補注を著し、宋の張璠の言に本つきて舊注を匡正し、朱長

春は権を著し其文を評し義を訓したるも發明する所無し、(清)に至り、洪頤煊の義證最も著る、之を要するに、歴代の學者大抵偏見を以て管子を排斥したるを以て、講解せる者極めて少し、(我國)には、日本國現在書目に著録したれば、其傳來の宇多朝以前に在るを知る可し、徳川氏の時に至り、注を作る者數家ありと雖、安井息軒を以て最も優れりと爲す。

〔體裁〕 七十六篇の目左の如し。

- 牧民、形勢、權修、立政、乘馬、七法、版法、幼官、幼官圖。(以上を經言)。五輔、宙合、樞言、八觀、法禁、重令、法法、兵法。(以上を外言)。大匡、中匡、小匡、霸形、霸言、問、戒。(以上を內言)。地圓、參患、制分、君臣、(上下)、小稱、四稱、侈靡、心術、(上下)、白心、水地、四時、五行、勢、正、九變。(以上を短言)。任法、明法、正世、治國、內業。(以上を區言)。封禪、小問、七臣七主、禁藏、入國、九守、桓公問、度地、地員、弟子職。(以上を雜篇)。形勢解、立政九敗解、版法解、明法解。(以上を管子)。臣乘馬、乘馬數、事語、海王、鬪畜、山國軌、山權數、山至數、地數、揆度、國准、輕重甲、輕重乙、輕重丁、輕重戊、輕重己。(以上を管子)。

各篇また細目に分るゝもの數篇あり、篇名は首字を取らるゝものと、意を取らるゝものと相交れり。

〔大意〕 牧民篇は管子の第一篇にして、又全書の綱領なり、其言に曰く、「凡有地牧民者、務在四時、守在倉廩」と、是其發端の言にして又牧民篇中の綱領なり、夫れ天の時運行し、萬物を化育する所以の理に本づきて、民生の資を充實すれば、民留處して國家成る、倉廩實ち衣食足り然る後に禮節行はれ、榮辱明なり、之を要するに、民は多富の地に集る、故に政治の要は、主政者が天に順ひ地に法り生を厚くし教を立つるに在り、之を約言すれば、則ち富民を以て第一と爲し、立法布教を以て第二と爲したり、立法布教は俗を易へ風を移し民をして禮節を知り、榮辱を知らしめんとするに在り、而も之を行はんとする國民恒産無ければ恒心無きを以て、假令法を嚴にし教を強ふるも、亦行ふ能はず、故に立法布教の本も亦富民に在り、是其富民を以て大本となす所以なり、民已に富めば此に於て之を其心に覽て以て法を立て禮義廉恥の四維を張りて教を布く、已に法を立て教を布けば、此が實行を期せざる可らず、是に於て刑賞を設け、民をして進據せしむるなり、是其學

の大要なり、其他形勢、修權、乘馬、七法、版法、樞言、八觀、法令等の諸篇、亦其本領の一端を窺ふ可し。

〔注解・参考〕

○管子補注二十四卷明劉○管子義證八卷清洪順○弟子職集解一卷莊述祖撰○弟子職正音一卷王琦撰○管子考三卷未詳○管子牧民國字解一卷細井傳○管子補正二卷猪飼彦○管子纂註二十四卷、同補正一卷、同考證一卷衛安井撰

●鄧析子一卷

〔作者、傳來、體裁〕 周の鄧析撰す、鄧析は鄭人なり、子産と同時に、或は少し後の人なる可し、列子力命篇に曰く、「鄧析兩可の説を取り、無窮の詞を設く、子産政を執り、竹刑を作り、鄭國に之を用ふ、析數、子産の治を難んじ、子産之に屈す、子産執へて之を戮す」と、然るに左傳に據れば、鄧析を殺したる者は子産より三代後の執政、黜職にして、子産に非ず、蓋し列子の誤ならむ、此書は漢書藝文志に二篇とあり、今本また無厚、轉辭の二篇に分ち、合せて一卷とす、然れども、其文節次相屬せず、後人の拾

集編輯せし者なり、篇中莊子と同じき者あり、鄧析は莊子より以前の人なれば、莊子の文を盗む理なし、必や後人其殘闕を補はんが爲に、莊子を取りて之を足せしものならん、此書の(我國)に傳はりたるは宇多朝以前に在る可し、佐世の目錄已に之を著録せり、然れども、歷朝之を攻むるもの無し。

〔大意〕 此書、縦横家の言あり、道家の言あり、法家の言あり、雜駁にして一家の説として見る可き者なし、然れども、其主として説く所は法家の言にして、其「勢なる者は君の興、威なる者は君の策」といひ、「名に従ひて實を攻め、法を察し、威を立つ、是明王なり」と、いへるが如き、甚だ多し、漢志之を名家に列するも、名家の言なし。

●商子五卷

〔作者、題名〕 舊本秦の商鞅撰すといふ、鞅は衛の庶公子にして、本姓は公孫氏、商に封せらる、故に商鞅といふ、又商君と號す、少より刑名の學を好み、長じて秦の孝公に事へ、國を富まし兵を強くし、諸

侯を震恐せしめたり、孝公薨後説に遭ひ、一旦逃走せしが、復た秦に返り、遂に車裂の刑に處せられたり、(史記本)此書の眞偽に就きては、古來諸説紛々たり、文獻通考に周氏涉筆を引きて、「史記載せざる所は往々書者の附會する所たり」といへるは當れり、蓋し此書元、商鞅の記せるものあり、後人更に其論を拾綴して之に録入せること、猶管子の書の如し、然るに四庫提要に、此書開卷第一に孝公の諡を稱せるを以て、直に斷じて盡く孝公卒後の書にして、鞅が手撰に非ずと爲せるは、未だ遑に首肯す可からず、管子は桓公の存生中に卒せるに關らず、其書中屢、桓公を稱するが如き、是古書に在りて毎に見る所なれば、此一事を以て、直に眞贋を斷す可からざるなり、況や漢の司馬遷が已に商君の書を読みたることと記せるに於てをや、此書漢志には商君といひ、三國志劉備傳には商君書といふ、隨書經籍志より商子と改む。

〔體裁、傳來、大意〕 漢書藝文志には、商君二十九篇とあり、隋志に至り分ちて五卷とす、宋に至り三篇を亡ふ、今傳ふる所の本は、目錄のみありて其書なき者又二篇あれば、全く存する者は二十四篇なり、即ち左の如し。

●慎子一卷

更法、懲令、農戰、去強、說民、算地、開塞、一言、錯法、戰法、立本、兵守、斬介、修權、來民、刑約、賞刑、畫策、境內、外內、君臣、禁俠、慎法、定分、商子の學は、信賞必罰、厚祿嚴刑、一に浮誇の學を去り、無用の事を汰し、游食の民を驅りて、之を耕戰の務に納れ、富強の域に躋すに在り、一言、慎法開塞の諸篇、其梗概を知る可し、此書は古く(我國)に傳來し、佐世の目錄に商君書三卷を著録せり。

〔作者、傳來、體裁〕 周の慎到撰す、到は趙人、曾て齊の稷下に客たりし事あり、(史記孟荀)史記に慎子十篇を著すとあり、然るに漢書藝文志に四十二篇といひ、唐書藝文志には定めて十卷と爲し、(宋)の崇文總目には三十七篇とす、蓋し後人の假托せしもの竝入せしなるべし、(明)に至りては僅に五篇と爲れり、是今日傳はる所にして、威德、因循、民雜、德立、君人。是なり、之を讀めば篇中往々刪除せる者あり、蓋し明人が殘剩を拾收して、重ねて編集せしものならん、

故に到が原著に非ざるも、亦全く到が作に非ずといふ可からず、清の姚際恒は断じて偽と爲せりと雖、論據無きの説たり。

〔大意〕 到の説は、道家の無爲の意を以て根本と爲し、一轉して法家の説を爲せしものなり、謂へらく、君主は無事を事とすべし、如何にして無事を事とすべきやといふに、法度を立て、賞罰を明にし、臣民をして之れに準據せしむるに在りと、韓非子は實に愼か説を祖述せる者なり。

●韓非子二十卷

〔作者〕 韓非の著なり、史記本傳に曰く、非は韓の諸公子にして、李斯と同じく荀卿の門人たり、後見る所あり、刑名の學を攻め、韓王安に干す、韓王用ふる能はず、是に於て、非は、忠直の士が、邪佞の臣に容れられざるを痛み、往者得失の變を見て、孤憤五蠹十餘万言を作れり、秦王其書を見、其人を慕ふ、非秦に使用するに及び、秦王大に之を悦ぶ、李斯姚賈深く之を嫉み、卒に之を毒殺せりと、是に由りて之を觀れば、非が著書は悉く入秦以前に成る者なり、

然るに初見秦、存韓の二篇は、秦王への游説の上書なるより、後世疑ふ者多し、況んや初見秦は、戰國策に張儀説秦王に作るに於てをや、按ずるに、二篇は非が秦に使中の作にして、後人が本書の始に之を附加したる者なり、戰國策に張儀に作るは、韓非の誤なる事は、吳師道已に辨せり、存韓の下半、李斯の上書、非の讒死を載せたるは、後人の補足せる者なり、又初見秦に、亡韓の二字あるは、怪む可しといふも、固と秦王の意は縦約を破り、六國を統一するにあれば、非が秦王に初見の時、故らに先づ其意に順適し、然る後徐ろに本國の爲に干説する所あらんとす、若し劈頭韓を存するを以て説かんか、秦王必ず疑ひて信せず、故に先づ六國併呑の策を擧げ、次に存韓の説を述べて、韓の亡す可からざるを論ず、其苦心以て見る可きなり、然らば則ち別に之を怪むを要せざるなり、張榜は存韓を以て李斯の徒の作と爲し、太田方は五疑を擧げて、初見秦、存韓二篇は一時好事者の作に出づと爲したるも從ふ可からざるに似たり、唯、忠孝、人主、節令の諸篇は、文氣薄弱他篇と類せざれば、或は非か作に非ずして其徒の手に成るにあらざるか。

〔題名、傳來〕 此書唐以前は韓子といふ、後、韓愈と別ちて、韓非子といふ、漢志には五十五篇とあり、(唐)

の張守節の史記正義に、阮孝緒の七録を引き、韓子二十卷とあれは、卷數篇數共に今本と相同じ、(宋)の乾道元年始めて之を刻す、最も信據す可き善本なり、元に至り何林また之を刻せしが二篇を佚せり、(明)の趙用賢宋本を得て、缺を補ひ訛を正し、始めて五十五篇の舊に復せり、然るに蜀の先主が人の智慧を益すといひて、後主に勸めたる外、深く崇びたる者無く、從ひて注を加ふる者極めて少し、舊注は何人の作なるか詳にせず、元の何林は李瓚の作なりといへども、確據無し、且つ何林の改削を経たれば、原書とは大に異なり、加之其説淺陋にして取る可きもの少し、唯、(清)の顧廣圻の識誤稍見る可きあるのみ、(我國)にては、佐世の目錄已に之を收め、管蠡抄、令集解等之を引用したるに見れば、其渡來の舊きを證す可し、下りて徳川氏の時に至り、太田全齋、蒲坂青莊、依田利用等の注解あり、考證該博、頗る讀者に益あり、宇佐美濤水、片山兼山、澁井太室等も亦皆撰述有りといふ。

〔體裁〕 五十五篇の目左の如し。

初見秦、存韓、難言、愛臣、主道、有度、二柄、揚權、八姦、十過、孤憤、說難、和氏、姦劫臣、亡徵、三守、備內、南面、飾邪、解老、喻老、說林(上下)、觀行、安危、守道、用人、功名、大體、內儲說(上下)、外儲說(左上下、右上下)、難四篇、難勢、問辨、問田、定法、說疑、詭使、六反、八說、八經、五蠹、顯學、忠孝、人主、節令、心度、制分。

篇名は、篇首の文字を取りて名づくる者少くして、意を取る者多し。

〔大意〕 韓非の學を刑名の學といふ、刑名とは形名なり、形名とは言行を參稽する謂なり、人臣たる者、事を陳して言へば、君其言を以て之に事を授け、專ら其事を以て其功を責む、功其事に當り、事其言に當れば則ち罰す、是之を刑名の學といふ、其愛臣、主道、二柄、揚權、南面の諸篇は、老子の虛靜無爲を基として、人君の御臣策を論じ、飾邪、難勢、定法、詭使、八說、八經、節令、制分の諸篇は、法術を論じ、八姦は姦臣君を惑はすの術を窮め、十過は、人主の過を詳説し、亡徵は國亡ぶるの道四十八を列舉し、

五藏、顯學、忠孝の諸篇は、言論文學の弊を痛論し、儒墨を排撃せり、其他解老喻老二篇の如き、老子の解釋として最古の者なり、蓋し韓非の學は老子の恬靜主義に本づきて、兼ねて商鞅の法と申不害の術とを、取り、能く之を渾涵貫穿して一家を成したるものなり、故に之を申商二家に見れば、其理幽深にして之を老子に見れば實行的なり。

〔注解〕

○韓非子識誤三卷清順原 ○讀韓非子一卷日本荻生 ○韓非子纂聞二十卷增讀 韓非子二十卷浦坂 ○韓非子翼說二十卷太田 ○韓非子校注卷數 亦田利田利 ○韓非子解詁二十卷津田 田風

兵家

六 韜六卷

〔作者、傳來〕 舊本周の呂望撰すと題す、莊子徐無鬼篇に、金版六段あり、陸德明釋文叙錄に曰く、「司馬彪、崔譔云ふ、金版六段皆周書の篇名、又六韜に作る、謂ふ太公の六韜、文武虎豹龍犬なり」と、則

ち戰國の初に原と是名あるは明なり、然れども太公の作と爲すは、未だ據る所を知らず、漢書藝文志兵家に著録せず、唯、儒家に周史六段六篇あり、班固自ら注して曰く「惠襄の間、或は曰く顯王の時、或は曰く孔子馮に問ふ」と、則ち六段は別に一書たるなり、顏師古之に注して今の六韜なりといふは、徳明の説に因りて附會したる者なり、隋書經籍志より始めて之を著録して、呂望の撰となししより、唐宋の諸志皆之に因る、今其文を見るに、避三正殿の語あり、乃ち戰國以後の事に屬す、又將軍の二字あり、將軍の字始めて左傳に見え、周初亦此名なし、殊に陰符の符を符節の符となしたるが如き、其偽書たるの證左二三にして足らず、況や文も亦周初人の口吻に類せざるをや、呂望の撰に非ざるは明なり、(古今考、四庫提要等参考) 唯其何人の作たるを詳にせざるを以て、姑く此に録するのみ、此書の(我國)に渡來せるは宇多朝以前に在る可し、藤原佐世の日本國見在書目錄已に之を著録し、注して周文王師姜望撰とあり、蓋し隋志に據れるなり。

〔題名、體裁〕 韜は、文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜なり、韜は弓衣なり、又劍衣なり、凡て六十篇

小分せり。

孫子一卷

〔作者、傳來〕 齊の孫武撰す、武兵法に通じ、之を以て吳王闔廬に見ゆ、闔廬曰く子が十三篇、吾盡く之を觀たり、以て少しく試に兵を勸す可きかと、武對へて曰く、可なりと、乃ち宮中の美女百八十人を擇びて之を試む、闔廬、武の能く兵を用ふるを知り、卒に以て將となし、西は強楚を破りて郢に入り北は齊、晉を威して名を諸侯に顯はす、武與りて力あり、(史記本傳參考) 司馬遷が孫吳列傳贊に「孫子十三篇、吳起の兵法、世多く有り、故に論せず」といへば、秦火の難も無事に、漢代に傳はりたる者なり、劉向の七畧に孫子兵法三卷といふは、十三篇を分ちて三卷となせし者か、漢書藝文志に孫子兵法八十二篇といふは、十三篇外の雜篇にして、後人の僞撰たるや明なり、に唐の杜牧が魏の武帝其繁を削り精を抜きて十三篇と爲すといへるは荒誕不稽の説なり、又張守節が十三篇の外に三卷ありといへるも亦誤れり、然るに此に此書を孫武の作に非ずとする者あり、宋の葉適、清

の姚際恒の如き是なり、彼等は二方面より之を疑へり、一は史記にいふ所の篇名の漢志と合はざることなり、(篇數の異同は已に前に辨せるを以て之を措く) 一は其名の左傳に見えざること是なり、適曰く、「左氏の吳の事を記する最も詳なるに、孫子の功灼々是の如くなるを遺すべきの理なし、云々、孫武の吳に於けるは大將となりて命卿とならず、左氏特に書せざる可からず、而るに左氏に傳なきは何ぞや」と然れども、左氏の叙事は、謀議、事體に委詳にして、戰鬪の如きは、往々簡明に説き去るを常とす、武は命卿に非ずして、兵を率ゐる者なれば必しも書せざる可し、且つ司馬遷の言に據れば、吳王闔廬が楚を破り齊晉を威する際に、孫武は與りて力有りといふに過ぎず、左氏の特書せざる、亦宜ならずや、故に此書は誠に宋の李季可、又は清の紀昀の言の如く、武の自著にして周秦の諸子中最も完善なる者別に之を疑ふを要せざるなり、而して此書を注したる者は、魏武帝を以て最古とし、亦最も簡約なりと稱す、其(我國)に入りしは、續紀、天平寶字四年十一月、授刀舍人春日、部三關中衛舍人土師、宿彌關成等六人を太宰府に遣り、大貳吉備、眞備に就きて諸葛亮八陣、孫子九地及び結營の向背を習は

しむといへば、其傳來の古きを知る可し、佐世の目録には已に此書數種を著録せり、徳川氏に至り、之を研究する者漸く多し。

〔題名、體裁、大意〕 孫子とは、猶孟軻の著を孟子といふが如し、漢志には孫子兵法といふ、後單に孫子と稱するに至れり、凡そ十三篇、首尾一貫せり、兵は籌略計謀を以て着手の第一義と爲す、故に始計を以て第一篇とす、計謀先づ定りて始めて戦を作す可し、故に作戰篇之に次ぐ、兵の情は戦ふを貴ばず戦はずして國を得るを上計と爲し、戦ふも敵軍を傷けずして下すを上策とす、故に謀攻篇を以て作戰の次に置く、勝敗の兆の形に見はるゝは、謀攻の巧拙に存す、故に軍形篇を以て之に次ぐ、謀攻巧に、軍形備はると雖強勢に乗するに非ざれば不可なり、故に兵勢篇之に次ぐ、而して虚と實とは兵の形勢なり、故に虚實篇之に次ぐ、兩軍相對するや必ず争ふ、争ふ者は先づ虚實を審にして、而る後争はざる可からず、故に軍争篇之に次ぐ、兵は變化を貴ぶ、故に九變篇之に次ぐ、九變の利害は行軍敵情の間より生ず、故に行軍篇之につぐ、行軍は地形を審にせざる可からず、故に地形篇之に次ぐ、地形を審にすれば地勢に九つ

の差あるを知る可し、將たる者先づ之を知らざる可からず、故に九地篇之に次ぐ、火攻は兵の最も慘酷なる者なりと雖、術の窮する之を用ひざるを得ず、故に火攻篇之に次ぐ、敵情を知るは反間を用ふるに如く者なし、是勝を制するの第一法なり、故に用間篇之に次ぐ。

〔注解〕

- 魏武注孫子三卷魏武 ○孫子十家注十三卷不著編撰人、清孫星衍等校
- 孫子會解四卷明郭長 ○孫子明解八卷陽撰 ○孫子國字解十三卷日本伏見
- 孫子副詮一卷佐藤撰 ○孫子折衷十三卷附錄一卷平山潜撰

● 吳 子 一 卷

〔題名、作者〕 漢志には吳起とあり、後吳子といふは猶孫武の書を孫子といふが如し、此書は起の自撰とする説(王守仁物)と、吳起の門徒の手に成れりとする説(胡應麟等)と、全く僞撰とする説(姚際恒等)とあり、開卷吳起備服以兵機一見魏武帝の如き文氣を察するに起の自撰とは思はれず、然れども亦姚際恒の如く、其論膚淺、自是僞托といふに至りては竟に信す可からず、

- 吳子二卷明劉宗周撰 ○吳子國字解 卷 日本伏見 雙松撰
- 吳子副詮 一卷 佐藤撰

● 司馬法 一 卷

〔題名、作者〕 司馬は周の軍官の長なり、史記司馬穰苴列傳に曰く、「齊威王大夫をして、古者司馬兵法を追論して穰苴を其中に附せしむ、因て號して司馬穰苴兵法といふ」と、是に由て之を觀れば、此書は齊國諸臣の追輯せる所にして、隋唐諸志に穰苴の自撰する所とするは誤なり、又清の姚際恒の如く、僞書と斷するも、酷なるに近し。

〔體裁、傳來〕 此書隋唐志には三卷とあり、今は篇頁多からざるを以て、合して一卷となす者多し。

仁本、天子之義、定爵、嚴位、用衆。の五篇に分つ、其言大抵道德に本づき、仁義を祖とせり、漢書藝文志此書を禮類に收むるは、其說多く周官と相出入し、又軍は古來五禮の一たるを以てなり、然れども要するに兵家の言たり。

〔注解〕

門徒が起の説を編録すといふを以て至當の説と爲す。起は衛人なり、好みて兵を用ふ、曾參に従學し、魯に事ふ、齊を破りて功あり、讒せられ、去りて魏に行く、文侯以て西河の守と作す、武侯亦善く之を遇す、後、魏相公叔に計られ、疑はれ去りて楚に行く、楚王以て相となし、大に諸侯を震驚す、又宗室に妬まれ遂に殺さる。(史記本傳參考)

〔體裁、大意〕 始に吳起魏文侯に見え、遂に大功を立てし事を記せり、劉太原は以後人の總序、吳起が始末を記せしものと爲す。從ふ可し、是より以下は即ち本文にして、圖國篇を第一とす、先づ國人を和せざる可からざる事を説く、次を料敵篇とす、敵情を料り知らざる可からざるを説く、次を治兵篇とす、兵を用ひんと欲せば先づ兵を整治せざる可からざることを説く、次を論將篇とす、將は兵の司命なるを以て、先づ其人を得ざる可からざるを説く、次を應變篇とす、變に應じて勝を制せざる可からざるを説く、次を勵士篇とす、士卒を鼓舞獎勵せざる可からざるを説く、凡て六篇なり。此書漢志に四十八篇とあるは、後人の附益せし者、信するに足らず。

尉繚子 五卷

〔作者、傳來〕 周の尉繚撰す、史記始皇本紀に、太梁の人尉繚來り云々とありて、始皇との問答を擧げたり、應に此書の作者なるべし、或は鬼谷子の弟子にして、魏の惠王に事ふといひ、(諸家大抵皆此說なり)或は魏人司馬錯と同人なりといふ(補有)は、信じ難し、開卷梁惠王の問對を以て、この書を引き起すは、惠王が好戦家なりし故、其人を借りて之を言ふなり、漢志兵家に尉繚三十一篇あり、今本は二十四篇なるも、上下に分ちし者二篇あれば、實は二十二篇なり、蓋し亡佚せしならむ、(宋)に至り張載之を注したりといふも、今は傳らず、且つ卷數も明ならざりしが、(清)の乾隆帝の時、其篇頁を酌み、隋志に依り分ちて五卷と爲せり、故に我國の刻本には卷數なき者なり。

〔體裁、大意〕 此書は
 天官、兵談、制談、戰威、攻權、守權、十二陵、武議、將理、原旨、治本、戰權、重刑令、五制令、分塞令、束伍令、經卒令、勒卒令、將令、種軍令、兵數(上下)、兵令(上下)の二十四篇なり、大指本末を分ち、賓主を別ち、賞

罰を明にするを以て主とす、戰國權謀誦詐の術無く、皆正理明法なり、明の胡應麟は此書を以て、孫武以下、與に匹する者なしといへり、誠に當れり。

黃石公三略 三卷

〔作者、題名、傳來〕 此書漢志になく、始めて隋志に出づ、其黃石公と稱する者は、史記留侯世家に據れり、世家に曰く、張良下邳の圯上を過ぐ、老人書を授けて曰く、太公の兵法なりと、或は又以て黃石公の授くる所となすと、故に之を稱す、然れども隋志には唯下邳神人撰といひて、黃石公といはず、按ずるに、漢より以來兵法をいふ者、往々にして黃石公を以て名とす、史載する所、黃石公記、黃石公略等頗る多し、今皆亡佚存せずと雖、大抵附會に出づ、是書の義古ならず、後人の依託する所なるや、明なりとす、(四庫提要)三略は上略、中略、下略をいふ、略は方略なり。

〔大意〕 其本旨は老子より來る、書中に、柔能制剛、弱能制強等の語あるを見れば、其文字も亦老子を掇拾せるものあるなり。

素書 一卷

〔作者、傳來〕 舊本黃石公撰と題す、宋の張商英始めて注を作り、且序して曰く、「黃石公素書六篇、按前漢列傳、黃石公圯橋所授子房素書、世人多以三略爲是、蓋傳之者誤也、晉亂、有盜、發子房家、於枕中獲此書、凡三百六言、上有秘誠、不許傳於不道不神不聖不賢之人、若非其人、必受其殃、云々と、然れども是商英の僞托する所にして、決して、真本に非ず、商英字は天覺、新津の人、崇寧中相となり、多く蔡京の弊政を革め、後出でて、河南府に知たり、(宋史本傳參考)晁公武の讀書志に商英の言、世未だ之を信する者あらずといへば、當時既に其僞撰たるを信せる者の如し。

〔體裁、大意〕 此書は

原始 正道、求人之志、本德宗道、遵義、安禮の六篇あり、言ふ所、柔を以て剛を制し、退を以て進となすの理に合ふ者あり。

〔注解〕

○素書國字解一卷 日本狀生 雙松撰
 ○素書獨斷一卷 龜井 賢撰

李衛公問對 三卷

〔作者、題名、傳來〕 唐の李靖、太宗と兵を論するの語を集めたる者なり、靖衛國公に封せらる、故に李衛公と云ふ、此書始めて宋代に出づ、陳師道、何遜、邵博皆以て阮逸(中說作者)の僞撰となす、然れども其指畫、攻守、變易、主客は、兵家の微意、於て、時に得る所あり、故に鄭瑗の井觀瑣言にいふ、其書僞と雖亦學識謀略ある者の手に出づと、斯言當を得たるに近し。

〔體裁〕 問對上中下に分ち、太宗の問を靖對ふといふ體例なり。

七書 二十五卷

〔題名、傳來〕 宋の晁公武の讀書志に曰く、元豐中に、六韜、孫子、吳子、司馬法、黃石公三略、尉繚子、李衛公問對を以て武學に分ち、號して七書といふと、爾來、談兵家恒に相稱述して、これが注を作る者亦多し、(我國)にては慶長中、徳川家康の刊したる者を以て最古とす。

【注解】
○七書講義二十五卷金鹿子 ○七書直解十二卷明劉美撰

雜家

● 鬻子一卷

【作者】 舊本題して周の鬻熊撰すといひ、以て子書の始めと爲す、然れども今傳ふる所の鬻子は、其言、道家に似ず、後人殘剩を掇拾して熊に託せしこと、學者已に定説有り、今熊の傳を記し、此書の熊の手に成りしものに非ざることを證せん、史記楚の世家に曰く、鬻熊の子、文王に事へ蚤く卒す、其子を熊麗といふ、熊麗熊狂を生み、熊狂熊繹を生む、成王の時、文武勤勞の後嗣を擧げ、熊繹を楚に封すと、又漢書魏相傳には、文王、鬻子を見る、年九十餘と有り、又同書藝文志注に、名は熊、周の師と爲り、文王以下之に問ふ、周封じて楚の祖と爲すとあり、又文心彫龍には、鬻熊道を知る、文王咨詢す、遺文餘事を録して鬻子を爲るとあり、此等に據れば大約文武の時の人にして有道者なりしこと疑無し、即ち列

子の天瑞、力命、揚朱諸篇に引く所、其道家の言たる居然見る可し、蓋し必ず古此書の存せしこと否定す可からず、故に漢書藝文志道家に鬻子二十二篇を著録せり、然るに今の鬻子を見るに、其言列子に引く所と概ね相類せず、而して又列子に引く所の語も亦篇中に見えず、又其章次篇名混淆錯亂して他の道家の書の如きものに非ず、(宋の李仁父王長公)是必ず漢書藝文志小説家(今の小説家)に鬻子説十九篇とある者ならん、明の胡應麟曰く、今傳ふる所の鬻子は即ち小説家の鬻子説なり、道家の鬻子は漢末已に亡佚し、小説家は尙後に傳はる、後人精覈する能はずして道家に列するの目を以て之に當つ、(中)其頗る質奥にして熊が手に出づるに非ずと雖、要するに漢以前の書なり、但、東京の後、兵火に殘逸し、唐に至りて僅に此十四條を剩すのみ、當時註者(逢行)鹵莽にして前代の全書に附會せんとし、篇章を混じ先後を淆したれば、今之を讀むに寥々枯寂にして觀るに足る者無きが如くなりたりと、四庫提要には、唐以來の好事者賈誼の引く所に依仿して賈本を撰爲せしなるも知る可からず、其甲乙を標題するを觀るに、故らに佚脱錯亂の狀を爲し、且つ其篇名冗贅にして古此

無く、決して三代の舊文に非ずといへり、以上の諸説に據れば、道家小説家の二鬻熊有りて、道家の書は已に亡び、小説家の書亦佚脱する所有りて、後人之が殘文を綴緝せしものならん、而して其綴緝せし人の時代は考ふ可からず。

【大意】 此書、概ね修身治國の術を述べ、仁、信、化、道の四者を以て帝王の器たるを論せり、其言簡切にして老莊清虛の旨に似す。

【傳來、體裁】 漢書藝文志道家には二十二篇、小説家には十九篇とあり、崇文總目には十四篇とあり、高似孫の子略には十二篇とあり、陳振孫の書錄解題には陸佃の校する所十五篇とあり、鄭樵の通志略には鬻子一卷注に周文王の師楚人鬻熊撰し唐の逢行注すとあり、是より後の書目皆一卷を録す、即ち逢行注の注せしものなり、明に至りて楊之森といふもの、賈誼新書中より此書の佚文を摘録して、補鬻子を著せり、文王問、武王問、各一則、成王問五則合せて七則あり、(我國)佐世の書目、亦鬻子一卷を載す、但、其注者を記さず、今百子全書本に據り其目を左に記す。

撰吏五常三王傳政乙第五、大道文王問第八、貴道

(子) 雜家

五帝三王周政乙第五、守道五帝三王周政甲第四、撰吏五帝三王傳政乙第三、曲阜魯周公政甲第十四、道符五帝三王傳政甲第二、數始五帝治天下第七、禹政第六、湯政天下至紂第七、上禹政第六、道符五帝三王傳政甲第五、湯政湯治天下理第七、慎諫魯周公第六。

● 尸子二卷

【作者】 周の尸佼撰す尸佼は晋人、秦の相衛鞅の客と爲る、衛鞅刑せられ、佼、并せ誅せられんことを恐れ、亡逃して蜀に入り、此書二十篇を造りて卒す。

(史記孟荀傳參考)

【傳來】 此書もと二十篇、漢志之を雜家に列す、後九篇を亡ぶ、(魏)の黃初中之を續きしが、南宋に至りて全書散佚せり、(清)の章宗源古書に引く所の語を取り輯成し、孫星衍之を補訂し二卷となす、是に於て漸く其一斑を窺ふことを得るに至れり、即ち今本なり。

【體裁、大意】 上卷は

勸學、貴言、四儀、明堂、分、發蒙、怒、治天下、

仁意、廣、綽子、處道、神明、廣澤、止楚帥、君治。

の十六篇あり、補綴文をなす者あり、下卷は其零語を輯めたる者にして二百餘條あり、其學孔子を斥くと雖、亦之を取る者多く、經傳と發明するの語多し、勸學篇に、學ひて倦まず己を治むる所以なり、教へて厭はず人を治むる所以なりといひ、貴言篇に心は身の君なれば之にはかりて身を處かざる可からずといひ、四儀篇に志動仁を忘れず、智用義を忘れず、力事忠を忘れず、口言慎を忘れずといふが如き其一例なり、また發蒙篇の名分を審にせざる可からざるを論せるは名家に似、分篇の天下を治むるには知と巧とを去るに在りといへる、老家に似たるあり、其他法家に似たる所亦少からず、要するに、衆家を綜合して一家の説をなすものなり。

●尹文子 一卷

〔作者〕 周の尹文撰す、漢書藝文志名家に、尹文子一篇と題して齊の宣王に説き公孫龍に先つと爲す、然るに顔師古注して宋鉞と併に稷下に遊ぶと云ひ、又

仲長氏の序に、宋鉞、彭蒙、田駢と同じく公孫龍に、學ぶといふは共に非なり、公孫龍は趙の平原君の客(公孫龍子駢)にして、趙勝の平原君に封せられたるは周赧王の十七年に在りて、齊宣王の卒は其元年に在れば、尹文の公孫龍子に先つこと明なり、況や公孫龍子中に、宣王、尹文の問答を援用して立論せるものあるに於てをや、愈々以て其公孫龍に學ばざることを斷す可し、且つ又已に莊子天下篇に、尹文、田駢を以て並稱せるを見れば、尹文は莊周に先つても、決して後れざるを知る、莊周は齊宣王梁惠王の時の人なれば乃ち尹文は孟軻と殆ど時を同じくし、周の顯王の末年に生榮せる人たることを斷定し得可し。
〔傳來 體裁〕 漢志一篇に作る、魏の黃初の末山陽の仲長統、條次撰定して上下篇と爲す故に隋志以下皆二卷に作る、而るに今本一卷に止まるは、蓋し後人の合併に係り分ちて、大道(上下)の二篇と爲す、此書の文、唐の馬總の意林に引く所三則有り、今本之を載せざるに見れば、其殘缺あるは明なり、但、其何朝に在りて佚脱せるやは今知る可からず。
〔大意〕 是書は、大道をいひ、又名分をいひ、又仁義、禮樂、法術、權勢をいふ、大略老子を學びて申

韓を難ふる者あり、故に其仁義禮樂を説くは、是書の主とする所に非ず、蓋し道よりして名に至り、名よりして法に至り、法よりして術に至る、勢説きて此に至らざる可からず、故に曰く「仁義禮樂名法」賞、凡此八者五帝三王治世之術也。」と然れども亦莊子に「爲人太多、自爲太少」といへるに徴すれば、墨翟の兼愛説に近きものあり、要するに其學黠辯を免れず、彼の晁公武の讀書志に六藝を宗とし仲尼を稱すと云へるが如きは、皮相の論のみ、孔子必ず名を正さんかの一言は、名家者流の口に藉る所と雖、此を以て直に法を孔子に誦すと爲すべからず。

●鵠冠子 三卷

〔作者、題名〕 是書何人の作なるか詳ならず、漢書藝文志に鵠冠子一篇を載せ、註に曰く、楚人深山に居り、鵠を以て冠と爲すと、顔師古亦曰く、鵠鳥の羽を以て、冠と爲すと、蓋し隱者ならん。

〔體裁〕 唐の韓愈の讀鵠冠子には十六篇と稱す、今本の陸佃が注本は、凡て十九篇ありて、佃の序には愈が十六篇と稱するは、未だ其全を睹ざるなりとい

へり、(今本の韓文は、乃ち亦徳佃の言に據り十九篇に改作せり、佃は北宋の人、其時古本の韓文を見て、其眞を以て序に稱せしむ)四庫提要、又三十六篇と稱せり、今記す所は、百子全書本にして、首に陸佃の序、韓愈の讀鵠冠子、及び目錄あり、其目左の如し。

博選、著希、夜行、天則、環流、道端、近迭、度萬、王鈇、泰鴻、泰錄、世兵、備知、兵政、學問、世賢、天權、能天、武靈王。

〔傳來〕 此書は、漢書藝文志、隋書經籍志、皆之を著録す、(唐)に至り、韓愈は其博選篇の四稽五至の説を擧げ、其人をして其時に遇ひ、其道を援て國家に施さしめば、功德豈に少からんや、といひ之を嘆賞せしが、同時の柳宗元は之に反して、淺陋の言意ふに、好事者が其書を偽り爲りて、賈誼が鵠の賦を以て文飾せしならんといへり、次で(宋)の晁公武、陳振孫、(明)の胡應麟、(清)の姚際恒等は、皆柳説に従ひ、後人の偽書と爲せり、然れども其詞氣の瑰偉なる、文格の古質なる、東漢以下の摸擬する所に非ざれば、古書の殘佚せし者とするを妥當とす、但、問、後人の竄入する所あり、注意せざる可からず、(我國)にては佐世の目錄已に之を載せたれば、宇多朝以前に渡來せるを知る可し。

〔體裁〕 此書は十二紀、八覽、六論より成る、其目左の如し。

○十二紀 孟春、仲春、季春、孟夏、仲夏、季夏、孟秋、仲秋、季秋、孟冬、仲冬、季冬。

○八覽 有始、孝行、慎大、先謙、審分、審應、離俗、恃君。

○六論 開春、慎行、貴直、不苟、似順、士容。而して論に三十六子目あり、覽に六十三子目あり、紀に六十二子目あり、合せて一百六十篇なり、然るに漢志に二十六篇に作れるは其綱を擧げしのみ、紀は即禮記の月令にして、十二紀を以て十二月に配せり、其中夏令多く樂を言ひ、秋令多く兵を言ふ、又每紀皆四篇を附し、季冬紀獨り五篇を附せり、末の一は、年月を標識し、題して序と曰へり、是十二紀の總論なり。

〔大意〕 呂不韋固より小人、而して是書諸子の言に比するに醇正たるは、其實賓客の手に成りしを以てなるか、其言ふ所大抵儒を以て主と爲し、參ふるに道家、墨家を以てし、多く六籍の文と孔子曾子の言とを引けり。

〔傳來〕 (漢)の高誘註してより世に行はる、(明)に至

りて朱國隆の校本あり、黃甫龍の校本あり、宋邦父の校本あり、劉如龍の校本あり、其嘉靖版には、首に許宗魯、漢の高誘の二序、及び總目有り、次て(清)に至りて畢沅の校定本あり、畢本を以て最も勝れりとす、此書の(我國)に傳來したるは、夙に平安朝の初にありて、高誘の註本なり、佐世の書目已に之を著録せり、徳川時代に至りて宋邦父本の翻刻あり、次て又畢本の印行あり。

〔注解、參考〕

○呂氏春秋二十六卷漢高誘註 ○呂子校補二卷清梁玉繩撰 ○呂子校補疑一卷清葉瑩撰 ○讀呂氏春秋四卷日本秋生撰 ○補訂讀呂氏春秋五卷明楊明撰

●淮南子二十一卷

〔題名、作者〕 漢の淮南王劉安撰す、故に名づく、高誘註して淮南鴻烈解といふ、鴻は大なり、烈は明なり、以て大に道を明にするの意なり、淮南王、劉は姓、安は名、淮南厲王の長子なり、封を襲ぐ、賓客方術の士を招き、内書二十一篇を作爲す、後、地を削られ反謀を爲し、元狩元年(五三九)自刎して死す、

淮南王の是書を作るや、蘇飛、李尚、左吳、田由、雷被、毛被、伍被、晋昌の八人、及び諸儒大山小山の徒と共に道德を講論し、仁義を總統して以て之を成せりといふ。(史記淮南王傳列傳漢書淮南王傳參考)

〔體裁〕 漢書藝文志雜家に、淮南内二十一篇、外三十三篇を著す、今存する所のものは蓋し其内篇のみなり、即ち左の如し。

原道、俶眞、天文、地形、時則、覽冥、精神、本經、主術、繆稱、齊俗、道應、汜論、詮言、兵略、說山、說林、人間、修務、泰族、要略、

〔大意〕 其旨老子に近く、淡泊無爲、虚を蹈み静を守り、經道に出入し、以て古今の治亂、存亡、禍福、世間の詭異環奇の事に及ぶ、其書元と諸人の討論に出でたりと雖、而も文氣格法の能く整一なるを見れば、其安が手裁に出でたるは明なり、(王世貞の說參考) 秦漢著作中に在りては、此書と呂氏春秋とは、尤も博洽俊偉なるものなり。

〔傳來〕 是書の傳來、時に隨ひて其卷數を異にせり、隋志には唯二十一卷許慎注高誘注の二本を載せて、外篇を佚せり、唐志には高誘注二十一卷本を著録し宋志には二十一卷本十三卷本の二種あり、宋の晁公武

は惟、十七篇のみを存し、其讀書志に曰く、李氏の書も亦云ふ、第七神第十九務亡ぶと、崇文總目は則ち云ふ、存する者十八篇と、蓋し李氏は二篇を亡し、崇文總目は三篇を亡し、家本は又其一を少くせりと、然れども(元)の馬端臨が文獻通考に二十一卷を著録したれば實に全く亡佚せるに非ず、(明)代に至り、閩本淮南子あり、漢太尉祭酒臣許慎記上と書し、原道、俶眞、天文、時訓、主術、記論を上下に分ちて十二卷と爲し、地形、覽冥等に合算して二十八卷と爲せり、然も是唯、強ひて割裂したるもの、何の謂もなきなり、日本國見在書目録に、淮南子卅一漢淮南王撰 同二十一許慎注とあるを見れば、(本邦)に傳來したるは、平安の初に在り、而して卅一は恐らく廿一の誤寫ならん、後寛文四年茅坤の批評本を刊行し、寛政十年には片山世璠の校本あり、次で明治に至り亦刻板あり。

〔注解〕

○淮南鴻烈解二十一卷漢高誘註 ○同上漢高誘註 ○許叔重淮南子注一卷、淮南萬畢術一卷清孫馮撰 ○淮南天文訓補注二卷錢坫撰 ○淮南子疏證六卷補遺一卷日本岡本保孝撰

● 論衡三十卷

〔題名、作者〕 衡は物の輕重を量るものにして、論衡は事物の輕重を論じたるものなり、後漢の王充之を撰す、充字は仲任、上虞の人、家貧にして書無く、常に市肆の書を閲し、一見すれば輒ち誦應す、論説を好み、門を閉ぢ潛思し、慶弔の禮を絶つ、辟されて從事と爲り、後病みて仕へず、年七十志力衰へ養性書十六篇を爲り、永元中家に病卒す。（後漢書本傳參考）

〔體裁〕 凡て八十五篇、其中第四十四の招致篇は、録有りて書無く、實は八十四篇なり。其目左の如し、逢遇、累害、命祿、氣壽、幸運、命義、無形、率性、吉驗、偶會、骨相、初稟、本性、物勢、怪奇、書虛、變虛、異虛、感虛、福虛、禍虛、龍虛、雷虛、道虛、語增、儒增、藝增、問孔、非韓、刺孟、談天、說日、答佞、程材、量知、謝短、効力、別通、超奇、狀皆、寒溫、讒告、變動、招致、（闕）明零、順鼓、亂龍、遭虎、商虫、講瑞、指瑞、是應、治期、自然、感類、齊世、宣漢、恢國、驗符、須頌、佚文、論死、死偽、紀妖、訂鬼、言毒、薄葬、四諱、調時、讖日、卜筮、辨崇、難歲、詰術、解除、

祀義、祭意、實知、知實、定賢、正說、書解、案書、對作、自紀。

〔大意〕 充の論は世を憤り俗を嫉むの餘に出づ、大旨天命の一定易ふ可からざるを説き、老子の天道自然の説を申べ、惡を遏め善を揚ぐるを以て天の道に非すと爲し、國祚の長短は政事の得失に在らざるを辨じ、當時災異を以て三公を免する非を矯めんが爲に、災異は政事の召く所に非すと説き、人死すれば知無く鬼と爲る能はざるを主張しては墨子の薄葬説を取れり、大抵其志は善を勸め邪を黜け讒を訂し惑を破するに在り、語增、儒增、問孔、刺孟の諸篇は頗る人を驚すに足る、故に當時蔡邕は之を秘し以て談助と爲して論録を鋭くせりといふ。

〔傳來〕 後漢書本傳には唯、八十五篇を著すと有りて卷數を記さず、隋志始めて二十九卷と録し、兩唐志三十卷を著録してより今本と合す、（我國）にては佐世の書目已に著録しあれば、其傳來の久しきを知る、寛延三年三浦衛興翻刻せり。

〔參考〕

○讀論衡一卷清命 ○論衡考一卷未日本岡本見保孝撰

● 牟子一卷

〔題名、作者〕 此書の本名は牟子理惑といふ、或は一に理惑論といふ、舊本題して後漢の牟融撰すといへり、融字は、子優、北海安邱の人、少くして博學、門徒數百人、名、州里に傳ふ、明帝の朝、茂才に擧げられ、永平中司空を拜し、後趙熹に代りて太尉に遷り、建初四年（七三九）卒す。（後漢書本傳參考）然るに此書の自序には、靈帝崩後、天下擾亂の何有れば、則ち建初四年に後るゝこと一十年、何ぞ死したる融が此書を著すことを得んや、應に別人なるを知るべし、梁の僧祐の宏明集に據れば、漢の牟融の理惑論三十篇の題下に、蒼梧太守牟子博傳と有り、然れども此書の記する所に據れば、未だ嘗て太守と爲らず、且つ史に牟子博といふもの見えず、或は是誤傳に出でしか、著者自ら述ぶる所を見るに少より經傳諸子の書に通じ、又兵書を讀む、靈帝崩後其母と共に世亂を交趾に避く、年二十六にして蒼梧に歸り、妻を娶る、大守之を召せども仕へず、愈、佛道老子を研鑽して遂に此書を著せりといふ、是に由りて之を觀れば、漢末の處士たること明なり。

〔傳來、體裁〕

隋志儒家に、牟子二卷を載せ、唐志道家に牟子二卷を録す、劉孝標の世說新語注、李善の文選注、太平御覽等に牟子數條を引き、其字句異同有りと雖、皆理惑論三十七篇中のものにして、隋唐志に載する所の牟子の如し、其後、文獻通考、宋志、元志、明志、清の四庫全書共に著録せず、嘉慶間に至り、孫星衍之を宏明集より摘出して一卷と爲し、尙漢太尉牟融撰と題せり、光緒元年之を百子全書に收む、其我國に傳來したるは、平安朝の初に在り、即ち佐世の書目に載する所は、隋志に記す所と異なる無し、然れども今已に傳はらず、茲に記す所は、百子全書本にして首に嘉慶十一年臨海の洪頤煊の序、牟子の自序有り、凡て三十七則、題目を設けず毎則必ず問を以て起し、付するに牟子の自答を以てす。

〔大意〕 其言釋氏を崇信すと雖、尙儒家の旨に適ひ、又雜ふるに道家の言を以てす。

● 顏氏家訓二卷

〔作者、題名〕 北齊の顏之推撰す、之推字は子分、臨沂の人、博識才辨、待詔文林館に當り、散騎侍郎に

遷り、齊亡びて周に入り、御史上士と爲り、隋の開皇中召されて文學と爲り、深く禮重せられ、尋て疾を以て終る、其著す所、此書の外文集三十卷並に世に行はる、(萬世統)是書は其齊に居る時の作なり、四庫簡明目録に隋顏之推撰と題せるは、即ち後隋に仕へて歿したるを以てなり、此書立身治家の法を述べ、時俗の謬を辨正して子孫に訓へしものなれば、家訓と題名せしなり。

〔體裁 傳來〕 隋志に著録せず、唐志、讀書志、書錄解題、文獻通考、宋志俱に七卷と爲す、而して讀書志には篇數を擧げて二十とせり、現存する者は二卷にして篇數相同じきを見れば當に卷を合したるものなるべし、其目左の如し。

序致、教子、兄弟、後娶、治家、風操、慕賢、勉學、文章、名實(上)、涉務、省事、上足、誠兵、養生、歸心、書證、音辭、雜藝、終制(下)。

此書は宇多朝以前已に(吾國)に傳はり、佐世の目録に著録して七卷有りといへり、然れども亡佚し存せず、徳川氏元祿の頃に至り、二卷本を翻刻して世に行はる。

〔大意〕 大旨儒に本づき世故人情に於て利害を深明

し、文るに經訓を以てせり、然るに其中歸心等の編は、佛法を申明し、兼ねて字畫音訓を論じ、並びに典故を考正し、文藝を品第し、曼衍旁涉して専ら一家の言を爲さず、之を要するに雜家たるを免れず。

● 劉子十卷

〔作者、體裁〕 是書或は題して劉歆の作と爲し、或は劉勰或は劉孝標、或は劉晝と爲し、殆ど其何人の手に出でしやを詳にする能はず、唐志初めて著録して梁の劉勰撰すといふと雖、梁の通事舍人の劉勰傳には、惟、其文心雕龍五十篇を著すのみにして、更に別書あるをいはず、又劉歆、劉孝標も亦確證なく、惟唐の袁孝政序に、定めて劉晝となせども、恐らくは孝政僞作して自ら之に註せしものならん、是書古籍を難採し、融貫し、編を成し、其末九流一篇は、隋書經籍志子部の論する所と相同じ、其目左の如し。

清神、防慾、去情、韬光、崇學、專學、辯樂、履信、思順、慎獨、貴農、愛民、從化、法術、賞罰、審名、鄙名、知人、薦賢、因顯、託附、心隱、通塞、遇不遇、命相、妄瑕、適才、文武、均任、慎

● 子華子二卷

言、貴言、傷讒、慎隣、誠盈、明謙、大質、辯施、和性、殊好、兵術、鬪武、明權、貴速、觀量、隨時、風俗、利害、禍福、貪愛、類感、正賞、激進、惜時、言苑、九流。

〔作者〕 舊本題して晋人程本撰すと爲す、程本の名は家語に見はれ、子華子の名は莊子に見ゆ、本一人に非ず、呂氏春秋に子華子を引くこと三、高誘以て古の體道の人と爲す、又劉向が子華子を上る序と云ふを見るに、子華子、程は氏、名は本、字は子華、晋人なり、孔子と時を同じくし、齊に至り趙を回る。諸侯用ふる能はず、遂に子華子を著し、晋に反り復仕へずして卒すといへり、然れども、周氏涉筆に、此序を以て向の文にあらずと爲し、陳直齋書錄解題には、前世史志及び諸家書目並に此書無く、且つ莊子固より寓言、家語亦未だ考信すべからず、常に近世能言の流、此を爲りて世を玩ぶに出でしなるべしといひ、明の宋濂は其諸子辨に、四條を擧げて子華子の晋人にあらずること、及び其書の僞作なることを詳辨せり、今神氣篇末の自叙世系に「趙則真吾姓之所宗」といひ、又「將光啓于趙氏之業」といふを見れば恐らくは、宋の熙寧、元豐の間、其宗子の爲りしものならん。

● 化書六卷

〔題名、作者、體裁〕 舊本題して齊邱子といふ、南唐の宋齊邱撰すと爲せども、實は南唐の譚峭の著(傳未詳)世統譜を齊邱奪ひて己が有となし、以て之に序したるなり、凡て六篇。

道化、術化、德化、仁化、食化、儉化。是なり、故に化書といふ。

〔大意〕 其說多く黃老道德の旨に本づき、又儒言を附合せり。

〔體裁〕 書錄解題に十卷に作り、陳氏の續書目に十篇

と爲し、諸子辨亦十卷に作る、今本は二卷のみ、首に劉向の序有りて凡て十篇に分つ、其目左の如し。

陽城傅渠問、孔子贈、北宮子仕、虎會問、晏子、晏子問黨、執中、大道、北宮意問、神氣。

〔大意〕 此書は「道一也」といひ、「道無定形、虛疑爲一氣、散布爲萬物」といひ、「元者太初之中氣也」といひ、「有意於爲則狹矣、有意於治則陋矣」といひ、「天之精氣其大數常出三而入一」といふが如き、皆黃老の言に本づかざるはなし、而も詳に之を察するに又術數の説を雜ふ、而して晏子問黨篇末に禮を尊び儉を重んぜざるを見れば、則ち又墨家を斥け儒家に近づきたるものなり、之を要するに一家を墨守せず、其文は則ち頗る見るべしと爲す、蓋し後世諸子中に在りては理致を具ふるものなり。

● 鳴道集説一卷

〔作者、題名〕 金の李純甫撰す、純甫字は之甫、自ら屏山居士と號す、宏州襄陰の人なり、承安中進士に登り、三たび翰林に入り、尙書右司都事と爲り、正大の末、坊州に俸たりしも、未だ赴かずして京兆府

判官に改められ、南京に卒す、年四十七、其著す所の文、性理を論じ佛老二家に關するものは内蒙といひ、其餘の碑誌詩賦は外蒙と稱す、又大學、中庸、楞嚴、金剛、老子、莊子等を解せり、今傳はらず、(金史文藝傳、大金國志、歸潛志、佛祖通載等參考) 此書出でより鳴道は遂に李純甫の學派の稱號と爲れり。

● 郁離子二卷

〔題名、作者〕 明の劉基の撰にして、其郁離といふは、周易に離は火たり、文明の象とありて、此書を用ひなば、其文郁乎として、盛世文明の治と爲るとの意なり、基の傳は誠意伯文集の條に出づ。

〔體裁、大意〕 是書原本十卷、十八篇、一百九十五條なりしが、今は唯二卷一百八十二條のみ、是蓋し後人の合卷せしものならん、其記す所は、往往禽獸

を假りて譬喩と爲し、以て己が説を託せり、故に怪談の中に道義の存するあり、大旨治世の要を明すに在り、今記す所は、明の鄭能の校刊本を、我享保十七年に翻刻せるものにして、首に洪武十九年、天台の徐一夔の序有り、其目を擧ぐれば、則ち左の如し。

千里馬、魯般、玄豹、靈丘丈人、瞽瞍、枸椽、蟋蟻、天地之盜、省敵、虞孚、天道、牧癩、公孫無人、蛇蠍、神仙、麋虎、美壘、九難。

崇文書局刊行の百子全書本は僅に十七條あるのみにして又目を設けず。

● 空同子一卷

〔作者、題名〕 明の李夢陽撰す、夢陽の傳は空同集の條に出づ、空同は其號なり。

〔體裁〕 是書は揚雄の法言の體に仿へり、凡て六篇、即ち左の如し。

化理、物理、治道、論學、事勢、異道。

而して化理、論學二篇は上下に分ち編の中又數十則に分る、此書従前は空同集中に編入しありしが、後人摘出して別行せり、又空同子纂一卷は學海類編中

に在り、是空同子の每篇中、十の三四を摘鈔したるものなるを以て纂と名づけしなり。

〔大意〕 大旨儒家に近しと雖、而も亦之を墨守せず、孔子の妻を出せるを論じて不王の兆と爲し、(事勢)之をして位を得しむるも竟に二帝三王の治を致し難きを説き、(治道) 宋儒起りて古文の廢せるを辨じ、(論學) 又迅雷を以て陰陽搏擊の致す所と爲し、正徳二年正月一日の日食既するを見て月體の日體より小なることを説く(化理) が如きは、頗る物理家の言に近し、之を要するに意の觸れ感の動くに従ひて筆録せるものゝ如し、故に其大意を括言する能はざるなり。

● 於陵子一卷

〔作者、題名〕 於陵は楚の地名にして陳仲子の居りし所なり、舊本齊の陳仲子撰すと題す、然れども、實は明の姚士麟の偽作たり、清の姚際恒の偽書考、王士禛の居易錄並に已に之を辨せり、士麟字を叔祥といふ、胡震亨等と交り善し、其言に據れば此書を吳門承天寺の井中に得たるなり、是偶、以て其偽たるを

見はせり。
 (體裁、大意) 今記す所は、百子全書本にして、首に徐渭、陸何友の二序有り、凡て十二篇、即ち左の如し。
 畏人、貧居、辭祿、遺蓋、人間、先人、辨窮、大盜、夢葵、卷之人、未信、灌園。
 大旨老莊に近し、神を冲虚の表に寓して退を以て用と爲すに在り。

● 叔苴子八卷

(作者、題名) 明の莊元臣撰す、元臣字は忠甫、松陵の人、其事蹟詳ならずと雖、伍崇曜の跋に據るに楊升庵と相往還せる者の如し、叔苴とは用を後に取るの意なり、叔は拾なり、苴は麻子なり、農人九月の間、麻子を采拾し、以て來年播種の具と爲す、用を今に取るに非ずして用を後に取る、此書靜坐閑行の餘、適意隨記して後帙を成す、恰も叔苴の如し、蓋し詩函風九月叔苴の意なり。(自序)
 (體裁、大意) 篇を内外の二篇に分ち、内篇六卷は道德性命をいひ、外篇二卷は治亂興亡をいふ、百子全

書本は首に莊元臣の原序有り、粵雅堂叢書本は原序無くして尾に伍崇曜の跋有り。

儒者博而寡要、勞而少功、是以其事雖盡從、然其序君臣父子之禮、列夫婦長幼之別不可易也。墨者儉而難遷、是以其事不可備從、然其雖本節用不可廢也。法家嚴而少恩、然其正君臣上下之分不可改矣。名家使人儉而善失貨、然其正名實不可不察也。道家使人精神專一、動合無形、瞻足萬物、其爲術也因陰陽之大順、采儒墨之善、撮名法之要、與時遷移、應物變化、立俗施事、無所不宜、指約而易操、事少而功多。(史記自序傳)

集

小序

集は輯なり、一人若くは衆人の文章詩賦等を輯めたる書の總名なり、古は此名無し、漢代に至りても亦尙未だ集を以て其書に名づけず、故に漢書藝文志に賦頌歌詩一百六家を載せられたれども、之を集とは曰はざりき、晋の荀勗は書を四部に分ちて其四を丁部といひ、宋の王儉は七志を作りて其三を文翰志といひ、並に文章詩賦を收めたるも、亦未だ集を以て名づけず、梁の阮孝緒が七録を撰ぶに至り、始めて文集録内編(冠別集、雜文)を設けたり、之を分類に於ける集名の權輿と爲す、是に於て隋書經籍志は荀況等の詩賦等を以て之を集部と爲し、五百五十四部を收めたり、是より歴代の藝文志、諸家の書目、亦皆集部を立つ、今は之を大別して左の二種とす。

(1) 別集、一人の製作を自編又は後人の追録せるものにして、單に詩集のみの者あり、文集のみの者あり、詩文合集又は更に他の著作を雜ふる者あり、而して賦は以上の三部に相出入せり、其別集と名づくる所以のものは、他人の心靈體勢と區別せんが爲なり、其名は漢の東京に徇れり、而して其各集の題名は古人は但々其姓氏を以て之に命せしが、(荀勗集、宋玉集、東方朔集、張融、其集を玉海と號せしより、後世争ひて之に仿ひ、字、號、爵、里、故事等を以て之に命じ、一家にして十數種の多きもの有るに至れり。)

(2) 總集、衆人の詩文等を全編又は摘録したるものにして、諸家の詞藻文格を總覽することを得るを以て名づく、單に詩集のみの者あり、文集のみの者あり、詩文合集の者あり、其原は詩三百に起り、其名は七録に創まる、漢の劉向が屈原、宋玉等の賦を哀れ楚辭と名づけてより、後學之に擬

し、或は地名、或は代名、或は姓氏、或は抽象的文字を以て之に名づくるに至れり。
 [附言] 漢書藝文志、七志、七録は前既に述べたり、隋書經籍志は、楚辭、別集、總集の三類に分ち、新舊唐志は、隋志に同じく、崇文總目は總集、別集、文史の三類に分ち、宋志は之に楚辭を加へ、文獻通考は、詩賦、別集、詩集、歌詞、章奏、總集、文史の七類に分ち、元志は別集、總集、騷賦、制誥、科擧、文史、評注、詞曲の八類に分ち、明志は別集、總集、文史の三類に分ち、清の四庫全書提要は楚辭、別集、總集、詩文評、詞曲の五類に分てり、今茲に收むる所は、別集、總集の二類のみにして、楚辭を總集に歸し、奏議を政法部に入れ、其詩文評の如きものは別に修辭部を編成して録入し、更に別集を小別して詩集、文集、全集と爲し總集を區分して詩集、文集、詩文全集と爲せり。

別集

詩集

千字文一卷

作者] 梁の周興嗣撰す、興嗣字は思纂、世々姑孰に居る、梁の天監の初、散侍郎に累遷し、又給事中に遷りて國史を撰ぶことを佐けたり。(梁書文學傳參考)

[體裁、題名] 四言古詩二百五十句、凡て一千字、故に千字文といふ。

[傳來] 此千字文は、周興嗣が(魏)の鍾繇の千字文を

韻に遵ひ次第せしものなり、初め(晋)の武帝、魏の後を承け路州城に在りしとき、大夫鍾繇千字文を遣り之を上る、帝愛して手より離さず、(宋)の文帝武帝に嗣ぎ晋の後を承くるに及び、其書庫を開き中に千字文を得たり、然れども其次第損失して辨す可からず、是蓋し晋が丹陽に移る時雨に濡されたるを以てなり、因て文帝は右將軍王羲之をして次韻(此に次韻といふは、白居易、元稹等の次韻に同じからず、韻の消亂せるを次第するをいふなり、予別に考あり)せしめしに遂に得ず、(齊)の朝亦之を次韻するもの無し、(梁)武帝位を承け、乃ち周興嗣に命じて次韻せしめ此篇を得たりといふ、是宋の李暹が集注千字文に稱する所なり。

哉、後人小學の資に供するや。

[注解、參考]

○千字文注清版一卷 日本版三卷 梁李暹注 ○千字文注一卷 清孫昌吉撰 ○増廣附音釋文千字文註一卷 撰人未詳

寒山子詩集二卷附豐干拾得詩一卷

[作者、題名] 寒山子、拾得、豐干の三人、皆唐の國清寺の僧なり、寒山子は嘗て寒巖に居りしを以てかく稱す、唐の闕邱胤の序に頗る其事蹟を記せりと雖大概怪僻にして信す可からず。

[傳來、體裁] 相傳へていふ、闕邱胤、國清寺の寶徳道魁をして寒山を誦ねしめ、後、其竹木石壁上、及び人家の廳壁に書する所の詩三百餘首を得、又土地堂壁上に書する所の偈言を撫拾し、竝に纂集して卷を成し、付するに豐干の詩二首を以てし自ら之が序を爲れりと、然れども胤が傳は唐書に見えず、疑無き能はず、下りて(宋)に至り之を三隱集と名づけしこととは、淳熙十六年沙門道南の作りし記中に見え、唐書藝文志に據れば、舊七卷ありしものなり、其卷數今本と合せず分散逸を詳にせず、(明)の新安の吳

り、然れども魏志鍾繇傳を按するに、繇は大和四年に薨す、即ち魏の文帝、明帝の時の人にして、晋武帝即位の泰始元年より三十六年前已に薨じたるなり、惡ぞ晋武帝の朝之を上ることを得んや、恐らくは後人が鍾繇の千字文を取りて之を上れるならむ、李暹の言は誤有るに似たり、周興嗣一たび鍾繇の詩を次韻してより大に世に行はれ、歴代の書家多くは之を書するに諸體の字様を以てするに至れり、繇の千字文が(我國)に渡來したるは、古來傳へて應神天皇十六年即ち西晋の武帝太康六年(古事記、書紀等參考)と爲せとも、三國史記、東國通鑑等に據るに、仁徳天皇の末年と爲さざる可からざるが如し、乃ち其周興嗣が次韻以前のものたること明瞭なり、興嗣次韻の千字文、亦王朝に在りて已に渡來せることは、藤原佐世の日本國見在書目錄に李暹注千字文を著録せるに見て明なり、其後傳へて書家に用ひられ、現今尙多く習字帖として行はる。

[評論] 其體は漢人の四言より來る、千字中一字の重複無きは頗る用力の工を觀るに足れり、然れども四言は遂に之よりして微なり、但々其述ぶる所、宇宙より微物に至る細大洪纖、網羅せざるなし、宜なる

明春の校刻せる所は、寒山詩を一巻と爲し、豊干拾得を別に一巻と爲し、首に閻丘胤の序、朱晦庵與三南老、索寒山子詩帖、陸放翁與明老、改正寒山子詩ありて、凡て五卷、終に萬曆二十七年禹定沙門志南の作りし三隱集記を附せり、集中五言八句増も多し、其長きは二十六句に及ぶものあり、又三言あり、七言あり、七絶あり、七律あり、然れども極めて少し、（我國）にては通憲入道の藏書目録に、寒山子一帖を著録しあれば、其渡來の古きを知る、次で徳川時代に至り、僧の交易、白隠共に注解を施せり。

〔評論〕 其詩大抵禪門の偈語、又山林幽隱の興有り、或は時態を諷諷し、能く流俗を警勵す、語々皆自然にして真味掬すべし、後來禪家の偈頌、及び宋の邵雍、堯卿集の一派、此其濫觴なり、但々邵雍以後濬洛諸人の作は之を儒家の思想に發し、此は釋家の思想に發せり、是其殊なる所たり。

〔注解〕

○寒山子詩集管解七卷 日本撰 交易撰 ○寒山子詩闡提記開三卷 釋撰

◎孟浩然集四卷

〔作者、題名〕 唐の孟浩然撰す、浩然是襄陽の人、少くして氣節あり、鹿門山に隠れ、年四十二にして京師に遊び諸名士の間に交々、王維邀へて私に禁署に入る、俄にして玄宗至る、維實を以て對ふ、帝が曰く、朕其人を聞きて未だ見ずと、召して其詩を問ふ、浩然再拜して爲る所の詩を誦し、「不才明主棄、多病故人疎」の句に至り、帝慨然として曰く、朕未だ嘗て卿を棄てず、奈何ぞ我を誣ふるやと、因て放還して南山に歸らしむ、開元二十八年（一三九九）疽を病みて卒す、年五十二、（唐書文藝傳） 此書一に襄陽集といふは、其地名を取りしなり。

〔傳來、體裁〕 天寶四載宣城の王士元（源に作るは） 浩然の詩を編して曰く、凡て二百十八首、分ちて四卷となすと、舊新唐志著録せず、晁公武の讀書志に云ふ浩然の詩二百十首、宣城の王士元序次して三卷となすと、（公武は之を合して一卷とす） 士元の序にいふ所と卷に於て一を減じ、詩に於て八首を減す、何故なるかを知らず、宋志に著録する者は三卷にして、文獻通考は讀書志と同じ、明の毛晋の言によれば、當時已に

刻本あり、讀書志、源考本と同じくして、三卷に分ちり、（元）に至り劉須溪の評點本あり、亦三卷にして、遊覽、贈答、旅行、送別、宴樂、懷思、田園、美人、時節に分類し、別に拾遺十條を附す、凡て二百三十三首なり、（明）に至り弘治中關中にて刻せる者あり、卷數は宋刻、劉本と同じくして、編次互に異同あり、詩は凡て二百十八首なり、其後刻する者或は一巻、或は二巻、或は四巻ありて詮次寡多同じからず、といへり、毛晋は宋刻に依り、劉本、關中本を以て之を參し、附するに拾遺を以てし、凡て二百六十六首を得たり、分ちて三卷となし、前に王士元の序を冠し、之を遊覽、贈答、旅行、送別、宴樂、懷思、田園、美人、時令、拾遺に類別して刻せり、（清）に至り四庫に著録する者は、四卷本にして、凡て二百六十二首、卷首には王士元、韋韜の序ありといふ、予未だ此書を見ざるも、光緒十年、上海同文書局石印の孟浩然集は、此と卷數、詩數相同じければ、恐らくは同本ならん、其目錄は左の如し。

卷一は五古、卷二は七古、五排、卷三は五律、卷四は五律、七律、五絶、七絶。
而して卷首に士元、韜の二序あること亦相同じ、

（我國）に渡來せるは其時代詳ならず、元祿三年百安元鼎校刊せり、此は襄陽集と題し、三卷にして遊覽に始まり田園に終る、劉須溪先生批閱といふ、恐らくは關中本ならん。

〔評論〕 其詩、流派を論すれば晋の陶潛に近く、自然を以て宗と爲す、大抵氣象清遠、凡近を洗削して毫も堆塚の弊なし、故に能く清空自在、淡味餘有り、盛唐に在りて王維と名を齊しくし、韋應物、柳子厚等の先路を開けり、然れども審に其旨致を視るに蓋し憤世激俗の餘、命を知り天を樂むに至れるものにして王維と其來路を異にし其所歸を同くせり、各體に就きて之を論すれば、五言は其長する所にして七言は短なる所なり。

〔注解、參考〕

○孟襄陽集辨譌考異一卷 清胡鳳丹撰

◎岑嘉州集八卷

〔作者、題名〕 唐の岑參撰す、參は棘陽の人、天寶三載進士の第に登り、累官して右補闕より侍御史に至り、出で嘉州刺史と爲る、相國杜鴻漸薦めて幕府に

置き職方中郎と爲し侍御史を兼ねしむ、幾も無く致仕して蜀に寓居し、感奮賦を著し自ら叙して卒す、其子佐公、復前緒を纂す。(謝廣州志 杜)

〔傳來、體裁〕 此集は(唐)の時、京兆の杜確が參の嗣子佐公の命を受け分類編次して八卷と爲したるものなり、然るに唐書藝文志、崇文總目、文獻通考、俱に岑參集十卷に作れるは、恐らくは原本に非ざる可し、(明)に至り張遜業の刻せる者は二卷にして

卷上は五古、七古、卷下は五律、七律、五排、五絶、七絶。

を録せり、或は卷を合せるか、序跋なければ之を知る能はず、(清)の乾隆四庫之を著録せず、光緒十年上海同文書局の石印版は凡て八卷にして首に杜確の序文有り、類を分ちて編次せり、想ふに原本ならんか、其目左の如し。

五古三卷、七古一卷、五律、五排共三卷、七律、五絶、七絶共一卷。

(我國)にては日本國見在書目録に、岑參集十卷を録したれば、其傳來の久しきを知る可し、寛保元年、明の李本芳、許自昌の校本を以て異同を對照して翻刻せり。

〔評論〕 其詩は響亮壯壯にして邊塞の音に富む、又能く明淨整齊、高適と其名を埒くせり、而して豪健は稍々適に如かず、奇警は則ち之に過く、盛唐に在りては名家の魁たり。

儲光義詩集 五卷

〔作者、題名〕 唐の儲光義撰す、光義は丹陽、(或は延陵)の人、開元中進士の第に登り、召されて中書に入り、監察御史に歷官す。(尙友錄)

〔傳來、體裁〕 唐書藝文志に其集七十卷に作り、願況の序亦著す所文篇賦論七十卷と稱し、辛文房が唐才子傳に九經分疏義二十卷、政論十五卷ありと稱すれども、今は止た其集五卷のみ存す、予未だ其單行の集を見ず、全唐詩には其詩を編みて四卷と爲せり。

〔評論〕 其詩陶潛に出で、質樸の中古雅の味有り、尤も田園の作に長せり、其品位は之を王維、孟浩然の席に置くも殆ど愧色無し。

劉隨州集 十一卷

〔作者、題名〕 唐の劉長卿撰す、長卿字は文房、河間

の人、開元二十一年進士の第に擧げられ、至德中監察御史と爲り、檢校祠部員外郎を以て轉運使判官と爲り、隨州刺史に終る、故に後世稱して劉隨州と曰ふ。(尙友錄)

〔體裁〕 四庫著録本は詩十卷文一卷なり、舊外集一卷ありしが、其詩皆正集と重出すといふ、全唐詩には其詩五卷を編入し、唐詩百名家集には詩十卷補遺一卷を載せて分類せず。

〔評論〕 長卿の詩、大抵研鍊深穩、而して自ら高秀の韻有り、其文造語、工みにして亦其詩の如し、故に盛唐中唐の間に於て號して名手と爲す、但々才地稍々弱きは是其一短なり。

韋蘇州集 十卷

〔作者〕 唐の韋應物撰す、應物は京兆長安の人、性高潔にして食鮮く欲寡し、居る所には香を焚き地を掃ひて坐す、永泰中に京兆府功曹に任ぜられ、大曆中櫟陽令に除せられ、建中二年比部員外郎より滁州、江州の刺史に轉官し、左司郎中に改められ、貞元の初、蘇州刺史と爲る、蒞む所皆惠政多し、世號して韋蘇州

と爲す、官を罷むる後、永定精舍に寓居し、太和中復び出で仕へて太僕少卿と御史大夫とを兼ね、年九十餘、其終る所を知らず。(宋王欽臣の序、沈明遠の韋刺史傳、唐書文藝傳、尙友錄等參考)

〔體裁、傳來〕 (宋)の嘉祐中、王欽臣是集を校定して序一首あり、(清)の四庫に要には、四十類に分ち、凡て賦一篇、詩五百七十首ありといへり、吾見る所胡鳳丹の唐四家詩集本は、古賦一首の外、詩は雜擬、燕集、寄贈(上下)、送別、酬答、逢遇、懷思、行旅、感歎、登眺、遊覽、雜興、歌行(上下)の十三類に別ち、

五百六十首あり末に群書拾補の抜抄、並に拾遺詩八首を添へたり、(我國)寛永三年の和刻本は亦、古賦一首、詩を十二類に分ち、凡て五百五十五首、其内佚するもの三十四首あり、末に拾遺として雜詩八首を附記せり、卷數相同じ、次で文政三年同六年の刻本あり。

〔評論〕 其詩七言は五言に如かず、近體は古體に如かず、五言古體は大抵陶に源出して三謝に融化す、故に真にして朴ならず華にして綺ならず、但々柴桑を追歩し尙未だ其實を究めず、然れども中唐に在りては、高淡閑雅名家の魁たり、宋の蘇軾が「樂天長短三千首、卻愛韋郎五字詩」といへるもの當れりといふ

可し。

〔參考〕

○韋蘇州集辨論考異一卷清胡鳳

●張司業詩集八卷

〔作者、題名〕唐の張籍撰す、籍字は文昌、和州の人、貞元十五年の進士、水部員外郎と爲り、國子司業に至る、嘗て韓愈の客と爲りて朝に薦められ、當時の賢士争ひて之を慕ふ、(唐書韓愈傳參考)司業を以て集に名づくるは其官名に因るなり。

〔體裁〕四庫提要に據れば(南唐)の張洎、張籍の詩を輯め、四百餘篇を得、分ちて十二卷となし、名づけて木鐸集といふ、後(宋)の湯中諸本を校定し、分ちて八卷とし、名づけて張司業集といふ、(明)に至り高曆中、張尙儒復諸異本を校合して、籍の詩を編し、凡て詩四百四十九首、書二首を得、其卷數は湯本と同じく、篇數は張本と略同じ、是に由りて之を觀れば二家の本恐らくは散佚する所無きに似たりとあり、然れども未だ之を見ず、今記す所は唐詩百名家集本にして、首に張洎の序、目錄、湯中の識語有

り、其目左の如し。

樂府二卷、古詩一卷、五律二卷、七律一卷、五七言絶句一卷、聯句一卷。

聯句の外總て四百二十篇あり。

〔評論〕籍の樂府王建と名を齊くす、而して格は其上に在り。

●長江集十卷

〔作者〕唐の賈島撰す、島字は閻仙、范陽の人、初め僧と爲りて法乾寺に居り、無本と號す、後、初服に返り進士に擧げられ、長江主簿と爲り、會昌の初、普州司倉參軍を以て司戸に遷り未だ命を受けずして卒す、年五十六、(唐書本傳參考)蘇絳が誌に據れば、會昌三年(一五〇三)七月二十八日、六十歳にして郡の官舎に終れり、未だ其何れか是なるを知らずと雖、後説或は確ならんか。

〔傳來、體裁〕郡齋讀書志に十卷詩三百七十九首と稱す、四庫に著録する者は卷數之と同じくして、僅に一首を佚するのみ、予が見たる者は(我國)正徳五年の刻本にして、首に賈島の紀事目錄有り、體を分たす、

類を別たす、或は編年の疑無きに非ずと雖、而も哭孟郊東野詩の一は第三卷に出で一は第十卷に出でたるを見れば、其然らざるや蓋し明なり。

〔評論〕島は韓愈に學へりと雖、才學識力並に遠く愈に及ばず、然れども其詩清瘦幽僻、自ら一格を爲す、遂に宋の四靈の先導を爲せり、明の竟陵の一派も亦頗る此に得るもの無しとせず、五律は其最も長ずる所たり、「怪禽啼曠野、落日恐行人」の如き極めて佳句たり。

●李長吉歌詩四卷外集一卷

〔作者、題名〕唐の李賀撰す、賀字は長吉、昌谷に家居す、七歳能く文を屬し、元和中詩を賦して皇甫湜韓愈に知らる、進士に擧げられ太常寺協律郎に補せられて卒す、年二十七、或は曰く二十四、(韓愈の諱避、杜牧の李長吉歌詩叙、李商隱の李長吉小傳、陸龜蒙の李賀傳、李賀傳後、新唐書、太平廣記等參考)是集一に昌谷集といふは、其地名に因りしなり。

〔體裁、傳來〕賀の友沈子明、賀の詩を編し杜牧之に序す、其序に稱す、四篇凡て二百三十三首、賀が手定する所なりと、今唐志、宋志を按するに皆五卷に

作る、牧が序に較ぶるに一卷多し、文獻通考には集四卷外集一卷と爲す、吳正子の昌谷集箋注に薛常州士龍の言を載せて、蜀本と會稽姚氏本とは、皆二百一十九篇、宣城本は二百四十二篇といへり、四庫提要に之を辨していふ、外集の詩二十三首、之を合すれば則ち二百四十二と爲り、之を除けば二百二十九と爲る、實は即ち一本なり、惟々正集を杜牧の序に較ぶるに十四首少し、外集は東觀餘論の跋に比するに二十九首少きのみと、此言當を得たり、予が見たる吳正子の箋注本は卷數、通考、四庫と同じ、元の惠宗至元三年復古堂の刊行本にして劉須溪の評點せる者なり、每卷皆樂府古今體を分たす、正子の後、又之に注するもの(明)に在りては徐渭、曾益、余光、姚銓等あり、(清)に在りては姚文燮、王琦等あり、評家に至りては枚舉に遑あらず、此書の初めて(我國)に傳はれるは其時代を詳にする能はずと雖、異制庭訓往來に記載するを見れば、恐らくは當時已に渡來せるならんが、文政元年吳正子の箋注本を翻刻せり。

〔評論〕賀は韓愈に學びて而も自ら一格を成せり、蓋し其天分奇才に富む、故に語を出せば則ち怪險奇譎、凡近を離絶し、五色の人目を眩曜するが如し、但其

奇を弄するの餘、人をして解する能はざらしむるに至る、是其短處なるも亦其長所たり、古來稱して鬼才と爲すもの當れり。

〔注解〕

○箋注評點李長吉歌詩四卷外集一卷宋吳正子箋註 ○李長吉詩集四卷外集一卷明徐渭等批注 ○李昌谷詩注四卷外集一卷清王琦撰

●王司馬詩集十卷

〔作者、題名〕 唐の王建撰す、建字は仲和、潁川の人、大曆十年の進士、大和中、陝州司馬と爲る、韓愈、張籍と相友として甚だ善かりき。(尙友錄)

〔傳來、體裁〕 文獻通考に王建集十卷を載せ、(清)の胡介祉の校刊する所は、古體二卷近體六卷、凡て八卷なり、蓋し後人の合併せし所ならん、今記す所は唐詩百名家集本にして、首に傳略附論說、目錄有り、其目左の如し。

卷一二は樂府、卷三は樂府、古風、卷四は古風、卷五より八は律詩、卷九、十は絶句。

〔評論〕 元稹、白居易、張籍、王建並びに樂府を以て名

し、凡て七類に分録せり。

送別、寄贈、閑道、題詠、遊覽、和酬、雜詠。

〔評論〕 其詩品は略、賈島に近くして又小異あり、大抵五言に長す、刻意苦吟、物象を冥搜し、務めて古人の體貌を求め、人意の至らざる所多し、而かも細功を求めて却て瑣屑に渉る、漸く宋の四靈の風氣を開けり。

●温飛卿集七卷別集一卷集外一卷

〔作者〕 唐の温庭筠撰す、庭筠字は飛卿、彦博の裔孫なり、少にして敏悟、工みに詞章を爲り、李商隱と名を齊しくす、世號して温李となす、大中の末、方山尉を授かる。(唐書本傳參考)

〔傳來、體裁〕 唐書藝文志に庭筠握蘭集三卷、金荃集十卷、詩集五卷、漢南真韻十卷を載せ、宋志も亦同じ、陳振孫書錄解題には七卷に作る、陸游の渭南集には温庭筠集の跋ありて稱す、其父所藏の舊本に華清宮の詩を以て首と爲し、中に早行の詩あり、後蜀本を得しに則ち早行の詩已に佚せりと、文獻通考には温庭筠金荃集七卷別集一卷を録す、是宋刻已に

を擅にす、而して、元稹、白居易は多く長調を作り曲折を以て情を盡し、張籍、王建は多く短章を作り抑揚を以て意を含ます、同工異曲、各々長する所を擅にせり、其宮詞百首に至りては詩を以て事を紀せり、其格亦建より之を開く。

●姚少監詩集十卷

〔作者、題名〕 唐の姚合撰す、合は硤石の人、宰相崇の曾孫なり、元和十一年、進士の第に登り、武功尉に調せられ、監察御史に遷り、秘書少監に終る、詩家稱して姚武功といふ、著す所極元集有り。(唐書姚崇傳參考)

〔傳來、體裁〕 其集(北宋)に在りては甚だ顯はれず、(南宋)に至り永嘉の四靈始めて奉じて宗と爲してより大に世に行はる、(明)の汲古閣刻する所は、分類編次せり、唐人此例無し、且つ毛晋の跋によれば、此書浙本あり、尙川本あり、編次少しく異なりとあり、又稱す、宋の治平四年、王頤石武功縣詩三十首を刻せり、其次序字句皆不同ありと、然れば則ち唐時の舊本に非ざること明なり、全唐詩には編して七卷と爲す、今記す所は唐詩百名家集本にして其目左の如

一本に非ざるを知る、(明)の曾益四卷本を作りて、八又集といひしが、(清)の顧予成之を補注し、其子嗣立又之を重校し、詩集七卷別集一卷集外一卷に分ち以て通考本に歸せり、然れども全く唐本の舊に違りしに非ず今記す所は即ち此重校本にして、首に舊唐書本傳、諸家詩評、康熙三十六年に顧嗣立の作りし集後、目錄有り。

歌、詞、謠、曲、行共三卷、七言律一卷、七言絶句一卷、古詩一卷、五言律一卷。

別集は五七言律、集外は補遺なり。

〔評論〕 其詩艶麗綺靡、華は質に勝る、李商隱と其體を同じくして而して之に亞ぐ、隸事博奥なるは則ち相近し。

〔注解〕

○温飛卿集箋註九卷明曾益注、清顧予成補、顧嗣立校

●樊川詩集四卷補遺一卷集外一卷

別集一卷

〔作者、題名〕 唐の杜牧撰す、牧の傳、題名は樊川文集の條に出づ。

傳來、〔體裁〕 陳直齋の書錄解題は樊川集二十卷外集一卷を載せ、外集は皆詩なりといへり、然るに宋史藝文志に外集一卷の目なし、清の王士禛は謂へらく、舊、杜集止だ二十卷を載す、後、宋版本を見しに彫刻甚だ精にして數卷多しと、劉克莊の後村詩話を案するに樊川續別集三卷有り、十中の八九は皆許渾の詩なりといへり、然らば則ち士禛が數卷多しと云ひしものは許渾の詩に非ざるなきを得んや、今記する所は清の光緒十六年版にして、嘉慶中桐郷の馮集吾の注せしものなり、而して外別兩集は共に集吾の補録に係る、首に嘉慶三年馮集吾、同六年吳錫麟の二序有り、目錄は毎卷の首に冠らし、其體例は五七言雜然として分類する所無し。

〔評論〕 牧才高くして俊邁不羈、其詩は豪にして麗、晚唐中にありては蔚然として家を成す、餘人の及ぶ所に非ず。

〔注解〕 樊川詩注四卷 清馮集 梧撰

④ 丁卯集二卷續集二卷續補一卷

補遺せり、序に據れば信安の祝徳甫といふ者、渾の集全からざるを恨み、百方搜討して鄂州類藁若干卷を得、更に旁搜して此冊を爲せるなりといふ、今案するに文獻通考に丁卯集を載せざれば此序にいふ所のもの事實なる可し、(清)の席啓邁の唐詩百名家集本も亦之に相同じ、而して續集は拾遺と遺篇とあり其目左の如し。

續五言(十韻一律二十三、絶句一)、七言(律十、絶句七)。

拾 五言(律十六)。

續補五言(律十)、七言(律十九、絶句五)。

外遺詩五七律共十四。

〔評論〕 其詩整密を以て勝る、其才は温李に如かざるに似たり、然れども懐古の諸詠に至りては故事を濼砌せずして清空の中、情景頗る融和せるものあり、劉滄と其趨歸を同じくせり。

⑤ 李群玉集三卷後集五卷補遺一卷

〔作者〕 唐の李群玉撰す、群玉字は文山、澧陽の人、大中八年闕に詣り詩を進め、宏文館校書郎を授けらる。

外遺詩一卷

〔作者、題名〕 唐の許渾撰す、渾字は用晦、丹陽の人宰相團師の後なり、大和六年進士に及第し、常塗太平の二令と爲り、大中三年監察御史に遷り、虞部員外郎を歴て陝西二州の刺史に至る、(尙、錄補) 其丁卯集といふは、潤州に丁卯橋あり、渾の別墅の在る所なり、因て集に名づく。

〔傳來、體裁〕 新唐書藝文志に二卷に作り、晁公武の讀書志も亦同じ、陳振孫の書錄解題の注に、蜀本拾遺二卷ありとあり、即ち今の續集是なり、其續補及び外遺詩は、後人の掇拾増益せしものなり、詩凡て五百篇、晁氏の載する所と合す、而して卷數殆ど之に倍す、疑らくは後人の分析する所ならん、明の毛晋の汲古閣本は二卷三百餘頁なり、是必ず闕佚せしものなる可し、全唐詩には其詩を編みて十一卷と爲す、(我國)内閣蔵する所の單行本は上下二卷に分ち首に元の大徳丁未王璠希書の序あり、都て近體詩のみにして、卷上は七律、七絶、卷下は五排、五律、五絶を収む、七律、五律尤も多く、五排は僅に四篇、五絶は五首に過ぎず、末に散體詩一首を附し七絶一首を

(尙、錄補)

〔傳來、體裁〕 今記す所は、唐詩百名家集本にして、首に群玉の進詩表、及び合狐綯の薦狀、鄭處約が行ひし所の制詞を載せ、其表に稱す、歌行、古體七言、今體五言、四通合して三百首と、唐時の一通は一卷のことなり、今本前後補遺合して共に九卷、而して詩は止だ二百八十七首、中正集二百三十五首、後集一百一十三首、補遺七首、又別に授官以後の作あり、是恐らくは後人の編みし所にして、秦進の舊本に非ざるべし、其目左の如し。

歌行古體一卷、今體七言一卷、今體五言一卷。

後集は分類せず補遺は今體七言七首あるのみ又全唐詩には

五古一卷、五七律一卷、五七絶一卷。

を録せり。

〔評論〕 其詩、唐に在りては傑出せるものに非ず、然れども之を宋以下に視るに仍優れる所あり、蓋し一代の風氣自ら争ふ可からざるものありて存するか。

⑥ 韓内翰集一卷香奩集二卷

〔作者、題名〕 唐の韓偓撰す、偓字は致光、或は致堯といふ、京兆萬年の人、龍紀元年、進士の第に登り、昭宗の時兵部侍郎翰林學士に至り、旨を承けて朱全忠に忤ひ、濮州司馬に貶せられ、再び榮懿尉に貶せられ、鄧州司馬に徙り、天祐二年故官に復す、然れども全忠の逆節を惡みて背て入朝せず、地を避け閩に入りて卒す、偓屢々逆臣の鋒に觸れ、死生患難百折するも晩節を渝す、實に唐末の完人たり、(唐書本傳參考) 翰は翰林學士たりしを以て名づく。

〔傳來、體裁〕 唐志に韓偓集一卷、香奩集一卷を載せ、郡齋叢書志には韓偓詩二卷を載せて、香奩は卷數を記せず、書錄解題には香奩集二卷入内廷後詩集一卷別集三卷と稱して、諸家著錄互に同じからず、我見る所は内翰集一卷は大抵皆入廷後の作なるも亦間々然らざる者あり、香奩集三卷と共に其體例は五七言雜然として分別無し香奩集は首に偓の自序あり、毛晋の汲古閣本は詩、詞、賦の三部に分ちて卷數無し、全唐詩は此二集を混じて四卷と爲して集名を別たす。

〔評論〕 其詩、風氣渾厚は前人に及ばずと雖、忠憤の氣時々語外に溢る、晩唐に在りて亦作家の一たり、但々其香奩の集に至りては緣情綺靡、錦秀才子の悦

ぶ所、竟に豔體の一派を開けり。

◎ 唐英歌詩三卷

〔作者、題名〕 唐の吳融撰す、融字は子華、山陰の人、龍紀の初、進士の第に登り、侍御史に至る、累に坐して官を去り、後、左補闕より禮部郎中を経て韓偓と與に翰林學士と爲り、後、戸部侍郎に進み、官に卒す。(唐書本傳參考) 題名詳ならず、或は其號か。

〔體裁〕 兩唐書志、文獻通考、書錄解題、皆著錄せず、四庫全書に始めて著錄す、想ふに明末清初の際綴指せしものならん、凡て上中下の三卷に分ち、其詩體は分類せず、又前後序跋無し、刊行の傳來待て知る可からず。

〔評論〕 其詩音節諧雅、猶中唐の遺風あり、韓偓に較ぶるに稍々勝れり、然れども士氣を以て論すれば融は竟に偓に及ばず。

◎ 白蓮集十卷

〔作者、題名〕 唐の釋齊己撰す、齊己姓は胡、益陽の

◎ 禪月集六卷

〔作者〕 唐の釋貫休撰す、貫休字は德隱、姓を善氏と爲す、蘭谿の人、舊本題して梁人と爲すは誤なり、幼にして圓貞長老を師とし、日に法華經一千字を念し、數月にして畢る、十五六歳に至り詩名益々著る、初め乾寧三年を以て荆師成訥に依り、後、高季興、錢鏐の間を歴遊し、晩に蜀に入りて王建に依る、梁の乾化二年(一五七二)卒す、年八十一。(參考傳)

〔題名、傳來、體裁〕 貫休の集名卷次一ならず、西岳集十卷は乾寧三年荆門に編みて吳融之が序を爲り、又外に南岳集寶月詩一卷有り、(蜀)の乾德五年、其弟子曇域、前後の歌詩文贊を編集し題して禪月集といひ、重ねて之が序を爲れり、(宋)人相傳へて三十卷と稱す、然れども(明)に至りて毛晋之を索むること十年、僅に二十五卷を得たるのみ、而して晋亦補遺一卷を輯め共に之を刊行せり、今記する所は即ち此本なり、(我國)元祿八年之を翻刻せり、首に吳融、曇域、可燦、周伯奮の四序、傳、目錄、尾に毛晋の跋有り、其目左の如し。

樂府古題雜言一卷、古風雜言古意五卷、五言律詩

人、自ら衡岳沙門と號す、聰敏逸倫、圓品の法を納れ、律儀を習學す、而して性吟咏に耽り、氣調清澹なり、梁唐命を改むるや、已乃ち荊州の留後と爲り、尋で節度を受け、龍德三年龍興寺に禮せられ、僧正と作る、然れども其好む所に非ず、後、棲約自ら安んじ、破衲身を擁し、菜麻膝を纏ひ、華山の隱士鄭谷と相酬唱し、未だ曾て容易に諸侯に謁せず、(卷首の傳及び孫光憲の傳參考) 白蓮集とは久しく東林に棲みて勝事を忘れざるを以て惠遠の故事に取りて名づけしなり。

〔傳來、體裁〕 是集は其門人西文の編みしものなり、今記する所は明の汲古閣本を、(我國)元祿八年に翻刻せし唐三高僧詩集の一にして、首に天福三年孫光憲の序贊傳、目錄、尾に毛晋の跋語有り、前の九卷は近體詩、後の一巻は古體詩、而して末に絶句四十二首を附記したるは、蓋し後人の採輯せしものならん、集中五律尤も多く七律之に次げり。

〔評論〕 其詩姚武功の派に沿ふと雖、其合作に當りては風力特に適し、他の釋子の及ぶ所に非ず、宜しく司空圖と相契るべし。

十二卷、七言律詩、七言絶句六卷、七言律詩一卷、補遺一卷。

〔我國〕の傳來は未だ詳ならずと雖、半陶菴に此書を讀めることを載せれば足利氏の末葉には已に渡り居れるを證す可し。

〔評論〕 其詩古體は好みて長短句を用ふ、頗る粗豪に失す、而も落々の氣有り、釋門に在りと雖、毫も筍蔬の氣無し、又往々にして理致を以て勝るものあり。

●浣花草堂十卷補遺一卷

〔作者 題名〕 蜀の韋莊撰す、莊字は端已、杜陵の人、乾寧九年の進士、校書郎を授けられ、補闕に轉ず、後蜀に仕へ吏部侍郎同平章事に至る、(蜀書機全) 莊、杜甫の浣花草堂を得たり、因て其集に名づく。

〔傳來 體裁〕 初め莊の弟藹、莊の稿草を録し、千餘首を得、天復三年之が序を作れり、文獻通考に莊集五卷を載す、毛晋の汲古閣本は乃ち十卷なり、末に補遺一卷あるは、毛晋の増す所なり、又集中全唐詩に録する所より三十餘首多きは、後人の増入せしものなり、(我國)王朝より足利時代を通じて諸家の著

録未だ此書に言及せるもの無きを見れば其渡來は恐らくは汲古閣刊以後に在るべし、今記す所は唐詩百名家集本にして首に藹の序目録有り、収むる所今體詩總て二百四十五首、其目左の如し。

卷一、二は庚子年大駕幸蜀後作、卷三は大駕在蜀巢寇未平洛中寓居作七言、卷四は浙西作、卷五は在婺州寄居作、卷六は自三衢至江西作、卷七、八は甲寅年自江南到京後作、卷九は及第後出關作、卷十は華州在蜀前奉使入蜀作。

〔評論〕 其詩音節頗る高亮、五代に在りては鐵中の錚々たるものなり。

●和靖詩集 一卷附錄一卷

〔作者、題名〕 宋の林逋撰す、逋字は君復、錢塘の人、廬を西湖の小孤山に結び、四面皆梅を種る、刻意詩を爲りて仕進を求めず、性古を好みて世利に趨らず、眞宗其隱を嘉みして粟帛を賜ひ卒して和靖先生と諡す。(宋史隱逸傳參考)

〔傳來、體裁〕 史に稱す逋の其稿を草するや、就れば輒ち棄去して之を録することを欲せず、後、事を好む

は漢の桓帝の朝始めて之を置く、當時圖書東觀に在り、故に其故事を取りて集に名づくるなり。

〔傳來、體裁〕 四庫提要によれば宋史に草堂集十卷に作り、薛田の序に稱す、野先きに草堂集あり世に行はると、蓋し原本なり、又稱す其子闕、新舊三百詩篇を以て混じて之を編み、彙めて七卷と爲し、因て贈典を取り之に命じて鉅鹿東觀集と曰ふと、是に據れば

東觀集は闕の重編せしものにして七卷の本なり、然るに此本凡て詩三百五十九首、題して東觀集といひ、乃ち十卷に作るは驗る可からず、豈序文字を誤りて七と爲すかとあり、此書は(吾國)帝室、内閣、帝國圖書館、公私立諸校、及び陽明文庫、尊經閣、其他の藏書家、子が聞見する所一も之を藏するものなし、東京帝國大學書籍目錄に之を著録せるも實に宋百家詩存中の一巻本にして此本に非ず。(東京帝國大學書籍目錄、往々總集を拆きて別に目錄を立つ、別集と混同し易し)

〔評論〕 其詩仍五代の舊格に沿ひ、林逋の超詣なるに及ぶ能はず、而して胸次俗ならず、故に醜醜凡鄙の氣無し。

●擊壤集 二十三卷附錄一卷

●東觀集 十卷(未見)

〔作者 題名〕 宋の魏野撰す、野字は仲先、草堂居士は其號なり、先世は蜀人、陝州に徙る、聞達を求めず、州の東郊に居り、樂天洞を構へ琴を其中に彈じ歌嘯自得す、出づる時は則ち白驢に跨る、眞宗其名を聞き之を召せとも出でず、天禧三年(一六七九)卒す、年六十、秘書省著作郎を贈る、(宋史隱逸傳參考) 秘書監

者、往々竊に之を記すと、宋志には林逋詩七卷、又二卷を、文獻通考には三卷を著録せるも、其編輯者は詳にせず、其後闕佚多し、(明)に至り沈履德、蒐輯して四卷となし之を刻せり、其目左の如し。

五律一卷、七律一卷、五絶、七絶、共一卷。

附録は和靖の傳及び宋元明諸學者の和靖に關する詩文をあつめたり、卷首には正德十二年洪鐘の序、宋の梅堯臣の序、和靖の像あり、又(我國)眞享三年の刻本は二卷にして卷上は主として五言律を載せ、卷下は七言律を收め、間に五七言絶句を雜ふ。

〔評論〕 其詩修詞雅秀、頗る工を求むるに意有り、而して、澄澹高逸、尙其人と爲りの如し。

〔作者 題名〕 宋の魏野撰す、野字は仲先、草堂居士は其號なり、先世は蜀人、陝州に徙る、聞達を求めず、州の東郊に居り、樂天洞を構へ琴を其中に彈じ歌嘯自得す、出づる時は則ち白驢に跨る、眞宗其名を聞き之を召せとも出でず、天禧三年(一六七九)卒す、年六十、秘書省著作郎を贈る、(宋史隱逸傳參考) 秘書監

〔作者、題名〕 宋 邵雍撰す、雍の傳は皇極經世書の條に出づ、擊壤は高士傳に出づ、上古野老の戲樂なり。

〔傳來、體裁〕 雍歿後毫も佚脱せず、今に傳はれり、予が見たる所の寛文九年の翻刻本は山脇重顯の訓點したるものにして、首に希古の引、次に自序、邢恕の後序、目錄あり、五七言詩相雜はり體を別たす、類を分たす、尾に附録全書一卷を附して語録を記せり。

〔評論〕 其詩寒山拾得に源出す、(寒山子詩集の條參考)然るに寒山拾得の派、唐に行はれず、此集の派、南宋に蔓延し、明代に至り、陳獻章、莊永等、講學を以て自ら名つくる者、大抵之を宗と爲せり。

〔注解〕

○伊川擊壤集十卷明吳翰補注 吳泰增注

●慶湖遺老集九卷拾遺一卷補遺一卷

〔作者、題名〕 宋の賀鑄撰す、鑄字は方回、衛州の人、官奉議郎に至り、致仕して宣和七年(一七八五)卒す、年七十四、鑄、米芾と相往來し、議論を上下し終日止まず、談者傳へて口實と爲す 慶湖は其自號なり。(藝譜、宋史新編參考)

り、上饒の茶山寺に僑居し、自ら茶山居士と號す、棺死し、召されて秘書少監、權禮部侍郎と爲り、致仕して乾道二年(一一八二)卒す、年八十三、文清と諡す。(宋史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 陸游が作りし墓誌に據るに、文集三十卷ありしが、宋志、書錄解題並びに十五卷に作れるを見れば、則ち(宋)末已に其半を佚せしことを知る、(明)より以來亦佚して傳はらず、(清)初永樂大典中より録出し、釐めて八卷と爲し、凡て古近體五百五十八首を得、之を武英殿に刻す、(我國)にて文政十一年之を翻刻せり、首に目錄、四庫提要の文を冠らす、其目左の如し。

五言古詩二卷、七言古詩一卷、五言律詩、五言排律共一卷、七言律詩二卷、五六言絕句共一卷、七言絕句一卷。

〔評論〕 茶山の詩、杜甫、黃庭堅を以て宗と爲す、故に江西詩派中、其格法尤も黃に近く、其會稽禹蹟に居るや、憂國の念禁する能はず、殆ど杜甫の忠愛と等し、目するに、惟一詩人を以てす可からざるなり、然れども其詩は陸游に及ばざること遠し、

〔傳來、體裁〕 此集は初め元祐已卯以前の作を前集八卷と爲し、以後の詩を後集十一卷と爲せり、故に宋の程俱の撰びし墓誌銘には二十卷に作れり 後、兵火を経て後集を佚し、前集九卷のみ存す、是に於て紹熙中、鑄の子孫其逸篇を掇拾したり、其後、澄、(年、代、姓、不明)といふ者拾遺と爲して刻す、即ち現存本にして、予か見し所は其日本寫本なり、首に程俱の撰びし墓誌銘、楊時、阿塔齋の二序、宋史新編本傳、程俱の舊序、澄の序有り、一詩毎に與へし人、作し地、歲月を其題下に注せり。

歌行、賦共一卷、古詩三卷、近體詩一卷、近體詩長句二卷、五言絕句一卷、七言絕句一卷。而して四庫著錄本は拾遺補遺無く、鑄の子楹の跋有りといふ、恐らくは別本なる可し。

〔評論〕 五字八句の詩は鍛鍊古今に出入し、集中の第一たり、其餘も亦大抵名家の作たるに愧ぢず。

●茶山集八卷

〔作者、題名〕 宋の曾幾撰す、幾字は吉甫、贛縣の人、高宗の朝、江西浙西提刑に歴官し、秦檜に忤ひ位を去

●劔南詩藁八十五卷

〔作者、題名〕 宋の陸游撰す、游の傳は渭南文集の條に出づ、游蜀に留まるること十年、其風土を樂めり、故に一生作る所の詩目一總ぶるに劔南を以てす、蜀は劔山の南に在り故にいふ。

〔傳來、體裁〕 游の子、子虛の跋に據るに、初め游の手定する所を劔南詩藁といへり、後、子虛が別に編次して四十卷を爲り之を劔南詩續藁と名づけ前藁を通じて八十五卷を成し、其九江に守たりしとき、之を郡齋に刊し、通じて劔南詩藁と云へり、而るに又淳熙十四年、游の門人鄭師尹の序には、其詩は眉山の蘇林が收拾せし所にして、師尹之を編次すといひ、子虚の跋と同じからず、蓋し師尹の編する所、先づ別に一本ありて、子虚其舊序を存し、此集に冠らせしならんか、我見る所は(明)の毛晋が宋版を翻刻せるものにして首に劉後村の序、並に子虚の跋あり、各卷の首に目錄あり、古今體雜然として類目を分たす。

〔評論〕 其詩法は曾幾、呂居仁より傳はる、二人皆江西派なり、然るに游の詩、浙新刻露、出すに間潤を以

てす、實に能く自ら一宗を開き、黄陳の舊格を襲はず、間々豪邁遒勁の語あり、其篇什の豊富に至りては殆ど古今に超絶す、實に南宋詩人の冠冕たり。

〔参考〕

- 放翁詩選前集十卷元羅後集八卷附錄一卷明無名氏選
- 放翁詩鈔四卷清周麟編
- 劔南詩鈔七卷楊大綱編

●范石湖詩集三十五卷

〔作者、題名〕 宋の范成大撰す、成大の傳は吳船錄の條に出づ、石湖は其號なり。

〔傳來、體裁〕 石湖詩集三十三卷、凡て古今體一千九百十六首、范文程の手づから編定し、(宋)の嘉泰の間、其子莘等刻して世に行ふ所なり、後、詩文を合して百三十卷と爲したり、宋の陳振孫が書錄解題、宋史藝文志、並に成大の集一百三十六卷を載するは即ち此本なる可し(卷數の合せざるは)(明)代會て之を重刻せしが、流傳頗る少し、又活板本あれども殘闕殊に甚し、宋志には、此外に又石湖別集二十九卷、石湖居士文集ありて卷數を著さず、今之を考ふるに由なし、(清)に至り康熙二十七年顧嗣立等、特に詩集を抜きて、賦楚

辭一卷樂府一卷を附し、三十五卷と爲し之を校刻す、賦のもと詩の前に在りしが、嗣立等詩後に附したるは題名に乖かざらんが爲なり、首に紹熙五年楊萬里、淳熙三年陸游の二序、宋史本傳、目次、依園主人の小引、後に嘉泰三年莘茲の跋あり、其詩を編するや體を分たず、名目を立てず、編年以て次を爲せり。

●白石道人詩集一卷卷末一卷

〔作者、題名〕 宋の姜夔撰す、夔の傳と題名とは白石道人詩說の條に出づ。

〔傳來、體裁〕 宋史藝文志に白石叢書十卷を載せ、陳振孫書錄解題に白石道人集三卷を録す、然るに現存本は止だ一卷一百數十首、殆ど完本に非ざる可し、今記す所は江湖小集本にして、首に自序二篇有り、其體は分類せず、卷末に補遺詩說、附錄、諸賢酬贈詩、續

附を附す、補遺は武林舊事より六首を、咸淳臨安志より四首を、姑蘇志より一首を、研北雜志より一首を、廣陵詩局刊本より二首を、散陶集より一首を、客亭齋附錄より一首を、附錄は楊萬里、周文璞等の酬贈詩十一首を載せ、續附は蘇洞の冷然齋集より十一首を補録せるものにして、乾隆五十年鮑廷博の續錄に係る。

〔評論〕 其詩運思精密にして風格高秀なり、其餘夜舟行の十絶、誠齋評して曰く、裁雲縫月の妙思、敲金戛玉の奇聲有りと、蓋し精思獨造を以て宗と爲し、南宋中葉に於ては傑出せるものたり。

●滄浪詩集二卷

〔作者、題名〕 宋の嚴羽撰す、羽字は儀卿、一字は丹邱、邵武の人、自ら號して滄浪逋客といふ、嚴參、嚴仁と名を齊くし、世之を三嚴と號せり。(尚友錄)

〔傳來、體裁〕 (明)の時、趙郡の尹嗣忠が校正し、正徳十五年、吳郡の都穆か序して世に行へるものは題して滄浪吟卷といひ二卷あり、其首卷は滄浪詩話にして次卷は詩なり、後陳士元は詩のみを著録し分ちて

二卷と爲す、此本は(我國)安永五年、十時秀長、鳥山長民、川合襄平三人が陳士元本を考訂重刊せしものなり、其目左の如し。

楚詞、操、吟、引、謠、歌、行、詞、古詩共一卷、五言八句、七言八句、五言絶句、七言絶句共一卷

●亞愚江浙紀行詩七卷

〔作者〕 宋の釋紹嵩撰す、亞愚と號す、廬陵の人、(卷首)

〔題名、體裁〕 自序に云ふ、紹定二年の秋、長沙より發行し、江浙を訪遊す、村行旅宿、物に感じ意を寓して作る所三百七十有六首を得、編して七卷と爲し題して江浙紀行と曰ふと、此本は嘉熙元年の刊本に據りて騰寫せるものにして、首に其自序、楊夢信の二絶、楊麟の一絶、陳教授の一絶を冠す凡て五言律三卷、七言律一卷、七言絶三卷。

あり、末に紹定四年陳應申の跋あり、此書は收めて宋の陳起が江湖群賢小集中に在り。

〔評論〕 其詩、格調は希畫、惠崇等の九僧に及ばず、

平雅は道潛に如かず、適肆は惠洪に當らず、然れども亦宋代桑林の作家たり。

◎ 汝陽端平詩集四卷

〔作者、題名〕 宋の周弼撰す、弼の傳は三體唐詩の條に出づ、汝陽は地名、端平は年號なり。

〔傳來、體裁〕 寶祐五年李韓の序に稱す、弼の端平集十二卷世に行はれ、其名は江湖に振ひ、人皆争ひて市に求む、但々巻帙中に晚學未だ曉る能はざるものあり、恐らくは不行の弊あらん、茲に其坦然なるものを摘み、集外得る所の二百餘首を兼ね、目して端平詩集と曰ふと、此本は即ち其李韓の編みて、臨安府棚地大街陳解元書籍舖の印行せるものを騰寫せしものなり。

古體歌詩一卷、五言律一卷、七言律一卷、五七絶句一卷。

卷末には補遺小傳を附す、其何人の録せる所なるを知らず、此書は江湖群賢小集中に收む。

〔評論〕 弼自ら唐詩を抄録し、備さに箇中の辛苦を知る、故に其詩も亦頗る三體詩の氣味に近し、風骨氣魄に乏しと雖、而も神韻あり。

◎ 晞髮遺集二卷遺集補一卷附天地間集一卷

晞髮遺集二卷

〔作者、題名〕 宋の謝翱撰す、翱字は臯羽、一字は臯父、長溪の人、後浦城に徙る、咸淳中進士に試みられて第せず、後、文天祥、府を延平署に開く時、翱其咨議參軍と爲り、天祥の兵敗れてより、地を浙東に避け、元貞元年(一九五五)杭州に卒す、年四十七、翱側儻大節あり、平生屈平を慕ひ、興を遠遊に托す、因て晞髮子と號す、其著す所、詩、雜文、唐補傳、南史贊、楚詞芳草圖譜、宋鏡歌、鼓吹曲、騎吹曲、睦州山水人物古蹟記、浦陽先民傳、東坡夜雨句圖等ありしが、今は唐補傳以下傳はらず、天地間集は之を杜甫が詩卷長留天地間の句に取れるなる可し。(年譜參考)

〔傳來、體裁〕 (明)の宏治中、儲曜の刻する所有り、又萬曆中歙縣の張氏の重刻本有り、此本は(清)の嘉慶二十一年陳珪、祝昌泰の校刊本にして、首に晞髮近藋小引、目錄有り、卷上は近藋雜詩、卷下は金華遊錄、補錄一卷は續琴操哀江南四首、天地間集一卷は文天祥

◎ 眞山民集一卷

〔作者、題名〕 舊本題して宋の眞山民撰すと爲す、然るに其人眞跡銷聲して、名氏詳ならず、今又舊本に仍りて眞山民集と題す。

〔傳來、體裁〕 四庫提要に稱す、宋史藝文志、焦竑の經籍志、俱に載せず、江湖小集始めて之を收む、知不足齋叢書本は、他本に較ぶるに稍々完善たり、然れども皆近體にして古詩無し、宋末江湖の詩人、皆意を古詩に留めず、山民亦其風氣に染みたりと、然れども(我國)文化九年泉澤充が刊本は、凡て一百五十九首にして、知不足齋本に較ぶるに、五十一首多く、五言古詩十首、雜言一首を收めたり、而して卷末に附するに補遺九首を以てす、然れども猶元詩の要中に録する陳雲岫愛騎驢の七言古詩一首、及び元の董師謙の序に所謂泊舟山間行醉和尙等の篇を闕けり。

◎ 金淵集六卷

〔作者、題名〕 元の仇遠撰す、遠字は仁近、一に仁父といふ、錢塘の人、山村民は其自號なり、宋の咸淳の間、詩を以て白珽と名を齊くし號して仇白といふ、元の至元中溧陽教授と爲り後湖山に優游し以て終ふ、(四庫提要)金淵は地名に本づけるならん。

〔傳來、體裁〕 遠、初、作りし所の一編を録し戴表元等之に序し、後、又金淵集を成し、吾邱衍之に序す、(明)に至り二集共に佚す、(清)の乾隆帝の時、四庫館員に命じ、永樂大典中より録出して、武英殿に刻す、即ち現行本なり、其目左の如し。
四言古詩、五言古詩、附六言一首共一卷、七言古詩一卷、五言律詩一卷、七言律詩二卷、五言絶

句一卷。

凡て四百九十七首あり。

〔評論〕 仇遠宋末に生れ、其詩高雅拔俗、江湖の派に染まず、其後張翥、張羽、詩を以て一代に鳴る者、皆其門より出づ。

楊仲宏詩集八卷

〔作者、題名〕 元の楊載撰す、載字は仲宏、浦城の人、後杭州に徙る、年四十にして仕へず、戸部賈國英數々朝に薦め、布衣を以て翰林國史院編修と爲り、延祐二年進士に登り、承務郎饒州路同知浮梁州知事を授かり、寧國路總管府推官に終る、元代の詩人は、世に虞集、范梈、揭傒斯及び載を推して四家と稱せり。(元史儒學傳參考)

〔體裁、傳來〕 (我國)延寶八年翻刻本あり、首に致和元年范梈の序有り、

五言古一卷、五言律三卷、七言古二卷、七言律二卷、五七言絶句一卷。

を載す、范梈の序に稱す、仲宏、子あり尙幼なるを以て、其殘藁流落して、未だ輯次する者あらず、友

人杜伯原、武夷より僕に命じて曰く、將に其平生得る所の詩に就きて諸を山中に刻せよ云々と、以て此書は范梈の編せるものたるを知る可し。
〔評論〕 其五言古は頗る唐の李白に尸祝する所あり、五律は王維、岑參に法るものあり、大抵整にして健なり、元史に稱す、其文章は氣を以て主と爲す、而して詩に於ては尤も法度有り、其詩出でより、一に宋末の陋を洗へりと、固より溢美の言に非ず。

范德機詩集七卷

〔作者、題名〕 元の范梈撰す、梈字は亨父、一に德機といふ、清江の人、初め左衛尉授と爲り、後翰林院編修官に遷り、出でて嶺海廉訪使照磨と爲り、諸官に歴仕し、天曆二年湖南嶺北道廉訪使經歷を授けらる、母の老たるを以て未だ赴かず、明年母を喪ひ、毀を以て竟に卒す、時に至順元年(一九九〇)、年五十九なり、著す所燕然藁、東方藁、豫章藁、候官藁、江夏藁、百丈藁あり、(元史本傳參考) 德機は即ち其字なり。

〔傳來、體裁〕 (元)に在りて范梈の詩を傳ふる者、廬陵に楊中有り、郡人に傳若金有り、傳若金は其神を

得、楊中は其骨を得、俱に盛名有り、此集は即ち楊中の始めて刻せしものなり、今記する所は(明)の汲古閣本元四大家詩の一にして、首に揭傒斯の序、目錄、尾に毛晋の跋語有り、其目左の如し。

五言古二卷、五言絶、五言律共一卷、七言古二卷、七言絶一卷、七言律一卷。

我國)にては延文六年、之を刊行せり。

〔評論〕 其詩唐の杜甫に步趨し、長を刻峭に見る、揭傒斯の序に稱す、秋空雲行き晴雷雨を卷き、縦横變化して出入朕無きが如し、又空山の道者殺を辟け仙を學び瘦骨峻嶒として神氣自若なるが如し、又豪鷹野を掠め獨鶴群に叫びて四顧人無く一碧萬里の如しと、寔に梈の詩を形容して餘蘊無し。

揭曼碩詩集三卷

〔作者、題名〕 元の揭傒斯撰す、傒斯字は曼碩、龍興富州の人、延祐の初、薦を以て國史院編修を授けられ、後、翰林侍講學士に至る、至正四年(二〇〇四)官に卒す、年七十一。(元史本傳參考)

〔傳來、體裁〕 顧嗣立の元詩選に傒斯の詩を載せ題し

て秋宜といへるも固より余集に非ず、(明)焦竑の國史經籍志に傒斯の集一卷を載せ、四庫全書に文安集十四卷を録し、詩四卷、續集二卷、制表書序記碑誌雜文八卷ありといふ、共に未だ之を見ず、今記する所は門人樊理溥化の校録せるものにして、首に序目無く、其體亦分類せず。

〔評論〕 其詩神骨秀削寄託自ら深く、嫣紅姹紫、徒に姿媚に於る者と比す可きに非ず。

雁門集六卷

〔作者、題名〕 元の薩都拉撰す、都拉字は天錫、直齊と號す、其祖は薩拉布哈といひ、父を傲拉齊といふ、世勳を以て雲代を鎮め、雁門に居る、故に世稱して雁門の薩都拉といふ、實は蒙古の人なり、始めて進士を以て官に入り、京口録事長と爲り、繼で燕南架閣官より閩海廉訪知事に遷り、河北廉訪經歷に進む。(自序參考)

〔傳來、體裁〕 元史藝文志に雁門集八卷集外詩一卷を載す、此本は康熙十九年の重梓本にして、首に成化二十一年劉廷振、至元三年干文傳の二序、及び成化

二十年張習、成化二十一年趙蘭、弘治十六年李舉、天順三年諸孫琦、康熙十九年八世孫希亮等の跋あり。樂府一卷、五言古體一卷、七言古體一卷、五言近體一卷、七言近體一卷、絶句一卷。

末に七言近體三首七言絶句一首を附録す、又別に明の毛晋の汲古閣本、薩天錫詩集三卷有り世に行はる。

〔評論〕 其詩清新俊逸にして而も滑調に入らず、歌行近體並に佳なり、但々才力薄きのみ、故に元好問虞集と並行する能はず、然れども亦元代名家の一席を占む可し、虞集曰く薩天錫の詩最も情に長じて流麗清婉と、此言之を得たり。

〔注解、参考〕 ○薩天錫妙選稿一卷附録一卷薩部 拉撰 ○雁門集十四卷附卷、倡和録、別録、目各一卷清隆館 光撰

● 蛻菴詩集四卷

〔作者、題名〕 元の張翥撰す、翥字は仲舉、晋寧の人、蛻菴は其號なり、至元の初、國子助教と爲り、上都に分教す、尋で退きて淮東に居る、宋遠金三史を修むるに會ひ、起ちて翰林國史院編修より翰林學士に累遷す、後致仕して河南行省平章政事を加へらる。

〔元史傳本〕

〔傳來、體裁〕 元史に稱す、翥の遺藁傳はらず、傳はる者律詩樂府僅に三卷有り、此集は釋北山の編集せるものにして、首に釋蒲菴、至正二十六年余猶の二序後に洪武十年釋宗泐の跋有り。

卷一は五古、五長律、五律、卷二は七古、卷三四は七律、七絶。を收む、清の朱彝尊が所藏本は五卷ありきといふ、吾未だ之を見ず。

〔評論〕 其心性の學は李存に受け、聲律の學は仇遠に受け、後講學成す無く、卒に詩を以て著る、王士禛曰く、蛻菴は元末の大家古今詩皆法度有り。

● 楊鐵崖詩集三種 二十六卷

〔作者、題名〕 元の楊維禎撰す、維禎字は廉夫、諸暨の人、生平氣度高曠、常に華陽巾を載き羽衣を披て山水の間に周遊し、聲樂を以て自ら隨ふ、早歲吳山鐵冶嶺に屏居して萬卷樓を築き、鐵崖を以て自ら號し、又鐵笛を湘江に得、鐵笛子と號す、其文辭秦漢に非ざれば學はず、晩年に至り天下の才俊、贊を投

じて文を求むる者虛日無し、著す所四書一貫録、五經論鍵、春秋透天關、禮經約、歷代史鉞、瓊臺曲、洞庭雲間雜吟等有り。(元史類編文) (翰傳參考)

〔傳來、體裁〕 此本は(清)の光緒十四年樓氏崇德堂補刻本にして、首に光緒十四年許應の序、鐵崖の像及贊、次に明史、貝瓊、朱彝尊の選びし三本傳、周忱、楊敷、魏驥の三跋、樓斐然の鐵崖先生里居致有り、三種とは、樂府註十卷、咏史註八卷、逸編註八卷をいふ、樂府は其門人吳復編し、樓下纏註し、首に乾隆三十三年樓下瀾至正六年張天雨、至正六年吳復の三序あり、咏史逸編亦樓下瀾の註にして、乾隆三十九年同人の序あり、末に同邑葛氏の輯めし跋語十三則及び樓斐然の跋あり、而して此本亦各卷の首に其目次を示す。

〔評論〕 其詩、五絶最も勝る、元一代に在りて殆ど能く之と與に京するなし、樂府も亦瑰奇豪麗、頗る唐の李賀に近し、盛唐の典型に非すと雖、要するに元末に在りては蔚として一大宗を爲せり、蓋し元季の詩格、織靡振はず、歌行多くは温庭筠の體に效ひ、柔媚旖旎、全く小詞に類す、維禎一世の雄才を以て其弊に乘じ、力めて之を根柢に矯めんと欲す、故に縦横排募自ら町畦を闢けり。

● 大全集十八卷

〔作者、題名〕 明の高啓撰す、啟字は季迪、長州の人、元末張士誠の亂を避け、松江の青邱に遁居し、自ら青邱子と號す、洪武の初、召されて元史を修め、翰林國史院編修と爲り、官戸部侍郎に至り、後、事に坐して誅せらる、年僅に三十有九、實に洪武七年(二〇三四)なり、其著す所、吹臺集、江館集、鳳臺集、婁江吟稿、姑蘇雜詠、缶鳴集等あり。(明史文苑傳參考) 此集は啓の總集なるを以て名づく。

〔傳來、體裁〕 高啓没して子無し、其姪の立といふもの永樂元年に遺稿を鏤梓し、景泰の初、徐唐又遺佚を掇拾し一編と爲し、題して大全集といふ、此本は清の光緒十四年版にして、明刻に倣ひしものなり、首に洪武三十四年李志光、景泰元年劉昌の二序目錄あり、其目は左の如し。

古樂府一卷、樂府、琴操辭、三言、四言共一卷、五言古五卷、七言古三卷、長短句體一卷、五言律一卷、五言律、排律一卷、聯句、六七言律共二卷、五言絶句一卷、七言絶句二卷。

〔評論〕 高啓天才高逸、其古調を摹仿するに至らざる無し。漢魏に擬すれば漢魏に似、六朝に擬すれば六朝に似、唐宋に擬すれば唐宋に似、凡そ古人の長とする所之を兼ねざる無く、元末纖穠縹麗の習を振ひて之を古調に返し、其中自ら精神意象の存する有り、其蒼澗は劉基に如かずと雖、天分は則ち之に過く、明初詩人の大宗なり。

〔註解〕

○高青邱詩集輯註十八卷、遺詩一卷、扣舷集一卷、鳧藻集五卷清の増撰

眉菴集 十二卷補遺一卷

〔作者、題名〕 明の揚基撰す、其字は孟載、吳中の人、眉菴は其號なり、始め張士誠の記室と爲り、洪武の初、滎陽縣知縣と爲り、山西副史より按察使に進み、讒に遇ひて官を奪はれ、謫せられて輪作に従ひ遂に工所に卒す、高啓、張羽、徐賁と明初の四傑と稱す。

〔明史文苑傳參考〕

〔體裁〕 是編は明の成化二十一年重刻本にして、五言古體一卷、七言古體二卷、歌行一卷、長短句

體一卷、五言律二卷、七言律二卷、五言絕句一卷、七言絕句一卷、詞曲一卷。
後に成化二十一年張習志の後志有り。
〔評論〕 其詩頗る元季纖穠の習に沿ひ、或は時に小詞に類す、故に藝苑卮言に其情至の語風雅地を掃ふと謂へり、然れども五言體は卓然として正聲、近體亦多く俊逸、青邱に駕する能はずと雖、要するに餘子の及ぶ所に非ず。

靜居集 四卷

〔作者、題名〕 明の張羽撰す、羽字は來儀、後更に附鳳と字す、本潯陽の人、後吳興に卜居す、鄉黨を領り、安定書院山長と爲り、洪武四年太常司丞を授かずして召し還さる、羽自ら免れざるを知り、龍江に投じて死す明史文苑傳參考、靜居は王逸の九思に本づく。

〔體裁〕 此書は(明)の高安の陳邦瞻、新都の汪汝淳の校訂せるものなり、其目左の如し。

五言牀二卷、七言古牀、五言律詩、五言排律、七律共一卷、七言律、五言絕句、六言律絕、七言絕句

共一卷。

〔評論〕 文苑傳に稱す、其文章精潔法有り尤も詩に長すと、然れども其四傑の列に加はりしは詩を以てし文に非ず、律詩は平熟を免れず、五言古體は低昂婉轉、殊に瀏亮の作有り。

北郭集 六卷

〔作者、題名〕 明の徐賁撰す、賁字は幼文、其先は蜀人、後、平江に徙る、賁詩に工みにして又書畫を善くす、始め張士誠に辟されて屬官と爲り、洪武七年京に至り、九年晋黨に使し、廉訪する所あり、還るに及び其藁を檢すれば、紀行詩數首のみ、太祖大に悦び給事中を授け、歷官して河南左布政使に至り、後事に坐して獄に下り瘦死す明史文苑傳參考、北郭とは其嘗て吳に客たりしとき、常に城北の齊門に居りし故、かく名けしなり。

〔傳來、體裁〕 始め吳人張習が編次せしものありといふも傳本少し、後萬曆間陳邦瞻、汪汝淳校訂重刻す、吾見る所は即ち其寫本なり、其目左の如し。

卷一は樂府、五言古體、卷二は五言古體、卷三は

七言古體、五言排律、卷四は五言律、卷五は七言律、卷六は五六七言絕句。
〔評論〕 其才氣は高啓、揚基、張羽に及ばずと雖、法律謹嚴、字句熨貼、長篇短什、並びに首尾溫麗、三家に於て別に一格を爲し、之と雁行して愧ぢ無きものなり。

徐迪功詩四卷附錄一卷外集三卷

〔作者、題名〕 明の徐禎卿撰す、禎卿の傳は談藝錄の條に出づ。

〔傳來、體裁〕 初め禎卿自ら其詩を定め、迪功集六卷を撰び、談藝錄と共に李夢陽に寄す、夢陽之に序して豫章に刻せり、後、皇甫湜、禎卿の詩百餘篇を得、其半を削りて外集と爲し亦之に序せり、傳光宅は詩百五十二首、文十二首を輯め、四卷と爲し、六卷の後に附せり、王士禎は其著池北偶談に徐昌穀自ら迪功集を選びて三百餘首に止むといへり、然るに四庫全書に著録したる迪功集六卷附談藝錄一卷本、及び今記する所の弘正四傑詩集本、竝に唯一百八十二首あるのみ、士禎の見し所のものと同じからず、(源洋三十六種の迪功詩選は)

來鳧、司勳、北征、南署、赴京、浩歌、亭安、雅齋等の諸集ありしが晩年自ら刪削して詩文集凡て六十卷と爲す、今記する所は明の萬曆版にして首に萬曆三年の顧存仁、范惟一、黃文祿の三家の序、萬曆二年游の自序有り、其自序に據れば、詩三十三卷、文二十七卷、總べて六十卷とあれども、此集は其詩集三十三卷のみ、刊せし者にして、毎卷の終りに其作りし歳次と其男琳校、楸校、姪盤校等の字様あり、其目左の如し。

賦一卷、四言騷體一卷、五古六卷、樂府二卷、七古三卷、七言歌行一卷、五律八卷、五排、七排共二卷、七律六卷、五絶六絶共一卷、七絶二卷。

〔評論〕 其詩、始は關洛の音たり、一變して楚音と爲り、又一變して江左の音と爲り、又一變して燕趙の音と爲り、又一變して蜀音と爲りしこと、朱彝尊の靜志居詩話にいへり、其古體は三謝に出で、近體は中唐に本づく、深湛の思無しと雖、雅飭雍容、風標自ら異なり、明の中葉に在りて第二流の首に居るを失はず。

●瑤石山人稿十六卷

〔作者、題名〕 明の黎民表撰す、民表字は維敬、瑤石山人と號す、從化の人、嘉靖十三年の舉人、翰林院孔目を授けられ、吏部司務に遷る、執政に其能を知られ累進して參議に至る。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 其詩初め鎮江の鍾太字之を刻し、後、民表の子吏部郎君華此集を哀刻せり、(清)初に至り流傳罕なり、劉三山、其影抄本を藏し後黃石溪の有に歸し、伍元微之を校訂して梓行せり、首に萬曆十六年陳文燭の序、目錄有り。

卷一は賦、五古、卷二は五古、卷三四は七古、卷五より八は五律、卷九は五排、卷十より十四は七律、七排、卷十五は五六絶、卷十六は七絶。

〔評論〕 其詩は風骨豐重、綺靡塗飾の習無し、其字句は李夢陽に得るもの少からず、大倉歷下の派と源を同じして稍々異なり、故に、王道行、石星、朱多燧、趙用賢と名を齊くして南園後五子と稱せらる、然れども終に四人の及ぶ可き所に非ず。

●區太史詩集二十七卷

〔作者、題名〕 明の區大相撰す、大相字は用編、高明の人、萬曆十七年の進士、庶吉士より簡討を歴て贊書中允に至る、(明詩歸傳參考)太史は官名なり。

〔傳來、體裁〕 大相、前使集、後使集、海目詩選有り、世に行はる、此集は即ち其彙刻本なり、首に前使集小序、後使集小自叙、崇禎十六年陳子壯の序、目錄有り。

賦、四言詩、銘、贊共一卷、騷體、歌詩共一卷、樂府、雜體共一卷、五古五卷、七古二卷、五律八卷、五排二卷、六言一卷、七律三卷、七排一卷、五絶一卷、七絶一卷。

〔評論〕 翁山謂へり、嶺南張曲公が正始の音を倡へてより、明三百年詩の美なるもの海目最たり、秦泉、蘭汀、崙山の上に在りと、又靜志居詩話に云く、海目持律既に嚴錡、詞必ず鍊れり、其五言近體は上初唐四傑より下大曆十子に至るまで、仿はざる所無く、亦合はざる所無しと、然るに錢謙益の列朝詩集には大相の詩一も録載しあるを見ず、蓋し先生に於て何ぞ損せんやと。今之を讀むに雄勁警拔を少くと

雖、而も頗る能く渾熟、信に當時の一家たるに愧ぢざるなり。

〔附記〕 銘、贊二體は諸家大抵之を文集中に編入する、以て概之を文集部に編入せり、然れども元來整句押韻のものなれば詩中の一體と爲すも妨げざるに似たり、況んや此集已に題して詩集といふ、又況んや區大相の長する所に詩に在るをや、故に今特に此に收む。

●譚子詩歸十卷

〔作者、題名〕 明の譚元春撰す、元春字は友夏、景陵の人、天啓七年の鄉試第一に擧げられ、同里の鍾惺と與に唐人の詩を評選し、唐詩歸を爲り世に行はる、其著す所此外嶽歸堂集あり。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 明史藝文志には元春の嶽歸堂集十卷を載せ、蘇州の張澤、元春の詩文を合刻して譚友夏合集廿三卷を編み、卷一より卷五までは嶽歸堂、卷六より卷十四までは鶴澗文章、卷十五より卷二十三までは嶽歸堂已刻の詩選を録せり、予未だ之を見ず、今記す所は其詩集にして題して譚子詩歸といふ、首に

蔡復一、鍾惺、朱之臣、李維楨の四序、元春の自序、自題、目錄あり。

四言、樂府、五言古、七言古、五言律、五言排律、七言律、五言絕句、六言、七言絕句、各二卷。

〔評論〕 友夏は鍾惺と名を齊くして景陵派の一體を成せり、然れども其才力は鍾に一籌を輸し、學殖も亦頗る淺し、筆力を見る可きもの絶て鮮し、其宗とする所清真幽峭に在りと雖、清真は却て俚率に陥り、幽峭は概ね僻澁に流る、要するに旁徑を免る能はざるなり。

● 亭林詩集 五卷

〔作者、題名〕 清の顧炎武撰す、炎武の傳は日知錄の條に出づ、亭林は其號なり。

〔體裁〕 此集は顧亭林遺書中に在るものにして、首に目錄あり、其體は分類せず。

〔評論〕 炎武は力を學に專にし、自ら詩人を以て居らず、而して其一たび發して韵語と爲れば、則ち詞必ず已れより出で、絶えて前人を踏襲せずして、自ら矩度に合す、遒勁の氣、蒼澁の質、專家の及ぶ可からざるものあり、沈德潛の之を評して以て第二流の人と作らずといへるは當れり。

● 獨漉堂詩集 十六卷

〔作者、題名〕 清の陳恭尹撰す、恭尹字は元孝、順德の人、邦彦の子なり、十餘歳已に詩名あり、又書法に工なり、羅浮に隠れ終身仕へず、自ら羅浮布衣と稱す、獨漉は之を古樂府に取る、蓋し其堂號なり、康熙三十八年(一三三九)卒す、年七十一、著す所、

此集の外文集十五卷、續編一卷あり、嶺南三家の人なり。
〔體裁〕 恭尹、初め康熙十三年に其詩文一編を刻したることあり、此集は其男の贛編次し、孫の世和校字し、道光五年來孫量平刊版す、首に獨漉子の像、彭士望、趙執信、潘鼎珪の三序、初刻自序、及び目錄あり、分ちて

初游集、增江前集、中游集共一卷、增江後集二卷、江村集一卷、小禺集四卷、唱和集五卷、咏物集一卷、詩餘一卷、壽言集一卷。
と爲し每集並に體を分たす。

〔評論〕 其詩、天才雄俊、激昂沈着、郷人元好問の遺風有り、最も王士禛に知らる、然れども詩風は頗る同じからず、綜べて之を論すれば、竟に子禛の上立つ能はざるなり。

● 精華錄 十二卷

〔作者、題名〕 清の王士禛撰す、士禛字は貽上、阮亭と號し、又別に自ら漁洋山人と號す、世々新城の右族たり、順治十五年の進士、揚州推官を授けられ、康熙十七年侍讀に進み、刑部尙書に遷る、四十三年事に坐し官を罷められ、後復職す、康熙五十年(一三三七一)里に卒す、年七十有八、文簡と諡す、士禛詩を以て、海内に鳴り、一代の正宗と稱せらる、其著す所、帶經堂集、漁洋詩話、蜀道驛程記、皇華紀聞、粵行三志、池北偶談、隴蜀餘聞、秦蜀驛程後記、古懽錄、居易錄、浯溪考、唐賢三昧集、唐人萬首絶句選、唐詩十選、古詩選等あり、(年譜、國朝先正類考)此集は其著す所の諸集の精華なる者を摘録したるものなり故に名づく。

〔傳來、體裁〕 相傳ふ此集は士禛自ら手定せし所なり

● 蓮洋集 二十卷

〔作者、題名〕 清の吳雯撰す、雯字は天章、山西蒲州の人、康熙十八年博學宏詞の科に薦められたれども罷め歸る、是より先、王漁洋と相唱和して詩文大に揚れり、康熙四十三年(一三六四)卒す、年六十一、

(感齋集、年譜、國朝先正類考)華岳山の下蓮洋村有り、雯之を樂む、故に以て其詩に名づく。(附錄、參考)

〔傳來、體裁〕 天章没後、王漁洋手定して此集を成す、今記する所は乾隆三十九年版にして、首に翁方綱、曹學閔、張體乾の三家序、王、湯、陳の三原序、墓誌、傳、年譜、附錄、總目有り、古今體詩十九卷、補遺聯句一卷、凡て二千零六十七首あり、其附録には詩話二十三事、詩三十二首、詞一首を載す、而して皆當時諸宿の作に係る。

と、其子啓泂の跋語に門人等此録を爲ると稱へしは、蓋し託詞ならん、按するに、士禎の詩、初刻に落棧堂集、阮亭詩、過江、入吳、白門前後諸集有りしが、後、刪り併せて漁洋前集と爲す、而して諸集は皆佚せり、嗣ぎて漁洋續集、蠶尾集、續集、後集、南海集、雍益集の諸刻有りしが、又之を摘録し合して一帙と爲し此集を成し、なり、今記す所は、首に像贊目錄有り、凡て十二卷、四庫著録本より二卷多し、而して毎卷收むる所、皆古今體詩にして、順治十三年に始まり、康熙三十九年に至る、年次を以て編す其目左の如し。

卷一より四は漁洋集及續集、卷五は蜀道集、卷六は蜀道集、漁洋續集、卷七より九は漁洋續集、卷十は漁洋續集、蠶尾集、南海集、卷十一は南海集、卷十二は蠶尾集、雍益集、蠶尾續集。

〔評論〕 其詩神韻を以て宗旨とす、其辭を措く新秀清雅、古體は唐の王維孟浩然を宗とし、上謝眺に及び、近體は多く錢起に仿ひ上李頎に及ぶ、止々律は杜甫の忠厚纏綿沈鬱頓挫を摹せるも而も氣魄乏しきを免れず、七古は其長する所に非ず、同時朱錫鬯と名を齊くす、各々長短有りと雖、大都士禎を以て優と爲す、蓋し清朝詩家の一大宗たり。

〔注〕 蓋し清朝詩家の一大宗たり。

○漁洋山人精華錄纂十卷目二卷自撰年譜二卷
○漁洋山人精華錄箋註十二卷補一卷年譜一卷

敬業堂集 五十卷

〔作者、題名〕 清の查慎行撰す、慎行初名は嗣璉、字は夏重、他山と號せしが、後名を慎行、字を悔餘、號を初白、查田と改む、浙江海寧の人、康熙四十二年の進士、官編修に至り、雍正五年(三三八七)卒す、年七十有八、著す所此集の外、周易玩辭集解、經史正訛、江南通志等有り、(國朝先正事畧四) 敬業は其堂號なり。
〔體裁〕 此集は其生平遊歷せし所の詩を哀めたるものにして、各、一集を爲せり其目左の如し。

慎旃集三卷、過歸集、西江集共一卷、臨淮集一卷、假館集二卷、人海集、春帆集、獨吟集各一卷、竿木集、顧壁集、共一卷、橋社集、勸酬集、溢城集、雲霧窟集各一卷、客船集、蠶尾集共一卷、穴寄集一卷、白蘋集、秋鳴集共一卷、敬喪集、酒人集共一卷、游梁集、皖上集、中江集各一卷、得樹樓集、近遊集

六瑩堂集 九卷二集八卷

〔作者、題名〕 清の梁佩蘭撰す、佩蘭字は芝五、廣東南海の人、藥亭と號す、康熙二十七年の進士、庶吉士に選ばる、後、名山を周遊し海内の諸名宿と相酬和す、王漁洋、朱竹垞及び潘次耕皆之を推重す、即ち嶺南三家の一人なり。(國朝先正事畧、國朝著錄類考)

〔體裁〕 此集は屈翁山、吳山帶、陳獨漉、王蒲衣の同訂本にして、首に朱茂淵屈大均、陳恭尹、王隼の四家の序有り。

古樂府一卷、五古一卷、七古二卷、五律三卷、七律一卷、七絶一卷。

二集は翁當年等の鑒定本にして、首に康熙二十四年翁當年、同四十七年張尙瑗、方正玉の三家の序、詞評、哀詞、總目有り、其目左の如し。

樂府一卷、五古一卷、七古二卷、五律五排二卷、七律一卷、五六七絶共一卷、附詩餘。

〔評論〕 其詩は大都溫厚、平にして而も才を以て勝る、七言古體は時に光怪陸離として觀る可き者あり。

共一卷、寶雲集一卷、炎天冰雪集、垂露集共一卷、杖家集、過夏集各一卷、偷存集、繙經集共一卷、赴召集、隨筆集、直廬集、考叢集、甘雨集、西阡集、迎鑾集、還朝集、道院集、各一卷、槐蔭集二卷、棗東集、長告集、待放集、計日集、幽會集、步陳集、吾過集各一卷、夏課集、望歲集共一卷、粵游集二卷、附餘波詞二卷。

古より好みて集名を立てしもの宋の楊萬里を以て最も多しと稱す、慎行は更に萬里に數倍せり、今之を繙くに僅に二十四首を以て一卷と爲すものあるに至る、四庫提要に稱して煩碎たるに傷むといへるもの苛言に非ず。

〔評論〕 其詩宋の陸游に近し、然れども各々長短あり、王士禎の原序に稱す、奇創の才は慎行は游に遜り、綿至の思は游は慎行に遜る、其五七言古體は、陳師道、元好問の風有りと、良に然り、之を要するに游は能く景を寫し、事を隸べ、慎行は善く情を抒べ、意を運らす、是其異なる所なり、抑も清初の詩、唐宋の二大流あり、唐風を宗とするもの、先づ指を王士禎に屈し、宋調を旨とするものは、慎行を以て巨擘とす、同時湯右曾ありて殆ど慎行と雁行するに足れり。

◎道援堂集 十三卷

〔作者、題名〕 清の龐大均撰す、大均は廣東番禺の人、初名は紹隆、字を翁山といふ、別字は介子、少くして諸生と爲り、亂に遭ひ、棄て去りて浮屠と爲り、今種といふ、一に一靈又は騷餘と字す、四方に周遊し、燕、秦、齊、晋の地より塞外粟末、挹婁、朶顔の諸處を跋涉し、中年初服に返り名を大均と改む、嶺南三家の一人なり。(文獻徵存、國朝先正事畧、國朝著錄、及木書序參考)

〔傳來、體裁〕 康熙中翁山自ら此集を撰す、後、徐掄三兄弟之を刻す、(徐嘉炎、序參考) 首に毛奇齡、周炳曾、徐嘉炎の三序有り。

五言古二卷、七言古一卷、五言律三卷、七言律二卷、五言排律一卷、五言絶一卷、七言絶二卷、詞一卷。

大均の詩を集めたるもの、此書の外、別に翁山詩集有り、其載する所殆ど之と相同しきも、間々節略する所あり、此書を以て優れりとす。

〔評論〕 周炳曾いふ「翁山の詩は李(白)杜(甫)を兼ねて而して之有り、材を取る極めて博し、鏘鏘して以て自ら家を成し、而して一に法の正に軌す」と今此を以て目を眩す、此に於て初學空疎の徒争ひて之を慕し、一時靡然として風を成せり、今之を讀むに大抵輕薄淺俗の音多し、名其實に副はざるに似たり。

◎甌北集五十卷續增詩集三卷

〔作者、題名〕 清の趙翼撰す、翼の傳は陔餘叢考の條に出づ、甌北は其號なり。

〔傳來、體裁〕 初め乾隆二十二年甌北初集成り、休寧の汪由敦序す、後二十四卷を編みて甌北集と名づけ、乾隆四十六年近藁三卷を益し二十七卷と爲し、祝德麟之を校讐せり、然るに今甌北全集中のもの五十卷あるを觀れば、其後復増補せしものなる可し、此集亦編年體にして丙寅(康熙二十五年)に起り、戊辰(乾隆十三年)に迄ぶまでの六十三年間の古今體詩と載せ、續集は己巳(乾隆十四年)より辛未(同十六年)に至る三年間の古今體を録せり。

〔評論〕 甌北は袁枚、蔣士銓と詩名を擧ぐすと雖、其才力は實に二家に軼きたり、蓋し其學根柢あり、故に自然に閑辯に涉り、往往流れて談笑に入る、源を宋人に發して而も其纖弱の習を脱せるものなり。

集を觀るに炳曾の言は過譽に失するを免れず、然れども其五古は往々にして李白の隻鱗片甲を得るものあり、各體皆善し、五律最も優る、七絶に至りても、亦清朝に在りては、王士禛の外、多く其倫を見ず。

◎小倉山房詩集 三十七卷附續二卷

〔作者、題名〕 清の袁枚撰す、枚の傳は隨園詩話の條に出づ、小倉山房は其居の名なり。

〔體裁〕 此集は隨園三十種中のものにして、首に其弟子薛起鳳の序、蔣士銓、趙翼、李憲喬等の題辭、總目有り、其詩每卷皆古今體詩にして、丙辰(康熙十五年)より、丁巳(乾隆二年)に至る六十二年間の詩を編年編次せり、而して其總數四千二百一首有り、續集卷一は癸丑(康熙十二年)より丙午(雍正四年)に至る削除改刻の作、卷二は歲次を記さず、凡て二百八首を附せり。

〔評論〕 其詩は性靈を主として古を師とせず、是より先、王漁洋出でより詩をいふ者皆其風を趁へり、枚自ら之に抗せんとする志有り、故に務めて新奇

◎曾文正公詩集 四卷

〔作者、題名〕 清の曾國藩撰す、國藩の傳、題名は曾文公全集の條に出づ。

〔體裁〕 此集は曾文正公全集中のものにして、乙未(道光十五年)より辛未(同治十年)に至るまでの古今體詩を、歲次の序に編成せり、其目左の如し。
卷一は八十五首乙未至壬寅、卷二は八十首癸卯至乙巳、卷三は六十七首丙午至戊申、卷四は八十六首己酉至辛未。

〔評論〕 清朝の詩は乾隆に至りて一變し、是より後作者相りと雖大抵纖弱の音を脱する能はず、盛唐の風格に溯るものに至りては終に之を見る能はざるなり、國藩は元より詩を以て立つものに非ず、然れども此集を讀むに猶是氣有り、質有り、江西の一派に近く未だ宋調たるを免れざるも、終に當時詩人の及ぶ能はざる所あり。

〔文集〕

●揚子雲集 一卷

〔作者、題名〕 漢の揚雄撰す、雄の傳は法言の條に出づ、此書一に揚侍郎集といふ、侍郎は官名にして、子雲は其字なり。

〔傳來、體裁〕 漢書藝文志、隋書經籍志、唐書藝文志には、皆雄の集五卷を載す、其本久しく佚せり、(宋)の譚俞、始めて殘剩を哀合して五卷と爲し、(明)の萬曆中、鄭璞、又太玄、法言、方言の三書、及び類書引く所の諸條を取り、釐めて六卷と爲し、逸篇の目を以て卷末に附せり、然れども未だ見ず、明の張溥の漢魏六朝百三家集は惟一巻に縮め、首に張溥の題辭及び目錄あり其目左の如し。

賦、上書、書、設難、頌、箴、箴補、符命、連珠、誄、文、騷、序傳、附錄。

又汪士賢の二十家集本の目は左の如し。

賦、騷、書、說論、頌、符命、誄、雜文、箴。

〔評論〕 其文難與淵深、宏麗之に副ふ、大玄は其最も精力を傾注する所たり、法言之に次く、解嘲の一篇は東方朔が答客難に本づきて其筆力は之に軼き、劇

秦美新は司馬相如が封禪文に擬して才華之に及ばず其鋪張は之に踰えたり、其賦を作る亦概ね相如出で、閎奇は其長を擅にする所なり、蓋し雄が文は學力に得るもの極めて厚し。

●李元賓文集 六卷

〔作者、題名〕 唐の李觀撰す、觀字は元賓、趙州贊皇の人、貞元八年進士の第に登り、九年復博學宏詞の科に中る、官太子校書郎に至り、年二十九にして卒す、(新唐書文苑傳) 元賓は其字に因る。

〔傳來、體裁〕 此集は文、外の二編に分る、文編は陸希聲之を輯め、外編は趙昂の輯むる所なり、郡齋讀書志に、昂が編みし所は、凡て十四篇なりといへり、乃ち陸希聲が輯めし二十九篇に合して凡て四十三篇なり是四庫に著録する者なり、粵雅堂叢書に収めたる李元賓文集六卷四十九篇は、嘉慶中江都の秦恩復が唐文粹、文苑英華諸書より採りて六篇を得、之を文編外編に増入したるものなり、首に嘉慶二十三年江都の秦恩復、大順元年給事中陸希聲の二序及び目錄、尾に顧廣圻の跋有り其目左の如し。

卷一は頌贊銘箴記、卷二は哀文賦等、卷三四五は書附詩、卷六は續編。

續編は記賦說等八篇を載す。

〔評論〕 陸希聲の序に元賓と韓退之とを較論して稱す、元賓は詞を尙ふ、故に詞其理に勝る、退之は質を尙ふ、故に理其詞に勝る、若し退之をして窮老休まざらしむるも元賓の詞たる能はず、元賓をして退之より後れて死せしむるも亦退之の質に及ばざらんと、或は稱す元賓蚤世を以て其文末だ極まらず、退之窮老休まず、故に能く獨り其名を擅にせりと、後説或は然らん。

●李文公集 十八卷

〔作者、題名〕 唐の李翱撰す、翱字は習之、隴西成紀の人、貞元十四年の進士、官山南東道節度使、檢校、戸部尚書に至る。(唐書) 文公は其諡なり。

〔傳來、體裁〕 唐書藝文志に十八卷に作り、趙汭の東山存疑には書後一篇ありて李文公集十有八卷百四篇と稱せり、書錄解題には、蜀本二十卷に分てりと云へり、今記する所は三唐人集の一にして、首に四庫

提要の文を載せ、次に成化十一年王融、嘉靖二年黃景襲の二序、及び目錄有り、其目左の如し。

賦一卷、文四卷、書三卷、疏一卷、奏議、狀共一卷、行狀、實錄一卷、碑、傳共一卷、碑、述共一卷、墓誌銘二卷、祭文一卷、補遺一卷、雜著、附錄共一卷。

附錄は史傳及び諸家題跋書論を載す、而して此書は即ち明の成化板に本づきたるものにして、成化板は明の西蜀の馮師虞が編集せるものなり、其目次卷數は二本皆同じ、但し附錄一卷は成化板に無き所なり、(我國) 文政二年昌平學にて之を刊行せり。

〔評論〕 翱は韓愈の姪婿なり、其學問文章皆愈より出づ、宋の蘇舜欽謂へり、其詞は韓に逮ばず、而して理は柳子厚に過ぎたりと、誠に篤論たり、然れども唐の古文を論すれば韓柳二家を以て巨擘とし、之に次く者を翱とし、翱と雁行する者を孫樵と爲さる可からず、而して翱の文は温厚和平を以て勝る、其復性書は尤も觀る可きものなり。

〔附記〕 此集は五言詩を收むるも唯僅に一首に止まり且つ其長所に非ざるが故に特に此に編入す。

皇甫持正集 六卷

〔作者、題名〕 唐の皇甫湜撰す、湜字は持正、陸州の人なり、元和元年の進士、褐を解きて陸渾尉と爲り、仕へて工部郎中に至る。(唐書本傳參考)

〔體裁〕 唐志に三卷に作り、讀書志に六卷雜文三十八篇に作る、文獻通考これと同じ、今記す所は三唐人集の一にして、首に四庫提要の文を冠らし、次に目錄を載す、其目左の如し。

雜著、論序、策、書、記、碑銘。

各一卷なり、尾に補遺一卷を附し、賦、論、序、碑、凡て六篇を收め、又新唐書列傳、唐闕史、書後、毛晉、王昶、吳大廷、馮煥光の四跋有り。

〔評論〕 其文は李翱と與に韓愈に出づ、翱は愈の醇を得、湜は愈の奇崛を得たり、其名愈に亞く。

樊川文集 十七卷

〔作者〕 唐の杜牧撰す、牧字は牧之、京兆萬年の人、大和二年進士の第に登り、官中書舍人に至り、大中六年(一五二二)卒す、年五十、牧、氣節ありて小節

〔傳來、體裁〕 樵の自序にいふ、其觀る可きもの三十

五篇、編みて十卷と成し、諸を篋笥に藏すと、新唐志に樵の經緯集三卷を載せ、晁公武の讀書記、陳振孫の書錄解題、文獻通考皆同じ、陳氏の言によれば凡て三十五篇とあり、然らば三卷は合本なるか、

〔清〕初汪師韓は孫文志疑一篇を作りて、十篇は眞たり、餘二十五篇は皆後人の僞撰に出づといへども、顯證あるに非ず、是より先明の毛晋之を汲古閣に刻す凡て十卷なり、是四庫に收むる者なり、今記する所は三唐人集の一にして、首に四庫提要の文を冠らし、次に正德十二年王鏊の序、中和四年孫樵の自序、及び目錄有り、其目左の如し。

賦一卷、書二卷、雜著七卷。凡て三十五篇あり。

〔評論〕 孫樵が王霖に與ふる書に曰く、某嘗て文を爲くるの眞訣を來無擇に得たり、來無擇は之を皇甫持正に得、皇甫持正は之を韓吏部に得たりと、今其文を見るに具に典型あり、然るに退之は群言を包孕し自然高古なり、持正は稍々奇を爲るに意あり、可之は即ち刻意奇を求む、故に宋の蘇軾は之を評して韓愈を學びて至らざるものは皇甫湜なり、湜を學び

に拘らず、詩情豪邁、人號して小杜といひ、以て杜甫に別つ、(唐書杜祐傳參考) 樊川は其號なり。

〔傳來、體裁〕 此集は其甥の裴延翰の編みしものにして、唐志に二十卷に作り、讀書志は此外に外集一卷詩を載せ、後村詩話には續別集二卷と稱し、四庫全書には二十卷外集 卷別集一卷を著録す、皆未だ之を見ず、今記する所は、寫本十七卷にして、首に朱一是、裴延翰の二家の序及び目錄有り、其目左の如し。

賦一卷、論一卷、傳一卷、墓誌銘三卷、序記一卷、書三卷、祭文一卷、表狀一卷、啓一卷、制四卷。

〔評論〕 其文縱橫與衍、多く經世の務に切なり。

孫可之集 十卷

〔作者〕 唐の孫樵撰す、樵字は可之、又隱之と字す、自ら關東人と稱す、大中九年の進士、中書舍人を授けられ、僖宗岐隴に幸せしとき、詔を以て行在に赴き、職方郎中上 國に遷り、紫金魚袋を賜はる。(唐書孫可之傳參考)

て至らざるものは孫樵なりといへり、其見る所淺からず、然れども平正に之を論すれば、唐三百年間散體文に在りては韓柳二家の外李翱と孫樵とを推さざるを得ざるなり。

豫章文集 十七卷

〔作者、題名〕 宋の羅從彦撰す、從彦字は仲素、本沙縣の人、家を陽平に徙す、楊龜山に從ひ、伊洛の學を得たり、學者稱して豫章先生と爲す、故に集に名づく、晩に特科に就きて惠州博羅縣の主簿を授けられ、官に卒す、年六十有四、其著す所、春秋解、毛詩解、中庸說、論孟解、議論要語、台衡錄、春秋指歸有り。(伊洛淵源錄參考)

〔傳來、體裁〕 (元)の至正三年、延平の曹道振、此集を編む、其原序に稱す、郡人許源堂、其遺集五卷を刻す、近ころ、邑人吳紹宗藏する所の稿を得て、釐めて二十三卷、附錄三卷、外集一卷、年譜一卷、凡て一十八卷を爲ると、今記する所は(我國)寛政十二年の翻刻本にして、首に至正二十七年卓說、成化七年柯潜、成化八年張泰、隆慶五年歐陽佑、萬曆三十七年

熊尙文、康熙四十八年張伯行の六序、及び嘉靖三十三年謝懋の原跋、年譜、目錄有り、前に經解一卷を列し、録ありて書無し、次は尊堯錄八卷、集二程楊龜山語錄一卷、雜著二卷、附錄三卷、外集一卷。實は十六卷なり。

〔評論〕 仲素は道學を以て著れ、文を以て名あらず、而も其言平正にして浮靡ならず、誦す可きもの無きに非ざるなり。

● 文定集二十四卷(未見)

〔作者、題名〕 宋の汪應辰撰す、應辰字は聖錫、信州玉山の人、初の名は洋、紹興五年進士第一に登る、高宗乃ち此名に改む、後、秘書監と爲り、吏部尙書に累官す、人と爲り剛方正直、敢言避けず、朝に在りて多く弊政を革む、三たび水銀を論じ、遂に出で平江府に知りたり。(尙友錄 參考)

〔傳來、體裁〕 宋志に其集五十卷を載せられたれども、(明)初已に流傳少し、宏治中程敏政内閣に於て其本を得、卷帙繁重にして盡く録する能はざるを以て、

● 東萊集四十卷

〔作者、題名〕 宋の呂祖謙撰す、祖謙の字は大事記の條に出づ、東萊は地名にして學者祖謙を稱して東萊先生といふ、故に其集に名づく。

〔傳來、體裁〕 此集は其弟祖儉と姪喬年との編せるものにして、祖謙歿後に成れるものなり、凡て文集十五卷、家範尺牘の類十六卷を別集と爲し、程文の類五卷を外集と爲し、年譜遺事三卷を附録と爲し、終りに附するに拾遺一卷を以てす、是今傳ふる所の本なり、予が見たる者は内閣文庫の藏する所にして、寫本なり、是によりて左に目を列す。

卷一は詩、卷二は表疏、卷三は奏狀劄子、卷四は

啓、卷五は策問、策、卷六は記、序、銘、贊、辭、卷七は題跋、卷八は祭文、祝、卷九は行狀、卷十より十三は墓誌銘、卷十四は傳、卷十五は紀事、卷十六、十七は策問、卷十八、十九は宏詞、進卷、卷二十は拾遺、卷二十一より二十六迄は家範、卷二十七より三十一は尺牘、卷三十二より三十五は讀書雜記、卷三十六は師友問答、卷三十七は年譜、卷三十八三十九は祭文、卷四十は哀詞。

〔評論〕 祖謙の學、朱子頗る其難を病む、其文博辨闕肆、朱子其約を守らざるを病む、然れども祖謙は群書を博覽して語に根柢あり、終に究理高談、人をしめて欠伸せしむるものに勝る遠し。

● 渭南文集五十卷逸稿二卷

〔作者、題名〕 宋の陸游撰す、游字は務觀、山陰の人、放翁と號す、夙に文名あり、秦檜の爲に嫉まる、檜死し、始めて寧德主簿と爲り、樞密院編修を歴て、夔嚴二州に知たり、後、寶章閣待制を以て致仕し、嘉定三年(一八七〇)卒す、年八十五、著す所南唐書、家牒舊聞、入蜀記、劄南詩稿、老學菴筆記等有り、

其渭南といふは、晩年に渭南伯に封せられしを以て名づく。(宋史本傳 參考)

〔傳來、體裁〕 此集は其子邁の跋に據るに、游の自定する所なり、陳振孫の書錄解題、文獻通考には三十卷に作り、宋志には五十卷に作り、(明)に至り、毛晋は無錫華氏の活字版本に據り、重刊して五十卷逸稿二卷と爲す、即ち今本なり、首に淳熙十四年鄭師尹の序、陸游の傳、逸稿總目、文集總目、終に嘉定十三年管勸の跋あり、其目左の如し。

表牋二卷、劄子二卷、奏狀一卷、啓七卷、書一卷、序二卷、碑一卷、記五卷、銘、贊、記事共一卷、傳青詞、疏共一卷、疏、祝文共一卷、勸農文、雜書共一卷、跋六卷、墓誌銘、墓表、擴記共八卷、塔銘一卷、祭文、哀辭共一卷、譜、致語共一卷、入蜀記六卷、詞二卷

逸稿は毛晋の編みし所にして、南園記、閩古泉記を載す、實は游之を傳ふるを欲せざりしものなりといふ、又萬曆四十年版の渭南文集五十二卷本あり之に比するに、卷一より卷四十二までは同く、卷四十三より卷五十一に古樂府、古近體詩を收めて入蜀記を録せず、終に詞一卷を記せり。

〔評論〕 南宋に在りては能文の士少からざるを以て游

に頭地を出す能はずと雖、之を金の元好問等に比すれば軼ぐるありて及ばざるなし、唯其文邊幅少狭にして、詩才の壯闊なるに及ばず。

● 兪州山人文部稿八十四卷續稿文部

一百五十二卷

〔作者、題名〕 明の王世貞撰す、世貞の傳と題名とは兪州山人四部稿の條に出づ。

〔體裁〕 此集は兪州山人四部稿、及び續稿中の文部を摘録せしものにして、正集は第五十五卷に起り一百三十八卷に至る八十四卷、續稿は第二十六卷より二百七卷に迄ぶ一百八十二卷なりとす、其正集文部の目左の如し。

卷五十五より七十一までは序、卷七十二より七十六までは記、卷七十七は記、書事、卷七十八は紀行、卷七十九、八十は志、卷八十一より八十五までは傳、卷八十六より九十三までは、墓誌銘、卷九十四、九十五は墓表、卷九十六は神道碑、墓碣銘、卷九十七は墓碑、碑、卷九十八より一百までは行狀、

述、卷一百一は頌、卷一百二は頌、贊、卷一百三は銘、誄、哀辭、卷一百四、一百五は祭文、卷一百六より一百九までは奏疏、表、公移、卷一百十は史論、卷一百十一は論、辨、說、雜說、議、卷一百十二は讀、卷一百十三は雜著、墓誌疏、卷一百十四より一百十六は策、卷一百十七より一百二十八までは書牘、卷一百二十九は雜文跋、卷一百三十より一百三十二までは墨蹟跋、卷一百三十三より一百三十六までは墨刻跋、卷一百三十七、一百三十八は畫跋。

續稿文部の目左の如し。

卷二十六より五十五までは序、卷五十六より六十五までは記、卷六十六は紀、卷六十七より七十九までは傳、卷八十より八十九までは史傳、卷九十九より一百二十四までは墓誌銘、卷一百二十五より一百二十八までは墓表、卷一百二十九より一百三十三までは神道碑、卷一百三十四は神道碑、墓碑、卷一百三十五は墓碑、卷一百三十六より一百四十二までは行狀、卷一百四十三は志、卷一百四十四より一百四十四までは疏、卷一百四十五は傳、頌、卷一百四十六より一百五十一までは像贊、卷一百五十二

二より一百五十五までは祭文、卷一百五十六は佛經書後、卷一百五十七は道經書後、書後、議、說、讀、

卷一百五十八、一百五十九は書道經後、卷一百六十は雜文跋、卷一百六十一より一百六十五までは墨蹟跋、卷一百六十六、百六十七は墨刻跋、卷一百六十八より一百七十までは畫跋、卷一百七十一は佛經畫跋、卷一百七十二より二百七十七までは書牘。

〔評論〕 李夢陽が唐以後の書を讀まざる説出で、より李攀龍此説を奉じ大に古文辭を唱道す、世貞は實に其羽翼たり、才學は則ち遠く之に過ぐ、故に其文淵博豐贍、言言皆古典中より來りて而も之に拘束せられず、縦横にして雄深、自ら一跡を成す、有明一代の大家たり、晩年頗る蘇軾の文を喜び文格小變す、後人世貞の文を刺りて優孟の衣冠と爲す者有りと雖、確論に非ざるなり。

● 震川文集三十卷

〔作者、題名〕 明の歸有光撰す、有光字は熙甫、學者震川先生と稱す、崑山の人、嘉靖四十四年の進士、長興知縣を授かり、隆慶四年南京大僕丞と爲り、明

年二二三一卒す、年六十六、著す所、易經淵行等あり。(明史文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 此集舊三刻本あり、一は二卷にして復古堂本といひ、一は其子子祐、子寧の刻する所、十三卷にして崑山本といひ、一は其族弟道傳の刻する所、二十卷にして常熟本といふ、後、其曾孫莊、崑山本、常熟本及び家藏鈔本を以て相校勘し、又未刻の文を補入して全集を爲り、總て六百有五篇を得たり、此本は光緒六年、常熟歸氏の重刻本にして、首に康熙十二年王崇簡、同年董正位、同十四年徐乾學の三序、及び新刊編次の序、凡例、目錄あり、其目左の如し。

經解一卷、序一卷、論議、說共一卷、雜文一卷、題跋一卷、書三卷、贈送序三卷、壽序三卷、記三卷、墓誌銘四卷、權厝誌、生誌、壙誌共一卷、墓表一卷、碑碣一卷、行狀一卷、傳二卷、譜世家一卷、銘、頌、贊共一卷、祭文、哀誄共一卷。

〔評論〕 有光古文を爲るに經術に本つき、太史公の書を好みて其神理を得、王世貞を目して妄庸巨子と爲し、以て相紙排す、後、王李の文衰へて有光の文乃ち益々顯る、評する者、有光及び唐順之、王慎中を

以て嘉靖の三大家と爲せり、然れども其家数を論ずれば震川を以て尤も大と爲す可きに似たり。

● 亭林文集 六卷

〔作者、題名〕 清の顧炎武撰す、炎武の傳は日知錄の條に出づ、亭林は其號なり。

〔體裁〕 此集は亭林遺書中のものにして其目左の如し。

辨論一卷、序一卷、書二卷、記、墓誌銘共一卷、補遺一卷。

〔評論〕 亭林は經術に精しく世故に洞達す、地理、音律、名物、器數に至るまで該ねざる所無し、實に清朝一代の學風を開けり、其近代文章の弊を論する言にいふ「全く摹倣に在り、即ち古人に逼背せしむるも已に極詣に非ず、況や其神理を遺れ其皮毛を得る者をや」と、今其作所の文を觀るに憂々獨造正其論旨と合ふ、所謂文家の文に非ずし、而して蓋著淵洪自然に發して涯涘無し、篇什多からずと雖清初の大家たるに愧ぢざるなり。

● 魏叔子文集 二十二卷

〔作者、題名〕 清の魏禧撰す、禧字は冰叔、一字は叔子、句庭と號す、裕齋は其別號なり、寧都の人、康熙十七年博學鴻儒に擧げられしが疾を以て辭す、當時禧、侯方域、汪琬を三家と稱し、又兄の祥、弟の禮と寧都の三魏子と稱せらる、而して禧尤も著る、康熙十九年（二三四〇）卒す、年五十七、著す所此集の外左傳經世鈔、日錄、詩集有り、世に行はる。

〔國朝著述考〕 先正事略參考

〔體裁〕 此集は寧都三魏集中のものにして、姪世傑の編次に係る、首に邱維屏、曾燦の二家序、及び自序、凡例、總目、論引、外篇、目錄、有り。

論二卷、策一卷、議一卷、書二卷、手簡一卷、叙四卷、題跋一卷、書後一卷、文一卷、說一卷、記一卷、傳一卷、墓表、墓志共一卷、雜問一卷、四六一卷、賦一卷、雜一卷。

末に日錄三卷を附す、首に唐景宋、謝文海の二家序、引、目錄有り。

裏言一卷、雜說一卷、史論一卷。

〔評論〕 清朝の文を論する者大抵魏禧、侯方域を道ふ、

方域は未だ雅馴なる能はず、魏禧は法度森嚴にして而も議論に長ず、凌厲雄健尤も左傳、蘇洵に得る所有り、清朝文家の文に在りては第一席を占むるに足る、然れども其考據は徃徃にして失無き能はず、又好みて段落を爲し、爲めに文氣を挫折すること有り。

● 林蕙堂文集 十二卷續刻六卷

〔作者、題名〕 清の吳綺撰す、綺字は園次、聽翁と號す、江都の人、貢生より中書舍人と爲り、出で、湖州の守と爲り、惠政多し、後上官の意を失ひ罷め歸り、諸名宿と春江花月社を結ぶ、著す所宋金元詩選、嶺南風物記、及び此集あり。

〔傳來、體裁〕 綺没後、其子壽潛、遺稿を蒐輯し合して之を編み、琬繡之を重校せり、首に康熙四年龔鼎孳、與祚、尤洞、陳維崧の序、及び自序、聽翁の自傳、目錄有り。

賦一卷、記一卷、啓、疏共一卷、序六卷、題詞、傳、文、誄共一卷、贊、引、碑、說共一卷、露布、表、書、跋、墓表、墓誌銘共一卷。

續刻は首に琬繡、汪洪度、留邨等の序、目錄有り。

賦、記、啓共一卷、序四卷、題跋、引、疏、傳、頌、碑、共一卷。

〔評論〕 清初四六を以て名有る者、綺と陳維崧と二人を推す、而して均く徐、庾に原出せり、維崧は初唐四傑に泛濫し、雄博を以て長を見し、綺は則ち楚南諸集に出入し、秀逸を以て勝を擅にせり。

〔附記〕 吳綺の著、此外に亭 詩鈔五卷、藝香詞鈔四卷ありて文集に附刊せり、之を瀏覽するに、詩は其所長に非ざるを以て此に之を收録せず。

● 三魚堂文集 十二卷外集六卷附錄

二卷

〔作者、題名〕 清の陸隴其撰す、隴其の傳は讀朱隨筆の條に出づ、三魚堂は其居の名なり。

〔傳來、體裁〕 是集は隴其歿後九年、其從子禮徵、其門人侯銓が共編せしものなり、首に門人侯開國の序、魏總憲參劾疏及び目錄あり、其目左の如し。

雜著四卷、書一卷、尺牘二卷、序二卷、記一卷、墓表、志銘、贈記、傳共一卷、祝文、祭文共一卷。

外集 卷は其奏議條陳表策申請公移等を集め、末に隨其の行狀及び詩を附す。

〔評論〕 其學一に程朱に準じ、居敬窮理を以て本と爲す、故に率爾たる操觚も道に合はざるもの鮮し。

◎西河文集 一百七十九卷

〔作者、題名〕 清の毛奇齡撰す、奇齡字は大可、一字は齊干、又原名は姓、字は初晴、學者西河先生と稱す、蕭山の人、康熙十七年博學鴻儒に擧げられ、檢討と爲り、康熙五十二年(二三三三)卒す、年六十七、其著す所仲氏易、推易始末、春秋占筮書、河洛原舛編、太極圖說遺議、易小帖、易韻、尙書廣聽錄、舜典補亡、古文尙書冤詞、國風省篇、毛詩寫官記、詩札、詩傳詩說駁義、白鷺洲主客說詩、昏禮辨正、廟制折衷、大小宗通釋、辨定祭禮通俗譜、喪禮吾說篇、春秋毛氏傳、春秋條貫篇、春秋屬辭比事記、春秋簡書刊誤、論語稽求篇、大學證文、大學知本圖說、四書臚言、聖朝樂本解說、皇言定聲錄、竟山樂錄、大學問、孝經問、周禮問、明堂問、郊社禘祫問、經問、禮司合誌、古今通韻、杭州治火義、等。り。○(國朝先正事考)註

〔傳來、體裁〕 此書は其孫覽輝健儒等の重輯したるものにして西河合集に收めたるものなり、其目錄を舉ぐれば左の如し。

語一卷、頌一卷、策問一卷(缺)、表一卷(缺)、主客辭二卷、奏疏一卷、議四卷、揚子一卷、史館劄子二卷、史館擬判一卷、書八卷、牘札一卷、箋一卷、序三十四卷、題詞、題端共一卷、引弁首一卷、跋一卷、書後錄起一卷、碑記十一卷、傳十一卷、王文成傳本二卷、墓碑銘二卷、墓表五卷、墓誌銘十六卷、神道碑銘二卷、塔誌銘 卷、事狀四卷、年譜一卷、記事一卷、集課記一卷(缺)、說一卷、錄一卷、制科雜錄一卷、後烈石錄一卷、越語宵繁錄一卷、祠主復位錄一卷、湘湖水利志一卷、蕭山縣志刊誤一卷、杭志三語三誤辨一卷、天問補注一卷、館課擬文一卷、折容辨學文一卷、答三辨文一卷、釋二辨文一卷、辨聖學非道學文一卷、辨忠臣不徒死文一卷、古禮今律無繼嗣文一卷、古今無慶生日文一卷、禁室女守志殉死文一卷、彤史拾遺記一卷、武宗外紀一卷、後歷錄七卷、禮司合誌十五卷、龍學要指十一卷、賦四卷、續哀江南賦一卷(缺)、九懷

詞一卷、擬廣博詞連珠詞一卷(缺)、誄文一卷。〔評論〕 其文は縦横博辨、一世を傲視す、其經說と相表裏し、古ならず今ならず、自ら一格を成し、繩尺を以て之に求む可からず、而して其議論發明する所多く、廢す可からず、亦豪傑の士なり。

◎鹿洲初集 二十卷

〔作者、題名〕 清の藍鼎元撰す、鼎元の傳は平臺紀略の條に出づ、鹿洲は其號なり。

〔體裁〕 此集は鹿洲全集中のものにして其友曠敏本の評せし所なり、各類皆年次を以て編す、首に康熙四十八年沈涵の序、鼎元の引、張伯、注紳文の二序、鹿洲小圖、鹿洲自跋、目錄有り、其目左の如し、卷一より三は書、卷四より六は序、卷七より九は傳、卷十は記、卷十一は論、卷十二、十三は說、卷十四は考、卷十五は賦、檄、銘、箴、贊、略、事錄、卷十六は讀傳、書後、跋、卷十七は壽文、卷十八は告文、祭文、卷十九は哀辭、卷二十は行狀、墓誌銘、墓表。

〔評論〕 其文初め簡潔幽峭を尙ぶ、後には筆の往く所

に隨ひて復修飾せず、而して頗る經濟の言を爲す、徒に浮華を圖はすもの、比に非ざるなり、宜なる哉、乾隆四庫之を收めたることや。〔附記〕 鹿洲全集は此外に、公案二卷、東征集六卷、女學六卷、棉陽學準五卷、修史試筆二卷、平臺紀略一卷あり、鼎元長する所は文章に在るを以て、特に之を抜きて著録し、全集は之を收めず、

◎望溪集 無卷數

〔作者、題名〕 清の方苞撰す、苞の傳は方望溪文抄の條に出づ、望溪は其號なり。

〔傳來、體裁〕 此集は其弟子王兆符、程岑二人の編輯せしものにして、方望溪文抄中に收録せり、首に雍正元年王兆符、乾隆五年顧琮、乾隆十一年程岑三家序、編次條例、目錄有り、其躰は類を分ちて卷次を排せず、蓋し時に隨ひて増益に便せんが爲なり、其目左の如し。

進呈文、附恭紀(以上題)、讀經、讀子史、書文集後、雜著、書、論、序、記、傳、墓誌銘外碑、墓表、哀辭、祭文、家誌銘狀表哀辭、騷。(以上題望溪先生文偶抄)

〔評論〕 苞は經學に通じ、最も禮に精し、故に其文氣欲り、神靜に、雅潔を以て勝る、縱横奔放の致無しと雖、而も漫漶繁蕪の弊無し、是儒家の文にして所謂文家の文に非ざるなり、蓋し亦歸震川の流なり、後劉大櫟、姚鼐、姚瑩等皆此風を追ふ、遂に桐城派の一派を爲せり、而して苞は實に其宗た。

●海峰文集八卷

〔作者、題名〕 清の劉大櫟撰す、大櫟字は才甫、耕南又は海峰と號す、安徽桐城の人、副貢生たり、乾隆丙辰、博學鴻詞に薦舉せられ、縣教諭に官す、年六十を踰え、數年にして樞陽に歸り復出でずして卒す、年八十三、詩文に工にして桐城派の領袖たり。(惜抱軒國朝先正事略、國朝著獻類微、參考)

〔體裁〕 首に大櫟の友人なる吳士玉の序あり、尾に弟なる琢敬の跋有り、其目左の如し。

論著一卷、書一卷、贈送序一卷、書集序一卷、記一卷、傳紀事一卷、誌銘、墓表、行狀一卷、祭文、雜文共一卷。

〔我國〕 明治十四年佚存書房にて之を刊行せり。

●小倉山房外集六卷補遺一卷

〔作者、題名〕 清の袁枚撰す、枚の傳は隨園詩話の條に出づ、小倉山は江寧に在り、枚、屋を此に築き、隨園と稱し、猶山名を取りて房に名づく、其外集といふは別に古文三十卷有るに對するなり。

〔體裁〕 此書は枚の四六文を收録せるものなり、嘉慶十九年吳郡の山淵堂にて刻せるものにして、首に李英の序、蔣士銓の題詩あり、收むる所左の如し。

卷一は表、序、卷二は序、卷三は序、祭文、卷四は書、卷五は啓、卷六は碑、墓誌、補遺は序、啓、墓誌、銘、末に穀芳の後序、萬應麟の題辭あり。

〔評論〕 枚詩文を兼ぬ、詩は已に之を評論せり、其古文は横逸恣肆にして法度に拘泥せず、意の到る所筆

之を盡さざれば止まず、故に従ひて簡雅なる能はず、品度も亦高からず、然れども所謂文家の文に在りては侯方域、魏禧の後一席を占むるに足る、而して其最も長ずる所は四六文に在り、抑揚跌宕の致、實に其古文に勝る、大抵賸麗にして六朝の體格を得たり。

●更生齋文乙集四卷

〔作者、題名〕 清の洪亮吉撰す、亮吉の傳は洪北江全集の條に出づ、更生は其號なり。

〔體裁〕 此集は洪北江全集本にして、其體分類せず、卷一、二、三は贊記序銘跋賦等、卷四は序記書等なり。

●卷施閣文乙集十卷續編一卷

〔作者、題名〕 清の洪亮吉撰す、亮吉の傳は洪北江全集の條に出づ、卷施は其閣の名なり。

〔傳來、體裁〕 此集は洪北江全集のものにして、首に乾隆五十一年袁枚の序有り、其序に稱す、友人爲に其乙集四卷を刊す云々と、今見る所は八卷刻成り、

〔評論〕 大櫟莊子の好み又韓愈を力追せんと欲す、故に其息争は頗る莊に似、海船三集序等は韓に類す、通じて之を論ずれば、大抵音節を以て勝る、大櫟の先輩方苞曾て之を評して今世韓歐の才といひ、次て其後輩姚鼐も亦大に之を推稱してより其名重きを致せり、然れども實に方姚の二家に及ばず、

二卷は未刻に係り、末に續編一卷を附す、袁枚等の刊行せしものより多篇なるを知る、其目左の如し。

連珠、叙錄、銘、頌共一卷、七招、賦共一卷、雜文六卷。

以上凡て八卷、末の二卷は代言、雜文にして未刻なり、續編は墓記、殯文、序銘賦表等三十篇を收む。

〔評論〕 駢儷に長ず、恣肆にして奇氣有り、體格は魏晉より來る、亮吉は經史說文地理に於て通せざる所無し、故に其文自ら力有り。空疎の者の比す可きに非ず。

●大雲山房初集八卷一二集四卷言事二卷

〔作者、題名〕 清の惲敬撰す、敬字は子居、簡堂と號す、江蘇武進の人、乾隆四十八年の舉人、官江西瑞金知縣に至り、嘉慶廿二年(二四七七)卒す、年六十一、著す所此集の外子居決事あり。(國朝先正事略、國朝著獻類微、參考)

〔體裁〕 此本は同治二年版にして、初集二集に分れ、首に通例二十五則、行狀、目錄有り、初集四卷は

雜文一百六十篇有り初、嘉慶十六年に刊せる所、後の二集四卷、雜文九十六篇あり、初、嘉慶二十年に刊行せる所にして、尾に言事十二卷を附し、從子世臨の跋有り。

〔評論〕 其文は最も力を韓非子に得たり、氣局未だ宏大なる能はずと雖も能く一家を爲す、張惠言、李兆洛、陸繼輅等の先軌を爲せり、所謂陽湖派なるもの是なり。

●東溟文集六卷外集四卷後集十四

卷外集二卷

〔作者、題名〕 清の姚瑩撰す、瑩字は石甫、桐城の人、嘉慶十三年の進士、福建知縣より臺灣道に擢られ、道光二十二年夷務に坐し誣られ獄に在ること十二日、後、釋されて湖南按察使に遷り官に卒す、著す所東槎記略、康輜紀行、寸陰叢錄、識小錄、詩集二十卷、及び此集有り。(國朝先正事略、中何堂全、集錄、國朝正雅集參考)

〔傳來、體裁〕 瑩の詩文嘉慶の末閩中に刻し、道光十二年李申者、毛生甫は、東溟文集、後湖詩集を編刻

せり、今記する所は同治六年其男濬昌の重校せる中復堂全集中のものなり、首に全集總目、方東樹の序、自記、目錄、李兆洛の識語有り。

卷一は論、說、辨、卷二は序、跋、卷三、四は書、札子、卷五は記、卷六は傳、墓誌銘、墓表、賦、祭文、外集卷一は、說、記、序、卷二は書、卷三は記、傳、墓誌銘、卷四は雜文、後集は論說一卷、議狀四卷、書牘三卷、贈序、序記、書後共一卷、書後一卷、傳狀二卷、碑文、墓誌銘共一卷、雜文一卷、外集は議、狀、書、序共一卷、序、記、札等共一卷。

〔評論〕 其文は桐城派に屬す、方東樹、瑩の文を品して曰く、其論議の豪宕なる快馬逸して銜繩を脱するが如く、其辨證の浩博なる溟海を眺めて濤瀾を觀るが如く、其明秀英偉の氣、實に涯際す可からずと、東樹は瑩の先輩なり、然るに其推重すること此の如し、蓋し其學賈誼、王文成に得て空談に涉らず、嘉慶以後の文家に在りては尤も觀る可きものたり。

●曾文正文集四卷

〔作者、題名〕 清の曾國藩撰す、國藩の傳と題名とは曾文正文全集の條に出づ。

〔體裁〕 此集は曾文正文全集中のものにして、門人李瀚章編次し、黎庶昌、張裕釗、王定安參校し、曹耀湘校字せり、每卷の首に其目を掲げ、道光戊戌(十八年)より同治壬申(五年)に至るまでの諸作を歲次に編成せり。

〔評論〕 其文平正にして而も漫ならず、布局も亦頗る大なり、是其言自ら物有るを以て乃ち然るを致す、徒に辭藻を尋摘する者の企つ可きに非ざるなり、國藩鳴原堂論文の著有り、古人の文を品臨し頗る肯綮に中る、是を以て察すれば則ち其文章に於ても亦實に折衷する所有りしなり。

〔全集〕

●董仲舒集二卷

〔作者〕 漢の董仲舒撰す、仲舒は廣川の人、少くして春秋を治め、孝景の時博士と爲り、帷を下して講授し、三年園を窺はず、武帝の即位するや、賢良を以

て對策し、嘉納せられて江都の相と爲る、時に公孫弘亦春秋を治む、然れども仲舒に如かず、弘之を嫉む、仲舒罪を獲んことを恐れ、致仕して家居し、卒するに至るまで産業を治めず、修學著書を以て業と爲す、著す所春秋繁露、聞學、玉杯、清明、竹林の屬數十篇有りしが、今世に傳はれるもの惟、春秋繁露有るのみ、(漢書本) 仲舒は學備さに源委有り、正誼明道の言當時の諸子に度越せり、時恰も秦學を滅せし後を承け六經離析せるに遭遇し、發憤心を大業に潜め、後の學者をして統一する所を知らしめたり、實に王佐の材有りて群儒の首たり。

〔傳來、體裁〕 隋志、唐志並びに二卷を載す、(宋)の陳振孫の書錄解題惟々二卷を録して曰く、今は惟々本傳中の三策及び古文苑載する所の士不遇賦諸公孫弘記室書二篇のみと、當時既に闕佚したるを知るべし今記す所は(明)の汪士賢の校せし漢魏六朝二十家集本にして、首に李陽の董子書院記、漢書本傳、目錄有り、其目左の如し。

策、賦、頌、書、對、章共一卷、賦、書、檄、雜(附白) 共一卷。又張溥の百三家集本の目を舉ぐれば左の如し。

賦、策、章、書、對、頌、春秋陰陽。

凡て一卷なり、附録に本傳あり。

〔評論〕 其文質實にして浮誇の習無し、然れども已に駢儷の風氣を開けり、是其賈誼の俊逸に及ばざる所以なり。

◎東方先生集一卷

〔作者〕 漢の東方朔撰す、朔字は曼倩、平原類次の人、依諧滑稽を善くす、武帝即位するや、上書して自ら稱譽し、大に帝の意に適ふ、上林苑を起す時、太中大夫給事中と爲る、將に死せんとして、同舍の郎に謂ひて曰く、世人朔を知るもの莫し、朔を知るものは惟々大伍公のみと、帝召して大伍公に問ふ、答て曰く、諸星皆在り、獨り歳星を見ることが四十年と、帝嗟嘆久しくして以爲へらく、朔を知ること晚しと。

〔漢書本傳參考〕

〔傳來、體裁〕 隋志、唐志、二卷を著録すれども、其以後の書目に著録せざれば、(宋)初已に散佚したる者なり、此集は明の呂非禮が結髮の時より、朔の遺文を哀集し一書とせるものにして、漢魏六朝二十家集

中に收む、首に呂非禮の序、目錄、本傳、應詔上書、諫起上林苑等有り、其目左の如し。

諫、歌、詩、書、狀、對、難、頌、論、逸句、壽書。等凡て三十二篇あり、又張溥の百三家本は同じく一卷にして、目を左の如く分てり。

騷、疏、書、序、論、設、難、頌、銘、詩。

附録に本傳あり。

〔評論〕 其文質朴の中に雅潤を含む、非有先生論、答客難諸篇の如き、尤も諷言に妙なり。

◎蔡中郎集

〔作者、題名〕 漢の蔡邕撰す、邕の傳は石經の條に出づ、中郎は其官名なり。

〔傳來、體裁〕 隋志に邕集十二卷を録して、其註に梁の時二十卷録一卷有りきと見ゆ、則ち其集(隋)時已に完本に非ざるを知る、然るに唐志仍二十卷を載せれば、當に官に佚して民間の傳本未だ亡佚せざりしならん、宋志僅に十卷を録す、(明)の嘉靖二十七年、喬世寧、俞憲校訂し、楊賢梓行せしものは六卷、次で萬曆三十九年、知陳留縣(蔡邕の生地)馬維驥が校

氏國語に得るものあり、然れども竟に一代の風氣を脱する能はず。

◎曹子建集十卷

〔題名、作者〕 魏の曹植撰す、是書一に陳思王集といふ、子建は其字にして、陳王に封せられ諡を思と云ふ、故に名づく、植十歳にして善く文を屬し、筆を下せば文を成す、即ち建安七才子の一人なり、大和六年(八九二)卒す、年四十一。(三國志本傳參考)

〔傳來、體裁〕 隋書經籍志に陳思王集三十卷を載せ、唐書藝文志に陳思王集二十卷又三十卷と有り、蓋し三十卷は隋時の舊本にして、二十卷は後人の合併せしもの、實は兩集有るに非ず、文獻通考には十卷に作り、予が見し所は漢魏六朝二十家集本にして是と合す、首に李夢陽の序、音義あり、其目左の如し。

賦四卷、詩一卷、樂府一卷、頌、贊、銘共一卷、章、表、令共一卷、文、啓、詠、書、誄、哀、辭共一卷、論、說共一卷。

凡て賦四十四篇、詩七十篇、雜文九十三篇、合せ

本は、十卷外傳一卷有りて分類せず、清の雍正中陳留に新刻せしもの亦六卷なり、俱に皆完本に非ずといふ、其(我國)に渡來したりしは平安朝以前に在り、即ち藤原佐世の書目錄に蔡邕集二十卷を録したれば、其梁時の完本たりしを知る、然れども佚して傳はらず、今は嘉靖版の目を左に示す。

獨斷一卷、章疏一卷、釋誨、雜文共一卷、詩、賦共一卷、碑、銘、頌、讚、表、誄共二卷。

又在士賢の二十家集本は、十卷にして其目左の如し。卷一より三は疏、策、辭、議、頌、表、論、銘等相混じ、卷四は、賦、詩、勢、卷五より七は碑、銘、卷八は、碑、頌、墓表、誄等相混じ、卷九、十は獨斷を收む。

又張溥の百三家本は、二卷にして其目左の如し。

賦、疏、表、書、論、議、對、問、設論、連珠、頌、贊共一卷、箴、銘、碑、靈表、誄、神誥、哀讚、祝辭、弔文、文、詩共一卷。

附録に本傳あり。

〔評論〕 西漢文は古僞にして眞力の瀟漫する所あり、東漢に至りては氣色漸く西漢に及ばず、邕東漢の末に生れ詩文を以て著る、其詞雅鍊往々にして力を左

て二百十篇なり、又張溥の百三名家本は二卷にして其目左の如し。

賦、騷、令、表、章、書、序、七、論、說、謳、碑、頌、贊、銘、文、誄、哀辭共一卷、樂府、詩、補遺共一卷。

附録に本傳あり、(我國)には現在書目に魏曹植集三十卷を著録せり、隋志と全く相同じ、然れども今は散佚して傳はらず。

〔評論〕建安の詩風三派あり、王粲劉楨一派を爲し、魏文帝一派を爲し、曹植一派を爲す、六朝の詩人は概皆此に胚胎せざる無し、而して三派中に在りて曹植籜什最も富み、材高く氣邁に、力厚く響亮なり、儼然として一大宗を爲す、文賦に於て亦一代の作者たり。

● 嵇中散集 十卷

〔題名、作者〕魏の嵇康撰す、晋書に晋人と爲すは非なり、字は叔夜、其先は上虞の人、後、家を嵇山に徙せるを以て嵇を姓と爲す、魏の宗室と婚し、中散大夫に拜す、山濤、阮籍、阮咸、王戎、向秀、劉伶

● 阮嗣宗集 二卷

〔作者〕魏の阮籍撰す、籍字は嗣宗、陳留尉氏の人、容貌瓌傑、性情に任して毫も束縛せず、或は數月戸を閉ちて讀書し或は山水に逍遙して數日歸るを忘る、酒を嗜み、歩兵の厨營人に善く酒を醸して三百斛を貯ふる者ありと聞き、乃ち求めて歩兵校尉となれりといふ、當時清談流行、學士競ふて之を爲すも内錮録の利を量りしことは一般の習なりしが、籍の如きは高潔清節、實に萬綠叢中紅一點の趣あり、景元四年(九三三)卒す、年五十四。(晋書本傳參考)

〔傳來、體裁〕隋志には魏步兵校尉集十卷、梁十三卷録一卷とあり、唐志には五卷とあり、崇文總目文獻通考共に隋志と同じ、唐志は蓋し合せし者ならん、宋史に之を著録せざるを見る、當時既に闕脱せるを知るべし、余が見たる者は明の汪士賢が二十家本にして程榮の校訂する所に係る、思ふに殘闕を收拾せる者ならん、左に其目を擧ぐ。

賦、論、奏、書、傳、牋共一卷、詠懷詩一卷。又張溥の百三名家本は一卷にして其目左の如し。

等と、竹林の遊を爲す、世之を竹林の七賢といふ、後、讒に逢ひ、景元三年(九三二)刑に東市に付せらる、年四十。(三國志本傳參考) 集名は之を官名に取れるなり。

〔體裁〕隋志、唐志、通志、皆十五卷に作り、(宋)の陳振孫の書録解題には十卷に作る、即ち崇文總目と合す、今記する所は(明)の汪士賢の校本にして亦十卷なり、首に嘉靖四年黃省曾の序、本傳あり、其目左の如し。

詩一卷、賦、書共一卷、集論一卷、論六卷、箴、誠共一卷。

又張溥の百三名家本は一卷にして其目左の如し。

賦、書、設難、論、贊、箴、誠、樂府、詩。

附録に本傳あり。

〔評論〕嵇康は文を善くし、又詩に長ず、直に胸臆を據べて摸擬を事とせず、筆力暢達にして古雅を失はず、其言憤激の氣多し、當代の大家たり、魏晉陳隋の間、作者ありと雖大抵建安の三派を脱する能はず、其能く之を脱する者は唯々嵇康、阮籍、陶潜の三人あるのみ。

附録に本傳あり、(我國)には、現在書目に著録すれば、傳來の古きを知るべし、唐志と同じく五卷本なり。

〔評論〕其辭率ね慷慨激烈、其心憤せるを以て其行危其道忠なるを以て其旨遠し、詠懷八十餘篇は語莊にして義密なり、後來諸家の咏懷、感遇の諸作、大概此に本づかざるなし、洵に六朝詩派の一大宗たり、晋の陶潜の如きも亦其高澹遙深の致に於ては、實に之を籍に得る所無しといふ可からず。

● 陸士衡集 十卷

〔作者、題名〕晋の陸機撰す、機字は士衡、吳郡の人、世々吳の名族たり、年二十のとき吳滅び、退居菟學、辭藻高麗なり、晋の大安の初、成都王穎に從ひ平原内史と爲り、後、將軍河北大都督に遷り、長沙王を討じ大敗して群少に譖せられ、太安二年(九六三)軍中に害せらる、時に年四十三。(晋書本傳參考) 此書に陸平原集と云ふ、平原は官名にして、士衡は其字に因る。

〔傳來、體裁〕機の集七録に著録せる者は、四十七卷

な所しが、(隋)末既に佚せり、隋志著録する者は、十卷にして唐志には十五卷とあり、蓋し卷を分ちし者ならん、崇文總目、宋志は隋志と同じ、(宋)の慶元六年、徐民瞻之を刻せしか、歳久くして其書傳はらず、(明)正徳十四年、都穆之を家藏中に得て重刻す、即ち現行本なり、首に徐民瞻の撰びし晋二俊文集叙有り、後に都穆の跋有り、其目左の如し。

卷一より四は賦、卷五は詩、卷六は擬古、樂府、卷七は樂府、歌、卷八は雜著、卷九は頌、箴、贊、牋、表文、誄、哀辭、卷十は議、論、碑。

汪士賢の二十家集本は之と同じ、又張溥の百二名家集本は二卷にして、其目は左の如し。

賦、表、牋、書、七、連珠、論、議、頌、贊、箴、策文、傳、碑、誄、弔文、哀辭、共一卷、樂府、詩共一卷。

附録には本傳あり。

〔評論〕 其詩賦は華藻を以て勝る、質に於ては乏しと雖而も才に至りては洵に當代の雋たり、齊梁以來排偶の詩盛に行はれ、唐に至りて遂に律詩の一體を成す、其濫觴を論すれば實に陸機に出づと謂ふ可じ、蓋し亦曹植以後の大家なり。

陸士龍集十卷

〔作者、名題〕 晋の陸雲撰す、雲字は士龍、兄機と名を齊くし、世號して二陸といふ、官清河内史に至り機敗るゝに及び、俱に穎に害せらる、時に太安二年(九六三)享年四十二(晋書本傳參考)此集一に陸西河集といふ、士龍は其字なり。

〔傳來、體裁〕 隋志に雲集十二卷を載せ、唐志、崇文總目、宋志皆十卷に作れり、宋の徐民瞻之を刻せしが、今は傳はらず、現行本は明人の哀辭する者なり、予が見たる者は明の汪士賢の校本にして、首に唐太宗御製の傳有り、左に其目を示す。

賦、箴共一卷、詩三卷、誄、頌、騷、書、啓、書集各一卷。

又張溥本は二卷にして其目左の如し。

賦、啓、疏、書、頌、贊、箴、碑、誄、文、騷共一卷、詩一卷。

〔評論〕 其文辭は概兄の機と風を同じくして、才力も亦之と相伯仲するに足れり。

陶淵明集八卷

〔作者〕 晋の陶潛撰す、潛字は淵明、潯陽柴桑の人、嘗て五柳先生の傳を作りて自ら況ふ、家貧なるを以て彭澤の令と爲る、郡督郵を遣し、縣に至らしめ、いふ、吏まさに束帶して見ゆべしと、潛嘆じて曰く、我五斗米の爲に腰を折る能はずと、即日印綬を解き、歸去來辭を賦して復仕へず、田園に隠れたり、高風清節實に六朝第一とす、元嘉四年(一〇八七)卒す、年六十三、諡して靖節處士といふ。(晋書本傳參考)

〔傳來、體裁〕 北齊の陽休之の序録に據るに、是書古來三本あり、一本は八卷にして序なく、一本は六卷にして序あるも、編比顛亂せり、共に撰者を詳にせず、一本は梁の蕭統(即ち昭明太子)の撰にして八卷なり、休之は此三本を校合して十卷となし、五孝傳四八目を増入せり、四八目は即ち聖賢群輔録なり、此二篇は統本に載せず、蓋し二篇は後人の擬托にして潜の作に非ず、統の頃は未だ世に出でざりしか、或は既に出てたりしも統は其偽を知りて收めざりしらん、八卷本、六卷本は傳はらざれば之を知る能はず、故に後に行はれたる者は統、休之の二本のみな

り、隋志に著録する者は九卷、唐志は五卷なり、其何れなるかを知る能はず、崇文總目、宋志、文獻通考に收むる者は十卷なり、恐らくは休之本ならん、(宋)の宋庠諸異本中より善本を擇びて之を校するや、江左本を取り、たゞ其聖賢群輔録中の八儒三墨二條を以て後人の妄加として斥けたり、江左本とは江左に得たるよりいふ、然れども實は休之本にして別人の撰する所に非ず、是に由りて之を觀れば、宋代より休之本のみ行はれたることを知るに足る、後李公煥(何代の人なるか知らず)(明)の何孟春、焦竑、毛晋、張溥諸家の校訂本あり、互に異同あれども、五孝傳、群輔録の二篇を取る皆休之本に據れり、(清)の乾隆帝四庫館員に命じ、統本に據りて八卷とし二篇を刪去せり、是即ち四庫本なり、(我國)には平安朝の頃既に渡來し現在書目に十卷本を載せたり、憶ふに休之の撰する所ならん、寛文中菊池東勻校點して刊行せり、同本なり、天保中松崎明復亦之を刊せり、此は毛晋本により、群輔録を削りし迄にして、他は陽本と同じ、今記する所は光緒五年の刊本にして、凡て八卷、首に四庫提要の文を載せ、次に昭明太子の撰びし序傳あり、次に總論あり、蓋し四庫著録本ならん、因

者、汪張二本を參校し、又益すに唯州の湯斌の鈔本を以てして、四卷を編成せり、四庫に著録する者はなり然れども未だ見ず、今は汪士賢本によりて、目を左に示す。

卷一、二は賦、卷三、四は詩、卷五は傳、書、表等、卷六、七は章、啓、表、卷八、九は表、詔、卷十は誄、墓誌、頌等。

又張溥本は二卷にして其の目を左に示す。

賦、詔、教、表、章、符、奏記、牋、啓、上書、書、論、頌、讚、誄、傳、墓銘、行狀、祭文、騷共二卷、樂府、詩、共一卷。

〔評論〕 賦に於ては庾信、六朝の局を結びて三唐の派を開きしと雖、審に其由る所を論すれば、江淹は早く已に其先路を爲せりと謂ふ可じ、淹が作る所の恨賦、別賦等を見るに古意を失へるも、亦細麗奇警、觀る可き所少からず、詩も亦一時の作家たり。

何水部集 一卷

〔作者、題名〕 梁の何遜撰す、遜字は仲言、東海鄒の人、官水部員外郎に至り、天監中、記室を兼ね、能詩を

以て名有り(梁書本傳參考)此集一に何記室集といふ、共に官名に因る。

〔傳來、體裁〕 梁の王僧孺、遜の詩文を哀め、彙して八卷と爲す、唐志之を著録すれども(宋)初世に亡佚したることは、崇文總目に收めず、又晁公武の讀書志に僅に二卷を録し、今亡逸全からずといへるに見て知るべし、文獻通考録する所は讀書志と相同じ、

〔明〕に至り、正徳中張紘といふ者、之を刻せり、四庫に收むる者は即ち此書なれども、未だ見ず、故に暫く張溥の百三名家集本に由りて其目を示す。

賦、牋、書、七、樂府、詩、聯句。

〔我國〕には現在書目に八卷本を著録すれば、其傳來の古きを知るに足るも、今は亡佚して傳はらず。

〔評論〕 梁朝に在りて詩を以て家を成す者、沈約、江淹、及び何遜たり、約は布局尤も濶大、遜は淹と同じく辭藻を以て聞ゆ、其、薄雲巖際出、初月波中上「露濕寒塘草、月映清淮流」の如き佳句に乏しからず、然れども風骨氣格に至りては、共に皆魏晉に及ばざること遠し、世に又遜を陰鏗と並稱して陰何といふ、而も陰は何の敵手に非ず。

昭明太子集 五卷

〔作者〕 梁の蕭統撰す、統の傳は文選の條に出づ。

〔傳來、體裁〕 四庫提要に曰く、梁書本傳に二十卷と稱し、隋志唐志俱に同じ、宋志に至りて僅に五卷のみ、文獻通考は遂に著録せず、されば(宋)末已に亡佚したるならんと、今明の汪士賢の二十家集本を見るに、昭明太子集あり、卷末に淳熙八年袁說友の跋あり、凡て五卷にして同年刻したるものなり、知らず宋志に著録する五卷本は即ち此にして、四庫館員未だ之を見ざりしか、此書は案首に梁簡文帝の序、上昭明太子集別傳等表、劉孝綽の序、蕭子範の求撰昭明太子集表あり、其目左の如し。

卷一は賦、古樂府、詩、卷二は詩、贊等、卷三は啓、書、卷四は疏、議、序、卷五は合旨解二諦義。又明の嘉興の葉紹泰が編輯せるものは六卷にして、四庫に著録する者なり、未だ見ざれども、提要によれば、遺篇を掇拾せるものにして、賦一卷、雜文五卷なり、而して賦は每篇僅に數句あるのみといふ、又張溥の百三名家本は一卷にして、其目左の如し。賦、疏、令、書、啓、序、七、贊、傳、議、樂府、

附錄には本傳あり。

〔評論〕 蕭統は文選の著を以て聞ゆ、其書の序を觀るに詩文を論する自ら一家の見解あり、然れども其自ら作る所を見るに、六朝作者中に在りては、竟に頭地を抜く能はず、豈其名篇傑製、散佚して傳はらざるもの多きか。

庾子山集 十六卷

〔作者、題名〕 周の庾信撰す、信字は子山、南陽新野の人、梁に仕へて抄撰學士と爲り、徐陵と名を齊くし、四六文の宗匠たり、周に仕へて開府儀同三司に至る、大象の初、疾を以て職を去り、隋開皇元年(一)二四卒す、年六十有九、(周書本傳北史本傳參考)此集一に庾開府集といふ、開府は其官名、子山は其字なり。

〔傳來、體裁〕 北史本傳に二十卷に作り、隋志に二十卷に作れど、久しく佚して完本有らず、元の倪瓚の清閨閣集に、蘇齊學士に與へて庾子山集を借るの書あれば、(元)末尙傳本ありしならん、然れども其後これあるを聞かず、(明)に至り新安の汪士賢彙輯

して庾開府集十二卷を校刊せり、又張溥も輯めて百三名家集に收めたり、(清)に至り吳兆宜専ら前二書によりて編校し、且つ箋注を作り、倪璠又吳氏の缺漏を補ひ、集注を爲り年譜を卷首に冠らし、史事考證に於て頗る精審なり、首に張溥の原序、倪璠の題辭、年譜、世系圖、本傳、滕王序、目錄有り。

賦一卷、詩二卷、樂府一卷、歌辭一卷、表一卷、啓、書共一卷、連珠一卷、讚一卷、教、文、序、傳共一卷、銘一卷、碑二卷、誄、銘共一卷、誌銘一卷。

末に庾集總釋を附せり、汪士賢、張溥二家の編校本は、汪本は十二卷にして其目左の如し。

賦一卷、樂府一卷、詩四卷、郊廟歌辭、燕射歌辭共一卷、表、文、銘共一卷、碑二卷、誌銘二卷。

張溥本は二卷にして其目左の如し。

珠、序、碑、銘、贊、神道碑、傳、墓誌銘共一卷、樂府、詩、共一卷。

附録に本傳あり、(我國)には宇多帝の時既に渡來せるものにして、見在書目に著録せり。

〔評論〕 庾信の詩は劃して二期と爲さざる可からず、

其梁に在る艶麗、是一期なり、其周に在る蒼涼、是一期なり、而して之を貫串するものは才華之なり、其悲感の作は風骨遒勁、唐の杜甫の傾心措かざる所、洵に六朝末の一大宗なり、其駢偶の文は、亦直に六朝の大成を集めて、唐初四傑の先路を導き、古より今に迄ふまで屹然として四六の一大宗なり。

〔註解、參考〕

○庾開府集箋註十卷 清吳兆宜撰 ○庾子山集注十六卷 倪璠撰 ○庾開府集辨譌考異一卷 丹波朝臣撰

徐孝穆集 六卷

作者、題名) 陳の徐陵撰す、陵字は孝穆、東海刻の人、庾信と俱に當時の文宗にして、南北の文學を云ふ者、必ず徐庾を並稱す、官僕射を歴て左光祿大夫太子少傅に至り、至德元年(一二四三)卒す、年七十有七 (南史本傳陳書本傳參攷) 此集一に徐僕射集といふ、僕射は其官名を取り、孝穆は其字に因る。

〔傳來、體裁〕 隋志に三十卷に作る、久しく佚して傳はらず、今本は後人藝文類聚、文苑英華等諸書中より、撥録して編を成し、者なり(清)の吳兆宜、庾信集を

箋し、因て又陵集を箋せんと欲し、未だ業を卒へず、其同里の徐文炳、續ぎて補綴を爲し、箋注六卷を爲れり、首に陳書本傳、四庫提要の一節、目錄有り。

卷一は賦、樂府、詩、表、移檄、卷二、三は書、卷四は序、碑、卷五は碑、頌、銘墓誌、卷六は詔、文、聖書、備考。 (備考は徐文炳の補輯せしもの)

〔我國)には見在書目に著録すれば、其渡來の王朝に在るを知るべし、卷數隋志と同じ。

〔評論〕 其文綺麗巧密、多く新意有り、又篇中史事と相證す可きもの有り、庾信と名を埒くす、詩は則ち信、及ばざる遠し。

王子安集 十六卷

〔作者〕 唐の王勃撰す、勃字は子安、絳州龍門の人、通の孫なり、麟徳の初對策して及第し、朝散郎を授かる、後、罪を以て官を廢せらる、上元二年(一二三五)卒す、年二十八、楊炯、盧照鄰、駱賓王と俱に初唐の四傑と稱せられ、勃は之が冠たり。 (唐書文苑傳參攷)

〔傳來、體裁〕 唐書文苑傳に三十卷に作り、楊炯集序

には二十卷といひ、容齋隨筆にも亦二十卷と稱す、(明)以來其集已に佚し、其篇目詳ならず、初唐十二家集中僅に其詩賦二卷を載するのみ、明の崇禎中、閩人張燮、文苑英華諸書より撥拾して十六卷と爲す、宋本に較ぶるに四卷少し、今初唐四傑集本に據りて、其目を記すれば左の如し。

卷一は賦、卷二は賦、四五七言古、卷三は五言律、排律、絕句、七言絕句、卷四より七は序、卷八は表啓、卷九は書、卷十は論、卷十一は頌、卷十二は頌、贊、卷十三より十六は碑行狀。

〔我國)には見在書目に著録すれば、其渡來の古きを知るべし。

〔評論〕 勃は駢體文を善くす、其作る所鉅麗、四傑の冠たり、段成式の酉陽雜俎、韓愈の滕王閣記、并に勃を推すこと太だ至れり、容齋隨筆に稱す、王勃等四子の文、皆精切本原有り、其駢儷を以て記序碑碣を作るは、蓋し一時の體格此の如しと、然れども亦實に源を徐庾に發せるものなり、唐三百年間、駢體文の作者は初に勃を推し、末に李商隱を推し、稱して二大家と爲す、勃又詩を善くす、五言八句の作に至りては殊に壯麗の觀あり。

〔註解〕 ○王子安集註八本清蔚清 翊注

●盈川集十卷附錄一卷

〔作者、題名〕 唐の楊炯撰す、炯年十一にして弘文館に待制し、武后の朝、宋之問と藝館に分直し、盈川令に終る、故に集に名づく、初唐に於て王勃、盧照鄰、駱賓王と俱に四傑と稱せらる。(唐書本傳參考)

〔傳來、體裁〕 唐書文苑傳に三十卷に作り、晁公武讀書記に僅に二十卷を著録すれば、當時已に闕佚せるを知るべし、後遂に散亡して傳はらず、(明)の高曆中、童佩、諸書より哀集し、以て編を成す、凡て賦八首、詩三十四首、雜文三十九首を十卷と爲し、而して贈答評論の作を以て附錄一卷と爲す、是四庫に著録する者なり、余が見たる者は、初唐四傑集の本なり、左に其目を擧ぐ。

卷一は賦、卷二は五言古、律、排律、絶句、卷三は序、卷四は碑、卷五は碑銘、表議、卷六、七、八は神道碑、卷九は墓誌、卷十は行狀祭文。
(我國)にては見書目に著録すれば、宇多帝の朝已に傳はりたるを知るべし、卷數唐志と同じ。

〔評論〕 炯典籍を貫穿す、故に其詞章瑰麗にして根柢あり、同朝の張説、之を稱して曰く、盈川の文懸河の如し、之を酌めども竭きずと、信に然り。

●盧昇之集七卷

〔作者〕 唐の盧照鄰撰す、照鄰字は昇之、幽州の人、高宗の時王勃、楊炯、駱賓王と名を齊くし、號して四傑と爲す、初め鄧王府典籤と爲り、病を以て官を去り、後手足孱廢し、竟に自ら頰水に沈みて死す。(唐書文苑傳參考)

〔傳來、體裁〕 唐志二十卷に作り、崇文總目、郡齋讀書記、書錄解題、文獻通考には十卷に作れり、卷を合したる者か、(明)に至り張遜業之を校刊せしが、止だ僅に二卷のみ、(清)に至り項家達また校訂して、初唐四傑集に收たるものは七卷あり、即ち余が見たる者なり、左に其目を示す。

卷一は賦、樂府、卷二は五言古、七言古、五言律、卷三は五言排律、絶句、七言絶句、卷四、五は騷、卷六は序、對問、卷七は書、讀、碑。
(我國)には宇多帝の朝已に渡來し、見書目に收め

たり、卷數唐志と同じ。

〔評論〕 其文、王、揚、駱の三家の宏放に及ばざるに似たり、然れども傳はる所の篇什獨り少し、未だ一斑を以て全豹を察す可からず、杜甫已に不廢江河萬古流を以て均しく之を許す、則ち容易に軒輊す可からざるものあるを斷す可し。

●駱丞集四卷

〔作者、題名〕 唐の駱賓王撰す、賓王は婺州義烏の人、高宗の末に長安主簿と爲り、武后の時臨海丞に貶せられ、怏々として志を得ず、遂に官を棄て、去り、之く所を知らず、賓王は王、揚、盧と初唐四傑と稱せらる。(唐書文苑傳參考) 賓王、臨海丞と爲る、故に集に名づく。

〔傳來、體裁〕 唐書文苑傳を案するに、中宗の時詔して其文を求め百餘篇を得、郝雲卿に命じて之を編次せしむと有り、唐志、宋志、文獻通考皆著録せり、其後不幸にして亡佚し、今存する者は後人の哀集する所なり、余が見たる者は初唐四傑集本にして、收むる所左の如し。

●陳拾遺集十卷

〔作者、題名〕 唐の陳子昂撰す、子昂字は伯玉、梓州射洪の人、家世々富豪、初め進士に擧げられ、轉じて右拾遺と爲り、武攸宜兵を統べて契丹を討ずるとき、其書記と爲り文翰を司る、後、父の喪に會ひ郷に歸り、縣令殷簡の爲に誣ひられ獄中に卒す、年四十三。(唐書本傳參考) 拾遺は其官名なり。

〔傳來、體裁〕 此集唐志以下皆十卷と稱し、闕佚なし、四庫著録する所亦同じく十卷あり、予未だ見ず、全唐文には其文八卷を收む、其總目左の如し。
賦、頌、表共二卷、上計一卷、答事、諫書、狀共

頌、賦、五七言古共一卷、五言律、排律、絶句、七言絶句共一卷、啓、書共一卷、序、雜著共一卷。
(我國)にては宇多朝の頃已に渡來せる者にして、見書目に著録せり。
〔評論〕 唐初四傑の文に於ける旗鼓相當り、優劣す可からず、然れども精密に玩味すれば王勃最も優り、駱賓王之に次ぐ、詩は則ち四家殆ど相伯仲せり。
〔註解〕 ○類選註釋駱丞全集四卷明顧從敬類選 陳繼儒註釋

二卷、書、啓、序、詞、銘、共一卷、碑、墓誌共一卷、墓誌銘、祭文共一卷。

又我内閣所藏の陳子昂集二卷は、詩賦のみを収む、其目左の如し。

賦(二篇)五古共一卷、五律、五排、五絶共一卷。

明の張遜業の校正し、黃諄の梓行する所に係る、序跋無し、恐らくは嘉靖中に刻する所ならん、此二部を合すれば方に十卷と爲るべし。(我國)には、宇多帝の朝、已に渡來せる者にして現在書目に著録せり。

〔評論〕 唐初の詩文未だ陳隋の舊習を脱せず、子昂始めて奮發して之を變ず、故に韓愈の詩に曰く、「國朝盛文章、子昂始高蹈」と、柳宗元も亦謂へり、張説は著述に工にして、張九齡は比興を善くす、之を兼備する者獨り子昂のみと、馬端臨の文獻通考には、子昂惟々詩語高妙、其他の文は則ち偶儷卑弱の體を脱せずと謂へり、今其文を見るに諸表序は猶排儷の習に沿ふと雖、論事書啓の類は實に疎樸近古にして、韓柳二家の推す所以なり、詩は則ち雄邁高雅、六朝の餘習を一洗し、唐一代の風氣を開けり。

五六七絶。

全唐文には其文を編じて十三卷と爲せり。

〔評論〕 其詩頗る唐初の習を脱し盛唐の運を開く、其文は沈雄清壯直に東漢を追ふ、魏晉以降匹儷少し。

曲江集二十卷附録一卷

〔作者、題名〕 唐の張九齡撰す、九齡字は子壽、父韶州の別駕と爲り、任に卒す、遂に曲江に居る、進士に擢られ、中書舍人と爲る、時人號して文場の元帥と爲す、左拾遺に遷り、後、中書侍郎に累遷し、嘗て李林甫を抑へて反て擠せられ、相を罷め家居して卒す、時に開元二十八年(一四〇〇)年六十有八、天下稱して曲江公と爲して名を呼ばず、(唐書本)曲江は其居りし地名なり。

〔傳來、體裁〕 唐志宋志、俱に載せて九齡文集二十卷有り、(明)の成化九年、丘濬内閣より録出し、韶州知府蘇韓之を刊行せり、其卷數唐志と相同じ、次で萬曆間之を重刻して十二卷と爲す、今記する所は成化版にして、首に丘濬の序有り、目錄は各卷の首に冠らす、其目左の如し。

張燕公集二十五卷

〔作者、題名〕 唐の張説撰す、説字は道濟、洛陽の人、永泰中に賢良方正第一に中り、校書郎と爲り、左補闕に遷り、同平章事に累官し、後中書令と爲りて燕國公に封せらる、朝廷の大述作多く其手より出でしといふ、開元十八年(一三九〇)卒す、年六十有四(唐書本)燕公は其爵名なり。

〔傳來、體裁〕 唐志に三十卷に作り(宋)以來の書目皆二十五卷と著録す、即ち其五卷の佚する久しきを知るべし、四庫提要に稱す、文苑英華、唐文粹諸書を參考するに、其文集に載せざるもの尙六十一篇有り、蓋し李昉、姚鉉が二書を編録するるとき、其五卷尙未だ佚せざりしもの如し、(清)初に至り其佚篇を類に依りて補入し、完本に近からしめ、卷數は則ち仍二十五に爲れり、(我國)に渡來せしは平安朝の初にあること、佐世の目錄に十卷を載せたるを以て知らる、我帝室文庫に二十五卷本を藏す、今其目を記せず、明代刻する所の八卷本は其目左の如し。
卷一は、賦、五古、卷二は五古、卷三は五七古、卷四、五は五律、卷六、七は五排、卷八は七律、

頌、贊、賦共一卷、詩四卷、制書一卷、勅制一卷、勅書五卷、表狀一卷、狀二卷、策書一卷、序、銘、文共一卷、墓誌銘共一卷、頌、碑、銘共一卷、碑碣、銘共一卷。

附録は其補遺なり。

〔評論〕 唐書文藝傳に、徐堅の言を載せて謂く、其文輕練素練の如く、實に時用を濟して邊幅に窘すと、然れども、今其感遇諸作を觀るに、神味超軼、陳子昂と方駕す可し、文筆宏博典實、垂紳正笏の氣象有り、亦具に大雅の遺堅を見はせり。

李北海集六卷附録一卷

〔作者、題名〕 唐の李邕撰す、邕字は泰和、廣陵江都の人、玄宗の時北海太守と爲り、才高氣方、剛毅激烈、其辯響の如しといふ、文を以て天下に名あり、其左拾遺たりしとき、宋璟を抑へ、後李林甫の爲に害せられ、天寶六年(一四〇七)年七十にして卒す(唐書本)北海は其官名に因る。

〔傳來、體裁〕 唐書本傳に邕文集七十卷を載せ、宋志已に著録せず、今本は(明)の無錫曹基の刊する所に

して、前に荃の序ありて稱す、紹和の徵君が唐人の集を刻するに、初めて北海集を得たり、而るに余之を論せしに、何人の編する所たるを言はずと、大抵皆文苑英華諸書より採摭し、哀めて帙を成す者にして、原本に非ず、凡て賦五篇、詩四篇、雜文三十篇、原集七十卷に較ぶるに十の二に過ぎず、末に新舊唐書の本傳及び贈答の詩を附録せり、是四庫に著録する者なれども予未だ見ず、全唐文に載する所は、賦五篇、雜文三十六篇、共に三卷と爲す、全唐詩には、詩四篇を載せて、本集と其數を合す。

〔評論〕 唐書に豈が文は碑頌に長せりと稱す、今は其篇什傳はる所多からざるを以て詳にする能はず、然れども端州石室記、大唐贈歙州刺史葉公神道碑の如き頗る觀る可きもの有り、而して其體は排儷なり。

◎李太白集三十卷附錄六卷

〔作者〕 唐の李白撰す、白字は太白、涼武昭王九世の孫、十歳詩書に通じ、長じて岷山に隱る、賀知章其文を見て玄宗に薦む、帝其才を愛し官を授けんとす、時に高力士に誣られて容れられず、乃ち四方に遊び

て清風朗月を友とし、賀知章等八人と飲中八仙の遊を爲す、安祿山反せし時、永王璘、白を辟して寮佐と爲し兵を起す、璘の兵敗れて白、潯陽の獄に繋がる、郭子儀其官爵を以て之を贖ふ、誅を免じて夜郎に謫せらる、道に赦に遇ひ、岳陽、江夏に憩ふこと久しく、復潯陽を過ぎ歷陽宣城の間に徘徊し、或は扁舟に乗じ或は湖月を賞し、悠悠以て其適を娛めり、寶應元年(一四二二)病を以て卒す、年六十二。(唐書本傳參考)

〔傳來、體裁〕 白の詩文天寶の末に當り、嘗て魏萬に命じて集録せしが、亂に遭ひて盡く散佚せり、將に終らんとするに及び、草稿を取りて、手づから其族叔陽冰に授け、序を作らしむ、是を原本と爲す、然れども陽冰の序中卷數を言はず、舊唐書李白傳に云ふ文集二十卷あり時に行はると、新唐書藝文志に云ふ李白草堂集二十卷、李陽冰錄とあり、(宋)に至り樂史序を作り、則ち云ふ翰林の歌詩、李陽冰纂して草堂集十卷と爲すと、豈其時草堂の原本已に其半を亡へる者あるか、抑も或は未だ亡びずして、後人併せて十卷と爲すか、史別に其歌詩十卷を收め、草堂集と互に相校勘し、排して二十卷と爲し、號して李翰林集といふ、又其賦、表、書、序等の文を得、排し

に李白歌行集を著録せり、延寶七年に分類補注本を刊行せり。

〔評論〕 世に李白杜甫を並稱して、古今詩家の一大宗と爲す、蓋し定論なり、今文を以て喩へば、太白は史記の如く、子美は漢書の如し、兵法を以て喩へば、太白は李廣の如く、子美は孫吳の如し、人物を以て喩へば、太白は仙にして、子美は聖なり、性根を以て喩へば、太白は頓にして、子美は漸なり、論者或は杜を甲とし李を乙とし、或は杜を乙とし李を甲とするものは、皆各々其服膺する所有るを以てなり、李白は又文を善くせり。

〔注解〕 ○分類補注李太白集二十五卷 宋楊齊賢撰 蕭士藻補 ○李太白文集注三十六卷 清王琦撰

◎高常侍集十卷

〔作者、題名〕 唐の高適撰す、適字は達夫、滄州の人、官封丘尉より諫議大夫に擢でられ、蜀亂るゝに及び、蜀彭二州の刺史と爲る、還て左散騎常侍と爲り、永泰元年(一四二五)卒す、唐書本傳に渤海の人に作り、其集も亦題して渤海集といふ、常侍は官名に由る。

て十卷となし、號して李翰林別集といふ、凡て詩七百七十六篇、雜文若干篇を得たり、熙寧中、宋敏求廣く遺稿を搜り、又詩二百二十五篇を得、其舊集に并せ、總べて編次を爲し、題するに類別を以てし、析きて二十四卷となし、雜文六十五篇を析きて六卷となす、共に三十卷篇數舊より多しと雖、然れども他人の作る所を闕入するを免れず、元豐中、晏知止之を刻してより、廣く世に行はれ、樂史の本は遂に佚して傳はらざるに至れり、南宋の末楊齊賢、蕭士藻各々注を作る、(明)に至り、林兆珂に李詩鈔述十卷あり、胡震亨に李詩通二十一卷あり、未だ完からず、(清)に至り王琦諸本を參合して集注を作り、益すに逸篇を以てし、釐めて三十卷となし、別に附錄六卷を爲る、最も信據すべき善本なり、今左に其目を示す。

古賦一卷、古詩一卷、樂府四卷、古近體詩十九卷、表、書共一卷、序文一卷、記、頌、讚共一卷、銘、碑、祭文共一卷、詩文拾遺一卷。

卷首に諸家の序、跋、王琦の跋、目錄あり、附録は諸家の作る所の序誌碑傳詩文、叢語、年譜等なり、(我國)に渡來せるは宇多朝以前に在り、佐世の書目

(唐書本)

〔體裁〕 唐志に十卷に作り、文獻通考には此外に集外文一卷詩一卷あり、今本詩八卷文二卷ありて唐志の數と同じ、而して通考に載する所の集外二卷無し、恐らくは散佚したるか、(明)人刻する所の高集には、太平廣記に載する所の高僧侍郎墓中狐妖絕句を以て、論りて適の作と爲して載せたりしが、(清)初之を刪りて其精善を期せり、今記する所は清の光緒十年版にして、其目左の如し。

卷一は賦、五古、卷二三四は五古、卷五は七古、卷六は五律、卷七は五排、卷八は七律、五七絶、卷九は表、卷十は雜著。

〔評論〕 其詩豪壯遒勁、盛唐名家の魁たり。(岑嘉州集の部參考)

杜工部集二十卷

〔作者、題名〕 唐の杜甫撰す、甫字は子美、少陵と號す、本襄陽の人、後、河南の鞏縣に遷る、開元二十三年進士の試に應じて第せず、天寶十年集賢院に待制し、十四年西河尉に擢せられたるも拜せず、右衛率府曹參軍に改めらる、祿山の亂に長安の城中に

より大に行はれたるを知る可し、而して之を注する者亦數十家、就中王洙、宋祁、王安石、黃庭堅、薛夢符、杜田、鮑彪尹、趙彥材の徒最も簡要と稱す、皆九家詩集注の中に收めらる、(元)に至りては、劉辰翁、趙汭、高楚芳、鄭鼎、董養性、(明)に至りては、張綬、范濂、邵寶等數家、(清)に至りては、錢謙益、張綬彦、仇兆鰲、朱鶴齡等數家の評注本あり、各々行はる、(我國)に傳來したるは、其時代を詳にする能はざれども、南北朝の頃既に渡來せるは、當時僧の記録によりて知る事を得可し、足利時代には漸く行はれ、釋心華は之を抄録せり、徳川氏に至りては釋顯常、津坂東陽等律詩を抜きて之を注せり、刻本も亦少からず。

〔體裁〕 諸家編する所に従ひ、各々卷數體例を異にするを以て、一々之を歴舉する能はず、今は姑く清刻の五家評本によりて、左に其目を示すべし。

古詩八卷、近體詩十卷、表、賦、記、說、讚、述、共一卷、策問、文、狀、表、碑誌共一卷。

此書予が見たる者は、光緒二年の刊本にして、首に道光十四年盧坤の序、次に誌、傳、集序八篇あり。
〔評論〕 古今詩家の一大家たり、前條已に李白と對比

在ること一年、至德二年亡げて鳳翔に至り、帝に行在所に謁して左拾遺に拜せらる、後累官して尚書工部員外郎と爲り、大曆五年(一四三〇)卒す、年五十九、甫博く群書を極め、尤詩歌に妙なり、元稹謂はく、詩人ありて以來未だ子美の如き者有らざるなりと、後世李白と並稱して李杜といひ、又杜牧に別ちて老杜と號す、(唐書文藝傳)工部は其官名に因る。

〔傳來〕 甫歿後、涇州刺史樊晃、其遺稿を哀めて六十卷小集六卷となす、是唐志に著録する者なり、宋に至り王洙中外の書九十九卷を哀め、其重複せる者を除き、古詩三百九十九、近體千有六、合して千四百五篇を定取して十八卷として、又別錄雜著二卷を爲し合して二十卷となす、嘉祐中王琪之を姑蘇に刻す、又遺文九篇あり治平中斐集集外に刊附せり、又黃伯思の編輯する者あり、一千四百七十七首分ちて二十卷とし、別に雜著二十九首を二卷となす、合して二十二卷、亟相李伯紀之に序せり、右二本は詩文合集にして、共に陳氏の書錄解題に著録せり、此外に詩のみを集むる者あり、郭知遠の九家集注杜詩三十六卷、黃希の補注杜詩三十六卷、徐宅の門類杜詩二十五卷、無名氏の集千家註詩杜詩二十卷等あり、以て其當時

して論述せり、今其支流を觀るに、孟郊は其氣焰を得、張籍は其簡麗を得、姚合は其清雅を得、賈島は其奇僻を得、杜牧は其豪健を得、陸龜蒙は其贍博を得、皆甫の奇偏より出で、尙軒々然として自ら一家を爲せり、以て甫が混濛至大なるを窺ふに足る可し、其三大禮賦等に至りても亦整雅壯偉、論者稱して班固左思を陶鎔し、徐陵庾信に跨躡すといへり、頌揚に過ぐるか如しと雖、必しも妄言に非ざるなり。

〔註解、參考〕

- 杜工部集千家注分類詩二十五卷文二卷首一卷 宋徐居仁
- 杜工部草堂詩箋四十卷 宋蔡夢弼
- 杜工部集千家注補遺 元劉辰翁
- 杜律趙處註 五言三卷初汭撰
- 杜工部詩集千家注 高楚芳
- 杜工部詩批選六卷 鄭鼎
- 杜工部詩選注七卷 董養性
- 杜工部詩通十六卷 明張綬
- 杜律選注六卷 范濂
- 杜律分類集註二卷 薛益
- 杜律詹言二卷 謝杰
- 杜律意箋二卷 梁廷
- 杜詩分類集註二十卷 清錢謙益
- 杜工部集箋註二十卷 清錢謙益
- 杜工部集輯註詩二十卷文二卷末一卷 朱鶴齡
- 杜詩分類全集五卷 張綬彦
- 杜詩註解十七卷首一卷 顧震
- 杜詩詳註二十五卷附錄二卷 仇兆鰲
- 杜詩附三十三卷 盧元
- 杜詩會粹二十四卷 強道
- 杜詩論文五十六卷目一卷 吳見
- 杜詩偶評

四卷沈約撰 ○杜律詩話二卷陳延敬撰 ○讀杜心解六卷浦起龍撰 ○杜律詳解三卷日本津坂孝緯撰 ○杜律發揮三卷常規撰

◎王右丞詩集二十八卷

〔作者、題名〕 唐の王維撰す、維字は摩詰、太原の人、開元九年の進士、大樂丞に調せられ、累遷して監察御使に至る、安祿山反するや維之に囚らる、藥を飲みて陽に瘡と爲り、通られて給事中と爲れりと雖、猶節を保てり、賊平らぎ特命を以て赦され、太子中允に任せられ、後、尚書右丞に遷る、草隸書畫に工にして、殊に山水雲石に長ず、入神の稱あり、乾元二年(一四一九)年六十有一にして卒す、(唐書本傳參考) 右丞は其官名なり。

〔傳來、體裁〕 唐志には王維集二十卷を載せ、書錄解題には十卷を作りて、建昌本と蜀本と次序皆同じからざることをいへり、然れども今知る能はず、(元)に至り劉辰翁之を評點刊行せり、(明)に至り顧起經、辰翁の本によりて分類註十卷を作り、惟々詩のみを註して文に及ばず、問々亦舛漏あり、(清)に至り趙殿成、詩は劉本に據り、其他は諸書より遺篇を輯め、

○王摩詰詩集七卷元劉辰翁評 ○類箋王右丞集十卷明顧起經撰 ○王右丞集箋註二十八卷附錄二卷清趙殿成撰

◎杼山集十卷

〔作者、題名〕 唐の僧皎然撰す、皎然名は晝、姓は謝氏、長城の人、謝靈運十世の孫なり、興國寺に居る、其遊歴する所、京師には則ち公相敦く重じ、諸郡には則ち邦伯の欽む所と爲る、蓋し其詩に工なるのみに非ず、子史經書に通じ、能く人を導きて佛智に入るを以てなり、後、杼山に居り、貞元の年、山寺に終る。(卷首傳參考)

〔體裁〕 此集末に雜文數篇を附載するもの有り、然れども其長する所に非ず、別本又杼山詩式一卷を附刊するものあれども、是又文史類中に載すべきものたり、故に清初析きて別録に出せり、(我國)元祿八年の翻刻本は明の汲古閣本の唐三高僧詩集の一なり、首に于頔の序及傳目錄あり、卷一より卷七までは四、五、六、七言互に相混じり、卷八、九は銘、讚、書、序、傳、偈等の文にして末に補遺詩五首及び詩式一卷あり。
〔評論〕 皎然ハ貫休、齊己ト詩を以て中唐に名有り、

業して、二十八卷となし、且つ箋註を作れり、最も信據すべき善本なり、今之によりて其目を示す。

古詩六卷、近體詩八卷、外編一卷、賦(二篇)表二卷、狀、文、書、記共一卷、序一卷、文、讚共一卷、碑三卷、碑銘二卷、誌銘一卷、哀、辭、祭文、連珠、判共一卷、論議一卷。

卷末に詩評、畫錄、年譜を附録とす、卷首には辨言十九條の外、李紱等の序、殿山の自序、箋注略例あり(唐國)には、見在書目に著録すれば、其渡來の古きを知る可し、然れども今は傳はらず、正徳四年京都書肆にて明の萬曆板、顧氏の注本を翻刻せり。

〔評論〕 其詩精緻高澹、各體皆宜し、而して律絶尤も妙に臻る、就中五言極めて佳なり、唐一代に在りては李白、杜甫最も群を出で、清に至るまで能く之と力を角するもの無し、王維は則ち自ら一體を成して李杜と雁行し、亦一太宗と爲る、而して其由來する所を觀るに晋の陶潛に近し、但々陶は儒家に得、王は佛理に得る所有り、其文も亦高華典貴にして上は張説を承け下は柳子厚に接するに足る、其與裴迪書の如き極めて畫致有り。

〔註解、參考〕

而して其作る所、齊己より弱く、貫休より雅なり。

◎毘陵集二十卷

〔作者、題名〕 唐の獨孤及撰す、及字は至之、洛陽の人、代宗の朝、召されて左拾遺と爲り、常州刺史に遷る、貞元十二年(一四五六)卒す、年五十三。(唐書本傳參考) 常州は古の毘陵の地なり、故に集に名づく。

〔傳來、體裁〕 此書門人梁肅編し、李舟之に序し凡て詩三卷文十七卷と爲す、舊本久しく佚せしが、(明)の吳寬、内閣より鈔出し、始めて世に傳ふといふ、今記する所は我天保四年の官版にして、首に乾隆五十六年趙懷玉の序及び李舟の舊序有り、目錄は各卷の首に冠らす、其目左の如し。

卷一は賦、詩、卷二、三は詩、卷四、五は表、卷六は議、行狀、卷七、八は銘、頌、碑、論、卷九は碑銘、卷十より十二は表、墓誌、卷十三は序、讚、卷十四より十六は序、卷十七は記、卷十八は策、書、卷十九、二十は祭文。

〔評論〕 權德輿、及の論議を作りて稱す、其立言遺詞、古の風格有り、波瀾を濳ひて流宕を去り、菁華を得

て枝葉無し」と、又王士禛の香祖筆記に謂へり、「其序記は尙唐習を沿ひ、碑版叙事は稍々情實を見はし、仙臺函谷の二銘、琅邪溪馬山茅亭記、風后八陣圖記は、是其傑作なり」と、唐貞觀以後の文士、皆六朝の體を沿ひ、開元天寶を経て詩格は大に變せらるも文格は猶舊規を襲へり、元結、及と始めて奮起し、繁濫を漸除してより、韓愈、柳宗厚繼ぎて起り、唐の古文遂に蔚然として極盛に達せり、而して韓の由りて來る所を見るに實に及に在り。

● 錢仲文集十卷

〔作者、題名〕 唐の錢起撰す、起字は仲文、吳郡の人、天寶中進士に擧げられ、官考功郎中に至る、大曆十才子の第一人なり、題名は其姓字をとる、又其官名を取り錢考功集ともいふ。(唐書文苑傳)

〔傳來、體裁〕 那齋讀書志に二卷に作る、今本十卷、蓋し後人の分つ所、集末の江行絕句一百首は、其孫錢翹の詩なり、而して是集も亦古體詩を題して往體と曰ふ、是れ唐代の詩集に古體往體の二名ありて、偶然名を異にす、別に他義あるに非ずといふ。(四庫提要)

予未だ全本を見ず、全唐文には其賦十三篇を載せ、全唐詩には其詩四卷を收め、唐詩百名家集には十卷を載す、其目左の如し。
雜言一卷、往體詩二卷、近體詩七卷。
〔評論〕 唐の大曆以還、詩格初めて變ず、十子實に之が職志たり、而して起と郎士元とは其稱首なり、起が詩は温秀蘊藉、風人の旨を失はず、前輩の典型猶存せり。

● 次山集十卷拾遺二卷

〔作者〕 唐の元結撰す、結字は次山、汝州の人、嘗て道州刺史と爲りしとき、杜甫が曰く、天下をして結の輩十數公を得しめば、海内又安からんと、又韓愈が唐の文人を稱すれば、則ち獨元結に及べり、以て其學才を知るべし、大曆七年(四三三)卒す、年五十、著す所元子十卷、文編十卷、琦玕子一卷ありしが、今皆傳はらず。(新唐書本傳)

〔題裁〕 是集は後人の掇拾せしものにして、舊本に非ず、今記する所は、天都の黃又、黃晟の全訂本にして我文政四年の官版なり、首に本傳目錄有り、其目

左の如し。

卷一は、歌、古詩、卷二は、賦、卷三は、樂府、古詩、卷四、五は、古詩、卷六は、箴、頌、銘、卷七は、書、序、卷八は、議、論、卷九は、墓表、記、卷十は、表。

拾遺二卷は雜著、銘等なり。

〔評論〕 結の蹤跡古の狂者に類し、制行高潔、深く閔時憂國の心を抱けり、故に其文章奇古憂々として自ら其趣を異にす、蓋し唐文韓愈以前に在りて、毅然として排偶禮麗の習を變せし者は、實に結より始められり。

● 顏魯公集十五卷補遺一卷年譜一卷

附錄一卷

〔作者、題名〕 唐の顏真卿撰す、真卿字は清臣、開元中監察使御史に遷り、又平原太守と爲る、安祿山反せし時、獨義を唱へて之を討し、李希烈反せしときも、亦行きて禍福を陳ぶ、後朝廷希烈を誅せんとせしかば、希烈怒りて乃ち中使を遣し真卿を殺す、時に貞元元年(一四四五)年八十、真卿四朝に歷仕し、

忠直孝友、王室を羽翼す、位太師に至り、魯國公に封せらる、故に集に名づく、(唐書本傳) 真卿また書を以て名あり。

〔傳來、體裁〕 真卿の集は唐書藝文志に見ゆる者、吳興集十卷、廬州集十卷、臨川集十卷あれども、(北宋)に至り皆已に佚せり、吳興の沈氏といふ者、遺佚を採扱し編みて十五卷と爲す、嘉祐中又宋敏求の編本あり、亦十五卷なり、(南宋)に至り又其三卷を佚す、留元剛見る所の真卿の文を以て補遺と爲し、又年譜を撰次して自ら後序を爲り末に附す、後人復元剛の本に依り、分ちて十五卷と爲し、以て沈宋二本の原數に合せり、(明)に至り留本亦傳はらず、(清)初行はるるものは真卿の裔孫允祚が萬曆中に刊行せし所にして、脱漏舛錯多しといふ、今記す所は明の劉思誠の重刊本に據り謄寫せしものにして、首に萬曆十七年趙燾、同年羅樹聲、嘉靖二年楊一清、宋の劉敞の四序、及び目錄有り。

奏議一卷、表上二卷、碑六卷、墓碣、墓誌、祭文共一卷、書帖、讚、題名共一卷、序一卷、記二卷、詩一卷。

補遺は詩議序述文帖等を録し、附録は年譜、行狀、